

拝啓女神様へ。どうも、
貴女に悪役モブにされた
者ですが。原作シナ
リオぶっ壊すついでに
こちらの鬱ゲーの主人
公、俺のヒロインにし
ますけど構いません
ね？

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

熱海 憧（あたま しょう）は主人公（ヒーロー）に憧れていた。

怪人を倒す仮面のヒーローは良い。

怪獣を倒す巨人のヒーローも良い。

剣を片手に鎧を纏い、魔物を倒す王道のヒーローなんて格別だ。

時に闘い、時に救い、時に助けた美少女に好かれて、悪に挫け、道に迷い、意義に嘆

きつ……

それでも前へ未来へ邁進する、そんな王道を往く主人公（ヒーロー）に、シヨウは憧れていた。

けれど彼の一度目の人生は、輝かしい未来を歩む事なく幕を下ろした。

「今回の手違い、誠に申し訳ありませんでした」

「お詫びとして、次なる生は貴方が望む世界に。はい。え、はい……はい？」

「ええと、とりあえずヒーローになりたい、ですか？はあ……変わった考えをお持ちですね」

「分かりました。では、貴方が次に生きる世界ではそのように、はい」

「では、逝つてらっしゃいませ」

「ふう。一時はどうなることかと……んえ？ なんですか。え、彼が言つてたのはヒーローという名前のキャラクターじゃなくて、ヒーロー。つまりは主人公だと？」

「……………え、うそ。彼の次の人生、主人公どころか、悪人寄りのモブキャラなんです。それは。どどど、どうしましょう……」

「これは、俗に言う”鬱ゲー”と呼ばれた、とある剣と魔法のコマンド式RPGの世界にて。

嗚ませ犬貴族の取り巻きキャラクターに憑依しながらも自分を主人公と思い込んだ精神異常モブキャラが「でも俺主人公だから何とかなる！」の精神で、悪役故の周囲の低評価やら鬱展開やら黒幕の思惑やらをぶち壊していく物語である。



週間総合最高7位行けました、応援ありがとうございます！

カクヨムにて数話先行公開中！こちらも是非ともよろしくお願いします

<https://kakuyomu.jp/works/168173306481>
50068490

目次

001	主人公志望、モブ憑依	1	009	シユラ	52
002	口悪い系主人公とかもはや基本	1	010	騎士へと至る為の道	60
です		12	011	紫電一閃	67
003	幼馴染は悪役貴族	18	012	莫迦の花道	75
004	学園物語、開幕!	24	013	熾烈なるシドウ	81
005	学園物語、閉幕!	29	014	無茶で無謀なヒロイック	
006	ヒーローの道も一歩から		90		
35			015	お前は何者だ	99
007	サラ・メリファアの視点		016	泣きつ面に腐れ縁	103
40			017	亀裂の入った合格通知	108
008	入団テストと灰色の乙女		018	その手の栄光	115
45			019	この物語の主人公は。	122
			長女ウルズの人物紹介	VOL. 1	1

0 3 6	小悪党の誤算	—	269	0 4 1	情けはヒーローの為になる	
0 3 7	餓狼か、英雄か。それとも修羅	—	276	0 4 2	アッシュ・ヴァルキュリア	
か	—	—	276	325	—	
長女ウルズの人物紹介	V O L . 2	—	284	334	—	
次女ヴェルザンデイの省略あらすじ	—	—	291	0 4 3	天下上等ヒロイック	
O L . 2	—	—	296	0 4 4	魔獣	
三女スクルドの専門用語解説	V O L .	—	313	0 4 5	姿なきマザーグース	
2	—	—	321	0 4 6	孤児院の黒き母	
0 3 8	大胆な告白は主人公の特権	—	313	0 4 7	歌う魔獣バンシー	
305	—	—	321	0 4 8	アイネクライネ	
0 3 9	騎士団の腐敗	—	313	0 4 9	相棒との邂逅	
0 4 0	コルギ村のハウチ	—	321	0 5 0	凶悪	
	—	—	321	0 5 1	我死にたまうことなかれ	
	—	—	321		—	

d	0 5 9	450	Round and Round	459	Ex. 0 0 0	或る英雄の光について	523
	0 5 8		貴方が騎士をやめるなら	444	0 6 7	手には鉄塊、この背に光	
	0 5 7		ルズレー属かませ犬科	444	507		
	0 5 6		帰還	437	0 6 6	今はいつかの誰かとして	
	0 5 5		舞台裏の神々	430	0 6 5	君思フ声	500
	422				0 6 4	月が晒した彼の悪意は	491
	0 5 4		拜啓、星なき夜に眠る貴方へ		0 6 3	仕組まれた罟	483
	0 5 3		陽炎の揺れる頃	415	477		
	407				0 6 2	エシユラリーゼ・ミズガルズ	
	0 5 2		Life goes on		0 6 1	貴方は私が救うから	471
	399				0 6 0	主役達の奔走	464

0 8 7	701	詩われし新たな光	707
0 8 6	693	カンテラの中の小さな朝	
0 8 5		薄い月夜のボーイズトーク	
0 8 4		護衛任務	687
0 8 3	668	リヤム、まだ春半ば	676
0 8 2		リヤム、少し大胆になる	
0 8 1	656	リヤム、少し相談する	662
0 8 0		リヤム、強引に迫られる	
0 7 9		死が二人を別つまで	647

0 9 5	779	目蓋の裏の血濡れた惨劇	769
0 9 4		R a i s e A C u r t a i	756
0 9 3	745	紅いルーージュは嘘の色	
0 9 2		I v y A n d I r o n y	
0 9 1		審問会	738
0 9 0		想い出は遠くの日々	729
		ト	721
0 8 9		ヒイロ・テクニカル・ノックアウト	
0 8 8		ワーグナー劇団	714

001 主人公志望、モブ憑依

『ヒーローに憧れたきつかけはなんですか?』

仮にそんな風にマイクを向けられたとしても、多分俺は応えられないんだろう。だって思い出せないし。

そもそもいつから憧れてたのかだって分からない。

物心ついた時は、多分もうそういう風になっていた。

怪人を倒す仮面のヒーローは良い。

怪獣を倒す巨人のヒーローも良い。

剣を片手に鎧を纏い、魔物を倒す王道の主人公なんて格別だ。

漫画に小説、テレビに映画。いたる架空に星の数ほど居る主人公ヒーロー。

産まれてこのかた十八年間、ずうっとその星のひとつになる事を夢見ていたんだ。だから、まあ。

二月の第四週末。人通りの少ない街角で。

泣いてる女の子の代わりに、暴漢のナイフから身を呈ていす。

そんな最期も、悪くないんじゃないかと思っただけだ。

「手違い?」

「誠に申し訳ありません!」

死んだと思つて目が覚めたら、宇宙空間っぽいところに投げ出されて。

あの世つてこんな場所なのかとぼけーっと漂つてたら、女神みたいな格好をした美人と、神官っぽい格好をした美人が現れて。

急に土下座かまされて。貴方が死んだのは、手違いだったんですなんて風に畳掛けられれば。

俺こと熱海^{アタミ} 憧^{シヨウ}は、もう困り果てるしかなかった。

「あの。とりあえず頭上げてもらつていいですか? えーと??」

「これは失礼しました。私、運命の神ノルンと申す者です」

「ご、ご丁寧にどうも。んで話を整理すると??俺、本当は死なない予定だったんです?」

「その通りです。だったんですけど??実はですね。こちらをご覧下さい」

「金色の糸?」

神官から差し出されたのは、高級そうな青い布の上で眩く輝く金色の糸だった。

綺麗な金色。純金の輝きつてよりも、青い海に架かる光の橋みたいな神秘的なまばゆさだ。なんか真つ二つになってるけど。

しかし、これがなんだって言うんだろう。

「真つ二つになつていきますでしょう」

「なつてますね」

「私がやったんです」

「お前がやったのか……つて、はい？どゆこと？」

「で、ですから、貴方の運命の糸が綺麗で、こう、翳してたらですね。爪が引つかかつて

プツンと??」

「えー」

なんてことだ。

暇を持て余した神々の遊びで、俺死んじやったのか。

手違いつてそういう事かい。

でもなんていうか、正直ピンと来ない。リアリティが無さすぎて。怒るべき場面なん

だろうけど。

それに目に見えてしよぼかれてる女神に追い打ちをかけるなんて、趣味じゃないし。

「ともかくお詫びです！」

「お詫びつすか」

「はい！ ワビサビじゃないです！」

「分かつてますけど」

「でもワサビは凄くツンと来ますよね。似てるのに似てない」

「まあ分かりますけど」

「アワビはあんなに美味しいのに！」

「話進めてもらっていいですか」

なんか言動も行動も破天荒だなこの女神様。

会話のハンドルの切り方が急すぎんだろ。

「それで、お詫びってなんですか？」

「はい！ 私の権能を使って、貴方の次なる生を貴方の望むようにして差し上げます！」

「え。望むようになって、なんでも？」

「望む形であれば、如何様にも。あ、やっぱり男性ですから異性からモテモテになりたいとか、巷で流行りのチート能力持って無双だったり、領主として領土経営だったり、美少女とゆっくりまったりスローライフだったりとかでしようかね？」

「……そんなもん、決まってる」

貴方の願いを叶えましょう、なんて。

望む通りの生き方。描いた理想がそのままに。

そんなことを熱海 憧に告げたのなら、願いはひとつに決まっている。

産まれてこのかた十八年間、ずうっと夢見ていたんだから。

「俺は???ヒーローに成りたい!」

「え。ひ、ひーろー、ですか?」

「そうっす、ヒーローっす! ああなんて甘美で胸が熱くなる響きかつ! 1にヒーロー2にヒーロー、34がなくても5にヒーロー!! 他はいつでも良いからっ! ”ヒーローって名乗っても胸を張れる人生”でおなじやつす!!!」

「は、はあ。そうですかあ」

それはもう土下座せんばかりの勢いでお願ひした。

十八年間、画面の向こうのヒーロー達に負けじと努力は詰んでも機会には恵まれなかったんだ。

だからこそこの好機、細かい事は無視してでも掴み取りたい。

「変わったタイプの御方ですね」

「そうっすか? 男なら誰しも持つてる願望ですけど」

「そうかなあ」

「そうなんっす!」

でも何故か女神様はいまいち微妙な顔をしていた。

全然ピンと来てない困惑フェイスである。

解せぬ。やっぱりヒーロー願望は女性からしたらあんまり理解出来ないもんなのか。

「分かりました。では少しお待ちを」

けれども吐いた唾を飲む事はしないでくれるらしい。

神官が懐から取り出した広辞苑並に分厚い本を受け取ると、ぶつぶつ呟きながらペラペラとページを捲っていた。

「ええと、ひーろー。ひーろー。ひーろ。ひいろお、つと??あ、ありました」

「おおっ!」

「なんて嬉しそうな目??本当に変わった人ですね。けれど良いでしょう。それでは貴方の次なる生に導いて差し上げますね」

「それって巷で噂の転生ってやつですか!」

「あ、いえ。転生とは少し違います。生まれ変わるわけじゃないです。転移とも異なります。魂だけがすっぽり器にインするわけですから??憑依、が一番相応しい表現なんじゃないでしょうか」

「そつすか! よく分かんないけどヒーローならなんでもいいです!」

「はあ。露骨にテンション違いますねあなた。でも喜んで貰えるなら何よりです。あ、あと、今なら女神ノルンの副官として神様の側でスローライフなんてのも??」

「ヒーローじゃないなら結構です! お構いなくう!」

「ぐすん」

なんかテンションのままに喋ってたら女神様が涙ぐんでるけど、どしたんだろう。目に埃でも入ったのか。神様のお膝元にも埃つて舞うんだな。

「では、これより貴方の望みを叶えます。動かずに、じっとしててくださいいね?」「うっす! 微動だにしませんからお構いなく!」

「ふふ、分かりました。それでは——」
いよいよよって事らしい。

緊張気味の俺にくすぐったそうに微笑み一つ零すと、女神はゆっくりと指揮者のように指を一本翳した。

「運命の女神、ノルンが権能を今ここに。

星霜満ちて、悠久を越え、空へと譲られし魂よ。

汝が次なる星の軌跡は??灼炎焦がす、黄昏の向こう。

眠らぬ魂の灯火よ——『ヒイロ・メリファー』の器に灯れ」

宙を橙色に光る爪が、軌跡をなぞる。

荘厳で壮大な詩を彼女が紡ぐ度に、なぞった軌跡が青白く浮かび上がって、星座の様に連なる。

連なった青い光のラインが、灯れの一言と同時に——生き物のように俺の身体にまとわりついた。

「っ、お、おお??身体が、光って??」

「準備が整ったということですよ。まもなく貴方は行くでしょう。剣と魔法と神話と神秘の世界へと」

「露骨にテンション変わったつすね」

「もう！ 最後までいい締めときたかつたんですつ。私、これでも運命の女神なんですからっ」

指先から光の粒子へと変わっていく俺の身体。

肌で感じる。本当に今から、何かが始まるんだ。

夢見たヒーローに、憧れ続けた主人公になる為の物語を、始めるんだ。

「まもなく、か。じゃあ、最後に一つ聞いておきたい事があるんすけど」

「あ、はい。なんででしょう?」

だからって訳じゃないけど。

最後に、心残りを無くしておきたかったから。

「俺の最期??少しは『主人公』っぽかったですかね?」

「???」

ヒーローのように、誰かの涙を止める事は出来なかつたけども。

いつからか憧れた何かに、少しは近付けたんだろうかっと思うから。

「——はい。確かに。貴方は紛れもなく主人公でしたよ」

「うん。なら、良かったっす！」

視界を埋め尽くしていく光にあやされて。

俺は眠るように、目を閉じた。

「貴方の旅路に幸あらんことを——」



「ふう。一時はどうなることかと思いましたが、なんとか丸く収まりましたねえ」

「ノルン様」

「んえ？　なんですか。貴女が自分から話しかけて来るなんて珍しい??」

「いえ、彼の次の人生についてですけどね。ノルン様は何か勘違いをしませんか？」

「勘違い、ですか？　それはないでしょう。あんなに『ヒーロ』という名前のキャラクターになりたいって仰ってたじゃないですか」

「??あの」

「本当に変わった御方ですよ。ヒーロって名前に相当なこだわりがあるんでしょう」

か。人生目録で探してみましたけど、なかなかそれらしい名前がなかったので。もし見つからなかつたらどうしようかと」

「あの、女神ノルン様」

「どうしました？」

「彼が望んだ人生って、ヒイロって名前の人じゃなくて??ヒーロー。つまり英雄とか勇者とか、そういう主人公みたいな人生を送りたいって事なんじゃないませんか？」

「……………えっ、嘘。え、ヒーロー？ しゅ、主人公!? あ、あのあのその??彼の次の人生、主人公どころか、悪人寄りのモブキャラなんですけどそれは」

「??しかも、よりにもよって現実世界じゃ『鬱RPGゲーム殿堂入り』として名高いあの世界ですよ。またすぐ死んじゃいますよ、彼」

「えええええ!!! どどどど、どうしましょう……!!」

「どうにもなりませんよ、もう」

「そんなあぁ~~~~!!!」

こうして新生ヒイロは誕生した。

尚、ヒーローではない模様。

002 口悪い系主人公とかもはや基本です

パチパチ、パチ。

火花の産声と死に声と、炎の匂いがする。

熱い。真夏の炎天下とは比べ物にならないくらい。

なにもかもが燃えていた。目の前で。コンクリートも、陳列された商品も、買ってとねだったお菓子の袋も、人も。

炎で焼けてる匂いがした。

——おに??ちや??

喉が焼けるようだった。

どこかの建物の中。一面の紅蓮。

熱いし臭うし痛いのに、水の中に居るような浮遊感があった。

揺れる。傾く。気付いたのは、目の前にある誰かの背中だった。

——おにい??っ!

大きい背中が、振り返って顔になる。

顔だけど、顔じゃなかった。

仮面だった。上半分だけの。

下側は破けたんだろう。

煤の付いた唇が微笑みを作っていて。

なんでか俺は、ひどく安心したんだ。

——おにいちゃんっ！

安心して、また眠気に襲われて。

瞼の間。仮面の男の、その向こうから。

崩れた瓦礫が、落ちて、きて

????

「起きてっつてば、お兄ちゃん！」

世界に、光が射した。

◆
「わっ、起きた」

重たい^{まがた}瞼の向こうには、仮面の人なんてどこにも居なかった。

それどころか、シーツっぽい布を両手に持ったエプロン姿の少女が一人。

炎の匂いもしない。熱くもない。

なんなら寒いくらいで、真後ろの開けた窓から吹いた風に身を縮こませたくらいだ。

「もう、お兄ちゃん大丈夫？ すごい汗かいてるよ」

「？」

「ぼーっとしてる。熱、もう下がったって思ったのに。うなされてたけど、悪い夢でも見たの？」

「??」

ああ。なんか気持ち悪いと思ったら、汗だくじゃん。

反射的に立ち上がれば、ふと違和感。

なんか、視線が高い。部屋の中の椅子とか机とか。背伸びしながら見渡せば、丁度こんな感じのような。

それで、頭二つ三つは低い位置にある少女の顔。

赤茶の髪をお下げにした、野暮ったいけど家庭的な雰囲気の子だった。そばかすが実にチャームポイント。

「??なに、じろじろ見てるの」

「?!ア」

照れて赤面する、なんてことはない。

むしろ不審がつてる眼差しだった。

流石に失礼だよなと思ひ、とりあえずの詫びついでに聞かなくちゃならない事があつた、んだけども。

「うっせえ。誰だテメエ」(ごめん。で、どちら様?)

「??は?」

「は?」(はい?)

え、なに今の低い声。

え、今の俺の口から出なかつたか?

いや俺の口からだよ。でも、あれ。

めっちゃ乱暴な感じになつてませんでしたか今。

「??」

「??」

思わず黙り込めば、向こうも同じく黙り込む。いや同じじゃないかも。

見る見る内に眉毛が吊り上がってるし。

頬も赤くなってきた。勿論照れとかじゃない。

えー。誰がどう見ても怒ってます。本当にありがとうございました。

「??じゃ、早く降りてきて。ご飯出来てるから」

「お、おう」

「ふんっ」

出逢い頭に誰だテメエ、なんて言われたら、そらそうなるね。

シーツをこつちに投げつけると、木造りの床にダンツダンツと足音を立てて少女は

去っていった。

いやーかなり怒ってらっしゃる。俺のせいだけど。

(??お兄ちゃん、って言ってたな)

お兄ちゃん。あだ名ってことはないはず。

多分妹だよな。起こされたし。一緒に暮らしてる感じだったから、そういう事だろう。

くるくる回る考えついでに、視線もキョロキョロさせてみれば、部屋の扉のすぐ脇に丁度良さげな姿見があった。

と、同時に思い出してくる。

死んだ事。死んだ後の事。

あの木の根が蔓延る宇宙空間っぽいところで会った女神ノルン。彼女の言ってたお詫
びと、旅立ち。

思い出して、思い返して。

身体がぶわつと熱くなった。

(ああ、そっか。そうだった！俺、ヒーローになったんだった！)

そうだ。願いが叶ったんだった。

転生だったか転移だったか憑依だったか忘れたけど。

そう思うと興奮が収まらなくて、思わずニヤついてしまつて。

(と、とりあえず落ち着こう。鏡でも、見て??)

クールダウンの為にとも姿見の前に立った。

立って、映って、見て、目を見開いて。

思わず言葉が漏れた。

「クツソ目付き悪いなオイ」(目付き悪っ)

あ、ついでに口も。

003 幼馴染は悪役貴族

どうも熱海 憧（旧）です。

今はヒイロ・メリファー（新）をやってます。

なんて風な自己紹介じゃ相手は混乱するだけだし、こつちも混乱しそうだ。
というか今まさに混乱してるんだろう。

ヒイロ・メリファー。それが今の俺の名前ってことらしい。

年は十八の健康男児。赤茶の髪色。前髪がバッテンみたいにクロスしてるのが
チャームポイントな、少年以上で青年未満。

背は高く手足も長いが、人相悪くてガラも悪けりや口も悪いの三連コンボだ。

特に目付きの悪さは酷い。鏡を見た時は、どこのチンピラだよ、とは正直に思ったく
らい。なのになんかパツとしない顔つき。なんだよこれ。

しかし、しかしだ。

悪人相だったたり柄の悪い主人公なんて、今どきいくらでも居る。むしろ人気のジャン
ルだろう。

それでヒイロって名前。いやもう、ニアピンじゃん。後伸ばすだけじゃん。

さらに、サラ・メリフアーって家庭的な妹まで居ると来ましたよ。
ああ、もうね、布陣整ってる。

誰がどう見ても主人公です、本当にありがとうございましたあやつほおほおほい！
「ねえ。お兄ちゃん、なんか今日変だよ」

「ああ？」（変って？）

「だって、気味悪いくらい自分のこと聞いているし。どうしたの。三日続きの高熱で記憶も全部吹き飛んじやった？」

「知らねえ」（さ、さあ。なんのことかさっぱり）

「あつそ。いいけどさ」

やつべ、と内心で冷や汗を垂らす。

ちよつと調子に乗ってあれこれ聞きすぎたせいで、サラに訝いぶかしまれてるらしい。

そりやそうだよな。むしろ兄貴の癖に誰だテメエなんていう奴に、よく答えてくれたよ。出来た妹である。メシも上手いし。

でも、訝いぶかしてみたいのは俺の方でもあった。

もつともサラにはなく、俺自身の疑問点だけど。

「んでこんな口悪イんだか」（なんでこんなに口悪イんだよ）

「は？ あたしが？」

「俺に決まってるだろうがよ」（いや俺だよ俺）

「??はあ。お兄ちゃんの口の悪さなんて、今に始まったことじゃないじゃん。変なの」
 そう、これだ。

さつきから喋ろうとしてる内容が一致しない。

というか、滅茶苦茶乱暴な言葉遣いに変換されてしまうのは何故だよ。正直困ら
 ず。

サラいわく、俺は元から口が悪いらしい。

でも時々ニュアンスまで違う内容にまでなってるのが質が悪い。下手すりゃ誤解招
 くぞこれ。

（主人公にやなれたみたいだけど??思わぬ障害があったなあ）

思った事を素直に伝えられないから、結構会話が大変。今後苦労しそうなのは間違
 ない。まだ湯気が残ってるシチューの残りを飲み干しながら、俺はそつと溜息をつ
 いた。

「というかお兄ちゃん、そんなにゆつくりしてて良いの？ ルズレー様とシヨーク、そ
 ろろ迎えに来るよ?」

「迎えにだア? つか、誰だソイツら」（迎えにつて??それに、誰だろその人達）

「え、冗談でしょ? 二人は昔からの付き合いなのに?」

「はん、腐れ縁つてとこか」（幼馴染つてとこか）

「??そう思うなら勝手だけど、口にしないですよ。特にルズレー様の前では??つと。玄関ツツキの音だ。噂をすればだね」

「?」

なんで様付け。あと玄関ツツキつてなに。

疑問を明らかにする間もなく、サラに玄関の方へと急かされる。

しかし、幼馴染か。幼馴染と来ましたか。

完璧じゃないか。主人公に幼馴染は付き物だ。

ラブコメなら美少女幼馴染は鉄板だ。

王道バトル漫画でも、美少女ないしは理解者の立ち位置のイケメンと相場が決まってるし。

期待に胸を弾ませて、コココンコココンと啄木鳥きつつきに突かれてるような音が響く方へ行けば、向こう側から扉が開いた。

「遅いぞヒイロ。嘴ノックが五度目を過ぎたから、つい開けてしまったじゃないか」

「ルズレー様。開けたのは俺っすけど」

「シヨーク。貴族は手ずから戸を開けるものじゃない。これは平民の仕事だろう」

「へいへいっす」

開くや否や、不機嫌そうな第一声。

豪華なマントを身に包んだマツシユルームヘッドの金髪男と、とんがり鼻で小柄な緑の短髪男。

妹とは打って変わって、扉の向こうの二人組の第一印象はというと。

なんていうか、こう。明らかに、見るからに??

「??悪人面な奴だ」（性格悪そう）

「お前が言うなっ！」

外見だけならもう見事に悪役だった。

しかも端役。なんという華の無さ。俺も含めて。

幼馴染にしちや珍しい塩梅すぎないかこれ。ま、まあ、中身はイケメンなパターンかもしれないし。別に美少女じゃないのを残念がってるとかじゃないから。うん。ほんとだよ。

「つて、おい、なに突っ立っているんだ。というかお前、荷物すら持っていないじゃないか。さっさと準備して来い、僕を待たせるな」

「あ? 何の準備だよ?」

「??寝惚けているのか。だらしがないぞ、これだから平民は」

平民つて。こいつも口悪いのか。尖ったキャストイングだな。

正直少しイメージとの落差があつて、若干落ち込む。

けども、そんなルズレーから飛び出た一言に、俺の失意は一気に回復した。

「騎士養成学園『ヴァルキリー』に行く準備に決まつてるだろ」

騎士、養成学園、だと???

んー。はい。はいこれロイヤルストレートフラッシュです。王道パターン入りました。

拝啓女神様へ。ありがとうございます。次死んだら貴方に仕えますね。

004 学園物語、開幕!

騎士。

この階級一つの響きで、胸を弾ませる少年少女がどれだけ居るだろうか。

『ナイト』『シユヴァリエ』『ナイトロード』

主を護る銀の盾。敵を貫く銀の剣。

時に身を滅ぼそうとも曲がることなき銀の意思。

古くから現代に至るまで様々な物語に題材とされ、その度に物語を彩ってきた人気の称号だ。

誰もが一度は見ただろう。

白馬に跨り、主君に仕え、譲れぬ意思で剣と盾を用いて闘う夢物語。そんな舞台に立ってみたいと。

勿論、俺もその一人であり??今こうして立っている。

それも主人公として。ははん最高かよ。

(しかも、この大通りの規模。明らかに大国じゃん。なんだっけ、聖欧国アスガルドムだっけか。そんな舞台で主人公とか、やばいだろ。想像しただけでノルン様と再会出来

るわ)

アスガルダム。もう名前からして仰々しい響き。

その上名前にも負けない美しい街並みには、もう溜め息しか出ない。

縦にも横にも広い大通り。道行く人の多さ。遠巻きに見える馬鹿でかい城。

現代じゃお目にかかれないレトロ口で神秘的な風景に、テンションぶち上がりだった。

(うへ、うへへへ。ノルン様マジでありがとう。足向けて寝れねーや。居る方角知らんけど)

中の人ならぬ外の人フィルターでニヤケ顔になってなくて良かった。

まさに気分は有頂天。このまま心行くまま浸っていたっていられば、どれだけ良かったか。

「おいヒイロ、聞いているのか!」

大通りでもお構いなしに響く怒声。

ああもう、またかよ。振り向けば案の定、ルズレーが俺を睨んでいた。

「なんだ」(なにー?)

「なんだよじゃない! 貴族たる僕の前を歩くなときつきから言ってるだろう!」

「??はあ? 良いだろ別に」(えー。ちよつとぐらい良いじゃん)

「る、ルズレー様。ヒロのやつ、まだ熱の名残りで調子戻って無いんすよきつと！ほらヒロもつ、さっさと後ろ回れって！」

「チツ」

渋々ルズレーの後ろに回れば、満足したように大股歩きで道行くルズレー・セネガル。聞かずとも何度も口にする通り貴族なんだとか。

水と油。ハブとマングース。騎士も歩けば貴族に当たるつてくらいに、貴族もまた騎士と同じくメジャーな階級だけでも。

前を歩けば怒るし、話に相槌あいづち打たなきや怒鳴るし。

悪い意味での貴族っぷりに、せっかくの高揚感も台無しだ。

鳴らした覚えのない舌打ちだつて鳴るよねそりや。

「面倒かけやがって、このデクめ。ルズレー様の機嫌を悪くすんなよな」

「あ？ んで俺が腰巾着みてえ真似しなきやいけねーんだ」(えー、流石に嫌なんだけど)

「ちよ、おま??真似もなにも今までそうだったろ?」

「んなもん知るか」(マジかよ。勘弁してくれ)

「ひつ、至近距離で急に睨むなよ??くつ。頼むから、齒向かったりはすんな。割を食うのは俺なんだからな」

しかも、この絵に書いたような腰巾着のシヨーク。

彼曰く、昨日までの俺も同じ立ち位置だったらしい。

いやいや冗談じゃない。わがまま貴族の太鼓持ちって。そんな主人公像は持ち合わせてない。

シヨークにや悪いけど、今後も割を食って貰おう。

「おい、後ろでごちやごちやうるさいぞ！ 僕の品位を下げるような真似をするな！」

「へ、へいつす！」

「????」

「ヒイロ、分かったのか?!」

「うるせえな。分かったから前向けや。転ぶぞ」

「ふん、僕がそんなドジを踏むとでも????どわあっ!」

忠告虚しく、マントを器用に踏んづけて見事にすつ転ぶ貴族様。いやほんとに転ぶんかい。

なんだろう、この圧倒的小物感。会って一時間も満たない内にすさまじいまでの株価暴落である。

「??言ってる側から踏むなよ」

「う、うるさい!! さっさと起こせえ!!」

息をするように命令。

た。
慌てて引き起こすショックの背中に、なんとも言えない先行きの不安を感じる俺だっ

005 学園物語、閉幕！

「騎士とは、即ちガーランド王家の揺るぎなき剣にして盾であります。王家に仇なす敵を討ち、国家を脅かす敵から守護する。騎士、並びに『エインヘル騎士団』はその為に存在します」

「うむ。心得てますね、ペランニージ君。では続けて仇なす敵、脅かす敵とは何か、答えてご覧なさい」

「はい！ 敵とは無論、魔獣です。人々の安全を脅かす人類の天敵。それがぼくら騎士にとつての敵であります！」

「?!悪くはありませんが、心得違いもありますね、ペランニージ君」

「え、どこがでありますか?」

「『ヴァルキリー学園』の学生は等しく騎士の卵です。まだ騎士ではありません。騎士と養成学徒では、その肩に積もる責任は大違いですよ。意気は買いますがね」

「うっ、はい」

消沈しながらがつくりと項垂れる目の前の生徒の肩を、隣の生徒が慰めるようにポンと叩いた。

窓際の席。左から吹く世界の風が、手元の教書のページをめくる。

まさに学園物語の1ページだ。素晴らしい。死ぬ前も学生だったけど。でも死ぬ前と後とじゃ、心の弾みっぷりが違う。

その最たる理由は、やっぱり俺が居るこの世界の現実離れっぷりだろう。

(すげえ。まさにファンタジーじゃんこの世界)

教書に目を通せば、開かれたページには大陸図が描かれていた。

四方に海を囲んだ円形の大陸は、当然俺の生きてた現代とは違う形状だ。

『ユミリオン』と名付いた広大な地続きの大陸と、色分けされる諸外国。

そしてユミリオン大陸の、約四分の一の領土を占める聖欧国アスガルダム。

王家ガーランド、エインヘル騎士団、ヴァルキリー学園。

教書に記されたのは、ただの地名の一つ一つ。でも、ここから俺の物語は始まるんだ。主人公として足跡を刻んでいくと思えば、胸が踊って仕方なかった。

『聖欧国アスガルダムの始まりは、人歴1500年。今より約500年を遡る。当時長きに渡る国家戦争に終止符を打った稀代の英雄王シグムント。彼と、彼に従う四人の英雄、そして彼の者を王と戴く人々によってアスガルダムが建国された』

だから捲ったページのアスガルダムの成り立ちって内容にも、食い入るように文字を追った。

英雄王。四人の英雄。くうう、たまらんね。

俺も後に英雄王とか呼ばれちゃったりすんのかな、と思うと、天にも昇る気分だった。

「随分と熱心ですね、ヒイロ・メリファー」

「あん？」（はい？）

「普段不勉強な貴方が珍しく教書を広げている事には感心します。しかし、教師の話を聞いてないといういつも通りの点には感心出来ませんね」

「???」

し、しまったー!。

夢中になり過ぎて完全に聞いてなかったし。やばい。

「まったく、この期に及んでもあなたという生徒は??今すぐ、学園を十周です。反論は認めませんよ」

「??マジかよ」

慌てて謝ろうにも、時既に遅し。

有無を言わさない雰囲気です。教室の出口を指差す先生に、もはや言い訳は通じるはずもなく。

「クスクス」

「良い気味」

「腰巾着には丁度良い葉だよ」

途端に囁かれた冷笑に蹴飛ばされるように、俺は教室から出ていくしかなかった。



「チツ」

先行きへの不安は見事に的中した。

学園と呼ぶだけあって広い外周を走りながら、なんだかなあという心の呟きは、舌打ちに変換されて春風に溶けた。

(はあ。出鼻くじかれちったなあ)

一周辺り、大体二十分。

てことは十周を終えるまでには三時間。

これじゃあ期待してた実技演習とかいうカリキュラムには参加出来ないだろう。身から出た錆とはいえ、悲しくなってくる。

目新しい世界に対する興奮も、水をかぶったように少し冷えた。

しかし、グズグズと引きずるのも柄じゃあないか。

(しゃーない。切り替えてくか。後七周だっけ)

ああでも、ランニングなんて久しぶりだ。

毎日欠かさずやってた習慣を、まさかこつちに来て早々やるとは思わなかったけど。

悪くないか。身体鍛えんの好きだし。

にしても体力ないなーこの身体。

まだ三周だつてのに、もう息切れしてるし。

(にしても……嫌われ者っぽいな、俺)

教室を出る最中に聴こえた、悪意の囁きを思い出す。

腰巾着。良い気味。ざまあみろ。

冗談のニュアンスを含まない悪口の数々からして、以前のヒイ口は良く思われてなかつたんだろう。

(ま、こつからつしよ)

とはいえ、マイナスから始まる学園生活も悪くない。

徐々に見せ場を作っていく、周囲の目を驚かせながら自分の道を突き進む。

苦難の中で掴む努力、友情、勝利。

いいじゃないか、そんな王道展開。

数学が嫌いな俺でも、覚えておきたい方程式だ。

(やってやる! やってやるぞ俺は!)

走りながら脳裏によぎる未来予想図。

これからの学園生活への課題とやり甲斐と期待と興奮に、胸が弾んで仕方なかった。

「それでは、明日は卒業式です。誉れ高きヴァルキリーの生徒として、最後までしっかりと胸を張り、門出を旅立ちましょう」

なお、学園生活編は二日で完結した。

拝啓女神様へ。泣いていいですか。

006 ヒーローの道も一歩から

新たに始まる学園生活。期待に胸を膨らませてたら、僅か二日で終わりました。

学び舎の門出に感極まって泣き出す生徒達の輪から離れて、俺は内心で涙の滝を作った。

ほんと泣くわ。悲し過ぎる。俺の期待と意気込み返してくれ。

と言いたいのは山々だが、いくら悔し涙で枕を濡らせど時間が巻き戻るはずもない。

そんなこともある。切り替えていけ。ポジティブ大事。自己暗示とかじゃないから。

『まもなく貴方は行くでしょう。剣と魔法と神話と神秘の世界へ』

女神様の言葉を思い出す。神話と神秘はともかく、剣と魔法だ。色んな主人公道を学ぶために多くの創作に手を出した俺としては、やはり剣と魔法と聞くとRPGを連想してしまう。

そもそも主人公なんてのが露骨に存在してる時点で、この世界はなにかの創作物って風に思うのが自然だ。ならここは一つ、RPGの世界って仮定して今後の方針を決めるべきなんだろう。

とはいえ先の未来に悩んで自分探しの旅に出る必要は、俺にはなかったらしい。

というのも。

『はあ？ お前は僕とシヨークと一緒にエインヘル騎士団に入るに決まってるだろ。ふん、取り柄のないデクのお前を今後とも僕として扱ってやるって言ってるんだ。有り難く思えよ』

なーんて風に、幼馴染みに将来設計されてるらしい。下僕呼ばわりを有り難く思えて。ははは、一周回って尊敬してきたぞ。

しかし、騎士団である。つまりは騎士である。

成りたい。ちよー成りたい。主人公・騎士ヒイロ。

かつこいいじゃん王道じゃん最高じゃん。

せつかく養成学園だって卒業したんだし、他の選択肢は俺の目には無かった。

とりあえず、目指すのはこの国一番の騎士でいこう。

せつかく主人公として生きていけるんだし、どうせなら高くを見なきやね。やはり最強の称号は男ならば誰しもが憧れるもんだし、目指すべき場所が高ければ高いほうが燃えるというもんだ。

てな訳で、バチツと目標は決まった。

エインヘル騎士団の入団テストも再来週とサラに教えて貰っている。

だったら後は、やることなんて一つしかないだろう。

そう、鍛錬だ。

「ふんっ！ ふんっ！ だらあっっ！」

千里の道も一歩から。

ヒーローの道も同様に、一歩から。

「はあっ、248いっ！ ぐうっ、249う！ せいっ、にひやく、ごじゅう！」

主人公といえ、努力、友情、勝利の鉄則だ。

俺は単なる酔狂で主人公を夢見てる訳じゃない。

どうせ目指すなら、当然てっぺん。つまりは最強だ。

ならば当然、最初の一步たる努力を怠る訳には行かなかった。

「ぜえっ、ぜえっ……くっ、まだだ。まだ半分、残ってる……っ、ぜあっ！ にひやく、ごじゅういちイ!!」

ランニング、おおよそ30キロ。

腕立て伏せ、腹筋、背筋、スクワットを各100回を3セット。

騎士を志すなら剣を触れなきや意味が無いってことで、木の棒を素振り500回。

入団テストのその日まで、俺は、生前の倍の量のトレーニングに励んでいた。

「はあつ、はあつ、はあつ……」

にしてもきつつい。体力無いなあ、この身体。

ちくしょう、死ぬ前のがよっぽど動けてたじゃん。

新しい世界は歓迎すべきだけど、主人公の境遇には歓迎出来ない要素も大いにあった。

まあ、嘆いたって仕方ないんだけど。

「ぐっ??」

体力の限界に来たのか、立ち上がれない。

木刀代わりの棒切れを投げて、ぐったりと仰向けに倒れる。

ちよーつとハードスケジュール過ぎたかもしれない。

立てない。しんどい。脂汗なんかもうタラタラのギトギトですよ。

素振りを終えた手も真っ赤。血豆が潰れてその上からまた新しい豆が出来始めてるし。

おのれ元の身体の主人公め。お前さんがもうちよいサボってなきやこんなにキツくはなかつたらうに。

「?!」

なんて悪態をついてみるけれど。

この限界まで励はげんだ感じ、結構好きなんだよな。

達成感というか。夢に向かつて邁進まいしん出来る実感を噛み締めてる感じが、昔から好きだった。

「??:くああっ」

でもやっぱり身体は正直なもので、ドツと眠気が襲って来ている。全身から伝わる疲労感を懐かしみながら、俺はそつと目を閉じた。

007 サラ・メリファアの視点

「お兄ちゃん、ほんとにどうしちゃったんだろ」

荒い息を途切れさせながら、満足したように庭で倒れた兄の姿に、サラ・メリファアは困惑していた。

いや、正確には困惑し続けていた。

三日も長引いた高熱が治ってから、ずっとだ。

サラにとつての兄、ヒイロ・メリファアは努力とは無縁の男だった。

怠惰で口数も少なく、主張も主義もない。

昔馴染みのルズレーに染まって口が悪くなる一方で、彼の言うことには決して逆らおうとせず、言われるまま為されるまま。

背丈と違って気が小さい。そんな、世にありふれた自分の無い人間だったはずなのに。

「やっぱり、あの熱のせいなのかなあ」

兄は変わった。明らかに。

養成学園を卒業した日に「この国一番の騎士になる」と自分に宣言してからというも

の、毎日のように過酷な鍛錬を積んでいる。

サラは唾然とした。はつきりと断言した兄にも。言葉を嘘にしない為の、鍛錬のハードっぷりにも。

「でも性格が変わっちゃう熱なんて聞いたことないし??村のみんなも全然分かんないみたいだし」

王都から離れた麓の村、ヘルメル。

自分と兄が暮らす村の人間は、誰しもがヒイ口の変貌っぷりに驚いていたが、誰にも心当たりのある人間など居なかった。

当然、人を変える熱病など知る由もない。

村一番の知恵袋であるルチャーバお婆に聞いてみても「さっぱり分からん」の一言。

村の噂好きいわく、一目惚れした美女を振り向かせたいからじゃないか、なんて憶測が出てるらしいけども。

真偽を問うても「俺がヒイ口だからだ」とはぐらかされた。サラには意味不明である。

「ルズレー??様、の誘いを断るなんて。今まで絶対あり得なかったのになあ」

何よりサラが驚いたのは、卒業式から二日後。

街に繰り出すからと迎えに来たルズレーの誘いを断つてまで、兄は鍛錬を優先させた

のである。

あり得ないことだった。無論ルズレーも、先に誘われたであろうシヨークも困惑した。

困惑ならまだしも、ルズレーは憤慨した。

今までの彼なら当然だ。自分に逆らうなんてあり得ない。ましてやそれがただの鍛錬如きに傾き負けるなど。

しかし、二度目の誘いにもヒイロは頷くことはなかった。

結局、耳を塞ぎたくなるような罵詈雑言を吐き捨ててルズレーは去っていったのだが。

去り行く背を無言で見送りそのまま何事もなく鍛錬を再開した兄の姿に、目薬を求めて村の薬師の元まで走ったのも記憶に新しい。

「??」

分からない事ばかりだった。

でも、確かな事もある。

兄は本気だ。本気で騎士を目指している。

ルズレーの取り巻きじゃなくて、国一番の騎士を。その姿を、笑う村人も居た。感心する村人も。気味悪がる村人も。

サラとて彼らの気持ちが分からない訳ではない。ちつぽけな村の小さな村人の一人が抱くには、あまりに身の程知らずな夢見事だ。

でも自分は家族である。そして、家族であるからこそ知ってる事もある。

口も悪ければ人相も悪く、流されてばかりの小心者。

そんな、誇るべき所なんてひとつも無かった兄だけけれど。

妹に、嘘をついた事だけは一度もなかった。

「??タオルくらい、用意しといてあげるかな」

頑張つてね、お兄ちゃん。

まっさらなエールは、けども気恥ずかしくて胸の内についぞ閉まったまま。

そばかすの広がる頬をかきながら、サラはいそいそとタオルを取りに行く。

サラ・メリファーはいわばモブの妹。

ただの平凡な村娘。騎士の養成学園に通つてる訳でもなく、剣のひとつも握ったことのない少女。

故に気付けるはずもない。

ランニング、おおよそ30キロ。

腕立て伏せ、腹筋、背筋、スクワットを各100回に、木の棒を素振り500回。

そんな過剰な鍛錬を、急に始めれば身体がどうなるか？

当然悲鳴をあげる。初日の晩など、ヒイ口の全身は当たり前のように筋肉痛に苛まれていた。

だが翌日。彼は当たり前のように、前日と同じメニューをこなしたのだ。

一足歩けば膝を折るかねないレベルの激痛。

一回の腕立て伏せで、折れそうになるほどの激痛。

一度の素振りで、手に持つ重しを落としかねない激痛。

それら全てに苛まれながら、それら全てを我慢して。

脂汗を垂らしながら、悲鳴をあげながら、それら全てを懐かしみつつもやり遂げる。

それが、どれだけ『異常』なことか。

幸か不幸か。妹のサラには気付けるはずもなく。

結局ヒイ口は入団テストのその日まで、一日とて鍛錬を欠かしも減らしもしなかった。

008 入団テストと灰色の乙女

時は流れてアリエスの月の27。

現代で言うところの3月末。

つまりは騎士団入団テスト当日が、ついにやって参りましたという事だ。

(うつわすんげえ人の数?!これ絶対卒業生だけじゃない。多分、一般募集枠の人も居るな)

エインヘル騎士団総合本部、通称ヴァルハラ。

アスガルダム王城のすぐ膝元にある本部の一画。

そこに今回の受験者達がこぞって集められており、見渡すだけでも百人は下らない。倍率どんだけ高いんだろ。や、気にはなんないけど。

だって俺、主人公だし。落ちないだろうからヘーキヘーキ。

「田舎者じゃあるまいし、あんまりキョロキョロするな。僕まで品位を疑われるだろ」

「へへ、すんませんつす。まさかこんなにも多いとは思ってもなかったもんで」

「??人がゴミのようだな」(確かに多いよなあ)

「所詮、平民の集まり。僕に比べればただの塵さ。わざわざ落とされに来るとは、身の程

知らず共はこれだから」

そして相変わらずの幼馴染の二人である。

こないだの誘いを断って以降、ルズレーとは溝を作ったかもと実は少おーし反省してたんだが、それでもなかったな。

神経質に見えてさっぱりしてんのかね。男って案外そんなもんだし。

なんて風に奇妙な友情にしみじみとしてたからかも知れない。

背後から歩み寄る気配に、これっぽっちも気付けなかったのは。

「ちよっと」

「あ？」

振り向いて、呼吸を忘れた。

美人だった。文句なしに美少女だった。

枕詞にこの世ならざる、が付きそうなほどの。

少しウェーブがあった灰銀色の長髪。左目の下の小さな黒子ほくろにさえ、美が宿ってる。何万人に一人ってレベルの美しさ。

そんな数々の謳い文句がまるで誇大表現にならない、同性異性関係なしに目を奪う美人だった。

俺だって現に結構な近くで拜んでるもんだから、言葉も失くすし頭の中は真っ白だ。

でも、それでもギリギリの所で意識を保ち続けられたのは、ひとえに。

彼女の持つ紅い瞳の??野良犬染みた目付きの悪さのお蔭だった。

「目付き悪いなオイ」（目付き悪っ）

「??あんたに言われたくないんだけど」

ま、そのせいでうっかり口にしちやっただんですがね。

うん、美人なだけに凄みも半端じゃなかった。

「あんたに、言われたく、ないんだけどー」

何故二回も言うのか。怖いから止めてほしいんですけど。

あれだな。効果音って、世界の一つも飛び越えたと聞こえるようになるのね。だって

聞こえたし。ギロツて。もう鼓膜に直接刺すレベルですよ。

「いつまでジロジロ見てんのよ」

「こっちの台詞だ」（や、そんなつもりはないんですけど。そこはお互い様というか）

「あつそ。じゃあ、さっさとそこ退いて。邪魔なのよ」

「?」

「出入口。塞いでんの。わかる?」

「??図体デカくて悪かったな」（あ、すいません）

「ふん」

必然的に睨み合いになつてゐる形から一步下がれば、厳しい顔付きを和らげる事なく少女は脇を通り過ぎていった。

超怖え。なまじ美人なだけに迫力ヤバイ。

主人公として美少女相手に腰抜かすまいと踏ん張つたけど、割とギリギリでした。

「ぬはあ??ぐへ、ぐへへへ。そそる身体付きしてやがった。ルズレー様。今の女、とんでもねえ上玉でしたね?」

「う??ま、まあ、まあ? 確かにそこいらのと比べればな、少しはな、マシかもな、うん」
やつと行つてくれたと安心していけば、鼻の下の伸びた幼馴染達の下衆な眩きが届く。

うん。まあ気持ちには分らないでもない。

デカかったし。背も、一部のむ??装甲も。

薄手で黒い肩出しの長袖に、赤い生地のマフラーなんて奇抜な恰好なもんだから、余計に凄かったし。

下も黒のスリットスカートに、片方だけ黒いストッキングに包まれたおみ足は、後ろ姿でさえ目に毒だ。どういふファッションセンスだよとは突つ込みたいけど。

(あいつも受験者なのか。あの存在感、絶対只者じゃないな)

一目で分かる。重要キャラだろあれ。

抜身の剣みたいなオーラも半端ないし。彼女の後に見たルズレーやシヨークの顔と
いったら、なんとモブモブしいことか。

顔だけならひとの事言えないけど。ま、主人公の顔立ちが割と普通なのは稀に良くある事だし。出来ればイケメンが良かったと思つてないし。愛着湧いてるし。

「ふむ。どいつもこいつも、遠巻きに見るばかりとは骨がない。所詮は平民、美人相手に
気遅れしていると見たぞ」

「あれ、美人？ ルズレー様、さっきマシつて??」

「う、うるさいつ。美しいが、僕と釣り合うには足りない、という意味だ。ふん、良いだ
ろう。だったら僕が情けない平民と貴族との違いつてやつを見せてやる」

「お、おう、流石はルズレー様だぜつ」

「??は?」（え、マジかこいつ）

今更ながらに自分の顔について不安になっていれば、いつの間にか幼馴染がとんでも
ない事を言い出した件について。

いやいや。見せつけてやるつてなに。ナンパでもするつもりか。

マントばさあつ、じゃねーのよ。

「やあ、その君。少し時間を貰おうか」

「??は?」

(ほ、本当に行きやがったよ！ 　いつ試験始まるかも分かんないのに、何してんだあいつ！)

止める間もなく、ルズレーは少女をナンパしていた。

しかもウインクしながら、なんかキメ顔作って、声色も渋くして。当然ながら恐ろしく似合ってたなかった。

「なによあんたは」

「む、ご挨拶だな。僕はルズレー！セネガル。アスガルダム王家に仕えし由緒正しき貴族さ。気品溢れるこの出で立ち、物腰、仕草。分かるだろう？ 平民には纏えない高貴さというものが」

「?!」

「言葉も出ないようだね。しかしそれも貴族相手ともなれば仕方ないだろう。だが分かるぞ。君の目。美しきワインレッドを溶かしたような眼差しには、僕への興味が灯っている。そうだろう?」

(これは酷い)

どう見ても何だこいつ、つて目しかしてないって。

いや確かにそんじよそこらの男じゃ口が裂けても言えない台詞だよ。イケメンでも許されないかもなやつだぞそれ。ほんとある意味すげーよお前。

「そこでだ。この試験が終わった後、ディナーを一緒にどうかかな？　無論、この貴族たる僕の鼻根にしてる店だ。そんじよそこらの店とは訳がちがが?？」

「?はあ」

これ以上は聴くに絶えない。言葉にしなくとも存分に伝わるため息に、だらうなあと頷く。

かと思えば何やらゴソゴソと取り出して、ルズレーの前に突き付けた。

「蠟燭??？」

彼女が突き付けたのは、なんの変哲もない蠟燭だった。

009 シュラ

「蠟燭??？」

少女がルズレーに突き付けたのは、なんの変哲もない白い蠟燭だった。

いやどういふ事なの。ルズレーも首を傾げてるし。

あれか。お前を蠟人形にしてやるって暗喩なのか。

しかし、その憶測は見事に外れ。

『灯れ、灯れ、燭台に』

「なっ、呪文!^{ルイン} き、君！ 一体なにを——」

【ルミナスの光】

彼女が、何言か唱えて手を翳した直後。

視界を白に灼くほどの光が、蠟燭の先から閃^{はじ}った。

「ぐあああああ!!!」

「ま、眩しいっす！」

「うわっ、なんだ?！」

「くっ」

「ひやあつ！」

(なんだつ、いきなり光がつ!?)

「ぐ、ぐうつ、こ、こんな所で魔術を使うとか、ど、どういうつもりだ！」

(魔術？ 魔術。今のが！)

「こんなのただの目晦めくらましでしょうが」

「ルーンと触媒まで使っておいてっ！ くそっ、まだ見えないっ」

唐突な強いフラツシユに、会場内は騒乱に包まれた。

ルズレーなんて至近距離で食らったから、たまったものじゃないだろう。呻きながら目を覆うその姿に、流石に同情が湧く。

でも、それ以上に興味が沸いて仕方なかった。

今のが魔術。魔獣なんてワードが当たり前のようにあるこの世界の、更なる神秘か。学園から持ち帰った教書で知っては居たけど、こうして見るのは始めてだ。

唱えたのは呪文ルンで、触媒が蠟燭ルンってことだろうか。ルミナスの光つてのが魔術名？

ああ、やべえ、かつこいい。少年ハートにグサグサ来るじゃん。俺も使ってみてえ！

「同じ赤魔術なら、火炎の方が良かったかしら？」

「ひっ、冗談は止めろ！ ぼ、僕に何するつもりだっ、止め！」

「何もしないわよ。魔素の無駄遣いにしかならないし」

「む、無駄って」

なんて一人で盛り上がってれば、あっちもあっちで佳境を迎えているらしい。

いい加減うんざりといわんばかりに、腰に手を添えた着火ウーマンは、冷徹な眼差しをルズレーに向けていた。

「あんたみたいなの、目障りなのよ。ここは入団試験の会場。女漁りをするんなら、繁華街にでも行けば？　まあ、あんたみたいなジャガイモ男、相手にする女なんて居ないでしょうけど」

「なっ??な、な、なんだと?!　僕を侮辱するの catt!」

「事実でしょ?　貴族なら、鏡くらい見た事あるわよね。それとも目がお腐りになってるの?　だったら直ぐにでも薬師の元にでも行けばいいわ」

「き、貴様ア、どういう意味だっ!」

「目障りだつて言ってるの。見苦しい顔、これ以上近づけんじやないわよ」

「ツツ!　ツツツ!!　ツツツ!!!」

うつわー容赦ないな。蔑み方のキレが一味も二味も違う。

ルズレーの顔色、怒りの余り赤を通り越して青を過ぎて黄色くなってるし。一人信号機か。

ああでも、この後の展開が手に取るように分かった。悲しいけどアレ単純なのよね。

「こつ、この、この平民つ、平民風情があつ!!　よくも、よくも僕をつ?? ショークツ!
ヒイロオー!」

「へ、へい!」

「??」

「この生意気で身の程知らずの淫売女を、二度と減らす口が叩けないようにしてや
れええー!!!」

ほらー。絶対こうなると思った。

「おい、ヒイロ、ショーク、なにを突つ立っている!　この生意気な女を分からせろ!!」

「へ、へ、へいっす!」

「お断りだ」

分からせる訳ないだろ。

ナンパに失敗して逆恨みする男の肩を持つ主人公が、どこに居るといふのか。

「は、はあ?!　なにを怖じ気付いている!　相手は女だぞ」

「バカかよテメエ」(怖じ気とか、そうじゃないだろ)

「なにっ!」

「今から試験だろうが。んなどこで戯じゃれて、無駄に体力使うんざ御免だぜ」

「どういふつもりだ貴様!　この僕に楯突くつて言うのかっ!」

しかしこの手の男には理屈が通らない。

正論なんて吐くだけ無駄だし、聞く耳持たないだろう。

「あんな、ルズレー」

だから、良い機会だ。

はつきり意思表示しておこう。

俺には俺の進むべき道があるんだと。

「俺は本気で騎士になりに来てる。やりたきやテメエでやれよ」

「えっ」

強く、ルズレーの目を見据える。

確かな意思。確かな言葉だ。伝わらずとも示せられれば。

せめてもの想いを込めた無言の訴えは、目の前のわがまま貴族にどう受け取られたのか。

「??もういいっ、この分からず屋め!」

「ちよ、ルズレー様! 待っててくださいえ!」

一瞬、脅えたような色を帯びたルズレーの目。

その感情ごと振り払うかのように去っていく背を、俺は黙って見送った。

「本気、ねえ。ふん、どうだか」

「あん？」

「どうせ口だけじゃないの。養成学園の出のやつなんて、たかが知れてるわ」

「??口悪いな」

「自覚はあるけど、あんたには言われたくないわよ」

置いて行かれた俺に対して、この言いようである。

しかし、ルズレーよりは少しマシだって風に捉えられてるんだろう。

癖っ毛を指先で弄りつつ、少女はジーツと俺を睨んでる。いや恐いんすけど。なんで

こんな眼力つええの。

「あんた、名前は？」

「俺か」

「他に誰が居るのよ」

「??ヒイロ・メリファー」

「あつそ」

「聞いたいてなんだよテメエは」(あつそは酷くね?)

「うっさいわよ??あと、私はテメエじゃない。エシユラリーゼよ。長いから、『シユラ』で

いいわ」

「修羅ア？」(修羅?)

略すと巖いついな)

「なによ文句あんの」

「ねえよいちいち嘯み付くな」

「あんたもね!」

シュラって。いや修羅で。

エシュラリーゼって名前から、どうしてそこを略したのか。

可愛げのかの字も見当たらない感じが「美しい薔薇には刺がある」を体現する彼女に
びったり過ぎて。

「??悪かったわね」

「あ?」

「っ、さっさとあのジャガイモ貴族のここに行けばって言ってるの。ああいう奴は放つ
とくと面倒でしょっ」

「?!」

「それじゃ」

かと思えば、詫びだけ残して去ってく。

俺とルズレーの溝を気にしてるのか、それとも目障りって言いたいのか。口は悪いけど、根は悪くないってやつなのかね。

でも、シュラってなあ。略称含めて諸々の圧が。

ひよつとしたらツンデレ系ヒロインかも、という期待をメキツと潰す威圧感に、もはや苦笑すら浮かばなかった。

「??ん?」

ふと、足元に何か落ちてることに気付く。

ゆつくりと拾い上げたそれは、黒い紐ひものリボンだった。いやこれ、ひよつとしなくてもシユラのだよな。

あんだけクールに決めといて、案外おちちよちよいなのかあいつ。

ともあれ届けてやらねばと、離れてった背を追いかけようとした時だった。

「総員、静粛! 並びに静聴! これより受験生ごとにグループ分けを行う! 各自、聞き逃しのないように!」

会場の壇上から、喧騒の一切を制止させる声が響いた。

010 騎士へと至る為の道

どうやら試験はグループごとに行うようだった。

騎士団側でくじ引きを行い、グループごとに別の演習場へと移動。そこで改めて試験開始って運びらしい。

「おいお前たち。僕の前を歩くな、後ろに回れ」

「そ、そうしたいのは山々なんすけど」

「列順が決められてんだから仕方ねえだろ」

「ちいつ、気に入らない。そんなもの好きにさせれば良いだろうに。細かい連中だ」

(これからその一員になろうっていう奴の言い草かよ)

本内を闊歩する集団の列の、前から数えた方が早い位置。取り巻きである俺達より後ろを歩く事がさぞ不満なんだろう。

コツコツ響く足音の中で、一際尖っているのがルズレーだ。

「何故、僕があの子より後ろなんだっ」

でも苛立ちの芯は別らしい。

歯噛みするルズレーの目線には、更に前のシユラに向けられていた。なんとという器の小ささか。

だがまあ、先頭を意識する気持ち自体は分からんでもない。だって主人公と言えば先頭だし。RPGとか特に。

(現状の俺は、いまいち主人公っぽさに欠けるけど)

一応、超が付くほどの美少女と知り合いとなれた。

重要っぽいキャラとの縁。主人公としては良い風向きだ。

でもこんなんじや、まだまだ全然満足出来ない。

(こっからだ)

まずは入団試験に合格する。

ヒイロの騎士物語のスタートラインはきつとそこだ。

栄光へのプロログを思えば、やる気が沸いて仕方なかった。



「総員、整列！ 並びに拝聴！ これより入団試験の内容について説明する！」

到着地は、運動会でも出来そうな広いグラウンドだった。

砂埃がさつと舞う壇上で、後ろ手を組んだ眼帯の騎士の一喝に背筋が伸びる。

「入団試験の内容はシンプルである。受験者である諸君には、これより一対一の闘争に挑んで貰う」

「二対一。決闘か！」

「そこ、静粛に！ 決闘と呼ぶほど大したものではない。諸君にはあそこにある矛棚から、己が得意とする武器を選んで貰う」

教官らしき騎士が指差す方には、横に広い武器棚と様々な武器が立て掛けられていた。

剣、槍、弓、槌。他にも沢山。けれど刃が潰れていたり木製であったりと、どの武器にも殺傷性を奪う処置がされていた。

「殺傷性が無いからと気を抜くな。危険防止の処置をしているとはいえ、事故とは起きるものだ。医療室は設けてはいるが、諸君らが負った怪我に關しての苦情や責任は一切受け付けられない。総員、心せよ」

とはいえ教官の言うとおりに、油断は禁物。

刃の潰れた剣で殴られたら痛いし、怪我だつてする。最悪死ぬ可能性だつてあるだろう。

「次に受験生の相手だが??総員、注目！ 私の眼下に並ぶ騎士達、諸君にはこの内一人を

自由に指名し、挑んで貰う。その後武器を取り、衆人監視の元、一対一の闘争である。騎士に勝利、又は善戦した者を合格とする。今回の試験の運びは以上だ！」

「あ、相手が騎士だつて?!」

「嘘だろ、勝てる訳ない」

「おい、右から5番目の人。あの人現役だぞ、見た事があるつ」

(うわ、きつくね?)

教官の述べる試験内容にざわめきが止まらない。かくいう俺も少し冷や汗を流した。

なにせ相手は騎士。だとしたら並の受験生が敵うはずもない。

騎士になりたければ、勝てない相手に勝つてみせろつて事か。

騎士の称号つてのはそんだけ重いものなんだろう。

「これだから下賤の者共は。試験内容に芸も華もない。だが、土壇場で震える奴らも滑稽だな。あんな連中、試験をせずとも落としてしまえばいいものを」

意外や意外。あの自尊心だけは立派なルズレーが、一ミリも動揺していなかった。

憎まれ口はいつも通りだけど。周りが肩を落とす中で自信満々に胸を張る姿は、素直に心に響いた。

なんだよ、根性あるじゃん。ちょっと見直したぞ。

「で、ですけどルズレー様、こいつあまらずくないつすか? いくらなんでも騎士相手なん

て」

「ふん、なにもマズくはない。僕とそこいらの間抜けを一緒にするな」

「んだよ。勝算でもあんのか？」（なんか秘策でもあんの？）

「勝算？ そんなもんじゃない。約束された勝利だ。おい、シヨーク、ヒイロ。耳を貸せ」

約束された勝利って。何それかつこいい。

既に合格を確信しているルズレーの手品の種が気になって、つい素直に耳を貸してしまつた。

「左から二番目。口元を布で隠した男が居るだろう」

「ん。あの人相悪いやつか」

「お前が言うなヒイロ。けど、そうだ。いいか、お前らもあいつを指名しろ。そうすればさしたる苦も無く合格出来る手筈だ」

「??は？」

いやちよつと待て。おい。

約束された勝利って、まさか。

「ルズレー様。それって」

「言つただろ、僕をそこいらの間抜けと同じにするなど。賢い手段を用いてこそ貴族だ。」

平民とは頭の出来と、用いれる手段が違うんだよ、ははは」

「さ、流石ルズレー様つす！ まさかそんな根回しをしていたとは！」

思いつきり不正じゃねえか！

返せ！ 俺の感心やら賞賛の気持ちを！

通りで試験前にシユラをナンパだなんて真似出来る訳だ。そりや余裕だよな。予め試験官と通じていたなら。見直して損したよマジで！

「ふふん。試験に向けての努力など凡人、平民の発想だ。賢き者はこうやって道を拓く。分かったか、ヒイロ」

「??:テメエ」（この野郎??）

しかもこいつ俺を煽りやがるし。

あんだだけ鍛錬した俺の努力を小馬鹿にした笑み。

グツと握り締めた拳を、けれど振り下ろさずに済んだのは、憎たらしい幼馴染に対する自制心じゃあなかった。

「総員、静粛に！ これより最初の受験者を発表する！」

教官の鋭い一喝。

握り締めた拳の震えも、周囲のざわめきもピタリと止まった。

最初の受験者。つまり今からいよいよ試験が始まる訳だ。

だったらもう、ルズレーなんて相手にしてられない。
腹は立つが切り替えよう。

目先の怒りより、未来の夢だ。

「エシユラリーゼ・ミズガルズ。前へ！」

って、いきなりあいつかよ！

まさかのトップバッターについて前のめりになる。

シユラ。俺が重要キャラと睨んだ女が一步前へと躍り出る。

その容貌、その雰囲気、止まっていたざわめきが再び息を吹き返した。

「それでは、試験官を指名せよ」

でもそのざわめきは、返し刀でばっさりと揃いも揃って殺された。

何故ならシユラがゆっくりと指差し、指名した相手は――

「ほう。私か」

壇上に立つ、眼帯の教官その人だったのだから。

011 紫電一閃

衆人監視の元、という教官の言葉は本当にそのままの意味だった。

武器を持つ受験者と指名相手。それをぐるりと囲む他の受験者達という図は、さながら闘技場の様だ。

周りからの視線。プレッシャー。緊張感。

肝の据わりが弱ければ、裸足で逃げ出しなくなっても仕方ないだろう。

けれどシユラは、そんな重圧など毛程にも感じてない素振りで剣を構える。視線の先には眼帯の騎士。入団試験の説明を一手に担っていた男だ。

「僕をあれほどコケにしたくらいだ、愚かなやつとは判っていたが。つくづく、馬鹿な女だった」

「あん？ どういう意味だ」

「指名した相手だよ。入団試験の教官を務めるのは、大概本隊『ブリュンヒルデ』に所属経験があるか、他で功績を積んだ奴だ。あの試験官の中じゃ一番のハズレだよ」

「?!」

「ふふん。身の程知らずの馬鹿女め。今から大勢の前で醜態を晒すがいい」

ルズレーの言葉はともかく、あの眼帯教官が只者じゃないのは誰の目にも明らかだった。

難易度で言えばベリーハード。もしくは二周目以降じゃなきや勝てない設定のボスキャラ。そう思えるくらいに圧力がある。

現にルズレーだけじゃなく、周りの目もシユラの敗北を予感していた。

「準備は？」

「いつでも」

「意気や良し。では、それが蛮勇でない事を示してみせろ！」

「！」

でもなんでだろうな。

あいつがルズレーの言う醜態を晒すだなんて。

そんな絵面は、これっぽっちも浮かばなかった。

「——なにっ」

「示してやるわよ、いくらでも」

先手を打ったのは教官。先に踵を地から離したのも。

だが相手の元へと刀身を届かせたのは、シユラの方が速かった。

「その隻眼に、焼き付くぐらいにねっ！」

至近距離の鏢迫り合い。切った啖呵をそのままに、くるりと二歩下がってすかさずシユラが殺到する。

速い。力比べから連撃に切り替えるのも。追撃の剣速も。瞬きする間もないほどだ。

「チイツ」

「はあっ！」

舌打ちを挟んで、払い退けるように剣を返す教官。

しかしシユラは返し刃を受け止めながらも、更に一步前へと詰めた。

「なにつ」

「逃さないわよー！」

退くことを辞書から消してゐるような怒濤の攻勢。

なんて攻めつ気の強さだ。でも単調じゃない。

突き薙ぎ斬り払いと豊富な攻め手。狙う箇所も定めず、色んな角度から。

(ただ攻めつ気が強いだけじゃない。あいつ、教官の返しの初動を全部潰してないか!?)

踏み返す一步を刈り取る振り下ろし。

突きで押し返そうとすれば、構えごと払う横一閃。

腰を据えようとすれば下からの掬い上げ。

息継ぐ暇ごと殺すような連撃。あれじゃあちよつとやそつとじゃ攻守が覆らない。

「教官が押されてる!？」

「嘘でしょ!？」

「シドウ教官が防戦一方だと?？」

「ああ。あの受験生、凄まじいな」

予想を大いに裏切る一方的な展開に、周囲はこぞつて目ん玉落としそうな勢いだつた。

かくいう俺も仰天するよ。つかないにあいつ。只者じゃないのは判つてたけど、流石に強過ぎませんか。

「ど、どういう事だよ。あの教官は、本隊経験もあるぐらいのはずなのにつ。なんであの女に押されてるっ!」

「る、ルズレー様」

「くつ、さてはあの女も僕と同じか。一体いくら掴ませたというんだ」

「阿呆か」(おいおい、なんでそうなんだよ)

ルズレーの驚嘆はもつともだけど、その結論はおかしいだろ。あの教官の必死の形相見ろよ。あれで手を抜いてるならアカデミー賞取れんぞ。

「見ての通りなんじゃねえのか」

「な、なにがだよ」

「そのまんまだ」

勿論、教官が弱い訳でもない。

あれだけの攻めを受けながら持ち堪えて、逐一反撃を仕掛けてるんだ。並ならとづくに倒れてる。

だつたら結論は一つ。

「あいつ、教官よりも強えつて事だろ」

受験生が試験教官を上回る実力を持つていた。

この目に映る景色に嘘がないなら、道理はいつだつてシンプルだ。

「よもやこれほどとは?!」

「私からすれば、この程度なの、つて話だけど」

「吼えよるわ、小娘!」

「ツ??つあつ」

(すげえ、強引に叩き返した!)

こつちの感心なんて、剣を交える当事者達には関係ない。

此処に至つて、展開は佳境を迎えていた。

教官のがむしやらな一打が、受け止めたシユラを圧したからだ。

思いつきり力技。現に、教官は打ち出す直前にシユラから一撃貰つてる。

でも止まらない。烈火の如き勢いで、そのままシユラへと殺到する。
しかし。

「??掛かった」

「むっ」

俺は目に映ったシユラの美貌は、この瞬間を待ってたのとばかりに笑みを滲ませた。
いつ取り出したのかも分からない一本の蠟燭が、細指に弾かれて宙を舞う。
隻眼の、目の前で。

「ルミナスの光」!

言葉が走って、光が閃った。

まぶた
瞼にも記憶にも焼き付いた光が、グラウンドを焦がす。

ほんとに一瞬。心なしかルズレーに喰らわせた光よりも幾分弱い。

シユラが言ってたような、ほんのめくらましに過ぎない。

けど、戦いの帰趨を決するには充分だった。

「これで、終わりよー」

「!!」

紫電一閃。

咄嗟に剣を構え直した教官だったが、叩き込まれた烈火の一撃には耐えられず。

苦悩を滲ませた教官の手から離れた剣が、くるくると宙を舞い、そして、地に墜ちた。

「??捌め手か」

「魔術は禁止、なんて説明は無かったわよね？」

「フツ、その通りだ。流石は灰色の戦乙女。アッシュ・ヴァルキリア見事である」

片や、片膝をつく者。

片や、剣を首筋に突きつける者。

明確に勝敗を分けた二者の姿を認識するのに、強い光はもう要らなかった。

「——エシユラリーゼ・ミルガルズ。合格である！」

静かな決着。

歓声も沸かない。拍手すら自失した呆然の中から手を出さない。

それがいかに、この光景を誰しもが想像してなかったかを物語る。

（ああ、そうか）

けど。

誰もが啞然としている中で、俺はといえば。

（ああ、そうだよ。そうだよなあ??!

俺の王道物語なら、そう来なくつちやなあ！）

心の躍動が灯す火を、
メラメラと燃やし続けていた。

012 莫迦の花道

「そ、そんな、馬鹿な。あり得ないぞこんなこと。なんだあの女??なんであんな奴があれほどの強さを??こ、こんなの何かの間違いだつ、八百長だつ、イカサマだつ」

「る、ルズレー様落ち着いて?」

そんな馬鹿なつて? 馬鹿言えよ、そりや俺の台詞だ。

シユラは勝つた。誰にも文句が言えなくらいの完勝っぷり。

つまりは、あいつが今後、俺と鎬を削り合う同期になるつて事でもある。

(間違いない。あいつ、ライバル枠だ)

強敵と書いて”とも”と読む。

王道な物語には必ず一人や二人はいるだろう、主人公の競合相手。常に競つては対峙し、時に敵対や共闘を得ながら、主人公の壁として君臨する強敵手。

主人公との対立を描く為に、冷徹だったり他者を寄せ付けない雰囲気があったり、序盤は主人公に力を示すべくかなりの強キャラとしてデザインされる事も多い。

ほら。まさにじゃないか。

シユラ。他の追隨を許さない強さに、他を寄せ付けないあの風格。もう間違いない。

絶対ライバルだよ。

「ひ、ヒイロ?」

「??あ?」

「お前、気が触れたのか?」

「どういう意味だ」

「だって、お前?!なんでそんなに嬉しそうに笑ってるんだよ」

「——ハッ」

だって考えてもみろよ。

シユラは強い。そりやもうとびつきりな強さだ。

けどライバルがあればほど強いんなら、当然主人公も強くなくちやあ物語は成り立たない。
い。

であれば、”お前もそこに行くんだぞ”って、物語に保証されているようなもんだろ
う。

そこに行き、やがては超える『いつか』があるなら。
「んなもん、嬉しいからに決まってんだろ」

俺は、滅茶苦茶強くなれる。間違いない。

そりや笑みの一つだって、零れ落ちるに決まっていた。



「あらま、こりや敵わねえや。ルズレー・セネガル。合格！」

「ふふん、当たり前だ」

「おあーつと、やられちまった！ シヨーク・シャテイヤ、合格！」

「へ、へへ?? まあこんなもんつすよ、へへ??」

うーんこの、あからさま加減よ。

衆人環視の中でも堂々と八百長をやる度胸だけは大したもんだけどさ。

仮にも縁ある二人の合格。とはいえ、これじゃ祝福する気なんて微塵も湧かなかつた。

「チツ、これだから貴族は」

「なんで茶番劇を見せられなきやいけねーんだよ」

「納得いかねえ、くそっ」

「……どうにも調子が悪いことだな、ハウツ試験官」

「お恥ずかしながらねえ。受験者も中々やり手でして。ははは、こんな日もありませんよ
うやね」

「……」

「シドゥ教官もそう思うでしょう？　なにせ一発目から相当なのとやり合ってますからねえ？　同じ調子が悪いもん同士、仲良く行きましようや」

「?!ふん」

試験官のあっさりした敗北。そりゃ怪訝に思うヤツだつて居る。けどもルズレーが取り込んだ人もさるもので、あの眼帯教官の眼光にも飄々と誤魔化してた。

そういう意味じゃ、ルズレーの目利きは良いんだろう。敬意なんて微塵も沸かないけど。

「……次。ヒイロ・メリファア、前へ」

感情の風いだ平坦な声に呼ばれて、遂に出番かと踊り出た。

（うおっ）

同時にグササツと見えない矢が俺の背に刺さる。

なにこれなにごとと振り返ってみれば、白いを通り越して寒々とした視線の数々。

悲報。俺、完全にルズレー達と同類と見なされてる。

いやあんだだけ一緒に居れば当然だけど。だがこれは大変よろしくない、俺からすればクソスレ待ったなしである。

「では、試験官を指名せよ」

(みくびられたもんだな、俺も)

ああもう、頭に来たぜ。ルズレーに対してだけじゃない。

この世界の親切設計に対して腹が立った。いやいや馬鹿にしてんのかと。

こんだけお膳立てされなかったって、ねえ。

「え?」

「は?」

「おいおい」

「なっ??な、なに考えてるんだ、ヒーロー!」

周囲の狼狽を押し退けるようなルズレーの声。

なに考えてるか、なんて。

俺はそもそも、最初っから一つのことしか考えてない。

こちとら産まれてこの方ずっと、ヒーローの信奉者だぞ。

露骨に誘導されなかったって、選ぶべき相手は誰かなんてとつくに分かっておりますも。

「ヒーロ・メリファアよ。指し間違えではないのだろうか?」

「たりめーだろ。男に二言はねえ」

「フツ、いいだろう」

指差した先の、正解が笑う。
塞がれてない方の隻眼が、至極愉快そうに吊り上がっていた。

013 熾烈なるシドウ

「シドウ教官に挑むなんて正気か」

「なあ、あいつって強いのか？」

「いや。養成学園では同じ教室だったけど、全然そんな事なかったぞ。模擬戦でも通算は負け越してたはずだ」

「セネガル家の嫡子の取り巻きだろ？ だったら金でも握らせてんじゃね」

「有りえないだろ。シドウ教官といえば腐敗化の進む騎士団においても、一切賄賂を受け取らない『清職者』として特に有名じゃないか」

「じゃあなんでだよ」

「知らないよ。気でも触れたんじゃないのか」

ぎざぎざわひそひそ。

狼狽と怪訝が肩を組んで踊り散らかしているグラウンドのど真ん中で、俺は万感の思いで空を仰いだ。

(ふっふっふっ??まさかこんなに早く見せ場がやって来るとは)

騎士としての道を歩む為の、最初の一步。

相対するのはライバルたるシユラに敗れたとはいえ、強者の風格が漂う眼帯騎士。

周りを囲むのは、誰一人として俺が勝つとは思っていないオーデイエンスの皆様方。完つ璧だ。完璧でパーペキでチョキプリだ。

騎士ヒイロが飛躍する舞台として、これほどまでにおあつらえ向きな展開が他にあるだろうか。いや無い。

「ヒイロ・メリファア。準備は？」

「見りゃ分かんだろ」（ばつち来おい！）

「ふっ、左様か」

劍の柄を握り直して吐いた強気を、教官はひとつ笑って構えを作った。

「それでは、試験を開始する——受けてみよ」

「！」

開始と同時に放たれる威圧感に、背筋が凍った。

隻眼に灯る濃密な殺気。5メートル以上は離れてるのに、まるで至近距離で刃を押し当てられているような。

「っ!？」

違う。ような、じゃない。

圧に抗おうと腹に力を込めた一瞬で、教官はすぐ目の前まで肉薄していた。

それだけじゃない。教官の持つ剣刃が閃る。下から上への斬り上げ。速過ぎるあまり、蛇のように歪んで見える。

しかしなんとか目で捉え、ギリギリで受けることは出来た。受けることは、だけど。

「ぐっ?!」(は!? 重っ!)

「ほう、防ぐか。しかし」

「!」

「脇が空いたな」

「まずっ??ぐ、あがつ?!」

速いだけじゃない。込められた力も尋常じゃなかった。

斬り上げを受け止めた反動で、身体がふわりと浮いてしまったほどだ。

嘘だろおい。どんな腕力してんだ。

そんな脳裏を占めた茫然も、がら空きになった胸に叩き込まれた掌底で消し飛んだ。

「っあ」

ぶれた視界と共に、地面と水平に吹き飛ぶ。

今度は浮いた、なんてもんじじゃない。真っ直ぐ飛んで、肩から落ちた。剣を手放さなかつたのは奇跡だ。

「うぶ??げほっ、ごほっ!」

前転の要領で落ちた勢いを活かして、惨めに倒れ伏せる事は防げたけど。口の中に広がる、鉄の味。こらえ切れなかった咳と一緒に、血の塊が吐き出た。

俺が濡らした紅い水面に、自分で血の気が引くほどだった。

「まだだ」

「っ、くそっ!」

でも相手の強さに気を取られる暇もない。

整えた呼吸の間を見計らうように、距離を詰めた教官からの一刀が既に振るわれていたのだから。

(次は上からか!)

「惜しい」

「なにつ!」

力、速さ。加えて、技。

上からの振り下ろし、と思えば再び下からの斬り上がり。受ける角度を修整するよりも早く、教官の剣が胴に届く。

「かッ——」

横つ腹から走る鈍痛。こらえて振り払うも、既に教官は数歩下がっていて届かない。

痛みのあまり、額から脂汗が滑り落ちる。でもその汗が地に触れるよりも、教官の追撃の方が速かった。

「ふむ。返しが浅いぞ」

「くつ、そがア!!」

斬り上げを防げば横薙ぎ。

薙ぎを防げば突き。

突きを躲かわせば、振り下ろし。

息継ぎを許さない高速の連打は、剣の雨。

いや、雨なんてもんじゃない。暴風だ。

防いでも防いでも身を削りとつてくる、容赦のない豪雨だ。

「チイツー!」

「粘るな。だが!」

端から見れば、試験の初戦の焼き直しだった。

けど立場はまるで違う。

あの時は受験者側が一方的に攻め立てたけど、今は受験者側俺が一方的に攻め立てられている。

しかも教官と違って、防ぎ切れてない。

速さと重さを相乗した連撃は、ガードすら潰し、受け刃を越えて身体に届いている。膝に、肩に、腕に、顔に。

一度剣が振るわれる度に、俺の身体には傷が幾つも増えていた。

「良い、加減にイ」

「！」

「しやがれつつ!!」

このままじゃ本当にまずい。

身体にまとわりつく痛覚を振り払うように、目一杯、力を振り絞る。

挽回の一打。暴風雨に晒されながらも、見逃さなかつた連撃の繋ぎ目に食い込ませ、

叩き込んだ。

「ふむ」

「くそつ、平然としやがって」

必死のカウンター。けれど全力込めた一打で拾えたのは勝利ではなく、数歩分の距離が精々だった。

挽回なんてほど遠い。現に受けた側の教官は、ちつとも余裕を崩さない。

（ああ、畜生。やっぱすげー強えやこの人）

みくびっていた訳じゃない。

シユラとのタイマンでも、剣捌きや足捌きの手堅さからして、相応の実力者だつてのは分かつてたことだ。

(はは、勝てる気しねー。クソゲーつてやつかなこれ)

こうして何度か剣を交えてみて、改めて分かる。

今の俺じゃ到底及ぶはずのない相手だ。

逆立ちしたつて敵わないだろう高い壁。

これがゲームだとしたら、負けイベントじゃねえかと匙もコントローラーも投げたくなるクソ仕様だろう。

(?!でも、だからこそ確信した)

しかし、そんなものは俺には最初っから見えていたし、分かっていた。

それでも俺が自分の選択を疑わないのは、いわゆる負けイベントつてのには『二種類』あるからだ。

一つは後々のシナリオの進行上、ここで主人公が負ける事に意味があるもの。

勝つてしまつてはいけないから、負ける。

歯痒いが、物語の枠組みを考えれば当たり前前の理屈でもある。

そして、もう一つはというと。

「??ふむ。不可思議なやつだ」

「あア?」

「見たところ、多少の心得はあるらしい。足の運び、腰の据え、目の動き。貴様のそれは、闘う術を知る者のモノだ。荒削りだが悪くはない」

「??」

「だが、であるならば一層分かるはずだ。私と貴殿の間にある差を。剣を交えずとも察せたはず。現に、貴殿は一太刀も入れれぬままに押し込まれている。その状況下で、貴殿は??なぜそうも、”笑っていられる”?」

腑に落ちないか。まあ、そうだよな。俺と教官の差は歴然。どうしたって無謀。棍棒持ったゴブリンが、ドラゴンに闘いを挑んでるようなもんだ。

でも。

例え周りから見れば無茶で無謀に見えたとしても、俺だけに見えてる勝ち筋がある。

それは、負けイベントのもう一種類。

耐えて耐えて耐えて、それでも諦めない主人公が咲かせる、反撃の芽。

圧倒的劣勢を覆す、ストーリーの盛り上がり所。

即ち——覚醒イベントだ

「知らねえよ。だが、いつだってそうだろう」（教えたってわかんないだろう）

「……？」

「最後に笑うのは、勝者だ」（でも最後に勝つのは俺なんだ）

「?!ほう」

俺の答えが琴線にでも触れたのか。

鉄面皮を少しだけ愉快そうに、教官が和らげた。

だがそれは、本当にほんの一瞬。

幻かっつてぐらいに僅かな一瞬が過ぎた後。

「面白い」

「——ツツツ、ぐあつ」

より熾烈な猛攻が俺へと叩き込まれた。

014 無茶で無謀なヒロイック

熱海 憧という人間は、周囲の風聞になぞらえて言えば『変人』だった。

怪人を倒す仮面のヒーローは良い。

怪獣を倒す巨人のヒーローも良い。

剣を片手に鎧を纏い、魔物を倒す王道の主人公なんて格別だと。

海原ほどに膨大な熱き願いを。子供染みた壮大で盲目な夢に憧れ続けて。しかし憧れるだけで終わる男ではなかった。

熱海 憧は努力を怠らなかつた。

ヒーローの道も一歩から。

ランニングは毎日10キロメートル。

腕立て伏せ、腹筋、背筋、スクワットを各100回。

学業と平行しながらこれをほぼ毎日欠かさずに行つた。

無論、彼の自分磨きは基礎体力作りだけには終わらない。

主人公たるものには必殺技が必要。

ならばその元手と更なる鍛錬を兼ねて、様々な格闘技を修めようと、空手、柔道、剣

道、合気道などなど、いくつもの道場の門を叩いたのである。

だが、はつきり言つて彼は凡人の域を出なかつた。

天才が1時間、秀才が1日で習得する基礎を、10日かけて習得するのがやつとという有り様だ。

しかしその精神は異常だつた。

ならば『十日間分を一日でやつたらいい』と、天才や秀才すら裸足で逃げ出す練習量を詰め込むという荒業を、彼は平然と行つた。

圧倒的脳筋である。冗談抜きで狂気の沙汰である。

ついでに修行にかまけてテストも赤点塗れになつていた。然もありなん。

だが、あえていうのであれば。

努力、根性、気合い。

そういつた体育会系が好みそんなものに才能があるとするのなら、彼は間違いなく努力の天才だろう。

熱海憧が望むような成果必殺技こそ終ぞ得られはしなかつたが、相手の動きをよく読み取る

『目』と、あらゆる体術に精通する体捌きの基本を会得していた。

「せいっ!」

「だらあっ!」

現に、こうして歴戦の騎士たるシドウの剣に、紙一重で合わせられているのが何よりの証だ。

努力は嘘をつかない。憧れるだけでは終わらなかつた少年の無茶は、彼の無謀をギリギリで繋ぎ止める力となつていた。

「?!しぶとこ」

「ぜえっ、はあっ?!そりゃ、こつちの、台詞だっ?!」

けれども現実は無情だ。

努力は嘘をつかない。なればそれは、騎士として力を磨いてきたシドウにも当てはまる。

そもそも平和な日本と死と隣り合う世界とでは練度が違う。年季も違う。覚悟は並べど、肩はまだ並べない。

息は乱せど無傷のままのシドウ。

至るところに斬り傷と打撲を作り、虫の息のヒイロ。

両者の力の差は歴然であつた。

(なんだというのだ、この男は)

だからこそ、シドウには不可思議でならなかつた。

倒れないのだ、目の前の男は。

何度打とうとも。何度突こうとも。

(分からはぬはずがない。彼我の差を。こうまでなつて、尚も理解出来ぬほどの氣狂いではあるまい)

一打浴びる度に傷を負い、一つ突く度に血反吐を落とし、苦痛と朦朧に苛まれながらも未だ倒れない。

ふらつく足取り。手には鈍なまくら。

もはや満身創痍の風前の灯火。

だというのに、彼の瞳は意志の折れなど微塵も感じさせぬほど、真つ直ぐ己を見抜いている。

(だが、この男の目。自分の勝利を欠片も疑つちやいない。盲目的とさえ言つていいほどの自信?いや、確信か。ならばそれに見合つた勝算があるはずだが)

「ハアツ!!」

「ぬ、ぐお?!っ!」

シドウには分からなかった。

この局面から見い出せる勝算などあるはずもない。

されどまた一つ一打を受けても、ヒイロ・メリファアの目の色は毛程も変わらない。

そう、変わらないのだ。対峙し、剣を交えた時からずっと。

彼の瞳は、シドウには見い出せない勝機をずうつと見つめているようにしか思えなくて。

(何を狙っているというのだ、ヒロ・メリファーよ)

見えないものを、人は恐れる。

幾度と重ねた戦いの中で、片方の光を失った騎士の目にも、ヒロの異常なしぶとさは不気味に映った。

(それとも、ただの蛮勇だったのか)

見えないものを、人は決め付ける。

誰かの優しさを保身だと、誰かの悪意を配慮だと。

清職者と呼ばれるほどに汚職や暗躍を嫌うシドウとて、誰しもが持つ心の法則には逃れられない。

(?!ヒロ・メリファーよ。貴殿の気概は買うが、それは愚かさとも何も変わらない。蛮勇だけを持ち合わせた騎士に、護れるものなど何も無いのだ)

だが、愚かと語り蛮勇と決めつけたシドウの論は、見当違いではあるが間違いでない。

そもそも、ヒロ・メリファーが折れぬ理由が『主人公ならば耐えていれば覚醒イベントが来て勝つる』だなんて、見抜けるはずもなかった。

「??もう、良い」

「あ、ア?」

結論は出たと、シドウは断じる。

「最後まで諦観を持たぬ意気や見事。だが、身の程知らずの蛮勇は、ただ身を滅ぼす自害の剣だ。蛮勇ではなく、賢しさを磨き??またいずれ、騎士を志せ」

「テ、メエ、なに、勝った気で、いやがる??! まだ勝負は、こっから??!」
「否。これで終いにする」

蔑みではない。その心の強さは惜しいとさえ思う。

だからこそ引導を渡してやらねばならない。

それが入団試験の総括教官たる己が役目なのだから。

「——疾^{シッ}」

「な」

一息で背後に回り込む。全力の疾走。それは今までとは比にならず、あのシユラよりも疾い。

それでもヒイロは見失わなかったが、満身創痍の身体ではろくな反応も出来ない。それほどに速く、疾く。

「断だつ——！」

無防備な後ろ首を、断った。

肉ではない。意を断つ一閃。

蛮勇なる者へ向けた、敬意を込めた一撃だった。

「?!、ア」

ぐらりと、ヒロの身体が崩れた。

まるで糸を切った人形のように、力が抜ける彼の背。

塞がれてない片目で、その崩落を見届ける。

蛮勇だった。愚かだった。

されど灯す意志はきつと、誰よりも強かったのだから。

今は敗北を知り、そこから自らの危うさを学び。

やがて力とし、再び立てるほどの強さを持つと信じて。

「?!ぐ、ぎ、ぎっ」

しかし。

馬鹿はそれでも折れぬから、馬鹿なのである。

「ずああアアアッ!!!」

崩れかけた片足で地を踏み。

折れかけたもう片足で一步を刻み。

零れ落ちそうだった柄を握り直して、我^が夢^{むしゅら}沙羅に斬りかかった。

「――」

だがそれでも届かない。

意断の刃を極限の意志で耐え、我武者羅に振るった反撃の一撃は??シドウに刃は届かなかった。

届いたのは、痛みの証。

首を打たれ巡りすぎたヒイロの吐血が――”シドウの手を真つ赤に汚した”。

ただ、それだけ。

「な、につ??馬鹿な。まだ! まだ倒れんというのかっ!」

「あ、ア? まだ、だと??」

本当にそれだけなら。

ただの蛮勇で終わったのだろう。

けれど終わらなかった。

「いつまでも、だろうがよ」

諦めない男の狂気にも似た意思是、崖つ縁に立たされようとも。終わらなかつたのだ。

「デメエ、に——勝つまでは??終わらねえッ!!」

啞然とするシドウに、最後の一步を踏み込ませて。

爪先から天辺まで。身体の隅から絞り出す膂力りよりよくで放つた、乾坤一擲の斬り下ろし。

反射的に上段水平に構えたシドウの手から、劍のみを叩き落とし??そのまま。

最後の力を振り絞ったヒイロは。

ついに一太刀も届かせることなく、地に倒れ伏せたのだった。

015 お前は何者だ

辺りは日もまだ高いというのに、夜の静寂よりも尚、シンと静まり返っていた。

無理もない。それほどまでに凄惨で、凄絶で、今日一日の何よりも鮮烈な光景だったのだから。

現にほとんどは開いた口が塞がらないか、閉じた口が開かないかのどちらかであった。

「??」

輪の中心には、立ち尽くす勝者と横たわる敗者。

地面は流れ落ちた血を吸い、生臭い泥を作っている。

紅い血だまり。同じ色に染まった両手を見ながら、シドウもまた言葉を失っていた。

(よもや、これを狙っていたというのか? こんな僅かな勝ち筋を目指して、必死に耐え続けたというのか、この子供は。だとすれば??)

血に濡れて握力を鈍らせた上での、渾身の一打。

もしあのままヒイロが倒れずに、もう一太刀振るう余力があつたなら。きっと届いた。意地でも届かせていただろう。

（いや、だとしてもだ。こんなものは勝ち筋とは言わん。己が身を挺してでも勝利目標を目指すのは騎士として持ち得ておくべき心構えだろう。だがこれでは。いくらなんでも己が身を省みなさ過ぎてている）

意表を突く妙手ではある。しかし諸刃の剣どころか、自身が負うリスクがあまりにも大き過ぎる悪手だ。

こんな勝算、まともな思考では描けない。勝利の為なら躊躇なく身を差し出すような愚行を、どうして実行出来るというのか。

（私の加減が一つ狂えば、それこそ一生歩けぬ身体ともなっていたのだぞ。そうはならんと確信していた？ 馬鹿な。入団試験での事故事例など腐るほどある。並の技量の試験官では加減など??否、だからこそ私を指名したのか?）

前提を変えて、また一つシドウは思考を凝らす。

もしや自分の手加減に期待したのだろうか、と。

試験官の中で最も腕が立つシドウは、言い換えれば”最も限界を見極められる”存在だ。

逆に考えれば、”最も死力を尽くせる相手”もシドウなのであるとすれば……

（馬鹿な。有り得ん。他人の強さにそこまで歪んだ信頼を持てるなど。それに、本末転倒ではないか。素直に他の試験官を指名しておけば、問題なく合格出来たであろう。何

故だ。何故、こやつは自ら窮地に挑んだのだ??)

脳裏に過ぎた憶測を、シドウは無理矢理斬つて捨てたかった。

もしそうだとしたら、このヒイロ・メリファーという男は外れ過ぎている。

狂人。愚者。あるいは——英雄の素質。

まともではない。決して。

まともではない、が、果たして。

(??底が見えぬ。強者との闘いに飢えた身の程知らずの餓狼か。それとも、限られた状況の中で最善を尽くした英雄の卵か。あるいは——勝算無き闘いに身を投じる修羅の雛か)

見えないものを、やはり人は恐れるのだ。

幾度も戦場を駆けてきた男には、剣を交えた相手の事が時に言葉を尽くす以上に理解出来たものだ。

だというのに、ヒイロに限ってはまるで見通せない。

淀んだ紅い血だまりのように、深く、不透明で。恐ろしいほどに強靱な意志だけが在る。

危険な男だ。利口ではない。

結果だけ見れば、ヒイロはシドウに一太刀たりとて届かせられはしなかった。

過程だけ見れば、強者相手に気概と歪んだ知性でもって、後一步まで追ってみせた。餓狼か。英雄か。はたまた、修羅か。

潜在は分からない。本質は見通せない。

されど決を下すのは試験官筆頭教官たる己なのだから。

「??: ヒイロ・メリファアの合否に関しては——」

後悔のない決断を下すには、深く吟味するしかあるまいと。鉄面皮に疲労を滲ませながら、シドウは大きく息を吐いた。

「一時、保留とする」

016 泣きつ面に腐れ縁

すつきりとした目覚めだった。

茜色の夕焼けにまぶたを叩かれて開いた先は、ちよつと黄ばんだ知らない天井。ビキビキとメロディを奏でる上半身を起こして、見渡す室内。白いシーツに仕切りに白い床。棚に並んだ薬瓶からして医務室だろう。

静かでのどかだった。遠い喧騒がノスタルジーな夕暮れに色を添えた。大人な午後。良いじゃないか。コーヒーの一杯でも呑みたいとこですな。

身体中に巻かれた包帯から漂う薬品の香りと合わさり、見事な不協和音となってくれそうだった。

えー。

はい、嘘です。满身創痕ですが戦いますよ現実と。

すーっ。はーっ。せーのっ。

(ああアアもオオオオオ!!! 絶対やらかしたあああああああ!!!
!!!)

拝啓女神様。いかがお過ごしでしょうか。

現在私は絶賛後悔中でございます。助けて。

(どうしよどうしよどうしよ。俺、多分だけど、ふつつーにボコされて終わったよな)

散々ぶつ叩かれたせいでいつ倒れたのかも定かじやないけど、覚醒どころか一撃すら与えられずに終わった気がする。

(あかん。強敵に挑んだ結果、負けイベ覚醒コンボキメるどころかストレートにフルボッコとか。なにそれ激ダサ君じゃん主人公どころか噛ませ犬じゃんしかも犬死にのっ！)

主人公ムーブと思いきや噛ませムーブかましちまうとはね。こいつは参った。いやほんと参るよどう考えても大失敗です、本当にありがとうございました。

(不合格、だよなあ。くっそお??)

ヒイロ騎士道物語、プロローグにて完結。

まさかの早期打ち切り展開に、涙を禁じ得ない。

(でも仕方ないよなあ。あのまま八百長バトルして合格、なんて主人公としてもヒーローとしても有りえないし。多分、シドウ教官でも八百長試験官でもない試験官に挑むのが正解だったんだらうけど)

悔いはある。いやぶつちやけ後悔しかない。

けど選択自体は一番ヒーローらしかったはずだって囁く些細なプライドが、後悔のドン底まで沈む事を留めてくれた。

(まだ終わっちゃいない、よな)

なにも試験は今回だけじゃない。一浪してまた試験を受けるつつて手もある。諦めるにはまだ早い。

最悪の結果にはなってしまったけど、最低の結果にまではなっていないはずだと。外は夕暮れ。黄昏時に黄昏ながら、痛む拳を握り締める。

そんな、行き先の未来に思いを馳せる主人公ムーブは??

「ははん。見事なほどに負け犬の姿じゃないか、ヒーロ」

「どっから見てもボッコボコだ。身の程知らずにピツタリだぜ、へへへっ」

「チツ、出やがった」(空気読めない奴らが来ちゃったよ)

ノックも知らない来訪者達に、あえなくキャンセルされました。嫌味つたらしい台詞もセツトでご登場かよ。冗談抜きでお呼びじゃないんですけど。嫌味つたらしい台詞

おまけにルズレーと来たら、ズタボロの俺を満足そうに見下ろしていた。

「僕の言うことに従っておけば、そんな不様を晒さなかつただろうになあ」

「うるせえ」(ほんと黙っててくれよ)

「お前のことだ。大方、養成学生の頃に行った英雄譚の演劇にでも影響されたんだろう? 不相应な夢を見たもんだな。みつともない恥を晒した気分はどうだ?」

「うるせえつつつてんだろ??ぐっ、げほっ、ごほっ」

重体の幼馴染み相手にかける言葉がそれかい。

からかいとか冗談とかじゃなく本心で言ってるし。性格の悪さが下限突破し過ぎて地球に穴開くわ。

「僕達と同じ試験官に挑んでいたら楽に合格していたのに。なんの為にあの試験官に金を握らせたと思ってる」

「全くですぜ。どうせ合格なら楽で賢い道を選んどきや良いつてのに、馬鹿な野郎だ」
「何が楽で賢い、だ。テメエらのは……、——？」

あ？ ちよつと待てよ。”どうせ合格なら”つつうのは、どういう……」

「??シヨーク」

「うえ!? す、すいやせん、口が滑りまして。へ、へへ」

「チツ、もう少し翳ってやりたかったが??まあいい。ほら、さつさと受け取れよ」

「??」

まさか。

まさかまさかまさか!

些細な違和感から紐付いた希望の糸は、単なる気のせいだった訳じゃないらしく。

不満そうに鼻を鳴らしたルズレーの手から投げ捨てられた羊皮紙が、からりと宙を舞う。

『アリエスの月の27。』

エインヘル騎士団入団試験にて、下記の受験者の合格を認可したものとする。

合格者　ヒイロ・メリファー』

震えた手で掴み取ったその一枚の紙面上には、今の俺がもつとも望んだ言葉が踊っていた。

017 亀裂の入った合格通知

「——つつつ、しやらああああ!!!」

えー。拝啓女神様。さつきぶりっすね。

現在私めは狂喜乱舞の極みにございます。うへへ。

絶望的状况からのまさかまさかの大逆転劇。全米が泣いた圧倒的カタルシス。

いやー結果的に大正解だったとか。これが噂の主人公補正つてやつなのか。たまたまね。

急カーブして到来された我が世の春に小躍りしたいところだが、節々の痛みが酷いので、残念ながら心の中だけで留めておく。

ともあれ良かった。ほんと良かった。

一時はどうなる事かと焦ったけど、俺の騎士道物語はちゃんとスタートを切れた訳だ。主人公補正万歳!

「??大袈裟な。たかが騎士になったくらいではしゃぐんじやない。お前の気味の悪いにやけ顔は、夢に出そうで目に毒だよ」

「うっせえ、余計なお世話だ」

「ふん。けど、そんな目に合ったんだから、お前も少しは懲りたろう？　馬鹿とて鞭打てば学ぶ生き物だ。これからは僕の言うことに大人しく従え、分かったな？」

「?!馬鹿はテメエだろ。テメエに従わなかったからこそ、掴み取れたんだらうがよ」

人が有頂天の極みに昇るや、すかさず冷や水を差すこのルズレーのインターセプトですよ。

通知書を持って来てくれた事には感謝するけど、ちよつとは空気読んでくれねーかな。

「お、お前はあ?!」　誰に向かってそんな口を利いてるんだ！　誰のおかげでお前の様な身の程知らずが、”騎士に成れる”と思ってるっつ！」

だが、本日何度目かも分からない激情と共に突き付けられた言葉は冷や水どころじゃなかった。

「?!は?　どういう事だよ、それ」

「お前の合否は本来、保留だったんだ。だからあの試験官が言ったんだよ！　お前を合格させるよう教官殿に口添えしといてやるからと！　おかげで余計な出費を払わされたんだぞ！」

「???」
「——」

ちよつと待て。整理させてくれ。

保留つてなに。俺が気絶してる間に何があつたんだよ。

いやでも、正直あれだけの負けっぷりを晒した訳だし。すんなり合格つてよりは正直腑に落ちるのも事実だった。

けど問題はそこじゃない。

「??シヨーク」

「え? な、なんだよ」

「今の話、マジなのか」

「お、おう。試験が終わつた後、ルズレー様ところに例の試験官が、口添えしてやるからもつと寄越せてせびつて来やがってよ」

信用も信頼も出来そうにない幼馴染の証言には、嘘らしさは欠片もあつてはくれなかつた。

(??嘘だろ。じゃあ俺つて、賄賂で合格したつて事かよ)

シヨックなんてもんじゃなかつた。

別に、清く正しい生き方を志してる訳じゃない。

主人公補正だとか覚醒イベントだとかに頼つた闘いを挑んだ俺に、ルズレーのやり方

を非難する資格なんて無いのかも知れない。

けれど、俺はただ憧れ続けた存在に、少しでも近付きたいだけだった。

負けただけなら良かった。悔しくても自分で選んだ結果だから。そんな結果さえも捻じ曲げられた。

よりにもよつて「これは違う」つて切り捨てたはずの形に落ち着いてしまった。

近付くどころか、遠ざかった。

身体を走る鈍痛の虫よりも、その実感の方がよつぽど重く、痛んだ。

「なんなんだ、お前は」

「?!あ?」

「る、ルズレー様?」

だつてのに、そんな俺の痛み様すら気に入らないと。

今までとは致命的に違う色に顔を歪めたルズレーが、俺に食つてかかる。

「いったい何が不満だつて言うんだ! ろくに取り柄もないお前如きが騎士には成れた。いいや、貴族の僕が、お前なんかを騎士にしてやったんだ! なんのになんだ、なんでちつとも喜ばない!」

「嬉しくもねえのに、喜べる訳ねえだろ」

「このつ??つ、いい加減にしろ! この間からお前と来たら、目をかけてやった僕に後ろ

「足で砂かけやがって！」

「??」

「僕に逆らうんじゃない！黙って後ろを歩いていればいいんだ！お前なんか??お前なんか?、僕の、前に出ようとするなあっ！」

馬鹿を躰ける鞭だと言わんばかりのルズレーの拳が、こめかみを叩く。雑な暴力だった。自分の思い通りにならない相手に振るうだけの、子供の癩癩みたいな殴り方だ。

痛みは些細で、骨どころか肉皮にすら響かない。

けれども、お陰様でやさぐれた心の苛立ちに火を着けるには充分過ぎる摩擦だったから。

ああ。もういい。この際だからぶつちやけようか。

いい加減、俺も我慢の限界なんだよ。

「帰れよ」

「ぐっ、お前?!」

「今すぐ俺の目の前から消え失せろつつつてんのが??聞こえねえのか！」

「ひっ」

もう知ったことか。

決定的な亀裂が出来たつて構わない。

元のヒイロが築いた関係性だからと、義理を立てるにも限界だった。

胸倉を引っ掴んで怒気を叩き込む。

至近距離の貴族の目が、理解不能な狂人を見るように怯えていた。

「く、くそ??この恩知らずが！行くぞシヨーク！」

「へ、あ、待つてくだせえ、ルズレー様！」

短い捨て台詞を吐くだけ吐いて、逃げるようにルズレー達は走り去った。事実逃げたんだらう。去り際の表情は、はつきりと恐怖に染まっていた。

だからつて勝ち誇るつもりもなければ、清々とした気持ちにもならない。ただ虚しかった。

夕暮れの豊かな赤黄色が、空気の乾きに拍車をかけるくらいに。

(?!:どうしようか、これ)

三人から一人。シンと静まる医務室に、手の中の通知書がくしゃりと響いた。

記されている自分の名前と合格通知。少し前には天にも昇る気持ちで見通した文面も、実情を知った後じゃあ寒々しい。

(辞退するべき、だよなあ??)

騎士になりたかった。でもあくまで手段としてだ。

魅力的な肩書きを得たいが為に、自分なりの信義を曲げたくはなかった。

惜しい気もするけど。いざって時に足を引っ張られかねない妥協を選ぶくらいなら、別の道で良い。

そんな決別の意味も込めて、通知書に手を添えた時だった。

「辛気臭い場所、辛気臭い事しようとしてるわね」

「てめえは?」

通知書を裂こうと力を込めた指先が、少女の冷めた声にぴたりと止められる。

そんな辛辣なご挨拶をしてくれたのは、俺が理想として描いていた導入を見事にこなしてみせた強者。

シユラだった。

018 その手の栄光

いや、ここでお前まで来るんかい、と。

気疲れしっぱなしな今日一日の締め括りとばかりに現れたシユラに、呆然とした。

一瞬手放した意識ごと、皺を増やした羊皮紙が手からすべり落ちる。

ある意味じゃ一番会いたく無かった少女の姿に、つい顔を背けてしまう。ライブルと見定めた相手に、今の俺を見て欲しくなかったからだ。

「何だよテメエ??ノックくらいしやがれよ」

「此処、医務室でしょ。別にあんたの部屋って訳でもないし」

「テメエの部屋でもねーだろ。マナー知らずか」

「グチグチと、顔の割に細かい男ね」

「顔関係ねえだろ」

居心地の悪さに引つ張られた俺の悪態も尖りがちだったが、シユラの返しも中々だ。

ツンケンとした態度のまま、何のつもりかベッドの上の俺へと歩み寄る。仏頂面とは裏腹に、高さのないヒールが小気味良い足音を響かせた。

「さつき場所も弁えずに罵詈雑言を撒き散らすジャガイモ貴族とすれ違つたけど、あれ、あんたが原因?」

「??知らねえよ。俺にはもう関係ねえ」

「ふうん。じゃ、あんたがその紙切れ破ろうとしてたのは、ジャガイモ貴族が原因かしらね」

「知らねえつつつてんだろ」

痛い腹を遠慮なく探る辺り、ほとほと気の強い少女らしい。包帯塗れの俺を見下ろす顔には、聞いときながらも興味の欠片も浮かんでない辺り、いい性格してた。

そもそもなんでこんな所に居るのか。怪我もしてなければルズレーへの興味も無いであろうシユラが、此処に来た理由が思い浮かばない。

「下衆の勘繰りに来たのかよ」

「あなたの連れと同列にしないで。医務室に来たのは、あなたに用があつたからよ」

「俺に?」

「そ。リボン拾わなかつた? 色は黒で、布で出来てるやつ」

ちゃんとした理由あるんかい。変に勘繰つたのは俺の方だったわ。

シユラのお目当てにもすぐ思い至る。多分あの予選会場で拾つたやつだろう。渡しそびれていたし丁度良いと、仕舞つていた場所を手探りひよいと掲げた。

「これか」

「ん。やっぱりあんたが持ってたのね。変な事に使ってないでしょうね」

「ねえよ。髪縛る以外の何に使うってんだ」

「?!セクハラ? 最低ね」

「発想が最悪だよてめえは」

善意で拾つたといつてこの言い様である。

ライバルキャラは主人公につんけんするのが相場つて知ってるけど、傷付くもんは傷付く。ただでさえ傷心なのに。

泣きっ面に刺す蜂よろしくな毒舌に辟易してる間に、シユラは受け取ったりボンを仕舞うと、合格通知書を断りもなく拾い上げる。

茜を浴びて輪郭を焼いた灰銀の髪と赤色のマフラーが、甘い香りと共にふわりと舞つた。

「てめえ、なに勝手に」

「なんだ、合格してるんじゃない。あんな辛気臭い顔してたから、てつきり落ちたのかと思つたけど」

俺の苦言もどこ吹く風に、見るだけ見てほいつと通知書を放るシユラ。憎たらしい仕事も妙に絵になるから得である。

「それ。破ろうとしてたわね」

「っ。だったらなんだってんだ」

「普通に解せないってだけよ。あれだけ滅多打ちにされて退かなかった癖に」

「てめえには関係ねえだろ」

「あのジャガイモ貴族、さつきすれ違つてた時に恩知らずとか喚いてたけど。それは関係あるんじゃない?」

「チツ」

痛い所を突いてくるシユラに、暴言悪態のフィルターを介さない舌打ちが零れ落ちた。

朝の出会いから今まで、常に排他的な言動や態度を崩さない癖に、なんで首を突っ込んで来るのか。解せないのはこっちの方だよ全く。

覗き込むシユラの瞳は爛々と紅を帯びていて、誤魔化すには苦勞しそうだったから。

(ああもう、どうにでもなれ)

半ばヤケクソ気味に、俺は経緯を話すことにしたんだけど――。

「??つまり、あんたは賄賂で合格したって話?」

「ケツ。笑いたきや笑え」

「ふーん。確かに笑い話ね」

話し終えるや一切口角を上げずに肩をすくめられ、俺はガチ凹みした。別にフオロとか期待してた訳じゃないけど、血も涙も一粒の優しささえも無いとかあんまりじゃん。

あんまりなシユラに噛み付く気力さえ湧かず、がくりと肩を落としたのだけでも。

「良い気味ね、あのジャガイモ貴族。まんまとしてやられてるじゃない」

「あ? どういう意味だ、そりゃ」

「ふん。だから、八百長してた試験官にしてやられてんのよ。シドウって教官は『清職者』って名がつくほどに厳正で、賄賂や不正を特に嫌う。主力部隊から一教官に左遷された経緯も、上層部の騎士の不正を処断したからって逸話が有名じゃない。そんな頑固者に、胡散臭い試験官の口添えが通る訳ないわよ」

「????
は、あ?」

驚愕の余り、顎が外れそうだった。

ちよつと待つて。衝撃で頭ん中の整理がつかない。

ワイロなんて意味無かったって。いや確かにシドウ教官が厳正つてのは、まあ分かる。絵にかいたような堅物っぽかったし。

だからあのルズレーが金を握らせた試験官の話に、シドウ教官が耳を貸さないつての

も想像に難くない。

じゃあ、ルズレーがしてやられてた相手つてのはあの試験官にか。流石平然と八百長する試験官だ、あっちのが一枚上手だったってことか。

いや違う。そうじゃない。

俺が一番気付くべき所はそこじゃあなくて。

つまり。つまり……！

「おい、じゃあ……俺の合格は」

「そういう事よ」。ほら、笑い話でしょ。笑えば？」

呆れたようなシユラの溜め息も、気にならなかつた。

ぶわつと血管が開いて、赤血が一気に巡る。

寒くもないのかじかむ手で、膝上に放られた紙を掴んだ。

破りかけて出来たシワで、文字が歪んでる。

けども、読める。合格者、ヒイロ・メリファア。

今の俺の名前がそこにある。

(??~~~~つっつ!!)

今度こそ、自分が掴んだものを確かめるように。
俺は傷だらけの胸に、その証を抱き込んだのだった。

019 この物語の主人公は。

変な男。

口の中で転がした批評を齧れば、なんとも言えない苦味が増して、シユラは眉を潜めた。

へん。おかしい。奇妙。珍獣。

目の前の男との、今日一日の中で積み重なった印象の顛末は、そんな似たりよつたりで良く分からない所に落ち着いてしまった。

(良く分かんないヤツね)

初めは失礼な奴だと思った。

頭一つ分の高さからまじまじと見下ろして、目付きが悪い、という失礼千万な一言から始まったのだ。

手鏡を持ち歩いていれば叩き付けてやりたかった。身嗜みに頓着しない自分の性格を、初めて後悔したくらいだ。

好印象など持ちようもない。類は友を呼ぶとも言うし、連れ合いらしき失礼千億な貴

族と取り巻きを見れば、覚える価値もないと思つた。

『俺は本気で騎士になりに来てる』

だからこそあの言葉の真剣味が、シユラには意外だった。

ほんの少し興味心を擦くすくられてしまった。つい、らしくもなく悪びれもした。

けど口だけなら何とでも言える。

それこそ身飾る鎧ばかりが立派で、中身の欲深い騎士は多い。秘めたる決意と共に刃境から王都に訪れて以降、そういった墮落した誇りをいくつも見ては失望してきたシユラである。

彼の名前は受け取りながらも、過度な期待はしなかった。

『デメエ、に——勝つまでは??終わらねえッ!』

そして、あの激闘だ。

圧倒的強者に対し折れず退かず、意識を手放す最後まで喰らいつこうとする餓狼の如き執念。

痛ましさを増す度に歯を剥き、絶望的な状況下でも絶やさないう勝利への灯火。薄緑色の目を赤鉄に燃やすヒイロを見るたび、シユラは肌が粟立つのを自覚した。

(こいつは。ヒイロは??違うのかもしれない)

富こそ力とする貴族とも。

潤う為なら平然と媚びへつらう騎士とも。

騎士という身分保証の為だけに団の門を潜ろうとする平民とも。

違うのかもしれない。揺るがぬ決意を思わせる目を持った男は、シユラの知る限りでは初めてだったから。

「??一つ、聞いてみるけど」

「なんだ」

「どうしてあんたは八百長に乗らなかつたのよ。正しくはないけど、利口ではあるじゃない。その選択の方がずっと楽で、確かだった。そうでしょ？」

「ふん。決まってるんだろ」

柄にもないことを聞いている自覚はあった。

それでも確かめたいと思った。この男が苦難を選んだ理由を。

「俺は、誰よりも強くなる為に此処に来た。卑怯者になる為じゃねえ」

「??ふーん。誰よりも、ね。あれだけやられといて、良く言えたわね。馬鹿なの？」

「ハッ。そだよ、馬鹿よ。賢くなくたって結構。嗤われながら指差されんのは慣れてんだ。だが、俺は強くなると決めた。決めたなら、後はやるだけだ。地に這いつくばろうが泥啜ろうが、やってやるってんだよ」

「??暑苦しい奴」

「るっせえ。聞いてきたのはためえだろうが、冷血女」

誰よりも強くなる為に。

そんな純粋で幼稚じみて、けれど真っ直ぐな答えが返って来るとまでシユラは思わなかった。

強くなる為なら苦難も厭わない。かといつてただ強さを求めるだけじゃなく、語られない奥底に秘めた『何か』がある事くらい、シユラにも察せた。

(強くなる、か。そう。あんたも同じって訳ね)

噛みしめるように、少女は目を閉じた。

誰よりも強くと謳うヒイロの目の光は、全てを喪ったあの日をシユラに思い出させた。

「口だけじゃなきやいいけどね」

「上等だ。いつかためえもこましてやつから覚悟しとけ」

「??精々頑張んなさい」

「ケツ、えらそーにしゃがって」

たった半日。顔を合わせた数は片手で足りる。

でも強烈な男だ。ヒイロ・メリフアー。

笑い方を忘れかけていた少女は、ほんの少しだけ口角を上げて、同じ心を持つ男に背を向けた。

意図した生意気な物言いに対するヒイロの抗議も、今は取り合わないで良い。

きつとまた会うだろうから。

今度は同じ、騎士として。

(またね、ヒイロ・メリファー)

終ぞ呼ぶ事はしなかった彼の名を、胸の中で転がす。

医務室から廊下に出れば、回廊窓から風が吹き、彼女の長い髪を撫でた。

外では沈み行く太陽が、地平に溶けて雲を焦がす。

空は、世界は。呑み込むような紅蓮に灼かれていた。



「あの、副官」

「どうしましたか、ノルン様」

「あのですね。早とちりした反省の意味をこめて、瞳さんを送ってしまった世界の原作をこうしてプレイしてる訳じゃないですか？」

「なんとという説明口調。しかし、なにを改まって言ってる?? もしや、もうクリア出来たんですか?」

「出来る訳ないですよ! だってプレイし始めてまだ二時間程度ですもの。やっと序章が終わったくらいで」

「はあ。では何用で?」

「いえ、その??今のところ、名高いなんて言われるほど鬱な感じがしないなあって」

「それはまだ序章だからでしょう。それに、主人公の過去は中々に重いものではありませんか?」

「確かにそうですけど、でも過去って言っても匂わせ程度で、描写もまだそんなにです。思ったよりは重くないのかなあって??や、やっぱりこの後ドンドン辛くなってくるんですか?」

「そうですね。ネタバレはプレイの楽しみを奪いかねませんが??第一章から重苦しいイ

ベントが続くそうですよ」

「罰なんですから楽しみも何も無いじゃないですか?? ああ、もう、やってやりますよ!」
「その意気です、ノルン様。責任を以って送り出した以上、貴女には是非ともエンディングを迎えていただかねばなりませんからね。」

そう、この??!

プレイストーム5ソフト! CEROD「D」17歳以上対象!

「なんでこんなシナリオ作った、言え!」

「歯応えのある難易度。歯が抜け落ちるストーリー」

「拝啓神様へ。鬱展開が癖になった僕をお許し下さい」

「初回限定特典は胃薬だったら良かった」

「大団円ハッピーエンド実装はまだですか??」

「本当に、本当に?? やってくれやがりました」

というプレイヤー達の阿鼻叫喚抱腹絶倒地獄絵図な感想を多く集め、発売から十年経った今でもカルト的人気を博す鬱ゲーと名高き名作!

剣と魔法と絶望のコマンド式RPG!

【灼炎のシユラー灰、左様做】を!」

「なんで宣伝風なんですかあ！ あの！ 本当は私の心が痛むのを楽しんでるだけです
よね副官!?!」

「そんな事ありますん」

「それどつちなんですか!?! うわああん!」

第一章 完結

長女ウルズの人物紹介 VOL. 1

閲覧ご苦勞様でございます。

運命の三姉妹が一柱。長女ウルズです、ご機嫌よう。

こちらではノルン様の命により、ストーリー上にて登場したキャラクター達の紹介を行っていきます。

また、紹介出来る内容としては現時点で判明してる内容がほとんどですので、飛ばしていただいても構いませんよ。

他の姉妹と違って些か淡白な紹介となりますが、平にご容赦を。
では、参ります。



【No. 1】 ヒイロ・メリファー / 熱海あたま 憧しよう

・年齢

18歳。誕生日は11月16日。

・外見

身長は180cmの長身で、手足も長い男性。

額でクロスする前髪が特徴的な、赤茶色の頭髪。

眼は薄い緑。顔立ちの造形自体は整っていないこともないのですが、目付きの悪さや険しい表情が悪印象を抱かせるようですね。その上、あまりパツとしない顔と。ある意味奇跡的な配分では？

・服装

普段着は黒の無地だったり落ち着いた色合いを好まれるそうです。

晴れ着姿は少しでも主人公らしさを強調する為に、紅い道服にグリーンのズボンと派手めなカラーを選んだとか。

・熱海 憧について

我らが女神、ノルン様の誤りによって本来迎えるはずのない死を迎えてしまった、ヒーローや主人公になることを夢見る男性。

ヒーローとしての生を望んでいたものの、ノルン様のいつもの早とちりのせいで、陰鬱な展開の多い事で有名なRPGゲームのモブキャラクター（ヒイロ）に憑依する事と

なります。

ですが本人はノルン様の早とちりを知らない状態ですので、憑依先については、ちよつと変わった風貌のヒーロー系主人公と勘違いされている様子。

色々違和を感じられてみたいですが、夢だった形の人生を歩めることへの喜びと持ち前のポジティブさもあつて、気付く様子はなさそうですね。

物事へ対する頭の柔軟性はあるようですが、こと対人関係においては時折思い込みの激しさが裏目に出ることもあるご様子。

また理想の主人公像を描き続けていた為に、独自の定規で物事を測ってしまいがちであり（この状況は主人公を活かすとしたらこういう展開になるよな、みたいな感じ）、そこが欠点でもありますが、それ故に予想外の事態の好転を招くケースもあります。

・ヒイロについて

元々は騎士養成学園ヴァルキリーに通う不良生徒。

尖った鼻が特徴的なシヨーク・シャテイヤと共に、貴族の嫡男であるルズレー・セネガルの子分であった模様。三人の中でも一番下っ端の立ち位置であるらしいです。

なお、その頃の悪行により学園の中では煙たがれているとか。

学園のある聖欧国アスガルダムの麓の村、ヘルメル出身であり、サラという名の妹

と暮らしていらつしやいます。

元の人格は口も悪かつたらしく、その影響もあつてか中身の思考を少し歪ませたような物言いになる事もあり、苦勞なさつてるようですね。

・戦鬪能力、精神性について

ヒーローや主人公に憧れている彼ですが、単なる夢ではなく、生前は本気で目指していた模様。

その為には常人ならすぐさま逃げ出しかねないほどの自己鍛錬を自らに課していたらしく、それはヒイロとなった現在でも続行中です。

また、生前の際にはいくつもの武道や武技を収めるべく様々な道場に籍を置き、鍛錬と並行して武術修行にも臨んでいたんだとか。

しかし、道場の師範代の何人かには『センスが無い』『才能が希薄』と評される事もあるほどに、彼は絵にかいたような凡人だったそうです。

が、もはや異常ともいえる精神性は評価に折れることなく努力と研鑽を続けて、一流には届かないものの相応な格闘技量と、非常に優れた『目』を持つまでに至った模様。

・好み

1にヒーロー、2に主人公、3、4もどちらか5に王道。と宣えるほどにヒーローや

主人公をこよなく愛する性格。

特に王道的な物語の主人公を好まれているらしく、ゲームや創作も大体はそういう内容のものばかりに手を付けていたそうです。

ですがジャンル自体は雑食らしく、ファンタジーを筆頭にコメディ、スポーツ、恋愛、SF、ラブコメ、ミステリー、歴史と多種多様。

王道的なストーリー展開以外にもポップな日常系やシリアス、ダークな物語も普通に受け入れられる性格で、基本的には満遍なく楽しめるとか。

しかし勉強の類は苦手であり、頭を使う内容の作品は読みはするものの雰囲気を楽しむタイプであるそうです。



【No. 2】 エシユラリーゼ・ミズカルズ

・年齢

17歳。誕生日はカプリコーンの月（12月）の末の日。

・外見

背は172cmと高く、胸や腰などの女性的発育が非常に豊かな乙女。灰銀色の長髪と、燃えるような紅い瞳。

美貌もまさしく絶世の美女と呼べるもので、同性異性問わず目を奪われるほどの造形ではあるのですが、本人の排他的な雰囲気と、泣き黒子がありながらも野犬のように鋭い目付きに、近づきがたさを感じる者も少なくないそうです。

・服装

上は肩とヘソの部分を露出した薄手の黒い長袖に、赤いマフラー。

下部も片方だけ包んだ黒いストッキングと黒のスリットスカートと、防寒意識の低いフアツションですね。

しかし戦闘スタイルからして軽装である方が都合が良いらしく、あまり美意識に頓着する性格ではないことが反映された結果なんだとか。

尚、シユラ本人は寒いのが得意ではないそうです。

・シユラについて

騎士団の入団試験の際にヒイロが遭遇した謎の人物。

その実力は他の受験生の中でも圧倒的に抜きん出ており、試験のトップバッターに選ばれながらも試験官の中で一番の実力者であるシドウ教導官にさえ勝ってみせるほど

の強者です。

性格は気が強く排他的であり、口調も攻撃的。シユラの美貌に鼻を伸ばしたルズレーのナンパにも手酷く仕返したりもします。

その折に仲裁し、かつ自分と同じくシドウ教導官を指名し、勝利こそしなかったものの強靱な意志を示したヒイロに、強い興味を抱いてる様子。

また、シユラ本人も並々ならぬ宿業を胸に秘めているようで、遠くない内に明らかになるかも知れません。

尚、この物語の舞台となる『灼炎のシユラ——灰、左様倣——』における、本当の主人公です。

鬱ゲーと名高い原作では苦難の一言に尽きる人生を歩んだ様ですが、ヒイロというイレギュラーが介在する物語においては、どういった結末を辿るのか。

それはまだ誰にも分からぬことです。



【No. 3】 ルズレー・セネガル

・年齢

16歳。誕生日キャンサーの月（6月）の2の日。

・外見

中肉中背の金髪マツシユルームヘア。

目付きというよりも、内面を透かしたような侮蔑的な眼差しの影響もあつてか、他人に良い印象を与えない顔付き。

・服装

マントや靴、装飾多く主張の強い色合いの上下服といい、豊富な財力を示すことを目的としたような装い。

ただ、本人の振る舞いも相まって、かえって品の無い印象を与えるので、シユラやヒイロとは別の意味で近づきがたさがありますね。

・ルズレーについて。

アスガルダムのとある貴族の息子という肩書きがありますが、育ちの影響か本人は傲慢で高慢、常に他人を見下したような言動と態度と、お世辞にも好感の持てる人間ではありませんね。

ヒイロとシヨークを取り巻きとし、学園でも悪童として有名であり、三者とも揃って

煙たがられている始末。

しかし子分達に対しては、高慢ではありつつも金銭を工面したり、進路を確保する為に裏で手を回したりと、褒められた手段ではないものの、面倒見自体は良いみたいです。入団試験の折に決別したヒイロに対しての感情は、下のものに歯向かわれたが故の怒りだけではなく、存外に複雑である模様。その心境が明かされる日は、そう遠くはないようです。



さて、今回は以上三名の主要人物について紹介致しました。しかし縁とは業、歩みと共に膨らみ繋がり絶えるもの。

物語が進むにつれ、また皆様とまみえる事もありましょう。他の姉妹共々、これからもよろしくお願い致します。それでは、此度はこれにて。

次女ヴェルの省略あらすじ VOL. 1

やつほーみんなあーはじめましてー

運命の三女神の次女ヴェルザンデーちゃんだよー

略してヴェルちゃんだよー

さてさてー、ここではヴェルちゃんがノルン様に頼まれてーヒイロくんを観測した結果を、あらすじっぽくお伝えしていくんだよー

観察日記みたいなものだよー

ストーリーっぽいけどお仕事なんだよー

だからそんな目で見ないで欲しいよー

まあまあゆっくり聞いていって欲しいよー！

・その1

ノルン様が運命の糸を切っちゃった影響で、死んでしまった熱海 憧くん。

お詫びに次なる生として好きな人生を歩ませてあげるってことになったんだけど、憧

くんは憧れだった『ヒーロー』としての人生を望んだんだー。

でもノルン様はいつものうっかりが発動しちゃって、憧くんは『ヒーロー』じゃなくて、とあるゲームの『ヒイロ』って名前のキャラクターとしての人生を歩むことになったんだー。

大変だよー。おおごとだよー。

しかもそのゲーム、鬱ゲー？っていうジャンルのゲームらしくて、とにかく憧くんこれから大変だよー

・その2

ノルン様の失敗で、ヒイロ・メリファークンの身体に魂がINしちゃった憧くん。

ヒイロくんはちよつと人相悪くて背がおつきな男で、サラちゃんって妹が居るみたいだよー。

ひと悶着ありながらサラちゃんのご飯を食べていると、貴族のルズレー・セネガルくと、その取り巻きのシヨーク・シャテイヤくんがお家まで迎えに来たんだよー。

ヒイロくんはどうやら、ルズレーくんの取り巻きだったらしいんだよー。

そして、ヒイロ君たちが通う、騎士養成学園ヴァルキリーに向かうことになったんだー。

でもヒイロ君に憑依したときにはもう卒業は目の前だったんだよー。だから学園生活は満喫出来なかったねー、ヒイロくんかわいそうだよー。

・その3

学園生活は楽しめなかったけど、代わりに騎士団への入団テストももうすぐってことで、ヒイロくんはせっせと準備にとりかかったんだー。ポジティブだよー。

そしてテストの日にルズレーくん達と騎士団本部に向かったところで、エシユラリーゼちゃん、もといシユラちゃんと出逢ったんだねー。シユラちゃんとっても美人さんだけど、ツンツンさんでもあるんだねー。

ナンパするルズレーくんに超ツンツン対応しちゃったもんだから、ルズレーくん激おこ。ヒイロくんたちにシユラちゃんを懲らしめろって命令したんだー。器ちつちやいなー。

でもヒイロくんが断固拒否しちゃったから、結局ルズレーくんはシユラちゃんを懲らしめることは出来なかったねー。

・その4

ルズレーくんとは溝が出来ちゃったけど、シユラちゃんとはすこーしだけ縁を作れた

ヒロくん。ヒロくんの目にはシユラちゃんがいわゆる重要キャラに映ったんだねー。

ツンデレヒロイン疑惑浮上だよー。でもテストでいちばん強い教官さん相手に勝っちゃったシユラちゃんを見て、この子はヒロインじゃなくライバルだっ！つてなっちゃったんだねー。うーん惜しいー！

ルズレーくんとシヨークくんも、事前にお金で雇っていた試験官に八百長してもらって合格出来たみたい。うーん、これはずるいねー。

そしてついにヒロくんの出番がやって来たんだけど、なんとヒロくんはシユラちゃんが戦ったつよい教官さんを相手に指名しちやっただよー！ うーん、ヒロくんこれ大丈夫かなー？

・その5

全然大丈夫じゃなかったよー?! ヒロくん、ボコボコのぎったんぎったんだったんだよー。でもヒロくんには作戦があっただよー。その名も「主人公なんだし苦戦してたら覚醒イベント来るから、それまでずっと我慢してよう」大作戦！（命名ヴェルザンデイ）

それが上手いこと出来れば良かったんだけど、残念ながら教官さんの剣を叩き落とす

ことで精一杯だったねー。それだけでも凄いことなんだけど、ヒイロくんはそのまま気絶しちやっただよー。

・その6

医務室で目が醒めたヒイロくん、すつごく落ち込んでたねー。

結局勝てなかったし不合格だと思ってたんだろーね?? 頑張ったのに、悲しいなー。でも、そこにあらわれたルズレーくん達からなんと! ヒイロくんが合格したって教えられたんだよー!

よかったよーヒイロくん! あ、でも、本当は結果は保留で、ルズレーくんが雇った試験官にワイロを渡して、合格にして貰ったみたい。うーん、それはちよつとヴェルちゃんのにも複雑かなあ??

けどヒイロくん的には複雑どころじゃなかったみたい。そんな方法で合格したって意味ない! ってヒイロくん怒っちゃった。したらルズレーくんも食ってかかっちゃって?? ヒイロくとルズレーくんの仲は完全にこじれちゃった。

・その7

合格はしたけど、ヒイロくんの本意じゃない形になっちゃったからかなー。

合格を辞退しようかヒイロくんは悩んだ。そんな時に、シユラちゃん再登場! しか

もなんとヒイロくんはワイロじゃなく実力で合格したって教えてもらったんだよー！

やったー！ヒイロくん良かったねー！ヴェルちゃんも嬉しいよー！

シユラちゃんもヒイロくんの頑張る姿に胸を打たれたんだねー。ツンツンしながらも、シユラちゃんはヒイロくんを少し特別に思いながらも、その場をおさらばしちゃったんだー。

うーん去り際もクールだねー。

さすがはこの世界の主人公だよー??

そんなこんなで、ここまでのお話をざっくり紹介したんだよー！

次のお話からは合格したヒイロくんが騎士の卵として頑張るお話！ 新しいお友達

も登場するみたいだから、期待して待って欲しいよー！

以上、次女のヴェルザンデイちゃんからでした！

それじゃー、またねー！

三女スクルドの専門用語解説 VOL. 1

わっはっはー！ 閲覧ご苦勞である！

余こそ運命の三女神の愛され三女ことスクルドであるぞ！

うむ。ここでは作中に出た各種の専門用語や設定についてを、可愛い余がじきじきに補足説明してやろう。

よって、低頭平身で余を崇めながら、お耳かっぽじって聞くが良いぞ！

はえ？ 三女の癖に態度が一番でかい？

な、なんじゃとー！ 三女が偉ぶって何が悪いかー！



【ユミリオン大陸】

物語の舞台となる、四方に海を囲まれておる地続きの大陸だな！ 超広いぞ！

【聖欧国アスガルダム】

ユミリオン大陸の北から中央部にかけての、約4分の1の面積を領土とする、大陸最

大人口の国家だな。

王家ガーランドを長とし、大陸最強と名高き戦闘集団『エインヘル騎士団』を有しておることも語る上では欠かせぬことだ。

中心部につれて発展しており、文明水準は他国より高く、魔術をはじめとしたあらゆる研究についての研究や貿易も盛んであり、都心の華やかさは実に見事だ。

かつて世界樹と呼ばれた大樹ユグドラシルが在った地の上に築いた都市であり、その影響か樹立する大木の幹を利用した橋や家屋も多く、実に目に楽しい街並みと言える。余も暮らしてみたいぞー。

だが近年では格差の増大、騎士の増長や辺境の魔術被害、隣接国との関係悪化と、なかなかトラブルを抱えておる。厄介だなー。

【王家ガーランド】

アスガルダムに座する王族ぞ。王族だけあって偉いらしいぞ、余よりは劣るが。

人類史1500年に誕生した稀代の英雄王シグムントを発端とした王家であり、500年もの間、広大なアスガルダムに君臨しておるそうぞ。

余談だが、四つ羽の鴉を聖獣とし、国家のシンボルともしておるらしい。しかし四つ羽の鴉とは、面妖であるな。

【エインヘル騎士団】

アスガルダム¹の保有する最大戦力で、「騎士」と呼ばれる階級に準ずる者達の組織だぞ。

騎士団長レオンハルト・シグを筆頭とした大陸随一の戦闘集団であり、実動部隊であり『本隊』と呼称されるブリュンヒルデ隊をはじめとして三つの軍団に分かれておるぞうだ。

春に一度、新規に入団する事となる者達を集わせ、試験を行うぞうだ。

アスガルダムの都心部に本部を構えておるぞ。

【ヴァルキリー学園】

エインヘル騎士団の近くに建設されておる、騎士を養成するための学園だ。

毎年国内の若人たちが集い、共に騎士団入団を目指しながら切磋琢磨する場であるぞうだ。

青春だの、余も通いたい。ヒロの幼馴染ポジとかどうだ？ 健気な余には適役だろ

？ のう？ こつちを見んか。

【魔獣】

本編ではまだ登場しておらんが、イメージは現世でいう魔物モンスターと似ておるらしい。

いわゆる人類の天敵であり、この世のもたらす災厄、森羅万象の悪夢であるとされておるのだが?まあ、うむ。いずれ触れる機会もあろう、Vol. 2を心して待つが良し。

【月の数え方】

この世界は各月の呼び方が現世とは異なるようだ。

いわく、人歴1000年頃に、星文学者アスクレピオスによつて唱えられた各月の呼称が元となつてゐるそうぞ。

大体以下の感じになつておる。

1月・アクエリアスの月〈水瓶座〉

2月・ピスケスの月〈魚座〉

3月・アリエスの月〈牡羊座〉

4月・タウラスの月〈牡牛座〉

5月・ジエミニの月〈双子座〉

6月・キャンサーの月〈蟹座〉

7月・レオの月〈獅子座〉

8月・ヴァルゴの月〈乙女座〉

9月・ライブラの月〈天秤座〉

10月・スコープオの月〈蠍座〉

11月・サジタリウスの月〈射手座〉

12月・カプリコーンの月〈山羊座〉

また、アクエリアスではなく「水瓶の月」、カプリコーンではなく「山羊の月」と省略した呼び方をする者もおおそうだな。



うむ！とりあえずはこんなところだの！

まだまだこの世界特有のワードは沢山あるが、それもお話の流れに沿っていずれ余が説明してやるぞ！ ありがたく思うが良い！

では皆の衆、さらばだー！

ふいー、疲れたのう??あ、ウルズ姉。余、喉がカラカラだぞ。お紅茶淹れてたも。
??ミルクとお砂糖切らしてる?????だど
????!?

・

020 入団の時、来たれり

「ふう??」

「浮かない顔ですネノルン様」

「あれだけ今後の不穩を匂わされたら、浮かない顔もしますってばあ」

「でも、例の熱海憧殿が憑依したヒイロというキャラクターも登場されたじゃないですか。少しはお喜びになるかと思っただけですけど」

「登場って、ナンパするルズレーさんの隣でコクコク頷いてただけじゃないですかあ。もう一人の取り巻きさんの方がよっぽど台詞ありましたよ」

「モブキャラもモブキャラですからね、ヒイロは。憧殿の苦境、察するに余りあります」
「あう」

「そんな顔をされても。ささ、気を取り直して早速第1章をプレイと行きましょう、ノルン様。攻略情報によりますと、この第1章の終盤にてヒイロの見せ場があるみたいですよ」

「ほ、本当ですか！ よ、よーし、頑張って進めますよー!」

「その意気ですノルン様。我々の目にしかと焼き付けましょう。原作のモブキャラヒイ

口の活躍を！」

「はいっ！」

「最初にして最後の見せ場ですけど」

「えっ」



光陰矢の如し。春休みにも似た準備期間は瞬く間に過ぎ、桜が散り終わったタウラス（4月）の7の日。

着替えと生活用品を最低限詰め込んだバックを肩に、俺は騎士団本部ヴァルハラへと赴いていた。

用向きは勿論、エインヘル騎士団の入団式である。

「——さて、騎士としての心得は以上で充分でしょう。次に、新人隊士の貴方達について。まずはこれより一ヶ月間、隊士訓練を行っていただきます。内容は基礎的な体力作

りに始まり、軍事行動の演習や実践式訓練が主となります。養成学園生上がりの隊士は、学園のカリキュラムがより濃く、厳しいものになったとイメージすれば良いでしょう」

マイクも通してないのに一字一句がはつきり届く声は、壇上に立つ女性のものでした。

片眼鏡モノクルから覗く紫の目が、説明を重ねながらも壇下の俺達を射抜いている。

滅私色のシヨートヘアに淡々とした口調も相まると、委員長的な雰囲気を感じざるを得ない。

「そして一ヶ月の訓練期間後には、選抜試験を行います。この試験の成果によって、貴方達が今後編成される所属隊が決定されると思つて良いでしょう。その中にはこの国の主力団体であるブリュンヒルデ隊も含まれます。各員、心に留めておくように」

ようは一ヶ月後に篩ふるいにかけるから頑張れよ、つて事か。確かエインヘル騎士団の属隊は、本隊を含めて三つくらいあつたはず。

となれば俺も花形である本隊入りを目指したいところだ。

騎士ヒイロ物語の為に、気合い入れてかねーと。

「くうつ、やっぱリーヴァ団長補佐官筆頭殿はたまらないなあ」

「全くだ。ああ、あの美貌に冷たい眼差しに睨まれたらと思うと僕は??」

「うん。俺は罵倒されたい」

「踏まれたい」

「蹴り回されたい」

「はあ、やだやだ。男つてのはこれだから?」

「ねー、見る目ない。何が筆頭補佐官よ。二十にもなつてないのにあの吊り目具合、絶対ヒステリーとか酷いよ。私には分かる」

いや学生気分かあんたら。中学の朝礼を想起させるような口々の囁きにずっこけそうになる。

え、騎士つてこんな思春期男子と給湯室のOLみたいな奴らの集まりなの。俺の氣の入れよう返して。

なんて風に、周囲とのまさかの温度差に先行きの不安を感じた俺だったのだが。

数秒後、心配は無事に杞憂となった。

「では、最後に??我らがエインヘル騎士団の長、レオンハルト・ジーク閣下よりお言葉があります。

——総員つ、拝聴!」

現れた騎士を前に、どこか弛んだ空気が消えた。

青銀の鎧、腰鞘の剣、胸元に付けたの四ツ羽の銀勲章に、金色獅子の刺繍が施された

赤マント。

その風貌は古の英雄譚いにしえから飛び出したかのような、紛うことなき『騎士』だった。

「晴れて騎士となった諸君、ご機嫌よう。エインヘル騎士団団長、並びにブリュンヒルデ隊主導騎士のレオンハルト・ジークだ。まずはこの度、我らが同門となった君達に歓迎の意を贈りたい。

ようこそ、エインヘル騎士団へ！」

誰もが口を閉ざして、背筋を伸ばして騎士を仰ぐ。さつきまで陰湿な囁きを零していた女達なんて、うっとり頬を染めてる。

恍惚としているのは彼女達だけじゃなかった。鼻の下を伸ばしていた野郎共でさえ、その眼差しに大なり小なりの憧れを灯していた。

あれが、団長レオンハルトか。

んー。なるほど。オーラばねえっすね。

しかも金髪碧眼の超絶イケメン。

見た目も立派、声も良ければ背も高くて手足も長い。天が二物どころか十は与えてそ
うな大盤振る舞いっぶり。

「と、仰々しく言っではみたものの、大体の説明はリーヴァくんが話してくれたからね。

説明下手な私としては、優秀な部下を持って良かったと胸を撫で下ろすべきだが??正直、話題に困ってね。贅沢な悩みというべきかな」

「か、閣下??」

それでユーモアもあると。完璧か。

拜啓女神様。ちよつとキャラデザインの格差あり過ぎやしませんか?」

い、いや、ああいう出来過ぎキャラを踏み台にしてこそ主人公つしよ。大丈夫、俺は折れない。

顔面偏差値なんてのは、物語優遇率の決定的な差ではないと教えてやるんだ。

「だからここは、手短に行こうと思う」

レオンハルトの持つ風格について自分を励ましていけば、憧憬羨望一色の空気が、シンと静まり。

「諸君。この世界は、平和ではない」

皮切りの言葉に、会場に風が吹く。

強く熱い風が、頬を擦り抜け肩を叩いた。

「領土拡大を望み、侵略の手を伸ばさんとする他国との小競り合い。災禍が生んだ貧困が故に身を落とした賊。古来より蔓延^{はびこ}り人類を脅かす魔獣。人々の明日を奪う脅威は、いつだって隣り合わせだ。咲かせたかった花こそ、灰を被って枯れていく事も多い」

不思議な声色だった。

この大陸にありふれた危惧。道端に転がる驚異。

淡々と語る言葉に温度はないのに、返ってそれが誇張のない真実なのだとしめた。

「だが、我らが居る」

けれどその危機を祓うことこそが使命だと、あの壇上の騎士は言い放った。

「我らこそ、大陸一の国家が誇るエインヘル騎士団。」

ユグドラシルの袂にて国を興した初代騎士王シグムントの意志を継ぐ、剣であり盾。我らが国家、我らが王家、我らが民を護る為の力である。

さあ、今ここに集い、新たに胸に四ツ羽の勲章を飾る騎士達よ！

揺らがぬ志を誓い、正道を為し、誇りを胸に灯す覚悟があるのなら！

総員——— 剣を掲げよ!!」

瞬間、鳴り響くのは数多の剣の声だった。

腰鞘から。背中から。

それぞれが大小短長違った剣を抜き取り、天を指す。

会場内全員の斉抜刀。騎士達の呼吸は一糸の乱れもない。

「——聖欧国に、光あれ！」

「「「聖欧国に、光あれ!!」」」

少し前までの有象無象を騎士に仕立てて、壇上の青年は言葉だけで率いていた。人はきつと、そういう姿を英雄と呼ぶんだろう。

（あれが、騎士団長。この国一番の騎士か）

良いなあ。喝采の中で独り呟いた。

そう、あれだよあれ。

俺はあなりたくて此処に居るんだ。

いずれ至るべき理想の姿を見出しながら、頬が吊り上がるのを抑えられない。抑える気もなかった。

「面白くなつてきやがった」

また一つ越えるべき壁を見つけられたんだ。

こんなに嬉しいことはない。主人公冥利に尽きるってやつだろう。

熱狂の中で掲げ続ける剣は、真っ直ぐに上を指す。

俺の目指す高みへと、曲がることなく重なるように。



なんて風に王道主人公然としながら心をメラメラ燃やしてた時期が、俺にもありました。

渡る世間は山あり谷ありで、べた風無風とはいかないらしい。それはそれで刺激的で結構なんだけど、今回ばかりは歓迎出来なかった。

「ヒイロ・メリファー??まさか君と同室になるなんて。うう、最悪だ。だから僕は騎士になんてなりたくなかったのに??!」

同月同日夜半ば。

新人隊士用に設けられた区画内寮のとある一室で、この世の終わりとばかりに嘆く少年に睨まれていた。

割とガチな涙目で。

021 クオリオ・ベイティガン

騎士団の朝は早い。

陽が昇ると同時に通常の騎士達は起床し、警邏や任務、民間窓口の準備など各々様々に忙しい。

なら俺みたいな新米騎士は暇なのかというと、そんな訳ない。ほとんど変わらぬ時刻に起きては朝飯を詰め込み、朝から晩まで調練漬けである。

丸太を担いで走り、汗まみれで模擬矛を振るい、泥だらけで演習場を駆け回る。

そのハードさには、スポ根モノの主人公だつて裸足で逃げだしかねないくらいだろう。現に入団式から一週間で、何人かの姿を見かけなくなっているのだから。

「ヒイロ・メリファア、完走確認。着順は、また上位の様だな」

「つたりめえだ??ハアツ、ハアツ??」

「貴様、気概が良いが相変わらず教導官への口の利き方がなつとらんな。もう一周走りたいか?」

「の、望むところだ」

「??ふん、良いだろう。では本部外周もう一走だ。行けっ!」

とはいえ、単純な基礎練は俺のもっとも得意とするところだ。相変わらず思い通りにならない口が災いしてもう一周を急かされても、大した苦にはならない。

(ん、あれは??)

身体で風を切りながら走り慣れたルートを駆けていく最中。

苦にはならないけど、なんとも言えない苦々しさを味合わせてくれる背中が見えた。

「??へばってんのか?」

「ぜえっ、はあっ、う、うるさい。僕を君みたいな体力馬鹿と一緒にするなっ」

「今にも朝飯戻しそうなザマで噛み付ける根性だけは買ってやるよ、クオリオ」

「よ、よけいな、お世話だっ!」

負い目から少しフォローを入れてみても、相手からすれば皮肉にしか聞こえないこの口調が憎い。

そんな俺に負けじと、眼鏡の奥の碧眼が忌々しげに睨んで来る。

緑色の長髪をうなじで縛ってる、この優男の風貌の痩せ男はクオリオ・ベイティガン。

俺の現在のルームメイトであり、一週間前からずっと気まずい関係が続いていた。



長い人生、身に覚えのない恨みを買うことだってあるもんだろう。人間だもの。

と、達観なんだか現実逃避なんだか良く分からない誤魔化しが出来ればどれほど良かったか。

「なんてことだ。なんてことだよ。騎士になるだけでも嫌だったのに、よりにもよってこんな奴と同室なんて。うう、あんまりだ。ユグリスト家庭に生まれながらも信仰心のない僕に、戦いの神が与えた試練だつていうのか？　なんてことだ、なんてことだよ?!」
(あの、出会って三秒でこれなんです。どないせいというんですか神様)

お互いが神様に嘆く地獄絵図が完成しちゃったよ。

流石に途方に暮れた。家も名前も知らぬ存せぬな猫相手にした警察犬だって、俺より困らなかつた自信あるよこれ。

とはいえ事情も分からないままじゃ話にならない。

絵にかいたようなインテリ風貌のルームメイトを、とりあえず落ち着かせようと声をかけた訳だけでも。

「おい」

「な、なんだよ。言っておくけどな、僕に何かしようたって、今は互いに騎士で、ここは

騎士寮だぞつ。学園の頃のような横暴が通用すると思うなよ！」

(アカン。これはアカンやつやん。過去のヒイロもルズレーも、どんだけ幅利かせてたつていうんだよ)

俺の身には覚えがなくても、心当たりありました。

絶対これ俺が関わる前の因縁じゃん。同じクラスの連中にさえ煙たがられていた学園生の奴じゃん。

「??一つ聞かせろ」(あの、一つお聞かせください)

「な、なんだよ」

「テメエ、誰だ? どつかで会ったか?」(ええと、まずお名前と、俺とどこで会つてど
ういう経緯で因縁が生まれたのかをですな)

「??お、お前。まさか、忘れたつていうのか!」

うおおい!この口語自動変換機能おお!

なるべく刺激しないように原因を探ろうと思つたのに、台無しだよ。カツと顔を赤らめてルームメイトが怒る。残念ながら当然だった。

「くつ、もういい。良いか、僕はお前に関わらない。関わろうともしない。だからお前も僕に関わるな!」

そしてこの拒絶っぷり。考えうる限り最悪な初対面だった。初対面なのは俺だけなんだけどさあ。

結局それ以降は言葉をかけても一切合切無視であり、クオリオという彼の名前を知ったのも、それから二日後の話なのである。



関係は最悪でも、一週間も一緒に居れば知れることもある。

クオリオという青年は、外見通りにインテリであり、一言でいえば本の虫だった。しかも度が過ぎたレベルの。

部屋に居るときも外出中も、訓練後の小休止でさえも、片時も本を手放さない。食事も片手が塞がらないサンドイッチばかりを好む筋金入り。

そのせいか、前後不注意でよくすつ転ぶし、壁にもぶつかる。ドジっ子もかくやというレベルで。

「ぐわっ」

「??本読みながら歩きやそうなるわな」

「う、うるさい。馬鹿にするなっ」

「ケツ」

だからこんな風に、今日も今日とて綺麗な転びっぷりを披露してくれた訳だ。

「第一、なんで僕に付いてくる。放っておけと言っただろう」

「付いてつてねえよ。食堂の道は一つしかねえだろうが」

「だったら、昼を抜けば良いだろ」

「昼からも訓練あんのに抜いてられっか」

「体力馬鹿の癖に」

「てめえこそ、いっつも吐いてる口で良く言いやがる」

起き上がりながらも止まらない悪態にも、そろそろ慣れそうだった。

一週間経てもクオリオとの関係は修復どころか、元となった原因すら分からず終いである。

正直辛かった。訓練でくたくたになった後も、重苦しい空気の中で過ごしてれば疲れだつて取れない。

身に覚えのない事で、というのもあるけど。

(はあ?!)

取り付く島もない現状。

どうしたもんかなと肩を落としながら、クオリオが転んだ拍子に落とした本を、拾い

上げようとした時だった。

「やめろ、本に触るなっ！」

「っ」

伸ばした手が、強く払われた。

勢いに息を呑む。払われた指先が、ジンと傷んだ。

「あ?！」

驚きが強かった。というのも、こんなにもはつきりと拒絶された経験なんて、俺にはほとんど無かったからだ。

つい茫然と自分の手を見つめれば、どこか後悔を含んだようなクオリオの呻きが耳に届いて。

「っ」

そんなクオリオと目が合った瞬間。

あいつは乱暴に本を拾い上げると、そのまま顔を隠すように駆け出して行った。

不意に浮かんだ些細な後悔すら振り払うような背中では、あつという間に遠くなつた。

(?!思った以上に深刻だよな)

払われた方の手を握り締めて、深く深く溜め息を吐く。ほんと、どうしたもんかね。

身に覚えがない事だからって、割り切れるはずもない。本気の拒絶だった。きつと余

程の事があつたんだろう。

(せめて原因が分かれば。けど、本人に聞いたって教えちゃくれないだろうし??)

「チツ、デカイ図体で立ち止まりやがって。どけよ、クソ野郎が」

「?!あ?」

真剣に悩む俺の背中に、容赦なくかけられる罵倒。

随分なご挨拶だけでも、それ以上に聞き覚えのある声色だった。

「??シヨーク」

ルズレーの取り巻きにして俺の腐れ縁たる小男。シヨークが真後ろに立っていた。にやにやと嫌らしい笑みを浮かべながら。

022 過去へのケジメ

「ケケ。浮かねえ顔だなヒイロ。飯時前にてめーのそんな面見れてラツキーだぜ」
（俺の不幸で飯が美味いつてか。変わんないなこいつも、悪い意味で）

案の定だったよ。

下卑たことを臆面もなくぶつける辺り、騎士になろうがこいつも変わらないやつである。

気まずいといえばルズレーとの関係も、未だに亀裂が生じているままだった。

敵愾心向けられる意味合いでいえば、あっちの方がよっぽど厄介なのかも知れない。たまたま顔を合わせれば、こんな風に嫌味か罵倒か無視。ろくなもんじやない。

けれど新米隊士同士とはいえ、ルズレーと顔を合わせる機会は少なかつた。噂によれば、貴族身分を盾に訓練を欠席したりして居るらしい。

（??待てよ。もしかしたら）

「シヨーク。クオリオって奴の事、覚えてるか？」

「あん？ クオリオ？ クオリオ??おお！ 随分前にヤキ入れてやったあのヒョロガリ

眼鏡か。ケケケ、なんだよ、懐かしい話しやがるじゃねーか」

思つた通り、シヨークはクオリオの事を覚えていたようだ。けれども下卑た笑みに含んだ嘲りが、話の行く末の不穩さを物語っていた。

「てめえ、ヤキ入れつつつたか?」

「おいおい、なんでおめーが覚えてねーのよ。ルズレーにぶつかつて来たあいつの本を水路に投げ捨ててやったのは??ヒイロ。お前だつたらうがよ?」

「???本、だと?」

「あん時の眼鏡の顔は傑作だつたな。今にもベそかきそうでお。ま、本読みながら歩いてたあの眼鏡の自業自得って奴だな、ケツケケケケ!」

「????」

ああ、くそ。道理で。

納得以上に有害な苦味が、舌をジンと痺れさせた。

あいつに払われた時以上にずっと嫌な感触だった。

どう鼻根目に見ても最悪の気分だ。

「あ、おい、ヒイロ!?!チツ、なんなんだあの野郎は」

背後から聞こえる悪態に振り向く気力も沸かない。

喉が渴いてもないのにきゅつと細くなる。
踵かかとの感触がなんだか遠かった。

クオリオが本をどれほど大切にしているかなんて、一週間も同じ部屋に居れば嫌でも分かる。

それを目の前で否定したのなら、あれほどの拒絶を示すのも当然と言えた。

(ヒイロ。お前、それでも主人公かよ)

クオリオをそうまでさせたのは、過去のヒイロだとしても。どちらにせよ「俺」である事には変わらない。

なら「俺」がなんとかしなくちゃいけない。

主人公がヒーローが、というこだわりを置いても。

このままじゃ絶対駄目だ。心底そう思った。



窓の外では退屈そうな月が傾いていた。

「??君は、一体なにをしているんだ」

「??見てのとおりだ」

クオリオの動揺を表すように、天井吊りのランプがカンカラと揺れる。

調練を終えて夕食も終えて、昼間の一件もあつていつも以上に静まった寮の部屋。

俺は土下座をしていた。

「そうじゃない。なんでそんな姿勢をしてるんだよ」

「理由なんて一つしかねえ。俺が、てめえの本を捨てたからだ」

「!!」

「??詫びる」

はつきり自覚してる。俺は頭が悪い。

あれからずっと考えてみたけれど、関係修復の為の冴えたやり方なんて思いつけやしなかった。

だからシンプルに行こうと決めて、敢行した。

誠心誠意、頭を下げる。フィルターを通して歪んでしまう言葉だけじゃなく、身体ごと。

ぴったりと貼り付けた額から、まだ春先の床の冷たさが伝わっていた。

「君は、卑怯だ」

頭上から降り注いだクオリオの声には、戸惑いと軽蔑が折り重なっていた。

「ルズレーに拒まれて、居場所が無くなった今になって、僕に取り入ろうとする。どうせそんな所なんだろう？ その手には乗らないぞ」

「違う、そんなんじやねえ。詫びなくちやなんねえと思つたから、頭を下げてる。立場がどうか、んなみみつちい御託は関係ねえ。それに、詫びないままの自分がどうしても許しちやおけねえんだ、俺は」

「なんだよそれ。ずるいぞ！ こんな、暴力と変わらないじやないか！」

「暴力か。そうかも知れねえな。だが、許さなくたって良い。これはケジメだ」

「??何が、ケジメだよ。卑怯者め」

卑怯。そうかも知れない。

結局のところ直接害した訳でもない中身の俺じゃ、上つ面の謝罪と変わらないからだ。

俺の中の罪悪感を消すための、一方的な押し付けとも言えるだろう。

それでも、止める気はなかった。

「?!」

どれくらいの間があつただろう。

丸めた手を握り締めていけば、耳の傍らに歯軋りが落ちてきた。苦い唾を飲み込むような、深い溜め息ごと落ちてきた。

「プレアデスの星冠獣目録」。君が棄てた本の名前だ」

「??本?」

「ああ。そんなに許して欲しかったら、弁償してみろよ。もつとも、あの本は異国で出版された写本だ。今この国に流通してるかも怪しい貴重なものだ。見つかるだけでも骨が折れるだろうさ」

「??」

プレアデスの星冠獣目録。

俺の謝罪を上つ面だけにさせない為の、クオリオからの譲歩なんだろう。それさえあれば、俺はケジメを付けられるんだ。

半ばやくそ気味に言い捨ててるクオリオをよそに、握り締めた拳がかすかに震えた。「分かったろ。だからもう、何度も言ってるように、放っておいてくれよ。僕はもう、君に関わるつもりはないんだ」

「おう、分かった」

そっぽを向くようにクオリオが寝台に寝転ぶ。

乱暴に毛布を包んだ背中には、拒絶というよりは拗ねた子供っぽさがあった。

(?!よし。寝るか。明日に備えて)

やる事は決まった。決まったなら四の五の言わずに突っ走ろう。主人公ってそういうもんだろ。

ランプを消して、寝床に潜り込む。

途端に闇夜に染まる室内で、ぼんやり明かる月と星が、ささやかな希望とばかりに光っていた。

023 クオリオの葛藤

喉にせりあがる不快感を堪えれば、代わりとばかりにツンと鼻を刺激する酸っぱさが襲い来る。

何かを我慢しても、また別の何かが苛む悪循環。

僕の人生こんなのばかりだなと、汚れた口元を拭いながらクオリオは自嘲を浮かべた。

「貴様、また最後尾になっておいて、なにをヘラヘラとしている。次の訓練も直ぐに始まる。さつさと演習場に来い」

「?は?」

鉛のように重い身体を引きずり演習場に向かいながら、クオリオは再び思う。

(僕の人生つてやつは、とことん僕に厳しいよな)

クオリオは学びたがりであった。

雨はどうして降るのか。風はどうして吹くのか。

あの国はどうして興った。どうして滅んだ。

道端の小石の歴史から底のない沼のような神秘にまで好奇心を光らせるほどに、彼は

学者気質であつた。

だからこそ知識の凝縮である本を愛し、丸一日を読書に費やす事も珍しくない。苦にもならない。

そんな彼が将来の夢として学者や研究者の道を掲げるのも道理だつたし、自然な事だろう。

しかしクオリオが背負うベイティガンの姓名は、そんな彼の性根と噛み合わないものであつた。

ベイティガン家は『果敢に闘う者』を崇拜するユグ教を信仰するユグレスト家系であり、代々騎士を排出してきた名家だ

歴史があり、信仰があり、代々の誇りがあるベイティガン家は、クオリオが学者を志すことを良しとしなかつたのである。

あんまりだと、何度思つたか。

無理矢理に放り込まれた騎士団で、来る日も来る日もしごかれる。そんな日々にも意義も見い出せやしなかつた。

「ねえ、あんた」

「君は、エシユラリーゼさんじゃないか。僕なんかになんの用だい」
だからだろう。

不意に新米隊士の中で、容姿と実力とで注目を集めているらしき噂の少女に声をかけられても、クオリオの心はさして浮き立たなかった。

卑屈な言い回しに彼女の美貌が苛立ちに曇っても、大して気にはしない。

けれどそれ以上に怪訝な事があった。

目立ちはしても一匹狼気質のシユラが声をかけてくる状況には、まるで検討がつかなかったのだ。

「あんた、あいつのルームメイトだって聞いたんだけど」

「ルームメイトって。ヒイロ・メリファアのことか？」

「そ。今日の調練で一度も姿見てないけど。あんたなら、何か知ってるんじゃない？」
なんでそんなことを知りたがる。

浮かんだのは当然の疑問。けれど勝ったのは疑問に対する探求欲なんかじゃなく、心をささくくれる苛立ちだけだった。

「いいや。僕は知らないよ。どうせサボリか何かじゃないのか？」

「あいつが？ まさか、あり得ないわよ」

「つ、なんで、そう言い切れる。学園卒じやない君は知らないかも知れないが、あいつは、あの男は、あの性悪貴族の取り巻きだったんだぞ？ いまさら不真面目さが顔を出し

たつて、別に不思議じゃあないだろ」

追求を嫌ったが故の、陰口のような決め付けに、されど少女は欠片も同意を見せてはくれなかった。

それどころか怪訝そうに睨めつける紅い瞳が、クオリオの焦燥と苛立ちを煽った。

「そうだ、そうだよ。あいつの本性はそのはずなんだ。大方、苦しい調練に嫌気がさして逃げ出したんだ。きつとそうに決まって——」

「あんた、それ本気で言ってるの?」

「??え?」

「一週間そこらでもう脱落者が出てくるくらいの調練をこなして、それだけじゃ飽き足らずに毎朝毎晩に更に自主鍛錬してるような」体力馬鹿が??今更、調練から逃げ出すって? もう一度言うけど、あり得ないわよ」

「っ。なんで君がそれを??」

「理由はどうでも良いでしょ。でも私でさえ知ってるようなこと、ルームメイトのあんたが知らない訳ないわよね?」

「!」

「あんた??やっぱ知り知ってるんでしょ。」あいつが居なくなつた理由」

突きつけられた結論に、暴かれた嘘の裏側に、クオリオはピタリと息を止めた。

ヒイロが此処に居ない理由。知らないはずがなかった。心当たりがない筈がなかった。

なにせ、心がざわめいて仕方なかったのだ。

今朝。起きたときにはもう既にもぬけの殻だったヒイロの寝台を見た時から。

そして、ヒイロが早朝に”鍛錬しているはず”の空き地に行つてから、ずっと。

今もずっと、心がうるさくてうるさくて、仕方ない。

「うるさいっ！」

「！」

「知らないつたら知らないんだよ！ あいつがどこに居て何をしようが、僕には関係ないんだ！」

膨らみ過ぎた風船が破裂したかのような痛癢は、まさしく彼の頭を苛さいませるものへの

怒りだった。

クオリオには理解できなかった。ここ数日は特に。今日に限っては酷く、理解出来ない事ばかりだ。

クオリオにとって、ヒイロ・メリファアの評価は地を這うほどに低かった。憎く、悪しく思うのも当然だ。自らの不注意が招いたとはいえ、貴重で大切な本を捨てた張本人なのだから。

関わりたくない男だった。学園時代に耳に挟んだ彼らの悪評も一層、ヒイロという人間への嫌悪感を高めていた。

だというのに。望まぬ再会を果たして以降の彼は、まるで別人のようだったのだ。

調練に対する真面目さも、ひたむきに強くなるうとする姿も。なにもかもが違う。生真面目なだけじゃない。

僕に関わるな、と拒絶した翌日にも関わらず、調練についていけずに倒れ伏す自分 hands を差し出して来たのだ。戸惑うな、という方が無理な話だった。

理解なんて出来ようはずもなかった。

「あいつの事なんて知らないし、分からない！ いや、そもそも僕が分かるうとする必要だつてないはずなんだっ！」

ヒイロがルズレーと揉めたらしいというのは風の噂で聞いていたし、事実ヒイロに対して憎しみすら帯びた眼差しで睨めつけるルズレーを、クオリオ自身の目で見たことがあった。

だから、単に孤立を恐れてるだけだとさえ思った。

かつておとし貶めた相手にさえ、擦り寄るような矮小な男なんだただけだと。引つかかる違和感を、冷めた満足で蓋したはずだったのに。

『??:悪かった』

違うだろうと思つた。ふざけるな。お前はそんな奴じゃない。もつと悪どく、他を省みないような奴だつたんじやないのか。

なんで今になって。止めてくれ。止めてくれよ。

父も母も、祖父も祖母も、家訓ばかりで僕を省みなかつたのに。

なんでよりにもよつて——お前なんか省みられなきやいられないんだ。

これ以上、僕を惨めにしないでくれ。

「関係ない。関係ないんだ。あいつがどうしようつたつて僕には。僕には??関係ないとだ」

だからこそ。希望敵しをちらつかせて、卑怯な男を遠ざけたのに。せめてもの静寂を願つたのに。

今朝からずっと、うるさくて仕方ない。

こびりついたような『罪悪感』にクオリオは今も、苛まれ続けていた。

「??あつそ。もう良いわ」

突き付けた拒絶に、少女の唇から静かな溜め息が零れる。

ならもうあんたと話すことはない、エシユラリーゼは背を向けた。

納得してないんだろう。クオリオに負けず劣らず苛立つてる心模様を隠そうとしな
い。けれど華奢ながらも伸びた背筋が、鬱屈に丸まるクオリオと対照的だった。

(なんで、僕が??こんな、惨めで苦い思いをしなくちゃならないんだよつ)

クオリオの人生は、確かにクオリオに厳しく出来ているのかも知れない。けれど。

読み歩きの不注意も、誠実に思えた謝罪を遠ざけたのも、元を辿れば自分自身が撒いてしまった種ではあつたから。

(全部、あいつのせいなんだ。くそつ。なんで、なんでこんな時に限つて——)

どうして何処にも居ないのか。

ひよつとしたら、あいつは。

先に続く言葉から逃げ出すように、クオリオは演習場へと足を進める。

本の虫が身体を動かしたいと思つた。騎士団に入つて以来はじめての事だろう。

その皮肉さを誤魔化すように、クオリオは道に転がる小石を蹴飛ばした。

024 曲がり角、春の少女

「チツ、また空振りか」

どうも、こちらら主人公のヒロからお届けします。

朝からアスガルド中の本屋を駆けずり回り、遂に大台の十件目となりますが。

えー。誠に遺憾ながら、なんの成果も得られませんでした。

(いやあくオリオが貴重なんだって言つてたけど??まさかここまで見つからないとはなあ)

なんだかんだですぐに見つかるっしょ、と括くつた高は五件目を過ぎた辺りから、遙か彼方へぶん投げてる。

うーむ。やっぱり見通しが甘過ぎたのかも知れない。

よっぽど貴重な本なんだろう。それなりに大きな書店でタイトルを伝えても、首を傾げられたくらいだ。

「はあ??」

溜め息一つ挟みながら、ずれた靴の踵を整える。

現代なら通販なり書店に電話して在庫確認、つてのが当たり前だけど、こつちの世界

にそんな便利な物がある訳がない。

有るか無いかも分からないんじゃない、結局は歩いて探すしかないんだけど。こうも手応えが無いと流石に不安もよぎった。

「??次は角を曲がって三路地先に進んだ先を左、だったか」

一向に見つからない焦りもあつたんだらう。

先程の本屋から聞いた他の書店へのルートを口ずさみながらの急ぎ足には、立ち止まる余裕を無くしていた。

「わたっ」

「??んア?」

角を曲がった瞬間、お腹に軽い衝撃が走った。

そう聞けば腹痛つぼいけども、別にそういう訳じゃなかった。本当に軽い衝撃。ポールでも当たったのかつてくらいに。

だから目の前で尻もちをついている小さな女の子を見るまで、ぶつかったんだと気付かなかった。

「いたたた。う、鼻ぶつけちゃった??」

どうやら鼻を打つたらしい。ぶかぶかのミリタリージャケットに付いてるフードに、頭半分隠された少女が俯きながら顔の真ん中を擦っている。

その度に、うなじから伝う三つ編みのロングツインテールが、ふわふわと揺れる。

フードに生えた耳のような装飾も相まって、子猫が顔を洗ってるようにしか見えなかった。

「おい」

「へ？」

声をかければ、女の子がぽかんとした顔で俺を見上げる。

不思議そうに丸まる大きな目。けどもその目の配色の方が俺には不思議で、面白かった。桜と青空。二つの色のグラデーション。

まるで春を閉じ込めたような、綺麗な瞳だった。

「あ、あの、お怪我はないですか？」

「そりゃこっちの台詞だろうがよ」（そっちこそ大丈夫？）

「ふあ。あ、はい。わたしは大丈夫です。む、無傷ですから」

「無傷?? あー。そうかよ。ほら、立て」（??大丈夫じゃないかもしれない）

「はい。ありがとうございます」

ついでに心配になった。二重の意味で。

無傷って。なんか天然っぽい発言だ。尻もちつきながらも俺を心配する辺りも、天然疑惑に拍車をかけた。

とはいえ、いつまでも地べたに座らせてる訳にもいかない。軽く頭を掻きながら手を差し出せば、遠慮がちなながらも小さな手に掴まれる。

起こした拍子に、少女の癖のない薄桃色の髪が、桜のようにふわりと舞った。

「そんじやな」（悪かったね。それじやあ）

「あ、はい」

ヒイロフィルター越しじゃあ謝罪もなかなか形に出来ない。

せめてと片手をあげれば、少女の頭も耳付きフードごとペコつと下がる。幸い怪我は無いっぽくて何よりだ。

本当ならもつとしつかり氣遣ったり詫びたりしなくちゃ主人公の名が廃りそうなんだが、時には優先しなくちゃならない事もある。

なんせこちとら、調練を無断で休んでまで本を探しに来てるんだ。一刻も早く目的果たして帰らなくちゃ、後がどんどん恐くなる一方だ。なるべく急がねば。

しかし氣を取り直した歩みも、僅か数歩でピタリと止まった。

「角を曲がって、三路目??いや二路目か? 進んだ先を右、いや左??」

やばい。緊急事態発生。

突発的なアクシデントのせい、頭の中のメモ帳は消しゴムに敗北を喫していた。

まっずいぞこれ。ちよつと入り組んだ道っぽいし、下手に迷ったら時間かかりそうだ

し。

「あの」

「あア?」

「えと、どうかなされたんですか? なんだか困ってる顔してますけど」

なんて風に頭を抱えていたが、そこは流石の主人公補正つてやつか。落とした大事なものを拾ってくれる少女は、いつだって主人公の傍に居てくれるもんである。

「別にどうもしねえ。ゲルマン堂つてどこへの道順をド忘れちまったつてだけだ」

「ゲルマン堂つて、近くの書店の?」

「おう。知ってるのか?」

「は、はい。本は好きですので。こっちですな」

わざわざ先導を切ってくれてるのは、案内してくれるってことなのか。小さな背丈ながらして、年は高く見積もつて十三から十四くらいかね。

なんて親切な子だよ。出来るもんなら元の身体に爪垢を煎じて飲ませてやりたいぐらいだ。ついでに性悪貴族にも。

「ゲルマン堂に行きたいってことは、お兄さんは本を探してるんですか?」

「あア。んだよ。顔に似合わねえつて?」(まあ確かに似合わないよなあ)

「う。そ、そんな事は?」

ないとは言い切れない、そんな表情。

嘘がつけない性格なんだろうな。親切にされてる手前、些細な事で目くじらを立てるつもりはなかった。

「チツ、別に俺が読む訳じゃねー。知り合いに本の虫みてーな奴が居んだよ。そいつの為だ」

「はあ。そうなんですか」

『『プレアデスの星冠獣目録』って本なんだがな。かれこれ十店以上巡ってんだが、とんと見つかりやがらねえ。骨が折れて仕方ねーよ』

「星冠獣目録、ですか」

先導してた少女の足が、何かに引つかかったようにピタツと止まった。

蒼と桜のオーロラ色が、どこか探るように俺をじつと覗き込む。

「んだよ」

「??あ、いえ。その??十店以上も探し回るなんて、お兄さんは優しい人なんですな」

「ああ? チツ、そんなじゃねよ」

何を言うかと思えば。まあ確かに本も優しさも似合わないチンピラフェイスですけども。

優しけりやそもそも本探しなんてしなくて済んだんだよなあ。

「プレアデスって、ヴェストリの学者さんの名ですよ。珍しい西国の学書でしたら、アスガルダムでは手に入らないかも知れません」

「なにつ、手に入らねえだど!？」

「えと、多分ですけど。西のヴェストリとは国境での小競り合いが続いてますから、思想書や学術書の類は特に関所で流通が止められると思います。アスガルダムの中央図書館なら、保管されてるかも知れませんが」

「??道理で見つからねえ訳だ。図書館は、駄目か。買い取りなんざ無理だろうし、あいつの手に渡らなきゃ意味がねえ。クソ、どうする??」

え、いや、マジっすか。ここにきてまさかの不安的中疑惑に、つい口の中が渋くなる。でも会ったばかりながら、親切な本好き少女の根拠は説得力があった。だとすると入手はかなり絶望的って事になる。

どうするよ俺。探し回る気合いは充分でも、在庫が無いなら徒労に終わる。

どうにもならない事もあるんだと現実から突き付けられた困難に、思わず空を仰いだ時だった。

「??あの、お兄さん」

「どうした?」

「えと。絶対とは言い切れないんですけど、探してる本を持ってそうな人に心当たりが??」

消しゴムを拾ってくれた少女は、ついでとばかりに救いの手まで差し伸べてくれた。

025 リヤム・ネシヤーナ

まさかまさかの手掛かりである。

これも主人公補正か。はたまたご都合主義なのか。ともかく、これまでの努力が報われるかも知れない可能性が浮上したんだ。

俺は思わず前のめりになった。

「あア!? 本当か!」

「ひゃいつ!」

「つと、悪い」

「はふつ。い、いえ、気にしないでください」

やっべ。勢い余ってつい、肩をがっちり掴んでしまった。出来た構図が身を竦ませて顔を赤くする少女と、迫るチンピラ。現代なら事案待ったなし。

慌てて謝れば、少しもじもじしながらも許してくれた。

なんだ。やはり女神か。またノルン様に会えたら、この子を側近に推薦しよう。

「えと、それでですね。私の知り合いに、マードックという薬師のお爺さんがいるんです。その人は昔から珍しい本を集めるのが趣味らしいので」

「そんな中にプレアデスの星冠獣目録も、って事か」

「はい。あ、で、でも、マードックさんは少し気難しい方ですので、譲って貰えるとは??
それに、持ってないって可能性もゼロじゃないです」

「構わねえ。少しでも芽があんなら充分だ」

「こちとら国中回ってでも探すつもりだったんだ。」

「分の悪い賭けになったって構わない。」

「それに、駄目なら駄目で別の方法考えりや良いだけの話だろ」

「??諦めたりはしないんですね」

「ったりめーだ。オマエが”無傷”なら、俺のメンタルは”無敵”なんでな。ここまで
来たら、天地がひっくり返ったって諦めねえよ」

「??無敵、ですか」

「おうよ」

「??そうですね。うん。それならきつと、大丈夫ですね」

「諦めるわけにもいかない。クオリオにケジメを示す為にも。」

「そして、ここまで親身になってくれた子の親切を。こんなしようもない強がりに、ま
た微笑んでくれる少女の思いやりを、無駄にしたくはなかった。」



「ごめんなさい。本当はマードックさんのところまで案内も出来れば良かったんですけど、今日は待ち合わせをして」

不思議な縁が出来た、と少女は思う。

引つ込み思案な性格だという自覚だつてあつた。まして初対面の相手にあれこれと世話を焼けるような性分でもない。

こんな姿、自分を良く知る者が見れば驚くかも知れない。少なくともマードックは驚くだろう。誰かと関わりを持つのが苦手なはずの少女が、見知らぬ男に”紹介状”を渡してまで協力するのだから。

良ければ力になってあげて欲しい。

簡単な一文だけ添えた紹介状だが、手渡した相手は落とすまいと既に懐に仕舞つてい

る。「こんだけしてもらえりゃ充分だ」

「そうですか」

充分。確かにそうだろう。

それでも充足感より、大丈夫かな??とさらなる心配を寄せている自分に、少女自身が

一番驚いていた。

「さつきも話した通り、マードックさんは気難しい人ですけれど??頑張ってくださいね」
「言われるまでもねー」

どうしてと尋ねられない事に、少女はほっとしていた。なにせ彼女自身、親身になつて理由が分かかっていない。

尋ねられてもきつと困つた顔で誤魔化すだけだっただろう。

(不思議な人ですね)

ただ強いて言うなら、彼に手を差し伸べられたときに、ふと“匂い”がしたのだ。

じんわりと淡い汗の匂い。何かの為に必死になつてるような、頑張つてる人の香り。

そして別れ際に、心底困り果てたように立ち止まつた背中を見たときには、少女は無意識に声をかけていたのだ。

「??本。見つかると良いですね」

「おう」

どこか不慣れなお辞儀を一つ置いて、男は走り去つていった。今度は急に立ち止まることはないだろう。

遠ざかる背中に瞳を細めて、少女はフードを目深に被る。眩しいものを見るかのよう

な仕草だ。

詳しい事情はついぞ分からなかったが——彼は少女の直感通り、誰かの為に必死になつてゐる人だった。

「?!」

年上な感じが、あまりしなかつた。

ぶつきらぼうな口調の癖に、頭を抱えたり地団駄を踏んだりと、気持ち剥き出しな所が妙に幼かつたけれど。

不思議な人。でも悪い人じゃないんだろう。

誤解を招きやすそうな強面に隠された優しい残り香に、少女がすと鼻を鳴らした、そんな時だった。

『リヤムー！ おーい！』

明るい声が響き渡つた。

『ちよつとー！ リヤムー！ リヤムー!? こちら天下無敵のシヤム姉さんだよ！ 応答せよ、応答せよー！』

声色だけでも天真爛漫。

風を伝えれば誰もが足を止めるほどの、通りの良い声。

けれど周囲は誰一人気付いた様子もなく、午後の雑踏に一足添えている。

当然だった。なにせその声は、少女の”頭の中”で響いているのだから。

『??聞こえてますよ、姉さん』

『あつ、やつと返事来たー！ もうリヤムったら。交信切ったまま待ち合わせに来ないからさー、めつちや心配したんだかね！』

『ごめんなさい、姉さん。少し??うん。少し、面白い人が居まして』

『面白い人とな? ほっほーう。リヤムがそんな言い方するなんて珍しいね。ちよつとお姉ちゃんにも紹介してみそらしー?』

『??無理ですよ。もう別れましたけど、名前聞くの忘れちゃいましたし』

『えー!?!』

聞きそびれたのか。聞かなかったのか。

ぱちくりとまばたくオーロラの瞳が、不透明な感情を一層煌めかせた。

『けど、もしかしたら??』

『んにや? もしかしたら?』

『??いえ。なんでもないです』

もしかしたら、また会えるかも知れないから。

音にはせずに独りで占めたまま、春染めの少女リヤム・ネシャーナは、構われたがりの姉が待つ場所へ向かう。

上機嫌な彼女の耳たぶをくすぐったのは、もう暖かな春の風。
昼にも隠れない三日月のピアスが、気持ち良さそうに小さく揺れた。

026 白む夜空と馬鹿二人

クオリオにとって読書の時間とは、至福であり至高であり救いであった。

ページを捲るたびに鼻孔を擦る紙とインクの香り。文字と知慧で練られた理論の世界。新しい学びを得られる度に生の瞬間を実感出来た。

夢中になり過ぎて、ちらりと流し見た窓外の朝焼けが、気付けば星空に変わっていた事なんて数え切れない。

だというのに。

「???
???」

異変である。

普段であれば身動き一つしない。しかし今は片足が落ち着かず、本を手に持つ指はトントンと背表紙を絶え間なくノックする。

常の読書を静寂とすれば、今はさながら暴風雨だ。

現にクオリオの心には嵐が吹き荒れていた。

「?!僕としたことが、どうしたって言うんだ」

異変を越えて事変であつた。

だが口振りとは違つて、聡明なクオリオには原因が分かつていた。

彼の心を波立たせ荒立てているもの。

その正体ともいえる無人の寝台を一瞥して、青年は鬱屈した面持ちで膝を打った。

「??：そうだ、あいつが悪い。あいつが調練までサボつて何処かへ行くから。おかげで僕が問い詰められる羽目になるし」

既に沈みかけている今日一日は、振り返るまでもなく最悪だつた。最悪にしたのは、今ここに居ない人物である。

「あいつが??悪いんだ」

だから一言、文句を言つてやらねば気が済まなかつたのに。

「誰が悪いつて?」

「なつ! 君! 今まで何処をほつつき歩いて——」

前触れもなく歸つて来た全ての元凶の、ここ一週間でうんざりするほど聞いた声に振り向いた、のだが。

粗雑な紙袋を抱えたまま、何故か泥だらけの格好で突つ立つヒイロの姿に、クオリオは一言の文句を作りきれなかつた。

「??んだテメエ。急に黙り込みやがつて」

「きゅ、急に帰って来るような奴が言うなよ。いやいやそうじゃなくてさ??なんで君はそんなに、泥だらけなんだ」

「ああ、これか。チツ、思い出すだけで忌々しいぜ、マードックの爺。本一つに掃除やら畑弄りやら倉の整理やら、散々こき使いやがって??お蔭で門限ギリギリじゃねえか畜生が」

「そ、掃除? 畑弄り? き、君は??騎士団の調練をサボってまで、いったい何を」

もうクオリオには訳が分からなかった。

彼とてヒイロが騎士としての調練を真面目に取り組んでいる事は知っている。ひよつとしたら新人隊士の中では一番情熱があるのでは、と思うほどに。一部ではそんなヒイロに期待を抱く教導官だっている。

だからこそ以前、自分に対して非道を行った人物のそういった一面に、クオリオは余計に心を乱されているのである。

「ん」

そんな男が調練をサボってまで、泥だらけになるほどの雑用をしていた理由などわかる訳もない。

至極当然に説明を求めるクオリオに、けれどヒイロは言葉で返すのではなく。

抱えていた、くしゃくしゃの紙袋を突きつけるだけだった。

「な、なんだよこれ。紙袋？」

「??約束だからな」

「約束って??」

渡された瞬間の、ずっしりとした重み。

見れば分かるそばかりに多くを語らず、そっぽを向いたヒイロ。

なぜだかきゆうつと細まる喉に嫌なものを感じつつ、紙袋の中身を確かめようとした時だった。

「おい、メリファー!! やつと帰ってきたな、こいつめ!」

「ああ?」

「ああ、じゃない! 全くおまえってやつは、急に帰って来るなり人の話も聞かないでさあ! こっちは教導官殿から、お前が戻り次第連れて来いと言われてるんだぞ!」

「チツ、さつき聞いたっつーの」

ドタバタと足音を響かせながらやって来た一人の若い騎士が、部屋に入るなりヒイロに食ってかかる。

若い騎士は、生真面目な性格から寮に住まう新米達のまとめ役に抜擢された男だった。

サボったヒイロを連れて来いと命じられたのだろう。

だがヒイロは、引き止める言葉に耳も貸さずに此処に戻ってきたのだ。一直線に、何よりも優先すべき物の為に。

「だったら早く来い。いっとくが、教導官殿は相当お怒りだ。厳しい折檻になることは覚悟しとけよ」

「ハッ、上等だ。最初はなつから覚悟は出来てんだよ」

「サボつといて格好付けるな。ほら行くぞ」

「わーつたよ。んじゃな、クオリオ」

「あ、おいつ！」

そして、さしたる抵抗も弁明もせず、ヒイロは大人しく彼に連れられて行った。

慌ただしい事この上ない。急に来ては急に去る。まるで嵐か何かのようだ。

けれど部屋に取り残されたクオリオの内心では、嵐は過ぎ去つてなどいかなかった。

「??:プレアデスの、星冠獣目録??:」

紙袋の中身を取り出して、少し年季の入った本に刺繍された題名を見て。

波立たない心なんて、ありはしなかったのだから。

「あいつ、本当に」

国中の本屋を探し回ったって、手に入れるのは無理だと思つた。無理だと分かつた上で言つた。

許してやるつもりなんてない。関わりを拒絶する為のただの建前だったのに。
「馬鹿じゃないのか」

つい先程のヒイロの姿を思い出す。

泥だらけの草臥くたびれた格好。

調練をサボつておいて、調練をこなした日よりもよっぽど疲れた顔。この本一つ手に入れる為に、相当な苦勞をしたに違いない。

「なんで僕みたいな弱虫の為に、筋を通そうとする必要がある」

もう観念するしかなかった。

だって、これではもう。これ以上はもう。自分自身の方が嫌いになる。

ただでさえ嫌いな自分をもっと嫌いになってしまう。

「やっぱり君は、卑怯じゃないか」

恨まれたままで居てくれない卑怯者。

満足げに成果を押し付けて、弁明一つせずに叱られに行つた卑怯者。

そんな彼だけが折檻を受けて、自分だけのうのうと読書を楽しめる訳がないのに。

「ああ、なんだよ。結局、意地になつているのは僕だけじゃないか」

ここにかたく至つて、ようやくクオリオは理解した。

頑かたくなにヒイロの誠意を認めまいとする、凝り固まつた「嫌悪感」の正体を。

理解して、納得した。呆気なく腑に落ちた。

困難にも平然と立ち向かうヒイコの姿勢。それはまさしく『果敢に闘うもの』だったのだ。

自らの夢を阻むユグレストの信仰偶像そのもの。意地になるのも、憎々しく思うのも道理だった。

「ケジメ、か」

道理ではある。けれどももう、筋が通らない。

なにせヒイコを憎める建前へのケジメは、既に自分の腕の中にある。であればこれ以上はもう、ただの八つ当たりにしかならないだろう。

ああ。総じて??気に食わない男だ。

ヒイロ・メリファー。悪意も善意も乱暴な者め。

「くそっ」

クオリオ・ベイティガンは恨みがましくランプを床に置いて、どかりと座り込んだ。

折檻は長くなる。恐らく深夜まで。もしかしたら朝までかかるかも知れない。

だがそれでも、クオリオはあの乱暴者になにか言ってやらねば気が済まなかった。してやられただけで終わるのは我慢ならなかったから。

「??おかげで、僕の明日も地獄確定だっ」

不眠不休の覚悟でもって、その夜、卑怯者の帰りをクオリオは待ち続けた。座り込んだまま一步も動かず。

夜の瑠璃色が朝の白焼けに変わる頃。

たつぷり絞られたヒイロが部屋に帰って来るその時まで。

クオリオ・ベイティガンはじいっと、待ち続けるのであった。

なお、翌日の騎士団調練にて。

ろくに寝てない二人が、仲良く揃って医務室に運び込まれたのは??もはや語るまでもない事だろう。



こうして、本来であれば『ユミリオンの悪夢』『凶悪なる黄父』とまで呼ばれ、ユミリオン大陸全土を恐怖の坩堝に叩き落としていたはずの、探求者クオリオ・ベイティガンの未来は――

馬鹿で無鉄砲で諦めを知らない、一人の男との出逢いによつて、大きく変わることとなる。

やがて来たる夢の狭間にて、クオリオ・ベイティガンは知るだろう。

この男との縁は??きつと。

奇跡のように掛け替えの無いものだったのだと。

027 ヒイロの悩み

夢中になってる時ほど時の流れは経つのが早い。

タウラスの月も丁度半ば。入団してから二週間だ。

選抜試験までいよいよ折り返し。どこか浮いた空気があった新米隊士達の間構えも、引き締まってきた今日この頃の騎士団本部空き地にて。

俺は、腕組み仁王立ちの姿勢で、頭から黒煙をあげていた。

「わっかんねえ」

どーにも伸び悩んでいる気がする。

こつちに来てかれこれ一ヶ月。自分でもやり過ぎかもと思うくらいには鍛錬を積んだつもりだ。

特に入団してからの二週間は相当な濃度だったと思うのに、これといって成長を実感出来ていなかった。

他の新米隊士の中には目に見えて強くなった奴だっているのに。解せぬ。

（俺、主人公だよな？ だってのに、この努力に対する手応えの無さはなんだろう。全然強くなってる気がしないんだよなあ）

主人公の成長率って大体ぐんぐん伸びるもんなんだけど、どういふことなの。

凡才だって師範代に言われた本来の俺でさえ、もう少し伸びてたぞ。

アレか、覚醒イベント待ちなのか。覚醒イベント後に一気に強くなる的な？

だとしたらまだチュートリアルくらいしか進んでない事になるけど。ちよいと序章が長過ぎませんかね。

(というか最近、段々と身体が鈍くなってる気がすんだよなあ)

俺の頭を悩ませる要因は、成長率の悪さだけじゃない。剣の振り下ろしを始めとした体さばきに、絶妙なもどかしさを感じていた。

こう、理想とする動きの六、七割はなぞれてるのに、残りがどうしても届かない感じ。

あれだ、十代で足の爪まで届いてた立体体前屈が、三十代になると踝くるぶしまでしか届かない。みたいなの。成人前にして感じる老いとは。

けど明らかに気のせいじゃ無かった。原因もさっぱりだ。

(わっかんねー。マジでわっかんねー)

そんな訳で、流石の俺もまあ良いかで済ませられず、こうしてショート寸前まで悩んでいるのである。

「どうなってやがる」

「しか響めっ面でひとり唸ってる君の方が、僕から一体どうしたって話なんだが」

「??ああ? んだよ、クオリオか」

「なんだとはご挨拶だな、君は」

俺のお悩みタイムを遮つたのは、インテリ眼鏡ことクオリオだ。

何しに来たのと尋ねれば、溜め息混じりにタオルと水筒を放られる。俺に差し入れて事らしい。

一週間前じゃ考えられない事態だが、ここで善意を深掘ればどうせへそを曲げるので、特に言及はしなかった。

「で? セツかくの休日になでわざわざ鍛錬に励んでおいて、なにをそんなに難しい顔をしているんだ」

「壁にぶち当たってる」

「壁?」

「どうにも思い通りにならねえんだよ」

「??相変わらず君の言葉は理解するには色々足りないな。なにがどう思い通りにならないか話して貰わなきゃ僕に分かるはずないだろう」

おっしゃる通りです。まあ口下手なのはお互い様だろうけどな。

とはいえ聞いてやるから説明しろ、と言われちゃ断る理由もない。

つてな訳で、俺の生前やら主人公理論やらを端折はしよって説明してみた。

「なるほど」

「何か分かったってのか」

「いいや。君だつて僕の得意としてるジャンルは分かるだろう。体術に関しては門外漢だよ」

「??チツ、使えねえ」(ですよねー)

「使えないとはなんだ、君はほんとに失礼なヤツだな。しかし??実の所、心当たりが無い訳じゃないんだよ」

「ああ?! おい、勿体振りやがったな teme エー!」

うーんこの頭でつかちめ。悪い顔しやがって。

クオリオもまた、インテリ特有の、結論をあえて持つて回しながら披露する悪癖持ちな男だった。

「日頃粗暴な君への仕返しだよ。で、心当たりなんだが??二日前の実践式訓練のことだ」
「二日前の実践? 確か一対一の模擬戦だったか。チツ、結構手こずっちゃまった覚えしかねえな」

「確かに、苦戦していたな。で、その時の話だが、実は僕の隣で??その。エシユラリーゼさんも、君の闘いぶりを観ていたんだ」

「シユラが?」

予想外の名前に、思わず目を丸めてしまった。

何故ここでその名前が。つーかあいつも俺の苦戦っぷりを眺めてたんかい。

事後報告とはいえ、ライバル相手に体たらくを見られてたつてのは、やっぱりいち主人公としては抵抗感があつた。

あいつには以前も弱み見せてしまつてるし、なんだかなあ。ライバル枠の癖に、ヒロインみたいな妙な間の良さをしてからに。

「まあ、たまたま近くに居ただけだろうけど。彼女は僕に気付いて無かつたみたいだし。しかも機嫌が悪かつたみたいで。君が相手に圧される度に、こう、舌打ちしたり、情けないとか口だけとかなんとか眩いたり」

「チツ、あのアマ?!」

「ただその眩きの中で一つ、『魔素の使い方もろくに知らないから手こずるのよ』というのが気になった」

「魔素?」

え、なんでそこで魔素が出てくんの。

純粹な剣闘とは結び付き難い単語に、シユラの名前に続いて俺は再び目を見開く。

が、俺と違つてクオリオは何やら閃くものがあるらしい。教鞭を振るう教師みたく、眼鏡をクイツとやつて人差し指を立てた。

「なあ、ヒイロ。ひよつとして君、魔素をほとんど活用していない戦い方をしてるんじゃないか？」

ひよつとしてもなにも。

え。

魔素って、戦いに必要なの???

028 魔素と魔術と脳筋男

「ああ？ どういうことだ。魔術ならともかく、インファイトに魔素の活用もクソもねえだろ」

「?? 大有りだよ。魔素を扱うのはなにも魔術師ドルイドの専売特許じゃない。魔素は万物に宿る力の源、全ての道は魔素に通ずるといふ格言だつてあるくらいだ。普通に剣を振るよ、魔素を消費して振る方が威力も高いし、速度も早い。それこそ熟練グレートイーターの武芸者は、並の魔術師よりよっぽど魔素の扱いに長けているといつても過言じゃないんだ」

「??ハッ！ つまり俺の感じていた壁つてのは、魔素の扱いが全然出来てねえからつて事なのか！」

「その可能性が高いと、僕は見てる」

「っ、クオリオ、このインテリめ！ ただの本の虫じゃあなかつたんだな！」

「おいこら」

まさかの原因判明だった。いやマジか。魔素の存在自体は知つてたけど、てつきり魔術にしか使わないもんだとばかり。

でも魔素を、ゲームとかのMP精神力に置き換えてみればわかりやすい。

普通の「たたかう」と、MPを消費する「特殊攻撃」とじゃ、後者の方が強力なのは明らかだ。

で、それは何も純粋な攻撃に限った話じゃなく、回避や防御、身体能力そのものにも通じるって事なんだろう。

全ての道は魔素に通じる、ってのはそういうことか。どおりで他との成長の差を感じる訳だよ。

流石はクオリオ、シユラ経由とはいええ、こうもあっさり俺の行き詰まりの原因を見つけてくれるとは。

やはり知恵袋的存在は、無知な俺にはとても心強い。持つべきものは頭脳明晰な友達ってやつだな。

「しかし、妙だな。魔術学科はヴァルキリー学園でも必修科目だから、魔素の扱いについても何度か講習があつたはずだが」

「????」

魔術学科。ほほーん。必修科目と来ましたか。

「君、まさか」

「仕方ねえだろ、あの頃はチンピラよろしくグレてたんだよ」

「はあ。今もチンピラの風情は変わってないだろうに。困ったやつだな」

いやしようがないじゃん。こちとら二日で学園生活終わったんだもの。

「じゃあヒロ、君の適正属性は？」

「??あア? 適正属性だア?」

「ほら、ヴァルキリー学園の入学式で『色別の儀』をやったろ。特殊な魔法陣に立って、潜在的に保有量の多い属性を識別してくれる奴だよ。君が立った時、魔法陣は何色に輝いたんだ？」

「??」

「おい、ひよつとして」

「お、覚えてねーよ」

「???」
「僕、将来職に困っても、学園の教師にだけはなるまいと決めたよ」

心底呆れたようなクオオリオの視線が痛い。超痛い。

いやでも、仕方がないたら仕方がないだろ。俺だつて出来るもんならファンタジーの学園生活を送ってみたかったわ。

というか色別の儀って、なにその面白そうな儀式。

学園生活編イベント目白押しじゃないかよ。つくづく悔やまれる。もしかしたら魔術師ヒロルートとか、悪評持ちの不良と可愛い同級生ヒロインとのラブコメ展開とかあったかもものに！

記憶の引き継ぎすら無かったから、順応するだけで大変だった灰色の学園生活。思い返して、心の中でさめざめと泣き暮れる俺だった。

「困ったな。原因は見つけられたが、新しい問題も発覚してしまったようだし」

「問題だア？」

「だって君、その様子だと魔素への知識も理解もないんだろう？ 理解も出来ない力を

コントロールするのは、溢れた水を盆に戻すようなものだぞ」

「ぐっ、だったらどうしろってんだよ」

泣いてる場合じゃなかった。

クオリオの言う通り、伸び悩みの原因は簡単にわかってても、解決までは簡単にいかない。い。

だって魔素ってさあ。気合いとか根性ならどうとでもなるけど、流石に勝手が違うだろうし。

うーむ困った。と歯噛みする俺に、クオリオはわざとらしく大きな溜め息をついた。

「そう難しい話じゃないだろう？」

「あア？ どこがだ。俺からすりや相当な難題だぞ」

「もつとよく考えてみてくれ。君の課題は魔素を扱えるようになる事だ。だとしたら、手っ取り早く都合が良いのがあるだろ。魔素を理解し、操作し、集約し、力と為す??」

そんな術がね」

「??っ!」

そして再び。今度は心の底から切に思った。

持つべきものは、本当に、頭脳明晰な友達って奴なんだと。

「ヒイロ・メリファア」。

君は、魔術の世界に興味はあるか？」

ようこそと言わんばかりに、眼鏡の奥の碧眼がキラリと星みたく煌めいた。

029 四原色とカラーバランス

魔術を教えて欲しいか。

クオリオからの提案に、俺は一も二もなく頷いた。もう首が千切れんばかりの勢いで。

シユラの魔術を一目見た時から、いやさ魔術という存在を認知したときからずっと使ってみたかったファンタジーだ。

更に魔術を学べば、俺自身の悩みも解消できると。このビツクウェーブに乗らない手は無かった。

「まずは基礎的な知識から行こうと思う。さっきも言ったが、魔術とは『魔素』を扱う為の『術』であり、古より継がれてきた叡智だ。魔素を独自の方法で取り込み、呪文ルンや触媒を介して顕すあわ??そういう神秘だ」

叡智。叡智と来ましたよ奥さん。なんて心踊るワードでしょう。まだほんの導入だつてのに、ワクワクする気持ちが抑えらんねー。

「??なるほどな。呪文と触媒は、魔術に必要な不可欠なことか?」

「いいや。魔術を発動するのなら、最低限必要なのは魔素と魔術名だけで良いんだ」

「んじや呪文と触媒に意味はねえのか？」

「そんなことはない。呪文と触媒は魔術の效能を向上させる重要な技術だぞ。うん??? そうだな。百聞は一見に如かずか」

百聞は一見に如かず。つまりは実践してくれろという事だろう。

思わず昂ぶる期待感を胸に、素直に従う俺の隣で、クオリオの纏う雰囲気が変わる。

(?!?)

いや雰囲気だけじゃない。

目を細めたクオリオの周りに、翡翠色の光の粒子が浮かび上がり、星々の様に輝いていた。

まさに神秘の兆候。非現実の発露。でも仮染めじゃない。

これこそガリアルなんだといわんばかりに、クオリオは大きく腕を振り上げる。

『シルフの戯れ』！

「！」

腕の動きと同時に、「翡翠色の三日月」が飛んだ。

自然ではあり得ない現象、まさに魔術としか言いようがない。

クオリオの放った風の刃は、そのまま真っ直ぐに軌道を描き、樹木の太い枝をスパツと断ち切った。

「今のは?!」

「良いリアクションじゃないか。でも、驚くにはまだ早い。次はこの魔術の真骨頂を見せてやる」

ファンタジーがフィクションだった側からすれば、充分凄い。しつかり形になった神秘を目の前にしただけでも、鳥肌もಂಡった。

しかしまだまだこんなもんじゃないとばかりに、クオリオはニヤリと笑うと、懐から小さな瓶を取り出した。

(なんだ??虫と、鳥の、羽根?)

『戯^わげ、遊^あべ、バラバラに』

瓶詰めに使われてた中身が、呪文らしき言葉と共に宙に放られる。

無数の鳥と虫の小さな翅。光を浴びて一瞬輝いた小さな翅達が、クオリオの翡翠色の魔素に包まれた途端、可燃物を取り込んだ炎みたいに膨れ上がり。

『シルフの戯れ』ツ!!』

そして。再び放たれた風の刃は、さつきとは何もかもが違った。

大きさも。速度も。

枝どころか樹木の幹ごと断ち折った威力も。

「……すげえな。桁違いじゃねえか」

「勿論だとも。これが魔術の真髄だからね」

「……瓶の中身が触媒、中身をばらまく前の言葉が呪文か。おい、あの羽根をばら撒いたのは?」

「これも触媒の一環さ。触媒とは単に必要とされるものを用意するだけじゃなく、魔術のモチーフになった幻想に関連付いた逸話や思想をならアクシンヨンンのふり仮面も組み込まれている。今使った『シルフの戯れ』の触媒とは、バラバラになった羽根を振る舞う事までを指すんだ。魔術はいわば儀式みたいなものだからね」

「儀式、か??いかにドルイドめいてやがんな」(いいねえ、魔術! 浪漫がみなぎるぜ!)
 魔法使いではなく魔術師、って印象を強めるような二つのプロセス。ようは、単に羽根だけあれば成立する訳じゃないって事だろう。

その手間暇をかけなくちゃいけない面倒臭さがなまじりアリティがあつて、魔術なんて神秘を身近なものに感じさせた。

いや、実際身近なんだ。魔素も魔術も。

俺はそういう世界で息をしてるんだ、ってぞわりと肌立つ実感に、改めて思った。

「さて??今僕が使つてみせたのが、いわゆる『緑の魔術』の初級魔術だ。で、一応聞くんだが??四原色って概念については知ってるか?」

「あア？ 四原色??チツ、聞き覚えはあんだがな」

「中身は知らない、と。やれやれこれじゃあ幼子に一から教えるのと変わりないな。仕方ない、ちゃんと説明してやるから聞き逃しの無いように」

「???」
「???おウ」

口振りとは裏腹に、クオリオの眼鏡がさぞ楽しそうにキラんと光った。

(あーあー??スイッチ入ってんじやん、この蒞蓄うんちく語り大好きマンめ)

ここ一週間で分かったことだが、クオリオは知識を蓄えるのみならず、蓄えた知識を放出するのも大好きらしい。

薬草についてのちよつとした俺の質問に、やれ広義的にはやれ学説では研究成果ではと??それこそ夜が明けかねない勢いで語り通されたのも、記憶に新しかった。

『四原色』とは即ち、魔素の中でもっとも世界を構成する割合が大きく、また各特色が濃く、強い、四色の代表的属性のことだ。それじゃ、一つ一つ簡単に解説していこうか。

まず、一つ目は「赤」。顕すあらわ神秘は『火炎』『発光』『光線』などがあり、四原色の中でも攻撃的なものが多く、破壊性に秀でた属性だろう」

(赤??シユラが使ってた奴も、確か赤だったっけな)

「次に【青】だな。顕す神秘は『流水』『回復』『氷結』などか。四原色の中では応用性があり、環境次第では重大な成果を発揮する事も多い。

そして【緑】の顕す神秘は、『疾風』『阻害』『雷鳴』。四原色の中でも影響をもたらす範囲が広く、戦いの主導を握りやすいな」

（青は水、緑は風。つてことは、クオリオは風が得意な緑の魔術師なのか）

「そして最後は【黄】。顕す神秘は『大地』『引斥』『豊穰』か。四原色の中では汎用性に長け、戦闘から農作まで幅広く活用されている??とまあ、四原色の各特色はそんな所だよ」

総括を終えて、空っぽになった肺の空気を溜め込むように大きくクオリオが息を吸う。

すっかり属性か。いかにもゲームのシステムめいた要素だけど、こういうのは最初っから全部を理解しようとせず、なるべく簡単に覚えとく方が良さそうだ。

それで徐々に実戦を交えて身体に馴染ませていく。これがベスト。今までやったゲームもそうだったし。

てか全部覚えようとしたら俺の頭じゃ間違はなくパンクする。俺、基本はレベル上げで物理で殴る派だし。べ、別に脳筋じゃねーし。

「はん。要は赤が火で青が水、緑が風で、黄が地??てな風に考えりや良いんだろ。そんな覚えなら覚え易いぜ」

「うーん、本当はもっと各属性の副次的な特徴にも目を付けて貰いたいんだが??最初の

内はそんなものでも良いか。それに、僕も興が乗ってきた。もっと深い所にも触れていくとしよう。ついて来れるか?」

「ああ? お、おオ。たりめーだ、この程度ならなんてこたあねーよ」

かと思えば、なんか更に難しくなるっぽいんですがそれは。

「四原色について触れたが、魔術を扱う上で忘れてはいけないのは、魔術同士の力関係と、場の魔素比率だ」

「力関係? カラーバランス?」

「ああ。属性の力関係だが、一般に『赤』は『青』に強く、『青』は『緑』に強く、『緑』は『黄』に強く、『黄』は『赤』に強いとされている。とはいえ使用者の精神力や魔術精度によつては覆る事も多いがな」

(やつべ。なんか難しくなつて来た。あーつと、赤↓青↓緑↓黄↓???つて力関係で良いのか?)

「そして魔術とは、場の魔素比率によつて効力が左右され易い。例えば、火山などの火の魔素が豊富な地では、赤の魔術が効力を増し、青の魔術は減退する、といった風に。魔素と場のカラーバランスは、魔術におけるルーンや触媒並に重要項目だからな。とはいえ初歩も初歩だ。そう難しい内容ではないだろう?」

「???お、おう。初歩ね。余裕。余裕に決まってるんだろコラ」

これで初歩ですか。

うん、つい強がってみたけど、ぶっちやけ不安だ。

小中高と担任教師を泣かせてきた、勉強嫌いの憧ちゃんは伊達じゃあない。

魔術の底なし沼並の奥深さに、俺は口の端っこがピクつくのを抑えられなかった。

030 真つ白に燃え尽きたさ、色んな意味で

はあ。やつべーよ。情報量が一気に増えたんですけど。

つまり赤の魔素が多いフィールドだと赤が強くなって、青が弱くなる。青が多いフィールドなら青が強くなって赤が弱くなる、って事？ あ、違う、緑が弱くなるのか。ううむ。なんかややこしい。

脳みそから煙出ちまいそう。てか出てるよきつと。シユポーつつてるし。俺これ大丈夫か？

(??ま、まあ、なんとかなるっしょ)

い、良いし。俺は実戦の中で理解してく派だし。

大丈夫だ問題ない。主人公は狼狽うろたえない。

「少し不安は残るが、まあ良いだろう。では座学は一旦区切って、実技と行こうか」
「！ つ、遂に俺も魔術を使えんだな！」

「待て待て、そう逸るな。何事も段階が必要だ。魔術を扱うなら、まずは使用者の適正属性を判別させる方が先だよ」

「適正属性？」

「そうだ。人間ないし生物は大抵、四原色の中でどれか一つに適正属性パーソナルカラーを持つてる。僕の場合は緑の魔素、といったようにね。特別な才能が無い限り、複数の属性魔術を用いることは人間には不可能なんだよ」

「んだと。待て、じゃあ、自分の属性を知ってねえとそもそも話にならねーんじゃ?」

ど、どうしよう。魔術をそもそも使ったことない俺が、自分の適切属性なんて分かりっこないし。くう、こんなことならあの時君、女神様に記憶引き継ぎでよろしくくらい言つときや良かった。

「そういうことだ。だから僕は君の適正属性を確認したんだが??まさか色別の儀をすっぽかしたとはね。頭が痛いよ」

「す、すっぽかしてねえよ! 忘れちゃっただけだ」

「僕からしたら同じだよ。でもまあ、安心していい。適正属性を知る方法は、何も色別の儀だけに限った訳じゃあないのさ」

「なにつ」

「またも問題発生かと思えば、我に秘策ありとばかりにクオリオの眼鏡がきらりと光った。」

「おいおいどうしたよこいつ。かつてない頼もしさじゃあないか。」

俺の純度100%な期待の眼差しに応えるべく、誇らしげな顔で懐をまさぐるクオリ

オが取り出したのは、なんと。

「??金色の、林檎?」

「アンブロシアさ。齧ればたちどころに魔素を補充出来る果汁を有した貴重品なのは君も知っているだろうが、実は簡易の色別にも使えるんだ」

「かじるだけで、か?」

「そうとも。アンブロシアの果汁は、触れた物質の魔素と共鳴して性質を変化し、色素を変える特殊性がある。この場合共鳴するのは唾液とだな。だから齧った断面の色彩が、個人の保有する魔素のカラーを表してくれるという訳だよ。そう、そもそも万物に宿るとされている魔素だが、物質状態の中でも一番相性と良いとされるのが液体なんだ。これは四十年前、アスガルダム of 学者マルドゥック・ガーデンが提唱した魔素観測論における一つの実験が立証した内容であり、今日に至るまで有力とされてる学説で——

「ああ??つまり、齧って断面の色を見ればいいんだな。よし、寄越せ」

すかさずインターセプトである。だって止めないと日が暮れるまで語り続けかねんし、仕方がないよねー。

若干不貞腐れ気味にクオリオが投げ寄越した林檎をキャッチし、善は急げとばかりに齧りついた。

そこで、秒で後悔した。

「はぐっつ???」(??うわっ、味シブつつ!!)

尋常じゃない渋味だった。

食感が良い。しゃくしゃくした歯応えはまさに林檎の瑞々しさを感じさせる。でもくっそ渋い。

良薬口に苦し、つて奴なのかもしれないけどこれヤバいつて。

舌の上に広がる渋みに悶絶していれば、さもその反応が見たかった、とばかりにニヤけるクオリオの顔が目に入った。

「くく、一気に入ったな。酷い顔になってるぞ」

「テメ、知ってたんなら先に言いやがれ??ぐえっ」

「ははは。ほら、いつまでも悶えてないで、断面を見てみなよ」

確信犯かよ。こいつめ、後で一発殴ってやる。

がしかし、今は恨み辛みよりも色別の結果が大事だ。

ここはやはり情熱の赤か。いやいやクール系っぽい青も良き。緑と黄色は戦隊ものだと目立たないからパスしたい。

そんな我欲たつぷりな期待を込めて見つめた、黄金林檎の断面は。

(??えっ)

驚きの白さだった。

普通の林檎なら食欲だらりな『真っ白』だった。

うん、どうということだつてばよ。

「色、変わってなくねえか？」

「??い、いや。まさか、そうか。変わっていない、ということは君の得意属性は?? 『白』という事か」

(なにい!!? ここに来て四原色じゃないカラーだとう!)

四原色の前振りはなんだったのか。

いやしかし待て落ち着け熱海 憧。

逆に考えてみよう。これ、逆に特別な能力では?

主人公の能力で、枠に嵌まらないオンリーワンなんて腐るほどある。いやむしろ、オンリーワン属性とか主人公にとっちゃ王道だろう。

クオオリオも目を見開くほどに驚いてるし。

マジか??マジか!

「で! 白属性は一体何が出来んだ? もったいぶらずに教えやがれ!」(回復とか呪い解除か、それとも聖魔法とかか!)

押し黙るクオオリオを急かしながらも、俺は期待に胸をモーターエンジンばりに弾ませ

ていた。

赤が炎、青が水とくれば、白は色合的に光だろうか。光といえば光線。つまりビーム。

「ビーム！ 何それ浪漫が溢れてとまんない。」

「いやちよつと捻って光の剣とか？ それもありだ。まさに騎士ってジョブにぴったりじゃんか！」

「魔術師ヒイロ物語、いよいよはじまったかに??思えたが。」

「あ、ああ。白属性は、だな」

「おう」

「??し、強いて言うなら」

「おお！」

「??汎用、かな」

「おお！ おオオオオアア？ ハンヨー？」

汎用。ほう。汎用ねえ。

汎用ってなにそれ美味しいの。

「うん。その、魔術師なら割と誰でも使える属性というか。あー、うん。ぶっちゃけるとだな????」

ヒイロ。君に、魔術師の才能は無いのかもしれない」

心苦しそうに告げるクオリオの、アンブロシアを二、三口齧ったような洗面が、それはもう物語っていた。

残念ながら、俺の属性は。

『ハズレ』だと。

「????????」
泣きてえ」

えー。拝啓女神様へ。

主人公生活始まって一ヶ月を過ぎましたが、そろそろ俺、挫折そうです。

031 泣きつ面にスパルタなクオリオ

突然だが——魔術には全部で六色あるらしい。

火炎を司る赤。水氷を司る青。風雷を司る緑。大地を司る黄。

これら四原色はあくまでメジャー。つまり他にも二色属性がある。

それが『白』と『黒』である。

黒とかいかにも闇を司ってそうだがそういう訳ではなく、定義としては「魔獣」と呼ばれる存在が使う魔術を総じて黒の魔術と呼ぶらしい。

で、残った白の魔術。

普通ならば光を連想しそうなもんだが、どうやらこの世界じゃ白は汎用。つまりはコモンスペルが大半なんだとか。

コモンスペルとはつまり、魔術師が日常的に使う、『呪文^{ルーン}』と『触媒』が無い魔術のことだ。

例えばちょっととした物を宙に浮かべる「浮遊」だったり、ドアの錠を開け締めする「施錠」だったり、魔素で出来た膜で対象を包み込む「包囲」などなど。

そういう地味いくな魔術ばかりで、戦闘に使える魔術なんかは片手で数える程度しか

ないらしい。

しかもその魔術も、ステータスにバフをかける”補助オンリー”ですって奥さん。

えー、つまり、わたくし主人公でありながら魔術師だと後方支援タイプらしいです。

光魔法？ ビーム？

赤魔術師に生まれ変わって来いだつてき。ははん。

うわあああああ、ちくしよおおおおくくなんでこおおなるんだよおおお女神

様アアアアアア

!!!!



はい。

突然じゃあないけど、どうも。

先日、空き地の中心で心を挫いた主人公です。

実質、四原色に適正無しという判定に絶望しましたが元気です。無傷ではないけど

も。

正直ショックだった。やっぱり王道に憧れる者としては、派手な魔術をぶつかます爽

快感とか味わってみたかった。

だが無気力になるにはまだ早かった。

確かに俺には四原色の魔術を使うことは出来なかったが、そもそも当初の目的は魔素のコントロールがメインだ。

で、クオリオが言うには魔素を扱う技術ノウハウ的なのは、別に白魔術であっても問題自体はないらしい。

「あー、つまり？」

「喜ベヒイロ。調練じゃへばってばかりの僕だが、魔術に関しては得意分野だ。魔素の扱いを磨く為の修行方法なら沢山ある。徹底的にやろうじゃないか」

「??おいクオリオ。なんか私怨入ってねえか」

「まっさか。勘違いだよ。調練でダウンした僕を何度か煽ってくれた事を根に持つてるとかじゃあないさ、ははははは！」

その日からというものの、俺の自主鍛錬のメニューに『魔術師修行』が加わった訳なんだけどな。

いやもう??これが本当にしんどかった。

とりあえず魔素の扱いに慣れなければ始まらないからと、魔術をひったすら反復使用させられた。

つつても俺に四原色の魔術を扱う才能はない。だから代わりにコモンスペルを用いて修行することになったんだけども。

物体を浮かす白魔術? 「浮遊」。

これを使って羽ペンやら本やら瓶やらを、延々と浮かせ続ける修行。

鍵の開け締めをする白魔術? 「施錠」。

これで南京錠の鍵や寮部屋の鍵を、延々と開け締めしまくるだけの修行。

対象を魔素で包み込む白魔術? 「包囲」

こいつでガラス瓶などの壊れやすい物体を覆い、テーブルから落として強度を確かめるだけの修行。

「感知」は魔素の扱いが未熟な俺にはまだ早いから無しとして、上三つの修行をひたすらやる訳である。

さて、お分かりいただけただろうか。

圧倒的に！絵面が地味！

いやね、俺に四原色の才能がないのが悪いってのは分かる。

分かるけどさあ、ほんつと地味過ぎんの。最初の村外の草むらで延々とスライム狩るようなもんだし。

しかも俺の得意な鍛錬とは勝手が全然違うから、コツを掴むだけでも相つつ当に苦勞

した。

体力よりも精神力を費やす修行なもんだから、疲労感も段違いだし。

「白魔術の特徴は汎用コモンスペルが大半である事と、それゆえにほとんど呪文と触媒いらずって所だね。つまり他の属性と違って魔素マジカさえ続けばいくらでも修行し放題、という事だ。良かったなあ、ヒイロ」

って感じで監督役のクオリオはなーゼーか、ノリノリでスパルタだし。

朝の鍛錬、そこから調練。夜に修行して、寝てまた起きて。

そんな、こつてり豚骨ラーメンよりも濃度の高い一日のスケジュールの繰り返し。

そりゃあ、時なんてあつと言う間に流れてしまった。

うん。具体的には二週間くらい。

二週間後。ジェミニの月（5月）、7の日。

つまり入団から丁度一ヶ月経過したことになる。

はい。お分かりいただけますかね。

「それではこれより、選抜試験を行うっつ!!」

あつという間に来ちゃったよ、ビッグイベント。

032 泣きっ面に想定外

発表された選抜試験の内容は非常にシンプルだった。

ランダムに組み合わせられた新米隊士同士による、一対一の真剣勝負を全部で三回繰り返しただけ。

武器は入団試験の模造品。魔術の使用も可。

己が持つ力の総てをぶつけて、結果を掴み取る。

言わばこの選抜試験こそ、泥臭い訓練期間の集大成って事だ。

「よし、やるぞ、やってやる。本隊に行つて、俺を馬鹿にした奴らを見返してやるっ！」

「この時を待つてたんだ。あの地獄の一ヶ月をやり切つた僕なら、必ず誉れあるブリュンヒルデの本隊に！」

「愛しのレオンハルト様、待つててくださいね。選抜試験で全勝して、貴方のお側に参りますからあ！」

右も左も男も女も、やる気に燃えているこの状況こそ何よりの証だろう。

あの一ヶ月を耐え抜いた事への自信。

そして、三回の勝負で搦んだ白星の数次第では、入隊するだけでもいくつもの称賛と祝辞が捧げられるほどの、騎士団本隊ブリュンヒルデに編成される能性もある。

燃えないはずがない。やる気にならない訳がない。

当然、この俺も燃えに燃えていた。

「それではこれより、各々の対戦相手を記載した書面を渡す。試験の開始時刻と会場も記載してあるので、必ず確認しておくように」

教導官の説明を皮切りに、隊士一人一人の名前が呼ばれていく。

緊張に息を呑む周囲に倣ならって、俺もまた自分の名を呼ばれる瞬間を、今か今かと心待ちにしていた。

「次、ヒイロ・メリフアー！」

「?!」

(遂に来たな。来ちまったなあ、この時が)

他の団員が見守る中、悠々と書面を受け取るこの手が震えた。

勿論怯えなんかじゃあない。武者震いってやつだ。

「クツクツクツ?!」

つい悪役っぽい笑みが漏れちったけど、今の俺には気にもならない。そんならいテンションが漲みなぎっているのである。

（遂に来たんだな、この時が。つまり、俺の??主人公のターンがツツー）

漲るほどの確信が、俺にはあった。それも、一ヶ月前の入団式時点から。

だつてそうだろう。いざ入団して物語が動くかと思えば、水を差すように準備期間が生まれたんだ。メタファーな視点で見れば、ここに何か重要なイベントが仕込んであるつて感付かなきゃ嘘だ。

現に期間中、俺??いや、ヒイロはクオリオと再会し、関係修復を果たせた。そこからの魔術修行。シナリオの箸休めのな、主人公の強化期間と見れなくもない。

じゃあ箸が休み終わったら、次は何が来るか。

数多くの王道物語で学んだ俺からすれば、予想は出来た。予感もあつた。

強化期間の出口、集大成ともいえるこの選抜試験で——主人公にとっての、ドデカい展開が来ると。

「これが書面だ。調練期間、常に率先していた貴様の努力、実ると良いな」
「??うつす」

じゃあそのドデカいイベントとは何なのか。

これについても、俺の灰色の脳細胞が冴えに冴えた予測を立てていた。

「ずばり——」シユラ」の存在だ。

（この一ヶ月、クオリオと修行ばつかで俺とほとんど接点は無かつた??にも関わらず、ア

イツは妙に存在感があった)

シユラ。俺がライバルと見定めて、調練期間もやっぱりダントツの成績と存在感を放っていた女。

一目見た時からあいつとの付き合いの長さを感じ取れたくらいだ。

あいつとは切磋琢磨に、互いに互いを意識し、競い合う関係になりそうだって。

けども、まだ俺達は出会ってからは短い。

目立った衝突なんてのも未だに無い。精々が憎まれ口の叩き合いってくらいだ。兆候だけがちらほら目につくのが現状だ。

(つてなれば??!!) いらでそろそろ因縁を深めるような闘いが一度あってもおかしくないー！)

結論。俺とシユラはここで一度、ぶつかり合う。

物語を俯瞰して見れば、まさに頃合いって奴だろう。

しかもここでの結果によつちやあ本隊行きという、まさに王道を往くならば、絶対に敗けられない舞台”と来てる訳だ。

ここしかない。超ベストタイミング。

更に更に、一ヶ月という修行パートを経ているというお膳立てもばつちりな状況。

俺は、確信していた。ライバルとの衝突と、その果てにある——俺の勝利を。

(シナリオは見えた！　ここでライバルに白星をもぎ取り、俺は主人公として躍進を遂げる！　ンンンンッ、カタルシスツツ！)

完璧だ。

完璧でパーフェクトでパーペキな未来予想図だ。

逸る躍進への予感に、教官官に手渡された一枚の紙を握る手が、ぶるぶると震えた。つてか力み過ぎて皺になった。破れてないからセーフ。

例え破れたつて別に問題がある訳じゃないし、試験の組み合わせが変わる事もない。

そう、変わらないのだ。

運命は——俺が主人公である限り。

(じゃあ??答え合わせの時間だ！)

ちよつと今の台詞ヒーローっぽいから、今度シリアスっぽいシーンで使おう。

なんて今後の展望を更に華やかにしつつ、俺の予感と確信を照らし合わせるべく、手の中の紙を開いた。

「さあ、来い、俺の??！」

・選抜試験表『ヒーロ・メリファー』

試験会場 『演習所3—G』

対戦相手、以下。

『一次戦』 ショーク・シャテイヤ

『二次戦』 シャーベット・リコルメイザ

『三次戦』 フオトム・チヨツパー

開いた結果。

俺の時が、止まった。

033 舞台袖の因縁

・選抜試験表『ヒーロ・メリファア』

試験会場 『演習所3—G』

対戦相手、以下。

『一次戦』 シヨーク・シヤテイヤ

『二次戦』 シャーベット・リコルメイザ

『三次戦』 フオトム・チョツパー

「??」

うん。

ううん。

うん?? うん?

「????
ぼえっ?」

あれ。え? ちよ、シユラどこ?

シャとシヨの字はあっても、シユの字がどっこにも見つからないんですが。え、バグった？ このシナリオバグってない、ねえ神様。

「ちよつと、なにボケつとしてるの」

「しゅ、シユラか」

しかもいつの間にかシユラに声かけられてるし。

いやそこ居んのに、なんで記載欄に居ないの君。

どゆことなの。ついに俺の頭ん中もバグって来ましたけど。

「て、テメエ??なんでテメエが俺の相手じゃねえんだ」

「??ああ。それ、あたしも見たわ。口だけじゃないって事、やつと証明してくれるのかと思ってたけど??その機会はまた今度になりそうね」

「お、おう」

なんか残念そうな顔してるけど。いやでもあつさりつちやあつさりしてませんか。いやいやいや。

落ち着け俺。ちよつと一旦落ち着こう。

あー、うん。ひよつとしてあれか。

俺、早とちりしちゃってましたか。

へー。そう来たか。

(??)最近の俺、散々過ぎやしませんかね)

ぶっちゃけようか。くっそ恥ずかしい。

夜寝る前にふと思ひ出しては、ベッドの上で悶える奴やん。確信とはなんだったのか。

死にたい。穴があつたら埋まりたい。そこで雨降つて固まつてくんねえかな、穴ごと。

でも考えようによつては、まだ俺はシユラと戦える段階には至つてないって解釈も出来る。

魔術修行も頑張つたけど、正直クオリオからはまだまだ魔素の扱いが雑つて言われてるし。

多分早とちりだな。うん。マジで羞恥心でどうにかかなりそだけど、ここは堪えろ。堪えるんだ俺。

「まあ、鬱憤晴らすには都合の良い奴があたしの相手だったのは??幸いかしらね」

「あア? んだそりゃ」

「なんでもないわ」

強風吹き荒れる俺の心境をよそに、目の前のライバルは意味有りげに微笑んだ。

こう、俺以外の因縁を前に威嚇するような、怖じ気のあるほど綺麗な微笑みだった。

「あんたは自分の相手のことだけ気にしてなさい。精々、足元掬われないようにね」

「ケツ、そりゃ俺の台詞だ」

「あんたが言うには十年早いわよ??それじゃ」

どこか含ませた言動の周身を明かさず、シユラはあつさりとうつていく。

多分、振り分けられた演習場へ向かうんだろう。

若干、因縁の相手っぽい言い方だったけど??俺じゃないし。

じゃあシユラの相手って一体誰だよ。

浮かんだ疑問を視線に乗せて、去りゆく背中を見つめた時だった。

「?!」

冬の空のような灰銀色の長髪が舞台袖のカーテンみたくドレープを作っていた。

そのふわりと舞ったシユラの長髪の隙間から、ちらつと見えた人影。

見覚えがこびりついたような、小さなシルエツト。

(??シヨーク)

「キヒツ」

現時点ではシユラに劣らず因縁深いともいえる、一次戦の対戦相手。

とんがり鼻の悪い面構えが、濁った瞳で俺を嗤っていた。



「ムカつくヤツだよなあ」

「??あア?」(はあ?)

演習所についた途端の、唐突な憎まれ口だった。

前触れは無くても、積もりに積もった感情があつたのかも知れない。見えないカレンダーを捲るめくように、シヨークはのんびりと肩をすくめた。

「昔からすつとろいデクだったが、最近のおまえは格別ムカつく奴だよ。愚図の癖して、いつの間にかお高くとまるよーになりやがって」

睡で濡らした床を蹴るシヨークは、忌々しさをちつとも隠そうとしない。けども妬みや僻みも見せない下卑た面構え。まるで仲間の更生を許せない不良グループのような、歪みきつた口上だった。

「威張り散らしのくそルズレーよりもだ。荷物持ちの木偶の棒が。これ以上、このシヨークの上に立とうとすんなら、ここで白黒つけてやんよ」

黒い決意ごと叩きつけるような、見事な啖呵と言えなくもない。
でも、でもですね。

(??シヨークが相手かよお)

俺の方はといえば、コレジヤナイ感が凄かった。

いやだつてさあ。こんな因縁の勝負感だされても、いまいち燃えないシチュエーションですもん。

だつてこの構図、主人公（元取り巻き）対現取り巻きつて事だよな。ぶつちやけシヨボくない？ よそでやれつて感じの因縁じゃない？

ルズレーならまだ因縁らしさもあつたのに、このマッチアップは肩透かし感が酷かつた。

「見てやがれよ。テメエが最近つるみ出した、あのいつぞやのヒヨロガリ眼鏡みてえに、もっぺん這いつくばらしてやんぜ！」

「?!」

まあ、でも。

丸つきりやる気がないって程じゃないんだよな。

「クオリオだ」

「は？」

正直、お前にムカついてんのは俺の方だつて言いたい。

普段の言動は勿論、ルズレーの前じや卑屈な癖に、自分より弱い奴にはとことん強く出る姿勢が気に入らない。

クオリオとの一件もそうだ。俺が出しやばるのは筋違いだとしても、どつかで落とし前をつけてもらわなきゃと思つていたところだ。

「ヒョロガリ眼鏡じゃねー。クオリオだ。しみつたれたあだ名で俺のダチを呼ぶんじゃねえよ、”とんがり鼻のドチビカス”が」

「お、お前?!」

それに相手がどうあれ、今後を左右する敗けられない戦いであるのは変わらないし。飲まされた煮え湯の苦さだつて覚えてる。

これまでの恨み辛みをぶつけるつて意味でも、丁度良い。

「これより、選抜試験の一次戦を開始する。

ヒイロ・メリファア。シヨーク・シヤテイヤ。互いに、構えっ!」

ああ、丁度良かったんだろう。

やつと一発かましてやれるつて意味でも。

シヨークの言うヒョロガリ眼鏡との特訓の成果を、披露する意味でも。

「???
始めえ!!」

だから俺は、試験官の開始の合図と同時に躊躇なく唱えた。

「我が腕に赤き力の帯を——【アースメギン】！」

「！」

白の補助魔術が一つ、『アースメギン』を。

034 バッド・ボーイズ・ステータス

「我が腕に赤き力の帯を??」「アースメギン」

白魔術は大半がコモンスペルとされている。

現に俺が修行に使った白魔術は「浮遊」「施錠」「感知」と、コモンの名に恥じない地味なもんばかりだ。

が、あくまで大半。全部じゃない。

白魔術にはコモンスペル以外にも、歴とした魔術が存在する。

即ち補助魔術^{サブポートスペル}。触媒いらずだが呪文を必要とする補助魔術は、数は少ないけど実践にも充分使える。

その数少ない内のひとつが、このアースメギンだった。

(よし、発動したなっ)

自分が唱えた神秘を改めて確認するように、模擬剣を握る両腕を見下ろす。

アースメギンは、使用対象の腕に赤い魔素のタトゥーを刻み、攻撃力を増大させる補助魔術だ。

覚えたてだからこういう実戦で使うのは初めてになるが、両腕に光る赤いタトウーは魔術が成功した証だった。

「ふん、いきなり魔術かこのダボ助め。焦ってんのか？」

「ハッ、んな訳ねえだろ。うざってえ奴の口を、さつくり黙らせてえだけだ」(えー。せつかくの魔術お披露目なのに、ちよつとりアクション違くないか?)

自慢のカードを切ったつもりだけど、シヨークは不遜な面持ちで悪態をつくだけだった。

折角の主人公初魔術お披露目なんだし、もうちよい気の利かせたりアクションくれたって良いのに。

平日昼間のクレーマーばりのいちやもんを、そのまま踏み出すエネルギーにして、駆ける。

「——行くぜオラアッ！」

「！」

叩きつけるかのように振り抜いた剣が、ブオンと鳴いた。

何度も何度も繰り返した基礎動作。なのに付随する空気の悲鳴は、いつもよりも明らかに軋んでいた。

赤いタトウーは伊達じゃない。

しつかりと帯びる力があるのだと訴えるように、振り切った剣先は、石で出来た床つ面を派手に罅割らせた。

「うぎっ、あつぶねえなこの馬鹿力！」

「魔術なんだから知恵力だろうがっ！」

「なんだとお！」

アースメギンの効果はますますだ。

けども密かに狙ってた先制攻撃ノックアウトとはならない。剣の射程外から大きく飛び退いたシヨークは、焦りながらも減らず口を叩いていた。

「まだまだあー！」

「喰らうかよー！」

だったら口数減るまで、畳み掛けてやる。

有言実行とばかりに猛進して、繰り出したもう一打。

我ながら鋭い一撃だったけど、小柄な体躯を捉えることは適わない。

（くっ、やっぱり見た目通りすばしっこいなあこいつー）

バトル物において、小柄なキャラクターは俊敏って印象が強い。ついでに悪役は逃げ足も速いもんだ。

剣の距離に決して入らないように逃げ回るシヨークの足並みも、さながら光をあてら

れたネズミのように速かった。

「悪党は流石に逃げ足が速えな！」

「ケツ、お前が言えた台詞かヒイロオ！ そら、喰らえっ！」

「っ!？」

逃げ足だけじゃなく嗅覚も意外に鋭い。

雑に追い回すようにみせて、壁際に追い込もうという俺の狙いを嗅ぎ付けたんだろ
う。

その手には乗らないとばかりに、シヨークは俺の目を潰すように”金色の粉”を撒いた。

「ぐっ、目潰しか??味な真似しやがって」

「目潰しい??? キヒツ、つくづく物忘れの激しい馬鹿だ」

「ああ? どうい、う??ぐ、くうっ、これはっ??!？」

言うことを為すこと小物臭い。

そんな悪態をニヤリと嘲るシヨークにぶつけてやろうとするも、急激に身体に襲い来る謎の異常に遮られた。

(な、なんだこれ。身体が急に、し、痺れてる!?)

異常の正体は、つま先から股関節にかけてビリリッと走る、強烈な痺れだった。

立っていられないって程じゃない。

正座した後に成りがちなあの痺れを、一際強烈にした類のものだ。

けどこれは何だ。なんだっていきなりこんな異常に襲われるんだよ。

「間抜けが、まんまと吸い込みやがって」

「吸い込み???つ、テメエ、まさか!」

「おうよ。お前にぶつけたのはビリビモスの鱗粉だ。吸い込んだ途端に、バッドステータス状態異常の麻痺を誘発するつー便利な代物よ」

「状態、異常だと?!」

「ケケケ、つくづく鳥頭だなあヒイロ! この俺の十八番をすっかり忘れちゃまってやがって!」

ショークの目潰しは、追い詰められかけたが故の足掻きなんかじゃなかった。

身体の不調は、あの金色の粉が原因。

吸った人間にバッドステータスをもたらず、ゲームにありがちなユーズアイテムってことかよ。

「クソツ、アイテム道具の持ち込みだア?! んなの有りなのかよ試験官!」

「当然だ。騎士とは剣と盾のみが装備ではない。第一、魔術も可としているのだ。殺傷性に過ぎたモノでなければ我々は看過する」

「残念だったな、この間抜け！　そもそもこの俺を前に道具使用を想定してねーのがアホなんだよお！」

魔術も有りなら道具だつて有り。ぐうの音も出ない正論だった。自分の迂闊さに歯噛みするしかない。

加えてショークのあの口振り。つくづく姑息というか、小悪党ムーブが板についてる男だよ。

「焦つてやがるなヒイロ。その顔見るに、どうやら回復アイテムも持ち込んでねーようだな??ケケ、白の魔術素質しか無い無能野郎の癖してよお、無用心な野郎だぜ」

（なんでそんな事まで??いいや、元々ヒイロがつるんでた相手だ。知ってたつて不思議じゃない）

「デクの癖して素早いその脚をどうしたもんかと悩んじゃいたが、お前のオツムの悪さにや助かったぜ」

初見殺しもいいとこだが、引つかかった俺がつけるケチなんてショークが取り合うはずもなかった。

「これまで散々俺に生意気くれたお礼代わりだ。たつぷりと捌つてやんぜ??ヒイロちゃんよお！」

035 愚者の産声

結論から言えば、失態だった。

まんまとシヨークをナメたツケを支払われる形になった。

「どうしたどうしたあ！ 踏ん張り効かずのへっぴり腰じゃねーかよ！」

「ぎっ、んの野郎?!」

アイツは追い詰められるだけの鼠じやない。

むしろその血走った眼は、手傷を追わせた得物を更にいたぶらんとする肉食獣だ。

その証とばかりに、鱗粉に痺れて動きが鈍る俺へと、宣言通りに刃の潰れたナイフを突き立てて来る。

「キヒヒ、真正正銘のウスノロだな。一方的に翱るつてのは気持ちが良いんだぜ、ヒイロよおー！」

「ぐうっー！」

（状態異常、なんつー厄介な。でも??八方塞がりって訳じゃない。少しずつだけど、痺れが取れていってる）

武も技もない無鉄砲な斬撃。

四方八方から殺到する攻勢に、痺れた身体じや防御だけでも精一杯だった。

防戦一方なのは事実だが、微かながらも身体の痺れが弱まっていくのを感じる。

多分、ビリビモスの鱗粉には即効性があつても、持続性はそんなに無いんだろう。

その証拠に、補強した腕力だけに頼つた迎撃に踏ん張りが利いて来た。

「なめんなア！」

「ぐおっ?！」

踏ん張りが利くなら、止めるしか無かつた受けの剣も、こうして弾くまでに出来る。

シヨークの軽い体重ごと弾き飛ばしてやれば、余裕に塗れた表情も焦りに歪んだ。

「チツ、もう麻痺が和らぎはじめやがったか。血の巡りの悪いウスラ馬鹿は、これだから

嫌になる」

「?残念だったな、クソ野郎。今度はテメエが焦る番だぜ」

「焦るだあ? キヒヒ。寝惚けたこと言つてんじやねーぞ勘違い野郎が。そうら追加

だつ、もう一丁くらえ！」

「っ！」

わずかに見え始めた勝機。

けれどシヨークは、その勝機ごと潰さんと今度は「銀色の粉」を撒いた。

粉の色がさつきと違う。もしかしたら、麻痺とは違う効果のユースアイテムかも知れない。

(まずい、息を?!)

同じ轍を踏むわけにはいかない。

慌てて口と鼻を腕で隠して、息を止める。

けれど奇妙だ。対処法はもうバレてるんだから、てつきりこの隙に攻めて来るのかと思っていたのに。肝心のシヨークはニタニタと笑いながらも、黙って俺を見てるだけ。

(こいつ、一体何のつもりで?!)

まだ音に出来ない違和感に探りを入れようと、注意深く視界を尖らせた時だった。

「??つつ、カッ——カハッ!」

急速に喉に襲い来る咳気に、俺は激しく咳き込んでいた。

「キヒ、キヒヒヒッ! 馬鹿はつくづく馬鹿でやがんなあ。そいつはホグウイードの花粉。さつきの鱗粉と違って、息を止めたって対処法にやなんねーぜ。何故なら??」

「うぐ、ゲホッ、ゴホッ! の、喉が?!」(こ、今度は喉が、焼けるように、熱い!)

「ホグウイードの特殊な花粉は、付着した傷口に染み込み、状態異常『風邪』を誘発するつ! ケケケ、その喉じゃただでさえちんけなテメエの魔術も、もはやまともに唱えらんねーだろうぜ!」

「うっ?ぐはあッ!」

容赦のないナイフのラッシュと、隙間を縫うように放たれた蹴りの一打が、横っ腹に深く刺さった。

まだ麻痺が残った片膝が耐え切れずに、ついにガクンと崩れて。

悔つた相手に、俺は呆気なく見下されていた。

「這いつくばったなヒイロ。やっぱりお前は、地べたが似合ってたんだよ」

「ゲホッ?く、そ?」

完全に勝つたようになつてもりになつてるショークの声色に、ギユツと唇を噛みしめる。

敗北感に打ちのめされてる訳じゃない。審判役はまだ勝負の終わりを告げちゃいな
いし、俺の心だつて折れちゃいない。

こうして片膝をついたままにいるのだから、勝ちを確信したショークが悠々と近付い
て来る瞬間を待っているからだ。

(??:本当はこんな手、騙し討ちみたいで好きじゃないんだけど)

少し、爪を噛みたい気分だ。

代わりに唇を噛み締めたのは、純然たる悔しさからだつた。

分かつてる。ここまで追い詰められたのは、俺が自惚れたせいだ。俺自身の悔りと無
知さが、姑息と言わざるを得ない手段を取らせる事態を招いてしまった。

かといって、このままむざむざと敗ける訳にはいかない。後悔も反省も後で出来るし、とことんやる。

でも今は勝つために全神経を傾けたかった。

本隊行きの為だとかは、この時ばかりはもう、俺の頭の中に無い。

なにがなんでも勝利を掴む為にと、蛇のような執念で必死に機を窺っていた。

掌を堅く握り締めながら。

「むかつく目しやがって」

「ゲホッ、ゲホッ??あア?」

「癪にさわんだよ、お前ってやつは」

だがシヨークは、俺にトドメを刺そうとするどころか、忌々しげに怒りに顔を染めていた。

「昔っからそうだ、お前は気に障って仕方がねえよ。凶体の割には肝が小さい。自分一人じゃなんにも出来ないししようともしなかった、尻馬乗りのウスノロめ」

直前まで優位性に浸り、弱者を蹴る事への悦はどこにもない。

「なんなんだ、今のお前は。気色の悪い目をするようになりやがって。なにを小綺麗に頑張つてんだか。見てるだけで健康に悪いぜ」

魂に溜まった泥を吐き出すような声色は。

重い軽蔑だった。

「分かれやデク。今更立ち直ろうつたつて、小鬼オークが天馬ベガサスにやなれねーよ。身の程を思い出せ。卑屈で、腐った目をしてた屑のお前を思い出せ、うぬぼれ野郎」

暗い目だと思つた。

夜闇のような底知れない邪悪じゃない。

昼間でも路地裏に忍ぶ、ありふれた薄暗さだ。

「ヒビ、なんてな。今更お前が身の程知つて、元に戻りたいですくなんてほざいたつて、誰が許すか。お前は俺をコケにした。無能のゴミクズの分際で、唾を吐きやがった。だから徹底的に傷めつけてやるよ」

「??ハツ、有り得ねえ妄想語つてんじゃねえぞ」

「今に妄想じゃなくなるかもな? よく見ろヒイロ。この瓶の中身が何か、思い出せつか?」

「??瓶の中身??赤い、粉?」

下卑た笑みを浮かべると共にシヨークが手にもった小さな瓶には、赤い粉が入つていた。

赤い粉。思い出せるだけの記憶なんてない。

けど、あれが色彩が強いだけの粉じゃない事なんて嫌でも分かる。十中八九、バッド

ステータスをもたらすユーズアイテムだろう。

「ケケケ。最後のバッドステータスは『頭痛』だ。ベニテングの胞子が誘発する激しい頭痛は、攻菌向かうつて行意思を低下させる。麻痺に風邪、締め頭痛で、おまえの心をへし折ってやるさ」

「――へし折る、だと?」

「そうさ、折ってやんのさ。心ごとボキツとなあ! おまえの分際を教えてやんぜ!

ヒヤハハハッ!」

「??ボキツと、折る、ねエ??」

「???心を、折るって?」

途端に、世界が静かになった気がした。

不思議なこともあるもんだ。

あんなに目の前で、黒い意欲のままにゲラってる男がいるってのにさ。

静かになった世界で、握り締めていた掌からサラサラと 金色の粉が零れ落ちていく。砂時計の砂のように。

片膝をついた際に、床に積もっていたものを密かに掻き集めて作った反撃の一手。その名残が、ただの残骸になっていく。

(ああでも、もう要らないか)

もう要らない。

たつた今、要らなくなった。

なにせ手段を選ぶ必要が出てきたんだ。

なにがなんでも勝つつもりだったけど、それじゃあ駄目だ。

もう駄目になった。

(だって、こいつは言ったんだ)

意志を折るってことは、つまりさ。

諦めさせるってこと、だよな。

諦めさせるってことは、つまりだ。

俺に。この熱海 憧に、主人公であることを辞めちまえて――。

そう、言いたいんだな？

そういうつもりなんだよな？

そっか。

そうなんだな。

へえ。

??????

うるさいな、こいつ。
?????????
、
|
。

036 小悪党の誤算

他者より幸福を実感しながら生きるためには、悪どさと小賢しきさは必要不可欠だとシヨーク・シャテイヤは考えていた。

誰だってそうだろう。自分よりも強い者や偉い者には媚びを売り、弱き者を虐げる。人を下に見る人間は最低だというのが、人間は人を下に見ることで心の安寧を養う生き物である。

自分ではない誰かがそうしていれば悪と憤りながらも、いざ自分が加害に回る時には受け手側に悪を貼る。

生きていくという事は、そういう薄情さを必要としていくものなのだ。

だが自分の醜さから目を逸らして、無自覚のままに居る人間は悪ではない。至つて「普通」なのだろう。

自覚してなお開き直る事こそが「悪」であり、シヨーク・シャテイヤは悪党だという自覚があった。

そういう意味ではシヨークは自分の身の程をよく知り、弁えられる類ではあるのだ。小悪党は臆病だ。一人では何も出来ない自分のちっぽけさを知っている。

だからこそヴァルキリー学園に入学した際に、まず彼は被れる虎の威を求めた。権力があるといい。けれどあり過ぎると身の破滅を招く。そこそこに呆れられ、それでも無視出来ないくらい虎の威だと尚良い。

小賢しい狐は欲して、見つけた。ルズレー・セネガル。騎士社会となつたアスガルダムでも力の残る貴族でありながら、本人は高慢であり身の程知らずのドラ息子。高慢具合に難はあるが、何より気前の良い金づるは絶好の的だった。

並以上の裕福が、媚び諂う^{へちま}だけで付いてくるのだ。シヨークからすれば最適であつた。

シヨークの裕福な生活に、吹いた追い風はルズレーだけじゃなかつた。

いつの間にやらルズレーが連れて来た、ヒイロ・メリファーという人相の悪い男だ。どうにも昔からの縁があるらしい。

大きいのは凶体だけで、要領が悪く口下手で、クラスから孤立している惨めな三下だ。彼の身の上を聞いて、シヨークはほくそ笑んだ。何故なら、彼はいかにも”底辺”の間だった。

こんな自分でさえも見下せるような、小さい男。ルズレーの横暴に付き合う内に、溜まったストレスを発散するにも都合が良い。

ヒイロの存在は、まさにシヨークにとって追い風だった。

追い風だったはずなのに。

「へし折るかア。ゲホッ??いいぜ、上等だ」

ある日を境に、木偶デクの腐った瞳の色は、強い光を宿すようになり。

追い風は気付けば、向かい風に生まれ変わってしまった。

「だったら、俺も折ってやるよ」

「??へええ。んなポロポロのザマで、一体何を折るつて言うんだよ、ヒイロ」

「ハッ、決まってるんだろ。とんがり伸びた、テメエの鼻つ柱だよ」

「???馬鹿は死ななきや治らねーのかよ、ヒイロ」

気に入らなかつた。その眼に宿る強い意志が。

虫唾が走つた。敵うはずのない相手シドウ教官を前に、それでも決して退かない姿勢が。身の丈

に合わない心の強さが。

散々だった。

決定的に決裂して以降、荒れるルズレーに必要な以上の苦勞をさせられたし、何故だか他人の不幸から蜜の味が薄くなった。

何より調練へのひたむきさで、徐々に頭角を表そうとしているヒイロを見る度、並々ならぬ苛立ちが沸くのだ。皮膚ごと胸を搔きむしりたくなる衝動だつてあつた。

理由は知らない。知りたくもない。

無論、許容だけは死んでも出来なかつた。

かくして機会は巡り、シヨークは人生において初めて、全身全霊でもつてこの選抜試験に臨み??そして。

追い詰めた。周到に。這いつくばらせた。徹底的に。

なのに、この男は赦しを請うこともなく。

身の程を改めることもなく。

まだ足掻こうとしていた。

あの忌々しい光を宿した眼で、自分を睨めつけながら、立ち上がった。

お前なんかとはもう違うんだと——吐き捨てるように。

「目を覚ましやがれ、英雄気取りが」

ばら撒いた胞子の赤と、脳を焼いた怒り。どちらがより赤かつたかは定かじやない。

けどもよろめきながら、降り注ぐ赤を吸わぬように鼻と口を塞ぐ事しか出来ないヒイ

口の姿に。

真つ赤な舌が見えるほど、シヨークは口角をあげた。

避けることは叶わないからと、ビリビモスの鱗粉と同じ対処法を選んだ事に関しては

正解だ。

しかし、意味などない。大口叩きの身の程知らずはきつと分かつていないのだろう。

「ゲホッ、ぐ、くっ?!」

「キヒッ」

なんの為に大した魔術も使えないヒイロを「風邪」にしたのか。

全ては呼吸を著しく乱して、このベニテングの胞子を防ぐ手立てを無くす為である。かくして狙い通り、ヒイロは吸った。吸ってしまった。

「キヒヒヒヒッ! 残念だったなあ、風邪っぴき! 思いっきり吸っちゃまったなあ、ベニテングの胞子を、大量にい!」

「っ、っっ??風邪は、これが、狙いか?!」

「ヒヤツハハハ! 遅え遅え、もう遅っせえよ! 今におまえは激しい頭痛でまともに攻撃すら出来なくなる! 無能のデク野郎が遂に、なーにも出来ないデク人形になっちゃったなあ!」

「?!ショークウツ!」

呼吸という生きるための本能に、返って首を締めているヒイロの有り様は痛快だ。

最高の気分としか言いようがない。

どう足掻いてみても、ヒイロは己より下。

覆らない力関係なのだ、知らしてやった。思い描いた通りの形で。

ならあとはもう思う存分、甦るだけ。

「さて、お楽しみなの??弱いもの虐めタイムだ!」

思い知らせてやれるだろう。

思い知らせてやれただろう。

結局、間違ってたのはお前の方だと。

「たっぷりと後悔しなあ! お前自身の思い上がりをよおおー!」

手の内のナイフを握り締めて、折れたかのように俯くヒイロに殺到したショーク。
最高の悦楽に浸るその顔は、醜悪の一言に尽きるのだが。

「ヒヤツハアアアア——おぶふウツツツツ!!?!?」

拳がめり込み、鼻っ柱が真横に折れたショークの顔は。

それはもう、見るに絶えないほど醜いモノだった。

「ひゃ、ひゃんで??」

浮かんだ疑問は、辛うじて口には出来はした。

だが、ベニテングの胞子がもたらす頭痛以上の激痛に、ちっぽけな心が耐えられるはずもなく。

たった一発の拳の前に。
小悪党の意識は容易く折れた。

037 餓狼か、英雄か。それとも修羅か

この闘いにおける誤算をひかされた数は、間違ひなくヒイロの方が多かっただろう。幸運が味方していたのは紛れもなくシヨークの方だ。

姑息であり卑怯でありながらも有効な戦術に、ヒイロがことごとくハマったからだ。

ヒイロの迂闊さが招いた事態ではある。しかし、形勢を作った一番の原因は、ヒイロの無知さが故だろう。

彼の魂が辿る経緯を考えれば、やむを得ない事ではある。丸々違う世界の常識や知識を、僅か二ヶ月あまりで網羅する事など不可能だ。

そういう意味では、シヨークの運が良かったというより、ヒイロの運が悪かっただけかも知れない。

闘いの趨勢すうせいを彩るものとは、双方の運と情報だ。

しかし、多少の運の傾きなんてものは、風向きほど容易く覆るものである。

ヒイロはシヨークを侮った。慢心もあつたのだろう。

相手の手の内を探る前に、迂闊にも身を晒した。故に後手に回り、後一手という所ま

で追い込まれてしまった。

無知が故の劣勢。油断が招いた劣勢。忸怩しゆくじたる思はあるだろうが、当然の成り行きではあった。

故になにがなんでも勝たねばならないと、ヒイ口は取りたくもない姑息な戦法でもつて迎え撃とうとしたのだが。

『そうさ、折つてやんのさ。心ごとボキツとなあ！ おまえの分際を教えてやんぜ！』

ヒヤハハハッ！』

シヨークの言葉は、彼から姑息ビリビモスの鱗粉ささえ奪った。

だが、知らなかったのはシヨークとて『同じ』だった。

「激しい頭痛だア？ 笑わせやがる」

シヨークには知る由もないだろう。

今の彼に宿る心を。狂おしいほどに、ヒーローに焦がれる魂を。

少しでも憧れに近づく為にと、悪魔ですら青ざめるほどの過剰な鍛錬を強いる男のこ
とを。

常人なら気が狂うほどの激痛ですら隣人としてきたその魂には、痛みをもたらず状態異常など、見知った平常運転であることを。

「生憎こんな痛み程度じゃ、この俺はちつとも折れねえぞ」

知る由もないだろう。

今のヒイロが、最初っから「異常」だなんて。

バッドステータスというシステムの垣根まともすら越える、尋常ならざる精神性大馬鹿だなんて。

そんな事、シヨークに分かりようもない事だ。

ヒイロを『どうしようもないろくでなし』だと。

剥がれてはならぬレッテルを貼り付けたまま、理解したつもりで居続けたシヨークには。

決して、分かりようもない。

「??チツ、一発で伸びやがって。大口叩きの根性無しが。だが、まあ??」

けれどシヨークの敗因とは。

果たして不運が故の理不尽だけだったのだろうか。

無論、否である。

シヨークは不運だったかも知れない。

シヨークは理不尽な目にあつたのかも知れない。

『チツ、もう麻痺が和らぎはじめやがったか。血の巡りの悪いウスラ馬鹿は、これだから嫌になる』

だが彼は確かに自らの勝ちの目に気付いていた。

ヒントを口にもしていた。

にも関わらず、油断したのだ。

慢心し、悦に浸り、詰めを見誤ったのである。

もし、和らいだ麻痺を締め付ける為に、再び鱗粉を撒いていけばどうだっただろうか。長々とヒイロを挑発して、麻痺が更に和らぐ為の、余計な時間を与えていなければ。

ヒイロの心を折るなどと口にせず、姑息さを競う土俵にて、最終局面へと詰めていれば。

シヨークは、その手に勝利を掴めたかも知れない。

「俺の勝ちだぜ、クソツタレ」

故に、ここに示そう。

敗因は、弱者を蹴らずにはいられなかったシヨークの嗜虐性である。

狡猾な小悪党、シヨーク・シャテイヤは。

敗れるべくして、敗けたのだ。

「――選抜試験、第一次！」

勝者、ヒイロ・メリファー！」

小悪党とはいつの世も、自業自得で滅ぶもの。

最後の最後まで身の程を忘れ、そして思い知ったのは。

どちらの方かなど、言うまでもない。



決着は呆気なかったが、壮絶な戦いだった。

けれども皮肉なことに、元来の物語からすれば、本筋には一切絡まない舞台の隅での小競り合いである。

端の端にて行われる、取るに足らない与太話。

所詮モブ同士の戦いなど、どう決着付こうがどうでもいい話に過ぎない。

シヨーク・シャテイヤからすれば悲劇だったのだろう。

ヒイロ・メリファーからすれば譲れない意志を示す闘いであつたのだろう。

だがそれでも、蝶の羽ばたき程度の些細なことだ。

あくまでこの決着の一端が、物語の筋道を歪めれるほどの影響は、無かつたのである。

では。

舞台にてメインのスポットライトを浴びるべきなのは、どこなのか。

それは論ずるまでもない。

「――選抜試験、第三次！」

勝者、エシユラリーゼ・ミズカルズ！」

『灼炎のシユラ』の主人公。

エシユラリーゼの闘いである。

「はあつ、はあつ、う、うう?！」

だがその舞台は、ヒロとシヨークの闘い以上に盛り上がり所もなく、闘いの決着は実に呆気なかつた。

しかし当然である。分かれた勝者と敗者。

彼我の間には、易々と覆らないほどの実力差が存在していたのだ。

それこそ春の入団試験の際の、ヒロとシドウの力量差ほどに。

「ああ、あ、有り得ない。こんなこと、あつてはならない。平民風情が、この僕を??僕は、

セネガル家だぞ。貴族なんだぞっ！なのに、なのにい!!」

本当に、取るに足らない相手だった。

いや、本来であれば取り合いたくもないほどに、どうでも良い相手だった。

だから告げるべき言葉も無い。

敗者への興味も、微塵も無かった。

「お、おいつ！ 待てよ、去ろうとするな！ やり直しだ、やり直しをしる！ こんな結果はありえないんだ、この女が、何か卑怯な手を使ったはずなんだ！」

ただ入団試験の前に、不快な想いをさせられた分への借りだけは返せてやれたのだから。

シユラがジャガイモと称したほどの貴族の顔立ちは痣だらけで、もはや見るに絶えな
いほどに醜い有り様だった。

少しだけすつきりした気持ちは、無くもない。

かける言葉も勿体ないと、シユラは地に這う敗者に目を向けることなく、返した踵そのままに演出場を立ち去った。

「こんなつ、こんな結果?!」 僕は、認めない！ 認めてなどやるものか!!」

だからもう、遠吠えを届けるべき因縁は、既に舞台から降りている。

「後悔させてやる?!」 僕を見下したことっ！ 僕に無礼を働いたことっ！ そしてー！」

けれどそれでも敗け犬は、吠えることを止めない。
光の萎しほむ舞台の中心で、狂気に目を宿して叫ぶのだ。

「絶対に、後悔させてやるっつ!!」

幕が降りきるまで、遠雷の如く。

裁きを願う狂信者のように、叫ぶのだった。

第二章 完

長女ウルズの人物紹介 VOL. 2

ご機嫌よう皆様、お久しぶりでございます。

運命の三姉妹が一柱。長女ウルズです

お話も一段落致しましたので、また新しい登場人物及び既出のキャラクター達の追記情報をご紹介していきたいと思えます。



【No. 1】 ヒイロ・メリファー / 熱海あたみ 憧しょう

・魔術について

得意魔術、というより唯一使えるのが汎用の白属性のようですね。彼の魔術の師いわく、彼は魔術の才能が乏しいご様子。

本人はひどく落ち込んでおりましたが、前向き思考の賜物たまものでしょうか。選抜試験の折には既に白魔術の一つを修めておりました。

他にも習得した白魔術もあるそうです。今後に期待、ですね。

・精神性について

ヒーローであることを目指す彼の精神性については、今更語るまでもないでしょう。正々堂々を志す姿勢は真つ直ぐではありませんが、かといつて搦め手を使わない訳ではない様子。

シヨーク・シャテイヤとの対決の際は「心を折る」という挑発によつて正面突破となりましたが、彼の手には密かにホグウイードの花粉が握られていました。

最初に投擲された際、保険として確保していたのです。シヨークが油断して近付いて来た時に仕返す予定だったのでしよう。

ああ見えて、憧殿は意外と抜け目がないうですね。



【No. 2】 エシユラリーゼ

・ヒーロへの関心について

誰に対してもそつけない態度ではありませんが、ヒイロに対しては他者よりも強い関心がある様子。

新米隊士期間にヒイロが鍛錬していた事も、その中身もある程度把握してらっしゃいましたし、彼女自身、直接彼の力を確かめる機会に恵まれなかったことを残念がっているでしょう。

今後この関心がどういった方向に変わっていくのか。要注意といったところですね。

・新たな確執について

ヒイロがシヨーク・シャテイヤを相手取っていた頃、シユラはルズレー・セネガルと対決していました。しかしシヨークとの激戦を演じたヒイロとは裏腹に、ルズレーはシユラにまるで歯が立たなかったようですね。

しかしルズレーは敗北を認めていない様子。ああいう手合いの執着は思わぬ悲劇を招くものです。シユラ、どうかご注意ください。

・魔術

四原色「赤・青・緑・黄」の内、シユラは「赤の魔術」の素養を持っているようです。剣の技量も相当ながら、彼女はどうか魔術も得意な模様。流石は原作「赫灼のシユラ」

における主人公といったところでしょうか。

・口癖について

驚いたりときめいたり許容量オーバーなことがあったりすると「ひえんっ」と鳴くそうですね。乙女ですか。乙女でしたね。



【No. 3】クオリオ・ベイティガン

・年齢

18歳。誕生日はピスケスの月（2月）の第二週末。

・外見

背丈は170cm前後と平均的です。

眼鏡をかけており、緑の長髪をポニーテールにしている男。美形。でも常に無愛想。

・服装

騎士団の制服を着用していないときは、くすんだ黄色のくたびれたローブを主に着て

いるようですね。自分の格好にあまりとんちやくがないらしく、ところどころほつれていたり靴下の色が左右で違ったりと、意外とだらしないみたいですね。

・クオリオについて

生粋の愛書狂^{ヒリオマニア}であり、常に学問書を持ち歩くほどに本がお好きな方。読み歩きもしばしばで、その集中力の凄まじさから転んだりぶつかったりする事も多いそうです。

またヒイロいわく知識自慢蘊蓄大好きマンだそうで、自分の知識を夢中になつて披露される事もあるとか。いわゆるイケメンな顔立ちなのでしょうが、これは女性的にマイナスポイントですね。

・家系について

クオリオの産まれたベイティガン家は『果敢に闘う者』を崇拜するユグ教を信仰するユグレスト家系であり、代々騎士を排出してきた生粋の名家です。

ですので当然クオリオも騎士としての道を期待され、学者として生きることを許されませんでした。

・魔術について

四原色「赤・青・緑・黄」の内、クオリオは「緑の魔術」の素養を持つ魔術師です。身体的能力があまり秀でてないかわりに魔術の才が突出しており、保有魔素量、魔術威力

共に平均を大きく上回る魔術師でもあります。

・原作での立場

現時点ではあまり多くの情報を公開出来ませんが、原作においては後に『ユミリオンの悪夢』『凶悪の黄父』とまで呼ばれた狂気の人物となってしまう模様。果たして彼に何が起こったのか。非常に興味深いところですね。



さて、今回主要な登場人物の紹介はこんなところでしょうか。

え？ 私達三姉妹についての紹介とかないのか、ですって？

そ、そんなこと言われましても。妹達はともかく、私なんか紹介しなくても別に??地味ですし。

そ、その内にしますから、そのうち。
??????
ですからその、あまり期待せずにお待ち下さい。
それでは皆様、またの機会に。

次女ヴェルザンデイの省略あらすじ VOL. 2

やつほーお久しぶりだねー

運命の三女神の次女ヴェルザンデイーちゃんだよー

略してヴェルちゃんだよー

今回もヴェルちゃんがヒイロくんの観察日記をみんなにとばーつと教えていくよー



・二章その1

入団テストに合格して、晴れて騎士団の卵としてやっていくことになったヒイロくん。入団式で挨拶してた騎士団長レオンハルトくんを見て、自分もあなりたいつて気合入れてたねーメラメラだよー

でも同じ寮部屋になった新人隊士のクオリオくんに、すっごい嫌がられちゃったよー。ヴェルちゃん知ってる。これは前途多難つてやつですなー

・その2

クオリオくんがヒロくんを嫌がってる理由は、昔クオリオくんが不注意でルズレークんにぶつかっちゃって、その時に大切な本を捨てられちゃったんだって。で、その捨てた張本人がヒロくんだったみたい。うーん、これは怒っても仕方ないかなー。

・その3

昔の自分がやつちやつたことを知ったヒロくんはその晩、クオリオくんに謝ったんだよー。綺麗な土下座だったなあ、男らしいよヒロくんー。

でも簡単に許してくれなくて、あの日ヒロくんが捨てた本をもう一度手に入れることが条件だったんだー。むむむ、クオリオくんもなかなかいけずだねー。

・その4

一晩明けて、ヒロくんは本を探しにアスガルド中の本屋を探し回ってたんだー。そんな時にリヤム・ネシャーナちゃんって女の子とお知り合いになってたねー。リヤムちゃんは可愛い女の子で、困ってたヒロくんを助けてあげたい子だよー。リヤムちゃんのおかげで本を手に入れたヒロくんは、クオリオくんに改めて謝ったんだよー。

ちよつと素直じゃないけど、許してくれたみたい。クオリオくんも意地張ってたんだねー。んへへ、可愛いなあ。

・その5

クオリオくんと仲直りしたヒイロくん。最近トレーニングの成果が出なくて悩んでたみたいだけど、クオリオくんのおかげでその原因がわかったんだよー。

なんとヒイロくん、魔素の使い方が分からなくてほとんど生身で鍛錬してたみたい。ちよー凄いやねー。

そんでそんでねー、なんとクオリオくんが魔術の指導をしてくれることになったんだよー。よかつたねーヒイロくん！

・その6

いよいよ選抜試験当日だよー。ヒイロくんはここでシユラちゃんと戦うことになって予想してたみたいだけど、ヒイロくんが戦うことになった相手はシヨークくん。ルズレーくんの取り巻き同士の戦いなんだねー。ヒイロくんはがっかりしてたけど、ヴェルちゃん的には注目の対戦カードだったよー！

・その7

シヨークくんと戦うことになったけど、バッドステータスを付与するユーズアイテムに、ヒイロくん大苦戦だよー。でもでも、シヨークくんの挑発にぶつつん来ちゃったヒ

！
 イロくんが、バッドステータスを気合いで乗り越えてワンパンで勝っちゃったんだよー

ヒイロくんすごいねー！

・その8

ヒイロくんがシヨークくんに勝った裏で、シユラちゃんもルズレーくんにも勝ったみたい。しかも結構よゆうだった感じだねー。

でもおかげでルズレーくんにすっごく恨まれちゃったよー。シユラちゃん大丈夫かなー？



さてさて、だいたいこんな感じかなー

ほんとはヒイロくんが普段どんなトレーニングしてるのかとか、一日三食どんなもの食べてるのかとかお風呂で体はどこから洗うのかとか教えよーと思ってたんだけど、ウルズお姉さまがだめーって言うから我慢するよーごめんねー

それじゃあみなさん、また会おうねー
ばいばい！

三女スクルドの専門用語解説 VOL. 2

わっはっはっはー！閲覧ご苦労である！

久しぶりであるな。みんな大好き、運命の三女神の愛され三女ことスクルドであるぞ！！

新章になってからなかなか気になる用語が多く出てきたからのう、今回も余がぼつちり解説していく！ありがたく思うのだな！

あ、御礼にお菓子くれたりしても良いぞ！！



【エインヘル騎士団】

アスガルダムの保有する最大戦力で、「騎士」と呼ばれる階級に準ずる者達の組織じゃな。

騎士団長レオンハルト・シグを筆頭とした大陸随一の戦闘集団であり、主に国内で発

生じた魔獣事件の対処に当たっておるそうなの。

騎士団の隊には種類が全部で三つある。

ひとつは、『ブリュンヒルデ』

レオンハルトも属する最大規模の隊で、本隊と呼ばれておる。主に戦闘を担当しており、エインヘル騎士団が大陸最強とも言われる所以じゃぞ！

ふたあつ！ 『スコルグ』

騎士団における戦線確保、補給物資の調達及び運搬、偵察、アスガルダムにおける騎士団直轄の施設（依頼窓口、図書館、資料館など）の運営も担当しておるな。一番隊員が多いのはこの部隊じゃの！

みいつつ！ 『ラーズグリーズ』

魔獣や魔術の研究、保管、”有効活用”。またユグ教との繋がり、国内各地の孤児達の情報を収集しておる。騎士団の一つながら職務内容が騎士っぽくないせいで、あんまり人気がない部隊みたいじゃの。

以上の三大隊で構成されておるのが、エインヘル騎士団ということじゃな！

他にも暗部組織やら各部隊の語り終えてない要素もあるが、これもまたおいおい紹介しようぞ。急くなよ、みななもの！

【魔素と四原色】

魔素とは万物に宿る力の源ともいえる、この世界を構成しておる基礎原子のようなものじゃな。

この魔素はエネルギーと言い換えてもよくつての、ヒロロが言つてた通りゲームのMPと同じような役割も兼ねておる。

より速く、より硬く、より鋭く、より強く。攻守速魔全てに関わつておる要素だからこそ、熟練の武芸者ほど魔素の扱いに長けておるのだな。

また、魔素には属性があり、全部で六種類ある。

その六種類の内の四大魔素を『四原色』と呼んでおるようだの。

それぞれ『火属性』↓『赤』

『水属性』↓『青』

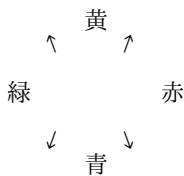
『風属性』↓『緑』

『土属性』↓『黄』

と、こういう色分けで呼称されておる。

属性には相性があり、下の図のように矢印の向いてる方の属性には有利じゃぞ！じゃんけんみたいいなもんじゃな！

※赤は青に強く、青は緑に強い。



【魔術】

魔術とはそのまま『魔素』を扱う為の『術』のことであるな。四原色に対応した魔術もあるし、他にも汎用属性の『白』、魔獣達が扱う『黒』もある。

さて、魔術といってもポンと念じるだけで発動はせぬ。魔術を発動させるには、必要なプロセスと補強要素が存在する。今から説明していくので、耳をお掃除してよく聞くのだぞ！

魔術において大事なものは呪文と触媒だな。

魔術とは伝承や伝説、神話が元となって作られておるから、魔術ごとの呪文と触媒も伝説や神話をなぞった内容になっているものが多い。

例えば、赤の下級魔術に『イフリートの爪』というものがある。これをそれぞれ分解して説明すると??

・ 魔術名

『イフリートの爪』

・ 呪文

『燃やせ、燃やせ、赤のはじまり』

・ 触媒

火を用意すると、効果が増大する。(蠟燭の火、カンテラの火、燃える松明など)

・ 魔術効果

炎を現出させる魔術。

つまり触媒たる火のついた蠟燭を手に『燃やせ、燃やせ、燃やせ、赤のはじまり』と唱える。そ

の後に『イフリートの爪』と魔術名を発すると、炎を放出することが出来る感じだの！
あ、あと、呪文と触媒が大事とはいったが、優れた魔術師の中には呪文や触媒を省いて魔術を唱えられる奴もおるぞ！ いわゆる詠唱破棄つてやつだな！

だが最上級魔術はどれも触媒や呪文を欠かしては発動しない。その分、とんでもない威力を誇るものばかりだから、お披露目の際は是非とも刮目するのだぞ！

あと四原色魔術のそれぞれの特徴もまとめてみた。

ざっくりでよいから覚えておくと良いぞ！

・火属性の【赤】

『火炎』『発光』『光線』など攻撃的なものが多く、破壊性に秀でておるの！

・水属性の【青】

『流水』『回復』『氷結』など応用性があり、環境次第では重大な成果を発揮する事もある

属性だ！

・風属性の【緑】

『疾風』『雷鳴』『阻害』など広範囲とデバフが主じゃな。主導権を握るに長けた魔術属性ともいえる。

・黄属性の【黄】

『大地』『引斥』『豊穰』など汎用性に長けておる故に、王道な砲台火力としても、テクニ

カルな使い方も出来る属性である！

こんな感じじゃの！

うむ、わかりやすい。流石は余である！わっはっはー！

【ユグ教】

アスガルダムにおける一部で支持されておる信仰思想の名前だの。

賢しくあれ、強くあれ。

戦士を祈る者であれ。

空へと譲った魂に、祈り絶やさぬ者であれ。

というのが基本の、闘う者を称賛する宗教とっておれば大体あっておるぞ！

サーガやエツダを聖書とし、戦いに殉じるものたちを信奉する。愛するものの為に闘い死ぬ、その滅びの美学を良しとする、ちよつとイッチャってる感じの思想でもあるの。

信者は羽飾りのバッジを胸元に付け、司教や神父は羽飾り付きの司教帽を被っておるのが特徴だな。各地に教会が立っておるのだが、これらは孤児院を兼ねてることも多い

とか。

また、熱心な教徒をユグリストと呼ぶそうぞ。クオリオの家系であるベイティガン家もこのユグレストであるな！



ふいー、今回はこんな感じだな！

なかなか重要な設定が目白押しだったからの、余は疲れた。みんなもよくぞついて参った、褒めてつかわずぞ！

さて！仕事も一段落終わったところで??ご褒美の時間じゃ！

さあ！お菓子を余に捧ぐのである！さあ！さあ！

ふえ、ウルズ姉!? なんでここに??え！ご褒美お預け!?何故じゃ!?え、じあん発生するかも?!それに多分用意されてないじゃと?!そ、そうとは限らんである??うわわわ引つ張るでない！

ん!!!
おのれ、おのれええええええ!!
次の機会には必ずやああああ!!
うわああああ

038 大胆な告白は主人公の特権

『拝啓、お兄ちゃんへ。』

どうも、妹のサラです。いかがお過ごしでしょうか？

お兄ちゃんがあのブリュンヒルデに入隊するという話で、今、村中が大騒ぎです。

村長が私のところに、奥さんが作ったパンとか畑で採れたお野菜をお裾分けだつて持つてくるようになったよ。お兄ちゃんの活躍を期待してるとか、お兄ちゃんはヘルメルの誇りだ、つてさ。

大人達の反応も今までから掌返したみたいで、なんか露骨な感じ。素直に喜べない私が悪いんだけど。ごめんね。

それと、村の女の子の何人かが、お兄ちゃんのことについて気になつてるみたい。玉の輿とかなんとか言つてた。

男の子の方はなんか、けっこう複雑っぽい。何人かは、あんなやつがなんで、とか賄賂や不正がどうか言つてるけど。

多分やきもちだね、サラには分かるもん。だつて女の子が騒いでる時に、毎回恨み節を言つてるもの。

ああでも、ちゃんと尊敬してくれてる男の子達も居るよ。例えば三軒隣のセルモくん、覚えてる？

あの子、僕もお兄ちゃんみたいになりたいからって、お兄ちゃんみたいに庭で木剣振ってるよ。

まあ、なんというかそんな感じ。皆ちよつとそわそわしてて、なんだか私の方まで落ち着かないよ。

そういえば手紙にあつたけど、本隊入りまで少し長めのお休みが貰えるんでしょ？
だつたら村を安心させる意味でも、一度は顔を見せてくれたら嬉しいかなって。うん。

お兄ちゃんの好きなご飯作ってあげるからね。

あ、それと追伸。

騎士として頑張るのも大事だけど、恋人も頑張って作ってね。そして出来たらちゃんと紹介すること。ね？

サラ・メリファーより』



「ふん。最後は余計だ、世話焼きめ」

読み終えた手紙を丁寧に畳めば、ふわっと前髪を撫でる爽やかな風。

清浄な自然の気遣いに、俺はフツと頬を緩めてティーカップの紅茶を一口啜り、目を閉じ思った。

俺の妹、可愛すぎてやばくない？

(??サラ。俺は今、世界の理の一端を見たよ)

なるほど妹萌えとはこういうものか。

なにこの、ちよつといじらしい感じ。つべーわ。超可愛いやん。生まれてこの方一人っ子の俺にはとんでもない破壊力だ。ヒーローを志す俺にシスコンへの道をちらつかせる程であった。

「??あんたの顔で急にニヤツとされると、紅茶の味が悪くなるんだけど」
だがしかし。

珍しく感情が無表情フィルターをぶち抜いたんだろう、俺のニヤけ面は喫茶店で同席している麗しき灰銀髪の少女をドン引きさせてしまったらしい。

うん。まあ、少女つつつてもシユラなんですけどね。

「妹と手紙で近況報告、って聞くだけならそう変な事もないはずなのに。不思議よね」
「何がだ」

「あんたの顔だと犯罪臭がするわ」

「んだとテメエ。人の顔に一々ケチつけやがって。嫌なら失せやがれ」

「ふざけんな。先に此処の食事を楽しんでたのはアタシ。なんで後から来たあんたのせいで席を外さなきゃならないのよ」

「このアマがア?!」

「なによ悪人相?!」

紅茶とケーキを挟んで睨み合う、俺とシユラ。

貴女と私。美女と野獣。ジエミニの月の11の晴れ空。

新米隊士が編隊されるまでの、空白期間の午後のことである。

一次戦でシヨーク相手に苦戦を強いられた俺ではあるが、シヨーク戦での油断大敵を
教訓として挑んだ二次戦、三次戦では、割とさっくり勝ち抜けた。

クオリオとの魔術修行の成果もあつての事だろう。

見事にブリュンヒルデ行きを掴んだ俺は、鼻高々に妹に手紙を出し、修行を怠るおわたこと
なく励んでいる。

今日もバチツと朝のメニューをこなし、こつちの郵便局に顔を出して妹からの返信を

受け取った。

それで手紙を読むついでに腹ごなしを兼ねて、良さげな喫茶店を見つけたのだが、まさかの満席。

相席ならということでも連れられた先のオープンテラスで、こうして睨み合ってる女と再会する事になった次第である。

「で、なんでまだ欧都に居るの？ 確かあんたって、麓の村からの出よね。ハーメル、とかなんとか。帰省しないの？」

「ヘルメルな。そのうち帰るつもりだが、今は少しでも強くなる方が大事なんだよ、俺はな」

「頭悪そうな台詞ね。別に鍛錬くらいなら村でも出来るでしょうに」

「そーでもねえ。辺鄙な村だからな、武術はともかく魔術を鍛えんならこつちに居た方が必要なもんがすぐ入る」

「へえ。なら、クオリオは？ あんた、あいつにいつも魔術教えて貰ってたじゃない。最近見かけないけど」

「あア？ あいつなら実家に連れ帰られてんぜ。力づくでな」

「ち、力づくで？」

「おお。なんでも実家に戻って来いって言われてんのに無視しようとしたみたいでな。

実家の使いだとかいう連中に引きずられて行きやがったぜ。つたく、おかげで修行の効率が落ちちまった」

「そ、そう。あいつも大変なのね」

悪態をつきながら、あの時の光景を思い浮かべる。

クオリオがそこそこ良い家の出でて事は知つてたけど、まさか実家のメイドやら執事達に強引に拉致られるとはなあ。

あの時半泣きで助けを求められたがスルーした俺に、憎まれ口を叩く資格はないのかも知れない。

きつと拉致るほどに息子の顔が見たかつたんだろう。

なら俺が出しやばるのは野暮つてもんだ。俺は悪くない。

決して美人なメイドに「坊っちゃんま」つて呼ばれたのが羨ましかつたとかじゃあないよ。ホントだよ。主人公は嘘つかない。

「つて、クオリオが居ないなら別に村に戻つても良いんじゃない。帰りたくない理由でもあるの?」

「んだよ、やけに踏み込みやがるじゃねえか」

「?!別に。ただ、それならあんたの暑苦しい顔を見なくて済むつてだけ」

「ケツ、好き放題言いやがつて。だが、残念だったなシユラよ。こつちに残る理由はある

だよ。より高みを目指す為の秘策って奴だ」

「別に悔しがってないけど??って、秘策？」

「おオよ、秘策だ。とびっきりのな????ン、待てよ。そうか、ここで会ったんなら丁度良い。むしろこいつが、巡り合わせってやつか」

ここで意気揚々と暖めていた考えを披露しようとした俺に、電流走る。

実は秘策なんだが、ちよつと困った問題があつたのだ。

しかしそれは目の前、怪訝そうに首を傾げるシユラの協力があれば、簡単に解決するかもしれない、と。

閃いた俺に迷いもなかつた。

空いたシユラの華奢な掌を、ガツと両手で包み込み、そして。

「シユラ、俺と来い。俺と付き合え」

「??ひえんっ?!」

告白した。

唐突な告白は、主人公の特権である。

なお、きよとんと丸くなるシユラの紅い瞳は、その時ばかりは刺々しさを忘れていて、ちよつと可愛かつた。

039 騎士団の腐敗

「つまり、ユーズシヨップに案内して欲しいってことでいいのね？」

「??あア」

「フン、なら最初からそう言えば良いでしょ」

「お、おう」

思い切り踏み抜かれた足の激痛を必死に堪えながら頷く俺に、シユラはムスツとそっぽを向いた。

しかも腕組みながらの指トントン。どう見てもまだ苛怒りが収まってないです、本当にすいませんでした。

ちよつと言いつたただけなんだけど、流星に手をガツと握ったのが不味かったのかもしれん。

やはりライバル枠といえど乙女だと言う事か。目付きは鬼みたいに尖ってますが。

「にしてもビリビモスの鱗粉、ホグウイードの花粉、ベニテングの胞子??確かにあまりシヨップにも並びにくいラインナップね」

「心当たりねえか?」

案内をわざわざ頼む理由は、俺がまだ地理に詳しくないってのもあるが、求める品が四原色の魔術の触媒に使われるものでもあった。

だから、赤の魔術師でもあるシユラなら心当たりがあるのでは、と思い至った訳だ。

「二応、鼻屑にしている店にはあったと思うわ??けど、何に使うつもりよ。触媒に使うにしても、あんた魔術は白じゃない」

心当たりはあったらしい。

けど、さも秘策みたいに勿体ぶつたからだろう。白魔術には触媒が不要ってのも引つ掛かったらしい。

腑に落ちてない顔でジロリと俺を睨む赤眼。肝心な部分に良い加減触れろと、まどろっこしさを嫌う眼が物語っていた。

「一体、何するつもりなの」

「はん。決まってるんだろ。使うんだよ」

「使うって、誰に?」

「俺にだ」

「??は?」

勿体ぶるのを止めたら止めたで、啞然とされた。

まあ、そういう反応になるよな。自分に状態異常アイテムを使う。普通に考えれば訳

が分からない。

だがこれこそ、俺の天才的発想が閃いた秘策なのである。

選抜試験を勝ち抜いた後に、ふと俺は考えた。

シヨークは強敵だった。俺が油断していたのもあるけど、あれだけ苦戦させられた相手だ。実は単なるモブじゃないのでは、とあいつへの評価を改めたのは当然である。

だが、そんなシヨークの最後は実に呆気なかった。なんせワンパンでノックアウト。あんなだけ手強かったのに何故。

俺は訝しんだ。そして閃いた。

あの時の俺、覚醒してたんじゃね？——と。

「え、は、意味分かんない。頭でも沸いてるの？」

「大真面目だコラ。必要なんだよ、俺が強くなる為には」

言葉通り大真面目だ。

だって今になって冷静に考えてみれば、ベニテング食らった後の俺ってちよつとおかしかったし。

頭痛は感じたけど、攻撃する意志はちつとも折れてなかった。頭痛の状態異常が相手の攻撃力を著しく下げるっていうなら、何故シヨークをワンパンで倒せたのか。説明がつかない。

つまりだ。

追い詰められた俺が、知らぬ間に覚醒したんじゃないやね？　と思うのは至極当然の流れだろう。

シドウ教官との闘いでは発生しなかった覚醒イベントが、遅れてやってきたんだ。だってヒーローは遅れて来るもんだし。有り得る。予想外のピンチに覚醒、それもまた主人公らしいじゃない。

シユラが相手じゃないと知った時にはがっかりしたもんだったが、選抜試験が重要イベントと睨んだ俺の眼は正しかったようだな！

そうと分かれば、俺が覚醒した能力は果たして何かを把握しなくちゃならない。

残念ながら試験の前後で何かが変わった自覚は俺には無い。新たな力はきつと、再び俺の中で眠っているんだろう。

ならば、もう一度あの時と同じ”状態”まで追い込めば??と、俺は閃いたって訳だ。いや我ながら天才かと。

でもまあ、ここらの事情が分からないシユラからすれば変人呼ばわりも仕方ない。

至って真面目な俺の物言いに、シユラは形の良い眉を八の字に潜めていた。

「強くなる為にとって??麻痺に、風邪に、頭痛にわざわざかかって、何が強くなるっていうのよ」

「鈍いなテメエ。人間つつうのは追い込まれて真価を發揮するつて奴だ。だから自分で自分を追い込む。追い込んだ先に、強くなれる可能性があんなら、試す価値は充分だろうが」

「???」

フィルター効果は相変わらずだけど、言いたい事は大体あつてる。

ライバルへ意地を示す主人公ムーブが、果たしてこの可憐な強敵にどう伝わったかは定かじやない。

シユラはどこか遠くを見るような目をしながら、風船が萎むように溜め息を吐いた。

「??ならもう、これ以上は聴かないであげるわ。それじゃ、これ」

「あア???伝票?」

「案内料よ」

「??おう」(ちやつかりしてんなあ)

納得は仕切れてない顔だが、どうやら案内はしてくれるらしい。ふいつと顔を逸らす辺り、なんだか照れ隠しのようにも見えなくなかった。

そんな訳で俺は紅茶一杯とケーキ一つ分の伝票を受け取り、善は急げとばかりに会計を終えたんだが。

『待って、待ってください！ 本当に困ってるんです！ お願いします。どうか、どうか依頼を！』

「??ん？」

「どうしたの？」

「いや??なんか揉めてねえか？」

長閑な午後の空気にそぐわない、張り詰めた女性の声が聞こえた。

音を辿ってそつちを見れば、なにやら大きな建物の門前で四十代くらいの女性と騎士らしき男が揉めているようだった。

「あそこは確か、騎士団の施設じゃなかったか？ なんの施設だったかは忘れちゃったが」

「??騎士団の依頼受付所よ。民間専用の窓口のね」

『ええい、しつこいぞ。規則は規則だ、罷りならん』

『そこをどうか！ お願いします！』

依頼受付所つてことは、実動部隊のブリュンヒルデとは別の管轄なんだろう。

しかし、あんなに必死に縋りつく女性の懇願に、騎士はまるで聞き耳を持つとうとしない。

事情は分からずとも、見てるだけでも胃腸を焦がすような気分させる光景だった。

「あれはどういう状況だ」

「??どうせ、割に合わない嘆願だったから門前払いしてるんでしよう」

「割に合わねーだど?」

「あの人の格好見れば分かるでしょ。多分、辺境の村の出。騎士団に依頼しようとしたけど、依頼内容の難しさに見合ったお金を持ち合わせなかった、つてところじゃない」

「??高額の案件なら、受けずに放つとく方がやべえんじゃねえのか」

「そうね。けど珍しくもない事よ。そう、この国じゃありふれた光景」

陰りを見せた表情を俯かせながら、シユラが一步を踏み出す。

だがその爪先が向かうのは、揉め事が起きている施設とは全然違う方向で。

「さっさと行くわよ」

「な?? テメエ」

「っ」

てつきり介入しに行くのかと描いてた想像とは別に、むしろ見ないように顔を背けてシユラは走り去ってしまった。

「くそつ、案内役が急に走んじゃねえよ」(ちよつ、待てつて!)

一見、薄情な行動にも思える。

でも去り際、黒濡れた横髪から見えたシユラの表情は、込み上げる衝動を無理矢理蓋をするような切実さがあつて。

主人公なら、ヒーローなら。

真っ先に困ってる人の元へ向かうのが、絶対正解なはずなのに。

「??チツ、なんだってんだよ」（あいつ、どうしたんだ???)

悪態を吐き捨てながらも、俺は急ぎ足でシユラを追いかけるのだった。

040 コルギ村のハウチ

「ご利用ありがとうございますーでしたーだよー。シユラちゃ??おねーさんもお、ヒイ??おにーさんも、またご鼻屑にねー」

「お、おう」（ひいお兄さんってなんだ???)

朗らかな店番の声に背を押されてシヨップの扉を潜れば、カランコロンと取り付けられたベルが鳴る。

遠くの方では少し茜に染まりだしたおやつ時の空は澄んでいた。

シユラが教えてくれたシヨップでの買い物だけど、欲しかったものはきっちり全部手に入った。入ったのは良いんだけど、シヨップの店員さん、ちよつと変わった人だったな。

俺みたいな見た目でも凄いフレンドリーに話しかけてくれたし。語尾を間延びする癖もおつとりしててグツド。

なにより可愛かった。なんかちよつと人間離れしてるレベルで。若干雰囲気はノルン様と似てる感じもしたな。

「??口が上手え店番ってのは厄介だな。あれこれと押し売りやがって」（めっちゃフレンド

ドリーだったなああの店員。凄く可愛かったし)

「まんまと余分に買わされた奴の台詞じゃないわね」

「チツ。テメエが鼻屑にしてるからって油断したぜ。騒がしいのは嫌いな性質たちだと思つてたんだがな」

「好きじゃないわ。けど品揃えも品質も良いから、背に腹は変えられないのよ」

けども買い物を終えた俺達の空気は、明るいものとは言えなかった。さつきまではあの店員さんがトークで場を保たせてくれたつてもあるけど。

まあ俺達二人じゃ明るく和やかな空気つて方が変だろう。雰囲気をいつも以上に重くしているのがどちらかは、言うまでもない。

「もう用事は済んだし、帰るわよ」

ぼつりと呟いて歩き出す背中を追いかけながら思うのは、あれから合流した後のこと。

ガイド役を務めてはくれたけど、シユラは露骨に口数が少なくなっていた。

多分、さつきの依頼所でのやり取りに思うところがあるんだろう。

今は口数が多少戻ったとはいえ、合流したばかりの時は返事は精々、一言二言。

まるで昔の傷を見られまいとするような、気の強い少女には似合わない、繊細な拒絶の仕方だった。

(主要キャラだし、何かしら込み入った事情なり過去なりがあるんだろぅけど??どうしたもんかね)

作られた壁を壊すのも主人公らしきというけども、如何せん踏み込んで良いものか。下手に詮索して仲違いなんてこともありそうだし。

例えばクオリオ相手の時みたく、男同士なら遠慮なく突っ切れるんだけど。ライバルとはいえ少女のシユラ相手じゃ躊躇ちゆうちゆう無しには行けなかった。

そんな風に踏ん切りつかない間に、氣付けば大通りへと戻って来た頃だった。

「あのー、そこのお二人、少しお待ちくださいー!」

「???

「あア」

大通りへの入り口辺りで、俺達は急に呼び止められたのだ。

「ええと、貴女が??エシユラリーゼさん、でしょうか?」

「そう、だけど??」

呼び止めるなり、シユラの名前を縋りつくように確かめる謎の女性。

口振りからしてシユラとは顔見知りって訳じゃなさそうだし、当然俺も知らない。けれどその女性の、切羽詰まった剣幕には見覚えがあった。

(ん?、この人って、さっきの??)

くたびれた緑の衣服。痩せこけた頬。必死な様相。

間違いない。あの時、依頼受付所で揉めてた女性だ。

「私はハウチ。ここより北東に十里ほどにあるコルギ村の村長です」

ハウチと名乗った女性は、突然のことで僅かに狼狽えるシユラの手を取り、赤く腫れた両目を潤ませながら懇願した。

「貴女は優秀な騎士の方だとお聞きしました！

・
お願いします、どうか、どうか私の村をつ??コルギ村を、お救いくださいっ！」

041 情けはヒーローの為になる

「子供の連続失踪事件？」

「はい??」

雲の向こうにはもう星がちらついているほど、すつきりと赤く焼けた夕空。

けれどもコルギ村の村長と名乗った女性の頬は、火照らす夕陽を浴びても尚、悲嘆に青く冷めていた。

つつても、これでも落ち着かせた方なんだよな。

出会い頭の時には、もう蒼白と言つても良かったぐらいだし。狼狽ろうばいしきりのシユラに懇願してばかりだったハウチさんを、なんとか宥なだめ、とりあえず事情を聞く流れになつただけだ。

「この始まりは1ヶ月ほど前。村民の一人娘が、付近の森に山菜を取りに出かけたきり帰つて来なかつたのです。娘の両親の嘆願もあり、村の男手を募つて捜してみたのですが、結局見つけられず??更に二週間後に、また新たに村の商家の三男が行方不明となつてしまいました」

連続失踪事件。

現代でもいくらでも起こり得たのに、どこかフィクションのようにも感じる物々しい響き。

けど、悲嘆にやつれるハウチさんの黒ずんだ目元が、本当にあつた悪夢だと存分に物語っていた。

「その更に一週間後に、また一人の子供が行方知らずとなり、私は村の子供達に外出を禁じました。失踪したのはみな子供であり、村の外で居なくなっていましたから。でも?? その、5日後のことでした」

「また居なくなつたのか?」

「ええ。ですが、奇妙なのです! 居なくなつた子は村の外には出ていない。それどころか、相次ぐ失踪で怯えていたその子は当日の深夜、”母親の腕の中でしがみつくように眠っていた”と。なのに翌朝、母親が目を覚ました時には、もうどこにも??」

あまりに不可思議な話に、唸らざるを得ない。

外出を禁じる前ならまだ失踪事件と云える。でも最後の一件に関しては、もう失踪や誘拐というより消失じゃないか。明らかに普通じゃない。

大人しく話を聴いていたシユラも同感らしく、怪訝そうな表情で俺に目を配らせてきた。

「魔術か?」

「さあ。けど聞いた感じ、人為的とは言い難いわね」

「言い切れんのか？ 盗賊団とかの線はまだあんだろ？」

「非効率だからよ。人攫いなら、子供をわざわざ期間をあけて一人ずつ、なんて手間をかける必要なんてないわ。まして過敏になってる母親や子供に気付かれずに、子供だけを攫うなんて真似が出来るなら尚更よ」

「ならなんだってんだ」

「人ならざるモノの仕業、なんじゃないの」

(??魔獣、ってやつなのか)

言外に含んだシユラの推測を、心内でなぞる。

魔獣か。何度も耳にしながら、俺がまだ一度も遭遇していなかった人間の天敵。

目的も生態も大部分が明らかになっていない不気味な存在だって話だけど、この難事件には本当に魔獣が絡んでいるんだろうか。

あと、子供達が失踪するペースも気になる。

最初の失踪事件から、明らかにスパンが短くなっている。ってことは被害は日に連れて増大していきかねない。

最悪、集落の存亡にだって関わる。ハウチさんが藁にも縋る想いなのも当然だった。

「もう、私達にはどうすることも出来ませんでした。こうなってはもう、エインヘル騎士

団にお願い申し上げるしかない、こうして欧都へと依頼に来たのですが??」

「相手にしてもらえなかったって訳ね」

「は、はい。魔獣の可能性がある依頼の案件だと、依頼料も釣り上がるそうでした。冬を越したばかりの貧しい村には、とても払える額ではありませんでした」

「んだよ、そのクソみてえな理屈は。纏る奴の足元見てどうすんだ」

「わたしだって同感よ。でも、これが騎士の現状なの。目先の金銀の為なら、遠い誰かの未来が消えるとしても目を逸らす事だって平然とするわ」

耳を疑った。

一部の騎士の腐敗がどうってのはなんとなく察していたし、入団試験の不正試験官の件だって忘れてない。

でも流石にここまで酷いとは思ってなかった。学園じゃ魔獣と闘うのも騎士の役割だって教えてたのに、現実はこれかよ。

騎士士の全部がそうじゃないのかも知れないが、だからと言って納得してやれる気にはなれなかった。

「お願いします。この欧都とは比べるものもない、ありふれた小さな村の一つではありませんが、私の愛しき宝なのです。どうか、お救い下さい。どうか、どうか??!」

彼女からすれば最後の砦なんだろう。

シユラの前へ跪き、懇願と共に身を伏せるハウチさんは泣いていた。

騎士への怒りではなく、迫る絶望を前にどうする事も出来ない悲哀の涙だった。

事情は分かった。心も決まっていた。

だからこそ泣き縋られながらも動けないシユラを遮るように、跪くハウチさんを立たせようと手を差し伸べた時だった。

「ねえ」

「なんだ」

俺の背に投げられたのは、感情を無理矢理殺したような、冷たいシユラの声だった。

「アンタ、依頼を受ける気？」

「だとしたら？」

「分かってんの？ あたし達は本隊入りを控えてる身、まだ正式な騎士の身分は持ちやしない。勝手に依頼を受ければまず間違ひなく罰を受けるし、最悪、騎士の称号も剥奪されるかも知れないわよ」

シユラの言い分はもつともだ。

俺達は騎士とはいえ配属の決まっていない、いわば仮称号身分。だから勝手に正規の手順を無視して依頼を受ければ、厳罰処分になるのは俺も分かっていた。

「剥奪か。そいつは困んな」

「だったら」

「——だがな、シユラ」

最悪、これまでの苦勞が全部水の泡になるかも知れない。それは困る。困るけれども。

もつと困ったことに、俺の心はとっくに決まっていた。

「俺は、俺の取るべき道だけは、絶対に間違わねえ」

「??なんでそんな事、言い切れるのよ」

「んなもん俺が、この物語のヒイロだからだ」

「??は? なによそれ、意味分かんない」

「結構だ。俺だけが分かってりや良い事だしな」

「??意味不明な上に、傲慢」

傲慢。言い得て妙だ。でも主人公つてのはある程度、傲慢にならなくちや務まらない。
い。

主人公なら。ヒーローなら。俺の憧れる夢なら。

ここで保身に逃げるなんて選択肢は、絶対に有り得ない。

だったらもう道は一つだ。

単純で良い。

「後悔するかも知れないわよ」

「ここでの手を取らねえなら、どっちにしる同じ事だ」

「??あつそ、もう良いわ」

第一、俺はグダグダと考えるのは苦手だし。

ならもう堂々と、困ってる人に手を差し伸べてやろう。

いつかと同じ夕暮れ時に。

今度は腫れも傷もない顔で。

代わり映えのしない決意を、灰銀髪の少女へ告げた。

「前にも言ったけど、あんたってほんと、暑苦しいやつね」

「ハ。うるせえぞ冷血女」

「暑苦しい馬鹿よりマシよ」

俺の決意の固さに、どこか一步引いた姿勢を取っていたシユラも、折れさせるのは無駄と分かったんだろう。

どこか諦めたように溜め息をつくど、長い銀髪を茜に染めて、シユラは俺に一步迫った。

「あたしも行くわ」

「??あア? 別に頼んでねえよ」

「うるさい。どうせあんた一人じゃろくに問題解決出来ないでしょ。なんせ馬鹿だし。ばーか」

「テメエ、取ってつけたように二回も言いやがったな!」

「二回も言わせたあんたが悪い」

「ふいっとそっぽを向きながらも同行を申し出るシユラの態度は、ちよつと意外だった。」

メタ的な視点で考えれば、てつきり俺一人で事に当たるもんだと思つてた。

だつてこれ、主人公とライバルの共闘だし。

まさかこんな序盤でそんな熱い展開になるとは、なかなか大盤振る舞いじゃないか。

意外ではあつても、悪いことじゃあない。実際、華奢で可憐な見た目に反して、味方であれば本当に頼もしい奴だ。

拒む理由なんてどこにも有りはしなかった。

(さーて、ヒーロータイムと行こうじゃないか!)

そうして、差し伸べた手が一つから二つに増えて。

空が夕焼けから夜に移ろうように、ハウチさんの目が悲嘆から希望に染まり行く。

ただそれだけの事になんとか嬉しさを覚えたのは??

もう焦がれるだけの夢じゃない。

そんな実感を、しっかりと肌で感じられたからなのかも知れない。

042 アッシュ・ヴァルキュリア

明くる日の空。

静けた夜が明け、瑠璃色が朝露に乾き始める早朝。

欧都の治安維持の為にと巡回の任についていたシドウは、アスガルダムの玄関である国門を訪れていた。

「これはシドウ殿、巡回任務、お疲れ様であります！」

「うむ。貴殿の方は変わりないか？」

「はっ！」

厳格な性格故に心暗い者に煙たがれ、余計な苦勞を背負い込む事の多いシドウである。

しかしその分、人望は厚かった。

門番を務める若き騎士もまた、シドウに対し信を置く人物である。

「恒例の春の入団、選抜も共に終わりましたね。入団試験の際は、確かシドウ殿が筆頭教官を務められたそうですねが」

「うむ。波乱はあったが、中々に見所のある者も居た。出来れば選抜前の強化期間にも指導してやりたかったのだが」

「シドウ殿もお忙しいですから仕方ありませんよ。しかしシドウ殿ほどの方に一目置かれるとは、今季の若手は豊作なのでしょうね」

「さて、どうであろうな」

人付き合いが得意ではないシドウではあるが、嫌いではない。

むしろこういう顔馴染みと費す、何でもない時間を憩いとするだけの器量はあるのだ。

だがその間にも、独眼は鋭さを保っている辺り、彼の厳格さは折り紙付きと言えた。

「若手といえば、つい先程に里帰りの為と門外に出た者達が居ましたね」

「??ほう。編成期間まで後一週間と迫る期には、少々悠長だな」

「まあ、正式に騎士となる前ですから。郷愁に駆られる気持ちは分かりますよ。しかし若手ながら、どうも存在感のある者達でして。こちらの二名なのですが、ひよつとしたらシドウ殿もご存知なのかも知れませんね」

「??む。ヒイロ・メリファーと??エシユラリーゼ、だと?」

他愛のない会話の一添えのつもりだったのだろう。

門番が差し出した届け出に記載された名は、偶然にも見所があるとシドウが見定めた

二人であつた。

とはいえ、それだけであれば両者の意外な繋がりに多少驚く程度であつたのだろう。揃つて門外へ出るともなれば、或いは懇ろな関係なのかも知れぬと、珍しく微笑まじさを覚えていたかも知れない。

だが、届け出の書類を手に取るシドウの顔付きは険しかった。

「貴殿に問う。外出届けには、里帰り」とあるが、確かか？」

「え？ は、はい。帰郷の為に、両者の口から直接申請されましたが」

「??門外には馬車で、とあるが？」

「ええ。十里ほど離れた村の者が丁度雇つた馬車に乗せて貰うとの事で。本人も了承しておりましたが??ひよつとして、何か問題が？」

「???
いや」

一見、問題はない。だが不自然と言う他なかつた。

まずヒイロは麓の村の出であることはシドウも把握していたから、馬車に乗る必要性を見い出せなかつた。

楽である事に代わり無いが、だからといってこんな早朝からの外出。

どうにも腑に落ちないが、何かしらの事情と言えなくもない。

(里帰りもなにも、エシユラリーゼの故郷は??)

だが、シユラに関しては別だった。

とある人物からシユラについての情報がある程度聞かされていたシドウは、全てではないが、知っていたのだ。

「エシユラリーゼにはもう、” 帰る故郷など無い ” ことを。

「????
「妙な事に、ならなければ良いがな」

届け出を門番へと返しながら、独眼はそつと彼方を睨む。

夜は明けても、まだ星も薄い灰色の空。

いずれ蒼に隠れる前の白い月に、ちぎれた雲が侵すように指先を伸ばしていた。



流れる風景。青々とした空。

揺れる草花の街道を、ガタンゴトンと馬車が行く。

みたいな導入で始めれば、少し古風な文芸作品の情緒の一つもあつたんだろう。

馬車での移動だなんて、花より団子派な俺でさえも栄古浪漫の名残を感じさせたくらいだったのに。

俺の隣で青い顔してる美少女のあられもない姿に、そんな情緒はどうにぶつ壊されていた。

「で。まだ気分は戻らねえのかよ」

「??見れば分かるでしょ??」

「つたく。乗り物が苦手なら最初つかからそう言いやがれよ。だらしがねえ」

「うる、さい??馬車に乗った事なんてなかったんだからしょうがな、うつ、あう??」

「だ、大丈夫ですかエシユラリーゼさん。俯いていると余計に具合を悪くしますから。背もたれに身体を預けて、楽にしてください」

昨日と顔色を取り替えたように、馬車酔いですっかり青ざめたシユラの介護をするハウチさん。多分、馬車を用意した負い目もあるんだろう。

つつても俺達の目的地であるコルギ村まで十里。バスや電車がある現代と違い、馬車以外の移動手段が無い以上、シユラには我慢して貰うしか無かった。

そんなこんなで、ハウチさんの介護の甲斐あってシユラの顔色が少しだけ落ち着いた頃。

「ところで昨日、聞きそびれた事が一つあるんだけど」

不意にシユラが、ハンチさんに尋ねた。

「はい、なんでしよう?」

「昨日、村長が声をかけて来た時??あたしを『優秀な騎士だと聞いた』と言っていた。でもそれって誰からの?」

「!」

(??あ。そういや、ハウチさんはシユラのことを最初から知っていた風だったな)

疑問は分からなくもなかった。

シユラの優秀さは紛れもない事実だ。けどその評判を一体誰が、昨日アスガルダムに訪れたばかりのハウチさんに伝えたんだらうか。

当のハウチさんは一瞬押し黙ると、少しだけ目を泳がせながら口を開いた。

「港町フィジカでのことを、私も聞いたのです」

「フィジカ???!??それって」

「はい。一年前、フィジカの港町を襲い続けていた凶悪な魔獣達。フィジカに住む人々を、その魔の手から護ってみせたという美しきアツシユ・ウアルキュリア灰色の戦乙女、エシユラリーゼさん。その活躍を、村に訪れた行商隊の商人から伝え聞いたんです! ですから私は、貴女であれば私の村を救ってくださるかも知れないと??」

「??商人って生き物は、どうして話を膨らませたがるのかしらね。あれ、大群ってほど

じゃ無かったわよ」

「けれど、魔獣から護ったのは事実ですよね？」

「??」

(アッシュ・ヴァルキュリア? なにそのヒーローっぽい通り名。ライバル枠なのに、ちよいと主人公っぽくはありませんか。ぐ、ぐぬぬぬ??う、羨ましくなんかないから??) 嘘です。超羨ましい。

自分の武勇伝を耳にしながらも、なんでもないように謙遜するムーブ。中学時代のお昼寝タイムで何度妄想した事か。俺が主人公じゃなければ、ハンカチ噛んでキイーツてやってた所だよ。

「テメエのへそ曲がり筋金入りだと思ってたんだが、昔の方は可愛げが残ってたみてえだな？」

「うっさい。女の過去を詮索すんな」

「してねえだろ」

「どうだか」

けど当の本人はといえば、あまり過去を触れられたくないらしい。

頬杖を付きながら、馬車の外を眺める静かな横顔。

酔い醒ましなのか、もつと誤魔化したい何かがあるのか。尋ねてみたって、答えてくれそうにはなかった。

「——何も、変わつちやいないわよ」

???)

ふと眩かれたシユラの独り言も、どうにもらしくない。

聞き逃しを促させる儂い一言は、蹄と車輪の音の波に呆気なくさらわれていった。

043 天下上等ヒロイック

都内住みにも関わらず空気の良し悪し新鮮さに、俺は実感を持てた試しが無い。

空気を読むのも下手な自覚はある。憧れに焦がれた心で思った事を口にするから、周りと歩幅も合わない事もしょっちゅうだったし。

でも、そんな俺にも一歩踏み入れただけで分かるほど、コルギ村の空気は重苦しかった。

「ここが、コルギ村」

「はい。本当であれば、ようこそいらつしやいましたと歓迎するべきなのですが?」

(暗いなー。村人の顔も、空気も??まさにどん底だ)

移動のうちに暮れた夕空に浮かぶ人影の群れは、誰も彼もが下を向いてる。春という季節の暖かみから隔離されたような心寒さ。

コルギ村が背負ってる問題を考えれば当然なのかも知れない。

現にこちらに気付いた村人達の顔色は、誰も彼もが濃い陰を貼り付けていた。

「村長、お帰りなさい。それで、どうだった!」

「残念ながら、騎士団の助けは??ごめんなさい」

「そ、そんな。やっぱり騎士団が腐敗してるとてのは本当の話だったんだ」

「じゃあ、私達の村は? 子供達は!? 滅ぶしかないって言うの?!」

「で、ですが落ち着いてください! こちらの騎士のお二人が私達の為に、欧都から足を運んで来てくれたのです!」

「騎士って、たった二人じゃないか?! 冗談は良してくれハウチさん! 捜索も見張りも、何十人であたっても成果が無かったのに! 二人増えたくらいじゃ何も?!」

「ハウチさんが村を出た後にも、被害は出続けてる。もう終わりよ。終わりなのよ?!」

「よせ、そうと決まった訳じゃないだろ!」

見るからに歓迎どころじゃない空気だった。

まあ確かに、聖銀鎧に身を固めた集団の助け舟を期待したんなら、俺達二人は見るからに肩透かしだろう。

仮にも無断で依頼受けてる身だからって、普段着で来たのがまずかったかなあ。

「皆、落ち着いてください」

「村長! この期に及んで落ち着いてなんか!」

「私が連れて来た方が、”灰色の戦乙女”だとしてもですか?」

「アツシユ・ヴァルキュリア!」

「それって、フィジカを魔獣達から救ったっていう、あの?」

「いやフィジカだけじゃない。ここから西のテルミ炭鉱町でも、魔獣を斃したって聞いたぞ」

「僕も聞いた事がある。しかし、騎士になっていたとは??てつきり吟遊詩人の嘯うそぶいたエツダか何かだと思つてたのに」

鶴の一声ならぬシユラの風評に、村人達の目の色は明らかに希望を灯し始めた。

「おいおい、シユラってどんだけ評判持ちだったんだよ。例の港町だけじゃなく、他にもちらほらと実績あるつばいし。」

「有名人じゃねえか」(いいなあ、もてはやされちゃつて)

「うっさいわね。なに、サインでも欲しいっての?」

「ケツ、いるかよ」

当のシユラといえ、向けられる畏敬の眼差しに対して胸を張る素振りも見せず、クールに澄ませている。

ぐぬぬ、この余裕。悔しい。けども格好良くも見えて仕方ない。

さすがは主人公のライバルというべきか。

俺の目指すべき道を、こいつはとっくに進んでしまっているらしい。

「じゃあ、隣の男は?」

「え、し、知らない。付き添いじゃないの？」

「相棒とか？」

「いや、灰色の戦乙女にそんなのが居たなんて話、聞いた事ないぞ」

「彼は一体??？」

「(???)よっし、やりますか」

しかしである。

例えライバルに大きなリードを見せてつけられたとしても、へこたれ続ける俺ではない。
い。

隣の英雄譚の為に小さく縮こまつてるなんて、主人公とは呼べやしないのだ。

だから俺は一步踏み出す。

見てろとばかりに背筋を伸ばし、怪訝そうに俺を見つめる村人達の前へと。

「確かに、俺にはこつちのお転婆ほどの知名度も実績もありやしねえ??ただの無名ネームレスだろ

うよ」

「誰がお転婆よ」

「フン??だがな、そりゃあくまで今だけの話だ。いいか、良く聞け村人共オ！」

そう。むしろここからは、俺のターンだ。

「俺の名前は、ヒイロ・メリファー。」

やがて俺はこの国一番の騎士?! そう、あのレオンハルトや隣の戦乙女すら越えて、最強の座に立つ男だ!

だから、喜びやがれテメエら!

期待されていない現状。大いに結構。上等だよ。

こっから成り上がってこそ、主人公の花道だ。

「俺が、悪夢を終わらせてやる!」

さあ、大言壮語で終わらぬように。

俺が誰なのかを分からせに行こうか。



「つてな感じに啖呵たんか切っておいて」

「ん?」

「真っ先にやる事は聞き込みなのよね」

「あア? んだよ、文句あんのか」(え、なんか問題でも?)

「別に。ただ、言動はガサツな癖に、変なところでまともぶられると調子狂うっただけ」

「んだそりゃ。文句の付け方までお高く止まってやがんなコラ」(もはやただのいちゃも

んじやん)

こう、俺が張り切つてる度に水を差すのを恒例にするのはいかなもんかね。

罵詈雑言フィルターを通してながらも、割と本心な不平不満。対するシユラといえば、俺への雑な物言いに悪びれる素振りもなく椅子に背を預けていた。

調子狂うつてなあ。シユラなんかでの俺つて、聞き込み調査なんてまどろっこしいと、草の根搔き分けて手掛かり探すパワー系に分類されてんのかね。

(見縊みくびつて貰もらっちゃ困るぜ、シユラさんよ。こちとら主人公とはなんぞやを学ぶ為ために、色んな創作話さつわに手を出して思春期潰つぶした男ぞ。当然ミステリー系もばつちしだ)

調査の基本は「聞き込み」だ。探偵ものでも刑事ものでも、難事件の手掛かりを掴むにはこれが重要。ほら、百戦錬磨のベテランほど言うじやん。情報は足で稼かせげつて。

だからこそ今、俺達は事件に関わる村人の家を訪れている訳である。

「あのか?」

「ん。あア。すまねえな、話の腰を折よちちまって。事あるごとに噛み付きやがる奴だよオ、あいつは無視してくれて良いぜ」

「犬みたいに言うな」

「うっせえ、事実だろうが。んじや、改めてもっぺん確認すんだがよ?? テメエんとこの坊主が、”二番目の被害者??” 商家の三男坊とで探検たんけんごっこやらをやつてたんだつてな

「？」

「??ええ」

血の巡りの悪い顔で頷いたのは、失踪した商家三男と最後に会っていたらしき少年の、母親だった。

あんまり眠れてないんだろう。母親は細々と、あらましを話してくれた。

「うちの息子と三男のクミン君は昔から一緒に遊ぶことが多くて、探検隊ごっこ称しては、村の周りを探検しに出かけていました。だから、あの日も本人達は探検のつもりだったんでしょう??クミン君と息子とで、村外れの共同墓地に集まったそうです」

「共同墓地で探検? ずいぶん趣味が悪いわね」

「いえ、墓地で集まったのは、その先にある森で探検するつもりだったからみたいで??あの森で、エミユちゃんが一番最初に方知らずになりましたから」

「エミユってのは、最初に失踪した子供だったな??搜索も兼ねた探検のつもりだった訳か」

けども、話はごっこ遊びじゃ済まなくなり、ミイラ取りがミイラになってしまった。

ごっここと称する以上、遊び半分のつもりでもあったんだろうが、どうにもやり切れない話だ。

「あの森は山菜が多いのですが、そのぶん鬱蒼としていて見通しが悪く??深くに行けば

大人でさえも迷ってしまうような場所です。息子も、奥へと進んでいくうちにクミン君とはぐれてしまったと聞いています」

「??で、そのまま三男坊は行方知れずになっちまったのか」

「??はい。すいません、本当なら息子から直接話させるべきだとは思いますが??」

そこから先の言葉を紡ぐように、彼女は閉じた扉を見つめた。扉の向こうには、友達が行方知らずとなったシヨックで塞ぎ込んでしまった件の息子が居るらしい。

無理もないよな。事態の大きさを考えれば、罪悪感と恐怖で潰れそうになるのも当然だ。

当然、責めるつもりもない。隣に目を配らせればシユラも同感だったらしく、柔らかい睫毛を静かに畳んでいた。

「それと、手掛かりになるかは分からないのですが??」

「なんだ?」

「はぐれてしばらくした後、息子は妙なものを聴いたと言っていました」

「妙なもの?」

「??歌、です」

「??歌?」

経緯を頭ん中で整理していく最中で、不意に告げられた新情報に、俺とシユラは揃っ

て目を丸めた。

鬱蒼とした森の奥で、歌。なんだそれ。

あまりに場違いな二つの要因が、この村を襲う怪事件を一層不気味に仕立てている気さえした。

「どう思うよ、シユラ」

「その”歌”が単なる幻聴の類じゃないのなら、人以外の何かが絡んでる。そんな気がするわ??嫌なくらいにね」

「??フン。なら、話は早えな」

情報は出揃ったとは言えなくとも、取っ掛かりはもう見えた。

調査の鉄則は地道な回り道。急ぐ為のまどろっこしさを越えたのならば、後は最短ルートで良いだろう。

「行ってみようじゃねえか。その森とやらに」

それに、ぶつちやけ??俺、遠回りって好きじゃないんだよね。

割と方向音痴だし。

044 魔獣

「で、噂の迷いの森に来てみた訳だが。割と普通の森だな」

「??まあ、確かに」

空模様はいっしか焼き回したような夕暮れだった。

並立する木々の群れ。茂らす若葉を秋色に染める。

ずんぐりと広がる景色を前に、身も蓋もない感想を落つことす二人の男女。

どうも、そうです俺達です。

「最初の一人目はここで山菜取りに行つて失踪。二人目は探検ごっこ中に行方不明だつたわね」

「三人目は付近の川に魚釣りに行つてから。四人目は村で、母親に抱かれたままにも関わらず。全体で見りゃ一番不可解なのは四人目の失踪だが、三人目もこの森と無関係とは言えねー」

「??川の上流近くは、この森に繋がってる」

「だからこの森は、三人の失踪に関わってる」いわくつき「つっ」訳なんだが??もつとこう、薄気味悪イ雰囲気か漂つてると思つたんだがな」

「そうね。魔素の流れも特別変わった感じはしない。魔獣が住処にするんなら、多少は歪いびつさがあるもんだけど」

「(?!いびつ、か。それ言うなら、後ろの共同墓地の方がよっぽど悍おぞましい空気してんだよなあ)」

後ろ髪を引かれるように振り向けば、茜色が照らす木造墓標の群れがあった。

名前も顔も知らない他人の生きた証がこうもずらりと並べば、不気味さの一つや二つ、嫌でも感じざるを得なかった。

「とやかく言っても仕方ねえな。ただの森かどうかは入ってみりやあ分かる話だ」

「出たところ勝負のつもり？ ま、変に慎重になるよりはあんたらしいけど」

「うるせえよ。普段以上に口が減らねえなテメエは。アレか？ 魔獣相手かも知れねえって今更怖じ気ついちまってんのかア？」

「はっ。吠えたわね、無名ネームレスが。誰に言ってるのよ。このあたしが、魔獣相手なんか怖じ気つく訳ないでしょ？」

フィルター補正で挑発気味になってしまうのも、もう慣れて来たこの頃。

けれどシユラからすれば、当然額面通りに受け取るしかない訳で。

「むしろ——臨むところよ」

語気を強める彼女の心情を代弁するかのように、トレードマークの赤マフラーがぶわ

りと舞い上がる。

いかん言い過ぎたかもって後悔する間もなく、シユラが一步踏み出した時だった。

「待たれよ、その若人共」

「へあつ」

「あア?」

急に現れた第三者に、出鼻を挫かれたせいだろうか。

憤然と踏み出した灰色の戦乙女さんは、膝カククンを受けたように腰砕けになってらっしやった。



「お主ら、旅の者か」

巷を騒がす噂の乙女をへっぴり腰にしたのは、ボロボロの黒絹に身を包んだ老人だった。

見事なインターセプトだったが、その格好。錆びたスコップと古いカンテラを手にかけてながら、じいっと俺達を見つめる老人は、正直かなり不気味だ。

「いや違え。俺らは村長に雇われたもんだ。失踪事件を解決してくれて依頼されて

な」

「そうか。ハウチの言っていた騎士とは、お主らのことか」

「ヒイロ・メリファーだ」

「???
???
???
エシユラリーゼ」

「エイグンだ。墓守をやっておる」

「どうやらこの人は村の人間だったらしい。ハウチさんの名前が出た辺り間違いないだろう。にしても墓守か。うん、居ても不思議じゃないよな。ここ墓地なんだし。」

「一方で、恥ずかしい目にあつたからだろう。ギンツと鋭い目付きで、シユラは睨みつけていた。何故か俺を。」

「俺なんもしてないのに、ひどいや。」

「それで、あたし達になんの用よ。生憎、墓標に名を刻む予定は当分無いつもりだけど」

「おいシユラ。テメエ、ビビらされたからって性根の悪い絡み方すんじゃねえよ」

「し、してないわよ!?!?じゃなくてっ! ビビってなんかないわよ! ちよつと躓つまづいただけですけど!」

「そうか。驚かせてしまつてすまんの。お主らが森へと入ろうとしておつたから」

「だから驚いたりなんかしてない!」

「プライドが傷付いたのか、必死に弁明するシユラ。場所を選ばない赤面っぷりは、夕

焼けにも負けず劣らずあら可愛い。

「??森に入ったら不味いつての何か?」

「うむ。森は、とても危険じゃ。お主らも聞いておろう。この森では既に二人の子供が行方知らずとなつておる」

「聞いてるわ。けどあたし達は、その危険を排除しにこの村まで来たの。忠告なら不要よ」

「しかし、もう直に夜となる。村の者でさえ方角をさらわれる森の中で、夜の闇はより深くお主らを惑わせるぞ?」

どうやらエイグンさんは、忠告の為に声をかけてくれたらしい。

言わんとする内容も分からなくもなかった。本当なら日を改めて森に踏み入るべきなんだろう。そつちのがよつぽど危険も少ないのも分かる。

『どうか、どうか私の村をつ??コルギ村を、お救いくださいっ!』
けれども。

心は、そうとは領かなかった。

「例えそうだとしても、俺はもうこの村に啖^{たんか}を切つてんだよ。俺が悪夢を終わらせてやる、つてな」

「??」

「4人目の失踪を考えれば、今夜また誰かが居なくなつちまうかも知れねえんだろ？
だったら迷つてる暇はねえ。最短距離で突つ走るのみだ」

「??若いのう、お主。直線的な男じゃ。こんな寂れた村の為に危険に飛び込むか。お主
らのような騎士が、まだ残つておつたとはのう」

無鉄砲だと思われてるんだらうか。

老人のしやがれた笑い声が、乾き風に静かに絡む。

まだ灯らないカンテラに視線を落としながら、エイグンさんは再び口を開いた。

「ならば、一つだけ言っておく。森の奥にある廃墟には、決して近付いてはならぬぞ」
「廃墟？」

「かつて、孤児院だった場所だ」

「孤児院??」

（シユラ?）

新たに忠告を重ねた時、せつかちな夜の帳が下りたのかと思うくらいに空気が冷えた。

それはひとえに、エイグンさんの纏う雰囲気には張り詰めたものが混ざつたのもある。
けど、何より言葉をなぞつたシユラの動揺が顕著だった。

目を配つても、なんでもないうつて言いたげにかぶりを振る。聞くなつて事なんだろう

か。

気にはなるけど、確かに今は、詮索すべきはそつちじゃなかった。

「どうして、そこに近付いちやいけねえんだ」

「??お主らは騎士なのであろう? 墓を暴くは、誇りと勲章とは無縁の者らの為す大罪だ」

「墓、つて??」

「眠れるみなしご達の魂を、無闇に夢から醒ます権利など誰にも無いのだ。例え騎士であつても、王であつても。お主らも、そう思わんか」

「???」

廃墟となつた孤児院を、エイグンさんは墓と称した。

それはつまり、その廃墟で命に関わる何かの事情があつたつて事なんだろう。

ゆつくりと振り返つて、スコップを地に刺す背中へ、事情への追求を明確に拒んでいた。

(訳ありつて事か)

しかし、分からない事ばかり増えていく。

正直、歯痒さもあつた。でもぶつちやけ、俺こそがこの世界で一番の訳有りだ。踏み入つて欲しくない事は誰にだつてあるもんだ。俺にもシユラにも、他の皆にも。

そんな、なんとも言えないやり切れなさに、気まづく頬をかけた時だった。

「??ヒイロ」

「ああ? どうした、シユラ」

「何か、様子がおかしいわよ」

「様子って、何のだ」

「??”森!”」

二ヶ月前、長閑な村の安穩を襲ったように。

”驚異”は、前触れもなく暗がりからやって来た。

【G e a G e a !】

【G G i ? G i G i i , G i i e e】

【G y a , G y a !】

(な??なんだよあれ。森の木々から、黒い影がいくつもっ!)

現れたのは、影の群れ。

聞き取れない不協和音を発しながらこちらへと這い寄る黒い物体。

【G G G G — ! G i i i G y a G y a G y a G y a G y a ! ! !】

「なっ??なんだってんだ、あの影共は??!」

「っ、ヒイロ! 戦闘態勢、構えて!」

そいつらは、まさしく異形だった。

でつぷりと膨らんだ腹。鉤爪みたく爪が伸びた両手。

目と鼻がどこにあるかも分からないほどに、真つ黒な顔。ただ口だけが、ぱっかりと

三日月に嗤つてる。

まともじゃない。

ああ、そうか。そうなんだな。

分かった。腑に落ちた。

本能的にも、理屈的にも。

あれが??あいつらこそが。

人類の、天敵。

「――」魔獣、よー!

【Gya】

闇の塊のような黒影が、答えるように短く鳴いた。

045 姿なきマザーグース

魔獣。歩く災厄。不倶戴天の敵役。かたき

なんて風にさ。

いかにも強敵出現って空気を作ってみた訳だけど、魔獣とはつまりモンスターみたいななものだ。

それでモンスターはピンキリである。ドラゴンや巨人みたいな血の気も凍る程に恐ろしい奴もいれば、スライムのような、いわゆる雑魚モンスターも居る訳で。

「おらア！」

【Gee!?!】

「そこオ！」

【Gibya!?!?!?】

「だらアツ！」

【Gi??】

えー、ご覧の通り割と弱いっす。だってそこそこのパンチで面白いくらい吹っ飛ばん
だもの。

見た目の禍々しさは凄いの、なんだこの手応えのなさは。

(ハッ！ ひよつとして俺、自分でも気付かないうちに覚醒を果たしたのか!?)

いやねーだろ。主人公の覚醒イベがこんな知らず知らずのうちに来るとか。一番の盛り上がり所がこんなあつさり来る訳ないし。つまりアレだ、マジな雑魚モンズって事なんだろう。現に俺もシユラもボッコボコにしてるし。満を持して登場した割には、ぶつちやけ肩透かし感が否めない。

「ハアアアッ!!」

【G y a a a!!?】

ただ、だからこそ。

一閃一閃が全身全霊なシユラの剣幕に、強烈な違和感を覚えてしまう。

【G e b a i e y a e !?】

【G i ? ? G i G i】

【G e e e e ? ?】

「なによ、脅えてるの？ 笑わせないでよ??魔獣の分際で」

なんだよこの気迫。殺気が尋常じゃない。向けられていない俺でさえ、羅刹じみたシユラの形相に足が竦すくみそうになる。

けれどもそんな俺とは裏腹に、シユラは更に魔獣を駆逐せんと一手を切った。

尋常じゃない殺意。明確な憎しみを込めた技の数々。

その普段の荒つぽさとは全く違う寒々しさに、俺は言葉を失ってしまった。

「あたしの前に立った以上、お前達は??一匹残らず殺し尽くしてやる」

「!」

いや、薄々は分かっていた。

シユラが魔獣に対して並々ならぬ執着を抱いてるだろう事は。でもまさかここまでとは。まるで親の仇のような勢いで、シユラは魔獣達を殺している。

ぶつちやけ魔獣なんかよりも、シユラの方がよっぽど恐ろしい。

魔獣達も気圧されているのか、狼狽えるように後ずさる。

そんな折だった。

「La——Ah——Ah——」

「???
歌?」

どこからともなく響いた女性の歌声に、手が止まる。

突拍子もなかったからでもある。でもそれ以上に、その歌声の異質さに身体が反応してしまった。

歌声自体は澄んでいるのに、洞穴から発しているような不気味な響きが奇妙だった。

「Gyaemamaaje」

【G i i i i】

【m a a a a a a a】

「魔獣が退いていく??? どうなってやがんだ」

異変はそれだけに留まらない。

シユラに恐れ慄おのいていた魔獣達が、奇声をあげながら一斉に森の奥へと帰っていく。

「っ!」

「シユラ!? どこに行きやがる!」

「決まってんでしょ追いかけるのよ。逃がしてやるもんか?? 一匹残らず、刈り殺してやるっ」

「!」

っておい、どこまで血の気が多いんだよこいつ。

罨とかそういうのを一切考慮せず、シユラは魔獣達を追いかけて森の奥へと消えていく。

制止の声なんて聞きやしない。あいつ、新米兵士の頃の訓練じや猪突猛進とは無縁だったの。魔獣相手だからか、冷静さを欠いているとしか思えなかった。

「今の歌声は、まさか??」

「っ、墓守! テメエはさつきさと村ん中で縮こまってやがれ!」(危険だからエイグンさ

んは村に避難してくれ！)

「お、お主、待つのだじゃ??森の奥に行つてはならん！」

「文句はあのイノシシ女に言いやがれ！」

止めようと声を荒げるエイグンさんだったが、流星に今のあいつを一人で放つておく訳にもいかない。

それこそ本当に修羅と化してるアイツを放置したら、森ごと魔獣達を燃やしかねないし。心配なものもあるけど、このままじゃあんな啖呵を切つといて見せ場無しで終わるかも知れん。

それはまずい。非ツ常にまずい。なんとしてでも阻止せねば。

割と自分でも俗っぽいなと思う理由に突き動かされながら、俺は急いでシユラを追うべく、森へと足を踏み入れたのだった。

046 孤児院の黒き母

(待つてろよシユラ、今行くぞシユラ！なんか明らかにパーサーカーしてるっぽいけど、主人公の見せ場はちゃんと確保しといてよほんとに！)

なんて風にね、意気揚々と追いかけていて何ですけどね。

結果だけ言えば、すぐにシユラには追いつけた。ものの十分くらいで。

というのも、鬱蒼と茂る木々の一本の前で、あいつは何やらしやがみ込んでいたんだ。

「シユラ！」

「??」

「おいシユラ、なにしてやがる。魔獣共はどうした」

「??これ」

「あア？」

「これ、見なさいよ」

手招く訳でもなく見ろの一点張り。なんなんだよもうと思いつながらも仕方なく歩み寄り、シユラの足元へと視線を移して。

背筋に寒気が走った。

「!」（ひえっ）

頭蓋骨だった。しかも子供くらいの大きさの。

ヒイロ補正のおかげがみつともない悲鳴は出さずに済んだけど、流石に狼狽うろたえてしま
う。

「さっきの小鬼の一匹が掘り返してたのよ」

「魔獣が？ 土葬でもしてたっていうのか」

「知る訳ないでしょ。でもこれで分かったわ。この森の奥に、失踪事件を引き起こした
魔獣がいる」

「なに。どういうことだ」

「多分これ、行方不明になった子供の骨よ。で、さっきの歌はあんたも聞いてたでしょ。
あの歌??墓地を探検して森に入った子供が聴いたっていう、アレのことじゃないの?」

「?!」

言われて思い出したのは、二番目の被害者の商家三男坊クミンが行方不明になった経
緯だ。クミンと一緒に森を探検してはぐれた子供が聴いたという歌。シユラはあの気
味の悪い歌が、そうなんじゃないかって考えているんだろう。

「小鬼の魔獣はあの歌に反応した。なら歌の大元が今回の事件を引き起こした元凶、つ
て考えるのが自然よ」

「フン」（まあ、確かに）

森に元凶が居る。シユラの結論には俺も同意したい。

鬱蒼とした森の奥に居るボスキャラなんて、言ってしまうえばお約束みたいなものだし。

「??だったら孤児院だ」

「え?」

「元凶ってヤツは恐らくそこに居る。勘だがな」

更にそのお約束になぞらえるなら、歌う魔獣はエイグンさんの言う廃墟になった孤児院に潜んでいる気がしてならなかった。

だってさあ、意味深過ぎる。村人達が絶対に寄り付かない廃墟とか、RPGとかじゃモンスター単になるには定番スポットだし。

忠告してくれたエイグンさんには悪いけど、事件を解決するなら踏み込む以外の選択肢はないだろう。

「??あんたの勘が当てになる気はしないけどね。脳筋だし」

「誰が脳筋だこのアマ」

「あんたしか居ないでしょ。でも孤児院を目指すつてのは賛成よ」

「ああ? どういう事だそりゃ」

「あたしの勤も、そこだって言ってるから」

「??うぜえ」(??いや、だったら最初っから同意しててよ)

うん、それただ俺を脳筋って言いたかっただけじゃん。

そんな疑問を呈したところで取り合わないだろう背中が、俺に構わず森の奥へと進んでいく。

足取りに淀みはない。シユラの頭の中には、もう魔獣を刈ることしかないんだろう。

(??嫌な予感がする)

胸騒ぎがしていた。未知なる魔獣に対してのものか。あるいは魔獣への執着を轟々と燃やしているシユラに対してのものか。

どちらかの判別さえ迷わせるほどに、森は更に深く暗くなっていた。



シユラが白魔術の感知を駆使してお目当ての場所に辿り着いた頃には、辺りはすっかり陽が暮れていた。

「??此処か」

「そうね。いかにもって雰囲気だわ」

暗い森の奥深くに在ったのは、孤児院というよりは教会に近い外観の廃墟だった。

いやもうね、シユラも言ってる通り雰囲気やババ。なにがババいって、ただの廃墟じゃない。孤児院の至る所に焼き焦げた形跡があったのだ。

どう見てもいわくつきである。どう見てもいわくつきである。魔獣の住処だと思つてたけど、むしろ怨霊とかの方が絶賛住み着いてそうなんですけど。

「気配がするわね」

「魔獣のか？」

「他になにがあるっていうのよ」

「シンプルに野獣だったりするかもしれないねえだろ」

「無いわね。このあたしが、獲物の気配を嗅ぎ分けられない訳ないでしょ。なによあんな、ひよっとして怖気ついてるの？」

「??隣に野獣じみた奴がいるせいで、慎重にならざるを得ねえんだよ」

「っ。誰が野獣よ、誰が」

別にシユラのセンサーを疑ってる訳でもないんだけど、魔獣相手だとほんとに寧猛極まらないなこいつ。

ともあれ此処にコルギ村を悩ませる魔獣が居るのは間違いないらしい。でも流石に

魔獣の巣と化してそんな場所に正面突破するわけにもいかない。

とりあえず中を伺える隙間を探そうと、俺とシユラは廃墟へと近付いていったんだが。

「—— a ——— i e ———」

「!」

廃墟の正面扉から漏れ聞こえる音に、俺達はハッと顔を見合わせた。

歌のようにも、誰かのささやきにも思える女性の声。

示し合わせた訳でもないのに、俺達は息を殺して正面扉へと近付く。焼き焦げてボロボロの扉には僅かな隙間があった。廃墟内を疑うにはまさにお謎あつちえ向きで、俺はゆつくりと隙間を覗く。

「?!」

そして、飛び込んで来た光景に息を呑んだ。

「G e e e e e, e e e e e」

「m a a, m a a, m a a」

廃墟の孤児院は、内装まで教会といっても良かった。

正面扉の向こうはそのまま礼拝堂となっているんだろう。

いくつも並ぶ教会特有の横長椅子。そこにまるで信者みたくあの小鬼達が肩を並べて座ってる。その光景は不気味を通り越して異様とも言えたけど、俺が息を呑んだ理由はそこじゃない。

【La—goo—nnigg—ssleep—】

もつと奥。小鬼達に崇められているかのように礼拝堂の祭壇に腰掛けてソイツから、俺は目が離せなかつた。

小鬼と同じ真つ黒な身体中の至るところに亀裂が生じていて、亀裂から黄緑色に発光している。更に頭からはオレンジ色の長い髪が垂れて、姿形は人間の女性に近い。

けれどなにより呆気にとられたのは、その魔獣が愛おしそうに頭蓋骨を胸元に抱いて、撫でているからだつた。

(?!あの骨、まさか!)

人間の頭蓋骨。それも多分子供のものだ。確信めいた予感が走る。あれは多分、失踪した子供達の遺骨じゃないのか。

それをあんな風に、まるで我が子を愛おしんでるような。

優しい手つきで。母親みたいに。

「なんなんだよ、あいつは?!」

あまりに異様な光景だったからだろう。自分でも気付かない内に口から動揺がこぼ

ずもがな、シユラのおかげだった。

「つたく、なに先手取られてんのよあんたは」

「ぐう、うるせえな。ちつと油断したただけだ」

「あつそ。じゃあさつさと立ちなさいよ」

「言われるまでもねえ?!」

シユラの檄に、衝撃の抜けきらない身体を無理矢理奮い立たせる。ちくしよう、まんと貸しを作っちゃった。しかもシユラと来たら、憎まれ口を叩きながらもその目は油断なく教会内を睨んだままだ。

その歴戦を思わせる立ち振る舞いは、お世辞抜きに格好良かった。

【Gii, Giii?!】

【Gnejhhqqq】

【Giii!!】

それで、出てきましたよワラワラと。

夕暮れから夜に移ろえども変わり映えしないフォルム。でも心なしか、さつきの戦いの時よりも獯猛さを増している気がした。

「ずいぶん威勢が良いわね。あの奥の大物の手前、張り切つてるとでも言いたいのかしら」

『燃やせ、燃やせ、赤のはじまり』?? 『イフリーストの爪』!』

【Geeeeeeeeaaa!?!?】

しかも小鬼達の数が多くと見るや、間髪入れずに赤の魔術をぶつ放してるし。炎の爪に引き裂かれた魔獣達の断末魔を前にしても、シユラは全く落ち着くそぶりがない。もはやどつちが鬼なのか分かつたもんじやないくらいの形相のままだった。

【a—aaa—aaaaa—】

【!】

一方で、形相を歪ませたのはあの歌う魔獣の方だった。

赤の業火に吞まれ尽きる小鬼達へと魔獣が手を伸ばして、うめき声をあげていた。

「次はあんたの番よ、院長気取りッ! 『燃やせ、燃やせ、赤のはじまり』ッ!」

【——】

でもシユラは止まらない。むしろ魔獣の悲哀めいた所作すら許せないかのように、再び呪文を唱え始める。おまけに練られてる魔素の量も尋常じやない。

あいつ、廃墟ごと魔獣を燃やし尽くす気か!?

周りなんてお構いなしなシユラの強行を、止めようにも間に合わない。

【cry^ク・more^ラ——AaaaAaaaAaaaAa!!!】

シユラを止めたのは、歌の魔獣の激唱だった。

!!!

「ぐううう??いきなりなによ、こいつ」

「ツ?!?鳴いてやがるのか?」（あの魔獣、泣いてるのか）

鼓膜がぶち破れるかかってくらの叫びには驚かされたけど、それ以上に魔獣の両眼から伝う紅い雫が、涙にしか見えない。

「今更嘆いたって遅いのよ?? 『イフリーストの爪』 ツ!」

これ以上、妙な真似をされる前に叩くべきだ。

合理性と私情を織り交ぜたように呟いて、シユラが赤の魔術を完成させる。

しかしそれが、あの魔獣の叫びが鳴いてる訳でも、泣いてる訳でも無かったという事を存分に知らしめた。

「魔術が、発動しない???」

「なに?!」（不発?! なんで??）

茫然と手のひらを見つめるシユラ。その手の爪は紅蓮の炎を生むことも、橙色に光ることもない。あれだけ高濃度に練られていた魔素さえも、完全に霧散してしまっている。

彼女にも何が起こっているのか分かっていないようだった。

「まさか、さっきの叫び声は??!」（もしかして、クオリオが言ってた”アレ”か?!）

脳裏に蘇よみがえるのは、魔術について教鞭を振るうクオリオの台詞。

『四原色以外の属性？だから白の魔術は汎用だつて何度も言つてるだろう。え？じゃあ黒はなんなんだ、つて？ それもさつき言つただらうに。忘れっぽいなキミは、全く』
『いいかいヒイロ。もう一度言う。白は汎用。そして”黒”は??魔獣が扱う魔術のことだよ』

— c r y . m o r e —

「??黒の魔術か！」

その通りだと答えるように。

紅い涙を伝わせて、歌の魔獣がギラリと歯を剥いた。

048 アイネクライネ

赤は炎。青は水。緑は風。黄は土。白は汎用。

そして黒は人ならずの域。魔のモノだけが振るう術。^{すま}

「このクソ魔獣、よりにもよって魔術持ちかよー！」

魔術はなにも人間だけの特権じゃない。魔獣の中には魔術を扱える種族もあり、この歌う魔獣はその扱える側って訳だ。

「魔術の詠唱不能??沈黙状態にしたっていうの?!」

「よりにもよってバッドステータス付与の魔術かよ、面倒くせえつたらねえな！」（序盤のボスキャラにしちや捻くれ過ぎてませんかね!）

つまりさっきの泣き叫びこそ黒の魔術であり、おまけに魔術詠唱をさせなくさせる『沈黙』付与という厄介さ。

とういかまた状態異常ぶん撒くタイプかよ。こちとら対シヨーク戦で充分お腹一杯なんですけど。考えたヤツ絶対性格悪いだろ畜生が！

「G a a !!!」

「チイッ！」

相手は魔獣。こつちの動揺なんて気にも留めちゃくれない。

廃墟外から戻ってきたらしき小鬼の奇襲を、辛うじて蹴り飛ばしながら気を取り直す。

そうだ。落ち着け。沈黙がなんだってんだ。魔術が使えない。だからどうしたよ。

正直あんまり関係ないんだよこちとら！ 言つてて悲しいけどな！

「シユラ！魔術封じられた程度で動揺してんじゃねえ！」

「なっ、誰が動揺してるですって!？」

「だったら手を動かせ！まだ小鬼共は残ってんぞ！」

「この、あんたなんか言われなくなつたって?!？」

若干の八つ当たりを込めた檄を飛ばせば、シユラも我に帰つたように小鬼の魔獣を蹴散らしていく。

廃墟内に響き渡るのは、銀剣の閃りと魔獣達の断末魔。

そう、俺達は騎士だ。魔術師じゃない。この身この剣があれば充分。魔術がちよつと使えないからって、慌てることなんてないんだ。

見る見る内に数を減らしていく魔獣達を見れば、実感はひとしおだった。

（よし。よし。なんかバーサーカーつてたシユラに見せ場持つてかれかけたけど、ペースは戻せた！）

別に、慌ててたのは魔術云々より全部シユラにもってかれてた事を危惧してたからとかじゃないから。主人公（笑）になりかけてて焦ったとかでもないし。

大丈夫、主人公はうろたえない。

「だらアアツ!!」

「Gi ya e!?!」

「シイイツ!!」

「Gi, a o o?!?!」

ともあれ持ち直した俺達は、勢いそのまま廃墟内を立ち回り。

気付いた頃には、小鬼達の掃討は終わり。残すは祭壇に鎮座したままの魔獣のみとなっていた。

「?!あらかた片付いたか。手間取らせやがって」

「後はアイツだけね。妙な真似してくれた報い、しっかりと払って貰うわよ」

しかしあれだな。台詞だけ見るとどっちが敵役なのか分からんな。なんせバーサーカーと悪人相だし。仲間を討たれて項^{うなだ}垂れる魔獣の方が、よっぽど悲壮感漂ってる。

とはいえ同情心なんて湧かせてられるほど、生温い相手じゃない事は先刻承知だ。

「Ruu, Ruuu, uuuuuuuuAAA」

「っ!」

予感的の中した。魔獣はただ項垂れていた訳じゃない。
地響きにも似た唸り声が旋律を作っていた。

「—Ei^アneCry^ネine^ク—RUuu, uuuuAAA—」

「ンの野郎、また歌かよクソツタレが!!」

さっきの沈黙付与の叫び歌が中音域なら、今度は低音域の嘆き歌。聞いているだけで体温を奪われていくような寒々しいメロディに、背筋が震え上がりそうだった。

いや待て。震えてる場合じゃない。この歌も黒の魔術なんだとしたら、またなにか悪い影響があらわれるんじゃないか。

そう思つて、咄嗟に俺は身構えた。しかし。

「???
???
???
ああ?」(あれ? 別になんともないんだけど)

え、もしかして不発?

まさかさっきの沈黙付与の歌で、自分も沈黙になつてましたとかそういうドジっ子プレイじゃないよな?

ちらつとシユラを一瞥するも、微動だにしてない。てつきり痺れとか風邪とか付与されるかと思つてただけに、拍子抜けだった。

「ハッ、只のこけおどしか。美声をどうもありがとうよ??おいシユラ! 一気に畳み掛けんぞ!」

何も無いならそれに越した事なし。さあ決着をつけるぞとばかりに剣を構え、シユラに促したんだけど。

返事はなかった。それどころかあれだけ執着を見せた魔獣相手に、立ち尽くしたままだった。

「??シユラ? おいテメエ、聞いてんのか?! なにをボサツとしてやがる!」(シユラ? シユラさーん? なにフリーズしてんだよ、おーい!)

流石におかしくないか。そう思ってシユラの方へと体を向けたのが、結果的には良かったんだろう。いや、不幸身の幸いっていうほうが正しいか。

「――」

「ッ?!」

何故なら、気付いた時にはもう既に。

シユラは俺に斬り掛かっていたのだから。

「ぐあっ?!」(はあっ?!)

間一髪どころじゃない。運が良かった。

ほんの一瞬でも反応が遅れたら、腕の一本どころか真つ二つだった。

斬撃を受け止めた腕がまだビリビリと痺れてる。間違いない。今の一撃は本気だった。本気で俺を斬るつもりだった。

「て、てめえ、なんのつもりだシユリア!!」(急になにすんだよ、殺す気か!?)
いきなり斬り掛かられる覚えなんてない。

訳も分からないまま、半ば反射的に問いただしていた。まさか主人公の座を狙つての裏切りか、だなんて身も蓋もない妄想だつてしちやつたくらいだ。混乱したつて無理もないだろう。

「やらせ、ない??」

「あア!?!」

”院長”は??殺、させない??」

「院長だど!?!?テメエ、なに言つて??!」

けれどシユラの目を見れば、頭は一気に冷めた。

光を失くした虚ろな目。ボソボソと囁く脈絡のない言葉。

明らかに、今のシユラは”異常”な状態だった。

「殺させない、奪わせない??もう、二度と。だから??」

そして、捻じ曲げられた意思のもと。

刃は真つ直ぐ俺へと向けられた。

「お前が、死ね??!」

•

049 相棒との邂逅

「アアアアアツツ!!」

喉が張り裂けんばかりの絶叫から繰り出される一撃は、見かけ倒しで済んでくれるはずもなかった。

「消えろオー!」

「ぐうおおっ?!」(なんつー、馬鹿力してんだこいつ?!)

全霊でぶつかるような斬撃。受け止めるだけで腰が砕ける程に重い。華奢な身体はどこからそんな力を絞り出せるっていうんだ。そんな悪態すらつく暇なかった。

「チイツ!このクソアマ、目エ醒ましやがれ!!なにまんまと魔獣に操られてやがんだよ、おいっ!」

「うるさいっ!あたしから奪っておいて!殺してやる!また奪うんつもりなら何回でも殺してあげるわよ!」

「クソツ、意味の分からねえ事をベラベラと!」(どうしたってんだよシユラ! 訳わかんねえよ!)

言葉がまるで通じない。それどころか、シユラの言動は支離滅裂になってしまってい

た。

どう考えても普通じゃない。何かがシユラを狂わせている。

その原因はもはや一つしか思い浮かばない。

「デメエの仕業かア、クソ魔獣！」

【clurururu??】

未だに抱え続けている誰か頭蓋骨を撫で付けながら、赤目を光らせている魔獣。原因はアイツだ。アイツが歌ったさっきの黒魔術。あれを聴いてからシユラの様子はおかしくなった。

恐らくあの黒の魔術は沈黙の歌と同じ、バッドステータスを付与する類のものなんだろう。そう考えれば、シユラがかかっている状態異常にも検討がついた。

（多分シユラが患っているのは『洗脳』だよな。くそつ、状態異常の中でもとびつきりに厄介な類じゃないか！）

俺だつて馬鹿なままじゃない。ショックとの戦いで状態異常のヤバさを痛感したんだ。

身体を自由を奪う『麻痺』に、魔術を封じる『沈黙』

魔封状態に加えて身体不調を招く『風邪』と、攻撃行動を失敗させる『頭痛』

クオオロオから教えて貰った状態異常の種類は、どいつもこいつも面倒だ。なかでも

『洗脳』は最悪だ。

本人の意志を捻じ曲げて操られる。味方が敵へと裏返る。それがどれだけ厄介極まりないか。

なんで俺には効かなかつたんだと気にはなるけど、もはやそんな事を気にしてる余裕はなかつた。

『燃やせ、燃やせ、赤のはじまり』

「なんだと?！」

こちらに畳み掛ける驚愕をよそに、唱えられる呪文と収束していく魔素。

鮮やかな橙へと染まるシユラの爪色が、敵を容赦なく燃やす紅蓮へと変わっていく。

『イフリーストの爪』!」

「ぐあああつ?!」

直撃を貰つたら洒落にならない。

せめてもの緩和として剣を横に構えて防ごうとするが、襲い来る灼熱の前には焼け石に水だった。

触媒無しの下級魔術とはいえ折り紙付きの威力。腕を焼かれながらも壁際まで吹っ飛ばされて、激痛のあまり肺中の空気が吐き出された。

(沈黙を解除したのかよ?!寝返らせた分のぬかりもなしってか、魔獣のやつ!)

卓越した剣技だけでも太刀打ち出来そうにないのに、攻撃性の高い赤の魔術までも加わってくるのかよ。

火傷は酷いがなんとか我慢は出来る。けども肝心の武器はイフリーストの爪を防いだ時に吹っ飛んでしまっていた。

「殺してやる??殺して、やる??」

「クソツッ!」(このままじゃヤバイ!)

幽鬼のように一足ずつ、殺意を燃やして詰めてくるシユラに身の毛がよだった。

まずいまずいまずい!このままじゃ本当に殺られる!

紛うことなき殺意に当てられて、たまらず態勢を立て直そうと身をよじった時だった。

硬くて長い物体が脚に当たって、カランと軽快に音を立てた。

「??ああ?ンだよ、これは」(??なにこれ)

足元に転がっていたのは、真っ黒い鉄の棒だった。しかも中心にぼっかりと空洞が出来てるタイプの。

有り体に言えば鉄パイプだ。漆黒の鉄パイプが何故か俺の足元に転がっていた。

(て、鉄パイプ?なんでこんなもんが、こんなところに??? ひよつとして横長椅子に使われた素材とか?)

なんでこんなもんがこんなとこにあんの。

場にそぐわない物体のご登場に、思わず呆気に取られる。

でも、あれだけ派手に吹き飛ばされたんだ。その拍子に巻き込まれた椅子が壊れて、ここまで転がって来たのかもしれない。

正直あまり腑に落ちてはないけど、適当な自己解決で片付けてしまった。そんな場合じゃなかった、という方が正しいか。

なにせずぐそこまで迫って来たシユラが、今にもとどめを刺さんとばかりで剣を振りかぶっていたのだから。

「ハアアアアアツツ!!」

「ツツ!?!」

咄嗟に鉄パイプを引つ掴んで、剣撃を防ぐ。

ここで真つ二つになっていようものなら絶望だったけど、幸い強度がしつかりしているらしい。

頑丈な鉄パイプのおかげで、なんとか鑢^{つばせ}迫り合いは出来ていた。

「やられてたまるかアアア!!」(うおおおおおつ、南無三つっ!!)

「うあつ!?!」

渾身の力比べ。負けたら終わりの背水の陣ともなれば、この踏ん張り所に全身全霊を

かけるしかない。

その気合が功を成したんだろう。不利な態勢だったけれども、なんとか押し返す事が出来た。

やっぱり気合って大事だわ。根性論万歳。

「待ってやがれよ冷血女。今すぐ目エ醒ましてやるぜ！」（待ってろよシユラ！すぐに助けてやるからな！）

これ以上、あの魔獣に好き勝手させてなにが主人公か。

こつからだ。こつから反撃の狼煙をあげてやる。

言葉にすることで自らにプレッシャーをかけるように、拾った鉄パイプを突き付けての宣誓を叩きつけた。

その時だった。

《くくくったたあ??もおお痛つたいなあ！ タンコブ出来たらどうしてくれんのさあ》

「は?」(は?)

場にひどくそぐわない、呑気な女の子の声が響き渡った。

俺の脳内で。

050 凶悪

《んー。寝てる間に、なにさこの状況。というかキミだれ?なんでボクを握ってて平気なの?》

(??え、なに。なんだこの声。どっから聞こえてんの???)

《ちよつと、もしもーし。なにキヨロキヨロしてるのさ。此処だよ此処。さつきからおにいさんがにぎにぎしてるのがボクだよ》

(にぎにぎって??は?ひよつとして、この鉄パイプか?!?! いやいやいやそんな馬鹿な喋る鉄パイプってなんだよそのパワーワード意味わっかんねー!)

拜啓女神様へ。正直、急展開過ぎてついていけません。

たまたま足元に転がってた鉄パイプ掴んだら、鉄パイプが喋りだすってどういうことなの。どういう偶然よこれ。

《うわわ、うっさいなあ。あんまり大声出さないでよ、ボク寝起きなんだってば》

(す、すまん??じゃなくって!え、なに、お前って妖精か何か?それともなんかのレアアイテムとかそういう系?そんなもんがあるなんてクオリオ教えてくれなかったけど!?)

プリプリと不満を俺の脳内にぶち撒ける鉄パイプさん。本当なにもんですかあなた

さまは。

いや、もしかしたら聞き逃してきた数々の蘊蓄の中にも、こういう類に言及してたのかも知れんけど。

にしても喋る鉄パイプって。なんだかミスマッチ感が凄いやね。

(つか??さつきから俺、言葉発してないじゃん。なのになんでこいつは——)

《聞き取れるのかつて? そりやそうだよ、ボクと意思疎通するのに言葉なんて要らないし》

(テレパシーってことか? なにそれ格好良い)

《へへーん、でしよでしよ??つて、うわわ、ちよつとつ、前!前見てよ前!》

「——!」

「ああ? 前だと??ツツ、ぶねエツ!」

つてそうじゃん。今まさに修羅場の真つ最中じゃん!

頬を掠めたシユラの剣を横目に見ながら、流れる冷や汗と血をぬぐう。

いやいきなり奇天烈なアイテムをお目にかかったもんだから、完全に意識をもつてかれちまつてたよ。あつぶねえとこだった。

《???!ふー?》
 なんだかボク、とつても面白い状況に巻き込まれちゃってるみたいだね

(いやいやどこが!?!俺が言うのもただけど、ちつとも笑えない状況だろ!?)

《そう? ボクからしたら抱腹絶倒モノのシチュエーションだけど》

(なんでだよ! 精神異常者かなにかかよお前は!)

《あはははは。じゃあ楽しむついでに、ちよつと力を貸したげよつかな。何故かおにいさんはボクを握つても平気みたいだし》

(え。平気ってなんの事?? ちよつと待て、力を貸してくれるってマジか?! 今ご覧の通り超絶ピンチなんだけど、この状況なんとかしてくれんの?!)

《んー。それはおにいさん次第かなー?》

なんとということでしょう。偶然拾った鉄パイプさんが力を貸してくれるらしい。

いやほんとなぜだよ。こいつは何なのかとか、なんでこんな廃墟に在るのかとか、なんで協力的なのかとか。

なぜなに尽くしだ。さっぱり分からん。

けど、すぐれるもんなら藁にでもすがりたいくらいに切迫詰まった現状だ。なんだか都合が良すぎる気もするけど、都合を得意げに振り回してこそ主人公つてもんだらう。

主人公補正万歳。

??それに、だ。

「あたしが、護るのよ?? 今度こそ、院長を、みんなを?!」

「??」(シユラ??)

取り憑かれたように対峙するシユラのうめきに、下唇を噛んだ。

思い返せば皮肉にも程がある。シユラ。一目見た時から並外れた存在感を持つていた、俺がライバルだと見定めた女。

選抜試験の際にきつと戦う事になると予想していた。けれど先送りにされた宿命の戦いが、まさかこんな形で迎えることになるなんて。

(??あー。鉄パイプさん)

《えー、なにその不細工な呼び方。ボクには「凶悪」って素敵な名前があるんだけど?》
(凶悪って。名前にパンチ利きすぎだつて??まあいいか。じゃあ凶悪。俺は、ヒイロ??
ヒイロ・メリファード。頼む、俺に力を貸してくれ!)

《まっかせてよー》

それに、昂ぶる気持ちもあったんだ。

ピンチを迎えて新たな力を手にするこのシチュエーション。

これっていわゆる、パワーアップイベントじゃん。

まさに『山場』にして『見せ場』。ここで気張らなきや意味がない。

そうだろ、ヒイロ。

そうだよなあ、俺の生きてきた十八年間!

「我が腕に赤き力の帯を——」【アースメギン!】

投げかけた自分への激励のままに唱えれば、両腕に赤いタトウが刻まれる。

ほとぼし 迸る力の昂りと、ある仮説の証明に成功した事実、俺はにやりとほくそ笑んだ。

（いよつし、ピンゴだ! やっぱりあいつの黒魔術、歌うたびに状態異常が更新されるみたいだな!）

シユラが沈黙状態じゃなくなった理由。もしかしたら「歌」による状態異常は自動的に更新されるんじゃないかって予想したんだけどピンゴだったっぽい。

ひよつとしたら洗脳の歌は一人しか対象を取れないとか、もつと別の要因があるのかも知れないけど。

まだこの世界の知識に乏しい俺じゃ、現時点で真相究明なんて無理だ。

（使えるならなんでもいい。こまけえことは気にすんな、だ。集中しろよ、俺!）

大事なものはロジックじゃない。今この目に映る現実だ。気になるなら欧都に帰った時にでもクオリオに聞けばいい。

そう。俺達は帰るんだ。

勝つて、シユラを取り戻して、揃って欧都に凱旋する。

それでなくっちゃ??誰も俺をヒーローとは呼べないよな。

「ギア、行くぜ凶悪! 反撃の狼煙イ、ぶち上げんぞ!」

《あいあいさー》

.

051 我死にたまうことなかれ

過去十八年。色んな道場の色んな師範に散々、凡才だの平凡だの言われてきた俺にも、肌で学んだ事が一つある。

それは、戦いにおける勢いの大事さだ。

「ツアアアアア!!」

「くうううつ?!」

俺はまさに波に乗っていた。あれだけの苦境を強いられた反動とでもいうべきか。
^猛る心そのままに振るった凶悪な一撃に、洗脳状態にも関わらずシユラが目を見開いている。

けれども、実を言うところの結果に驚いているのは、俺も同じだったのである。

「こいつは、どうなってやがる」(あ、あれ。アースメギンって、こんなにパワー増加したっけ?)

白の魔術アースメギン。かけた対象の攻撃力を上昇させる、とっておきの一つ。なんだけでも、ちよつと効きすぎてない?

いくらなんでもおかしい。なにせあのシユラが罅迫り合いに持ち込めず、押し負けて

後ずさつてるくらいだ。

《ふふん、驚いた？ 実を言うとな、ボクには魔術効力を増幅させる能力があるんだよ。おにいさんの補助魔術がいつもより効果が大きいのはボクのおかげってわけ！》

(マジかよ凶悪！お前凄いな！)

《どやあ》

原因判明。まさかの鉄パイプさんにそんなオートバフ効果があるとは。力を貸してやるなんて大きく出られる訳だよ。

《つてわけでさ。ちまちまチャンバラするより魔術でドカーンと行こうよ。さあさあ》

(あー。ここで残念なお知らせです)

《ほえ？》

(俺、白魔術以外使えません)

《えー。なにさそれ。めっちゃ宝の持ち腐れじゃん》

(ぐさあ)

そつすね。俺に四原色のどれかの才能あればドカーンといけましたね。凶悪は滅茶苦茶がっかりしてるみたいだが、俺だつて派手に魔術ぶつ放したかったよ。どやあしたかったですとも。

《まあいつか。例え汎用魔術でもボクの恩恵は受けられるんだから、ちゃんと頑張つて

よ、おにいさん?」

(へーへー。言われなくたってやっ तरीますよっと)

とはいえ凶悪の恩恵は白魔術であつても効果は絶大だ。

あのシユラ相手に押し負けなかつたことは、まさに反撃の狼煙といえる。

シユラも接近戦では分が悪いと見たんだろう。憎々しげに俺を睨み付けながらも、

シユラの周りに急速に魔素が集まつてきていた。

『燃やせ、燃やせ、赤のはじまり』!」

「っ?食らうかよっ! 『我が脚に空渡る銀の術を』!」
すべ

剣ではなく魔術の手数で押し潰すつもりか。

だつたらこちらも奥の手を出すまでだ。

なにを隠そう、白魔術の補助魔術はなにも腕力強化のアースメギンだけじゃないの

だ。腕の次と来たら、脚だろう。

『イフリートの爪』!」

『ヘルスコル』!」

炎の爪が出来上がるよりも、俺の唱えた白魔術により、靴の踵の部分から翼のような

銀色の風が発生する方が速い。

勿論ただの鮮やかな色した風じゃあない。アースメギンが腕力強化なら、死者の靴の

名を冠するヘルスコルは、速度の強化を施す白魔術だった。

「遅エー！」（緊急離脱！）

完成した炎の爪がようやく切り裂こうという時には、既に俺は恐るべき瞬足で後方に離脱出来ていたのだった。

そう。誰しもが憧れる「遅い！」ムーブが完璧に決まった訳である。念願のワンシューンが叶って、思わず心の中でガッツポーズ。

「がつ」（いったあつ!）

《わあ、痛そう。おにいさんドジだねえ》

（うぐつ、しまったあ。ブーストのされ具合が予想以上過ぎた。勢い余って壁に後頭部を??うごおおマジでいってえ!）

なお「遅すぎて欠伸が出るぜ!」へとコンボを繋げることは出来なかつた模様。くそう、強化の振り幅広すぎんよ。良いことなんだけどさ。クオリオとの修行でやっと強化感覚掴めてきたばっかなんだよこちらら。

「!!」

なんて言い訳しつつ痛みに悶絶していたけど、ふと鼻に届いた嫌な臭いにバツと顔を上げて。

目の前に広がる、赤い光景に、思いっきり顔をしかめた。

(まずい、火の手が回ってる?! ああもう、こんな廃墟で赤魔術なんて連発するからだ!)
 空振りになったイフリートの爪から引火したんだろう。ろくな光すら見当たらな
 かった廃墟に火災が発生していた。

《わお、なんとということでしょう。おにいさんが避けちゃったから大変なことに》
 (避けなかつたらもつと大変なことになってたよ!)

《ツツコんでる暇あるの? この建物古いし、あつという間に火の手回るよ? 今つて結構、
 ピンチつてやつだよ?》

(こんにやろう。分かってるよそんなこと!)

凶悪の煽りはムカつくけど、悠長にやつてられなくなつたのは事実だ。けども燃え盛
 る火の手の向こう側では、さらに混乱を招く異変が起きていた。

【ga, gaaa, gaaaaaaa?!】

「?なんだ?」(あの魔獣、急に苦しみだしたぞ?)

「うっ、ぐ?! あたしは護らなきや?! 違う、魔獣。魔獣を?! あああつ、頭が、割れる?!」
 「なつ?!」(シユラ?! あいつまでどうして?!)

まるで炎に脅えるかのように魔獣が頭を抱えて呻き声をあげ、シユラもまた強烈な頭
 痛を堪えるように頭を抑えていたのだ。

よつほど苦しいんだろう。見えない何かを追い払うように剣を振り回すシユラの姿

に、俺は立ち尽くすしかなかった。

《??ふーん。どうやらバンシーとあの女、火が苦手みたいだねえ。なにかトラウマでもあるのかな?》

(バンシー?)

《魔獣の名前だよ。ま、ともかく??これは好都合じゃん。

はいはい、ここで凶悪ちゃんから大提案でーす!

ここはいつちよお利口に??戦線離脱とかどうでしょう?》

(??は?!戦線離脱ってお前?!)

まさかの提案に、思わず呆気に取られる。

だが頭の中に響く凶悪の声は、俺の動揺などお構いなしに言葉を続けた。

《ほらほら、逃げるが勝ちっていうじゃん? さっきも言ったけど、すぐに火が回るだろうから下手すると逃げられないかもしれないでしょー?》

バンシーはほつといても死んでくれそうだし、今のうちに逃げておくほうがボクは賢いと思うなあ》

(お前??シユラを見捨てろっていうのか?!)

《そーだよ?あの女は仲間なのかもしれないけどさあ、まんまと洗脳されちゃった方が悪いんだし。なにより自分が死んじやったら意味ないじゃん。おにいさんも死にたく

ないんでしょ?》

(??死にたくないに決まってるだろ)

《だつたら逃げようよ。安全に、確実に、生きるためにさ。ボクが言ってることって、間違ってる?》

(???)

確かに間違つてはない。死んでしまつたら全て終わり。

普通はそうだ。特例なんてあるはずもない。

かくいう俺だつて、今度命を落としたら次はないだろう。

せつかく歩み出せた物語だ。むぎむぎ死にたくない気持ちは確かだ。

そうだ。死にたくない。

だからこそ??"死ぬ訳にはいかない"んだよ。

「てめえの言うことは間違つちやいねえ」

(凶悪の提案は間違つてはいないと思う)

《でしょー!だつたらさ?》

「おう——」

(ああ——)

死ぬ訳にはいかないから。

考えるまでもなく、答えは最初から決まっていた。

「——だからこそ、逃げたらダメだろうが」

（——だからこそ、逃げたら駄目なんだよ）

052 Life goes on

《??は?え?ほんとに逃げないつもりなの?》

(今言つたばかりだろ。逃げる訳にはいかないつて)

凶悪に表情なんてない。鉄パイプだし。

だから声色だけで感情の機敏を察する必要があるんだけど、この時ばかりはすぐに分かった。きつとこいつ、鳩が豆鉄砲くらったような顔してるなつて。

《えええ??でもさ、でもさ!このまま闘うのつて結構リスクあるよ?!逃げられなくなつても遅いんだよ?みーんな灰になつて、はいさようならつてなつちやうかもだよ?》

(そうかもな。でも死ぬよりはマシだろ)

《はい?! いやいやいや言葉通じてる?通じてるよね?!逃げなきゃ死ぬんだつてば!》

(いいや違うね。ここで仲間を見捨てて逃げる方が死ぬんだよ)

《なにが死ぬつていうのさ!》

(決まつてんだろ。俺の心だ!)

死なない為に逃げるべきだと、凶悪は言つた。

安全に確実に生きるためにと。けど違う。違うんだよな。

ここで逃げるのなら、俺の心が死ぬ。

俺のこれまでの十八年間で、全部灰になるのと同じだ。

《心が、つて??意味わかんない》

(分かんなくなつていいさ。その分しつかり目に焼き付けてやるよ。俺の??ヒーローの生き様つてやつをな!)

——仮面ヒーロー??見参!

やあ少年。私が来たからにはもう安心だ! ——

パチパチと鳴る火花の産声が呼び起こす記憶。

かつて死の淵で見た背中。例えリスクがあろうとも、燃え盛る祈りの家に仲間を置いて逃げる事はしない。

俺の”知ってる”ヒーローならそうするはずだ。

だから選ぶ余地も必要もなく、答えははじめっから決まっていた。

《??ひーろー、ねえ。なにそれ。わざわざ危ない橋渡るお馬鹿さんをそう呼ぶの?》

(助けたいと思つた奴を助ける事を諦めない。そういう奴をヒーローつて呼ぶんだよ)

《??馬鹿じゃん。人間なんて脆くてすぐ死んじゃうつてのにさあ。命ぐらい大事にしな

よ

(命だけ大事にしてどうすんだよ)

《??あーもう!なんだよこの石頭!》

(残念だったな凶悪。説得は諦めろ。俺は諦めないけどな)

《はいはいもうわかったってば! あーあー!変な人に拾われちゃったなあボクウ!》

(はは、ドンマイ)

《うるさーい!ほら、ちゃちゃつと終わらせるよ!》

(へいへい)

まだ納得はいってないんだろう。けれども俺に拾われたのが運の尽きだと悟ったのか、協力はしてくるみたいだ。

なんだ。名前の割に良い子だなコイツ。いや、それとも俺の真摯な言葉に胸を打たれたのかもしれない。

ふふん、いいねえ。悪の改心。それもまたヒーローたるものの王道だ。

「――征くぞ」

そんなでもって、王道とはど真ん中を突き進んで征くことだ。

ノーを突き付けはしたが、凶悪の言うリスクは長引けばその分だけ増えるのは確かだ。

あんまり時間はかけられないだろう。

だから最短距離でいく。

「う、あ、あああつ?!」

【Ru u u, G i, a a a?!】

見つめる先は真つ直ぐ正面。いつしか勢いを増して荒れる炎の海。

炎の向こうで苦しんだままのシユラ。

更にその奥で、なにかに悶えている魔獣。

全部ここで終わらせよう。

正面突破だ。

「ああアツツツ!!」

「

炎を潜り、一直線に進む俺に身体が反応したんだろう。

反射的に振りかざしたシユラの剣が頬をかすめる。

けど捉え切られることはない。ヘルスコルによる脚力強化の恩恵もある。でもなに

より錯乱した状態のシユラじゃ、剣技の冴えも半減してる。

薄皮一枚くれてやって、そのまま置き去りにする。

そうすれば、もう目の前だ。

【g i, g i i i i i e e e !!】

「——悪いな魔獣。テメエの歌もこれで終いだ」

歌ではなく、尖った爪でもって俺を迎え撃つ魔獣。

でも悪いな。こちらら、そんなもんで止まってやれない。

より速く。より剛く。

凶悪なる一撃が、魔獣の腹部を穿ち抜いて。

【a, a a?、——】

歌う魔獣バンシーは、その手に誰かの頭蓋を抱えたまま横たわる。

骸となった肢体が、最後は音もなく黒い靄もやとなって、焼け落ちた天井から夜空へと

昇っていったのだった。



《ふーん。言うだけあってやるじゃん、おにいさん》

(ふふん、当然。ヒーローは有言実行も得意技なんぞな)

《はいはいうざいうざい》

(ちよつ、扱い雑過ぎない?)

厄介かつ強力な状態異常ふりまきタイプだからか、バンシー自体はかなり貧弱だった。決着はほとんど一瞬。

時間を惜しんだ短期決着だったけど、力を貸してくれた凶悪もこれには驚いているらしい。なんか不服そうだけだ。

まあ、なにはともあれだ。

新たな巡り合わせもあり、強敵も倒し、操られた仲間も助け出すと、これにて万事解決。主人公ムーブここに極まれり?と。

そう思ってた時期が俺にもありました。

時期って言うてもほぼ直前なんだけどさ。

「嫌??嫌よ、こんなの??」

「なっ??シユラ??」

「また私は、失ったの??また、護れなかったの??」

(お、おい。シユラのやつ、まだ洗脳が解けてないのか!?)

《状態異常の余波かな。まあ、どうせ直ぐに元に戻るからほつといて大丈夫っしょ》

急に解除された余波なのか、まだシユラは完全に立ち直れていなかった。いや、それどころかうわ言のように何かを呟いている。ほつとけばいいと凶悪は言うけど、その生

気の無い横顔を見て猛烈に嫌な予感が走った。

「みんな???みんなまた居なくなるの??嫌、嫌よ??あたしだけ。嫌、イヤ、先生、あたしは

???

「あ、あああ、あああああツツ!!」

《???

あ、あれ。なんかこれ、まっずいかも》
ついには凶悪までもが意見をひっくり返した時。

絶叫するシユラに呼応するように、廃墟中に尋常じやない魔素が集まり始めていた。
しかも集まるだけじゃなく、荒れ狂う赤い炎がシユラに纏わりつくように収束して

いつてる。

おい。全っ然大丈夫じやないだろこれ。

なんだったら、今までで一番のピンチだよなこれ!

《やばいやばいやばいよこれ!おにいさん、なんでもいいから身を護る魔術使つて!今

すぐ!!》

「凶悪!?マジでいったい何が起きてやがんだよ?!

《説明してる暇ない!はやくはやく、消し炭になっちゃうー!!》

「クソツ??『我纏まとう冷厳なる神の楯』!」

何が起こっているのかも、何が起こるのかも分からない。

けども切迫詰まった凶悪の叫びに、俺は奥の手である白魔術を発動させた。

腕力強化のアースメギン。

速度強化のヘルスコル。

「うあああああああツツツツ!!!」

「『スヴァリン』!」

凶悪によつて増幅された、防御力を強化する魔素の鎧。

しかし。

シユラに纏わる炎が翼となつて、その胸元から一本の燃える刀身が見えた瞬間、眼の

前の世界が弾けた。

(あ。俺、死んだかも)

視界全てを覆い尽くす、鮮烈で眩まばゆい赤き光に。

俺は本気で、死を覚悟した。

053 陽炎の揺れる頃

パチパチ、パチ。

火花の産声と死に声と、炎の匂いがする。

眼の前には赤と黒しかなかった。

炎と血。生きてる色などにひとつ残ってない。

それだけが確かで、突き付けられた現実だった。

『みんな?!居なくなっちゃった』

古来より、死者の魂は空へと昇るといふ。

ならば死したみんなの命もそこへ行くのだろうか。

残骸と化したかつての自分の居場所から空へと繋がる黒煙を、少女は見上げた。

『ゆるさない』

”憎しみの目”で、睨み上げていた。

違う。あの黒は、斃れたみんなの魂なんかじゃない。

『魔獣?!』

自分が討ったものの達の残響だ。

人ならざるもの達が消え行く証だ。

まだ七歳になったばかりの子も居た。やっと裁縫を覚えたばかりの子も。自分よりも早く初恋を迎えた子だっていたのに。

無情にも、奴らは全て奪っていった。

『殺してやる。みんなの、先生の仇。一匹残らず、あたしが!』

だからこれは、死を想う祈りなんかじゃない。

お前たちを殺し尽くす為ならば、修羅を歩むことさえ厭わない、と。

魔獣という存在そのものへ向けた、紅き宣誓だったのだ。



焼き焦げた匂いのせいで目覚めは最悪だった。

「??うっ。こっ、は?」

ぼやけた頭にフクロウの鳴き声がすべり込んだ。自分は今まで、なにをしていたのだったか。

ぼんやりとしたまま記憶を探る。けれどじつくり探るまでもなく、眼の前には答えがあった。

「魔墟??っ! そうよ、あたしは確か?!」

眼の前には焼け落ちた魔墟があった。もはや焦土と呼ぶべき惨状に、フラッシュバックの如く記憶が溢れ返る。

コルギ村の不穩の元凶を追い、ここまで辿り着いて。

多くの小鬼を葬り、ついに本命の魔獣と対峙して。

「??あり得ない。このあたしが魔獣なんかにつ??なんて、不様?!」

自分は迂闊にも、魔獣の術中にはまってしまったのだ。しかも憎つくき魔獣を、よりにもよって恩師とも呼ぶべき人と思いつまされた。

不甲斐なさに吐き気がしてたまらない。

けれどもふと気付く。

自分は術中にはまって魔獣の味方となっていた。ならば誰が自分を呪縛から解いたのか。元凶を討ったのは誰なのか。

そんなのは、一人しか居なかった。

「あ??! ヒイロ。ヒイロは?!」

「そう叫ぶでない。後ろを向いてみよ」

「え。あ、あんたは、墓守の——っ!」

振り向いた先の見覚えのある人物。墓守のエイグン。どうしてここに。

けれども疑問は墓守の足元を見て吹き飛んだ。そこにはヒイロが、無惨な火傷と煤まみれとなって横たわっていたのだから。

「な、なんで。なんであんたがそんな酷いことになってんのよ!」

「わしにも分からぬよ。わしがお主らに追い付いた時にはもう、この有様だった。だが、こんな状態でありながら此奴は、お主を背負いながら燃える孤児院より出てきおつただ」

「あたしを、背負って?」

「うむ。鬼気迫る勢いであつたよ。執念とでもいうべきかな」

「?!」

薄ぼやけた記憶からでは確かなことは分からない。

どうやらあの魔獣はヒイロが討ち、更には気絶した自分を背負って廃墟から脱したのだらう。

しかし負った火傷は見るからに深刻であり、男の勲章とするにはあまりに重かった。

(?!指輪? あいつ、こんなのでしたっけ)

その深刻さ故に注意深くヒイロを見渡していたからだらう。

右手の薬指にはまっている”黒鉄の指輪”に、ふと気付く。この男がこんな指輪を身

に付けていた覚えはない。

気にはなる。しかしそれ以上に後悔の念とヒイロへの心配が勝り、指輪の事はすぐにシユラの意識の外へと置かれた。

「無理に動かすでないぞ。火傷を癒やす霊薬を塗っておる。葉がしっかりと回るまでは、一先ずこやつを安静にさせねば。そうすれば、痕も残らず癒えきるだろう」

「え?!?!、これだけの火傷が痕も残らないって。そんなの霊薬どころか特級の秘薬じゃない!、なんでそんなものを墓守が!」

「遠き昔の縁でな。マードックという偏屈から貰った逸品だ。よもやと思いついて来たが、老骨の勘も当たるものよな」

「?!あんだ、何者?」

見るからに重体なヒイロの火傷の痕すら残さない霊薬。本当だとすれば並のアイテムではない。私財を蓄えた貴族の蔵にだってお目にかかれない代物を、小さな村の墓守が持ち得ている。

ヒイロを救ってくれることを踏まえてでも、警戒心が露わになるのは当然だった。

「見ての通りの墓守だ。昔はコルギの村長とも呼ばれておったがな」

「昔は?!?!じゃあ、今村長やってるのは」

「ハウチか。アレはわしの娘だ」

「！」

淡々と答えるエイグンに、シユラは言葉を失う。

理解が追いつかないのも無理はない。村長を務めていた男が、どうして墓守へと身をやつたのか。まして現村長のハウチが娘と来ている。断片情報だけでは片付かない複雑さが、シユラに混乱を招いた。

しかし墓守は省みることなくシユラへと背を向けて、燃え落ちた廃墟へと向かい、しゃがみ込んだ。

「なにを、してるの」

「今は墓守と言ったであろう。職務に準じて、墓を建てておるのだよ」

「墓?？」

「贖罪とも言えるがな。己が罪を負う為に長を辞したのに、今の今まで向き合えておらなんだ。なんとも情けない。だがしかし、”これでようやく、みなを弔える”」

「なにを、言つて?？」

要領を得ない言葉だった。まるで独り言のように囁きながら、エイグンは廃墟の目前に太木を突き立て、更に継ぎ木を結ぶ。

出来上がったそれは、墓守と始めて顔を合わせた集合墓地に並んでいた墓標と同じものだった。

「今や焦土と果てたが、元からこの廃墟には多くの焼跡があつたことをお主も見たであらう?」

「それは?」

自分のみならず、ヒロ口とて気付いていたこの場所の残り香。

未知なる魔獣への警戒ですぐに捨て置かれたことだ。しかし頭の片隅では置き続けていた違和感を、墓守は紐解こうとしている。

「わしがまだコルギの村長と名乗っていた頃に、この孤児院は一度焼けたのだ。そして多くの子らが犠牲となつてしまった」

パチ、パチパチと。

悔いるような声色で囁く老人の目には、在りし日の火花が散っていた。

054 拝啓、星なき夜に眠る貴方へ

「騎士よ。ユグ教の名は聞いたことがあるう？」

「闘う者の姿勢や心構えを尊び、称賛するっていう他力本願な宗教でしょ。知ってるわよ」

知らないはずもない。ユグ教といえばアスガルダムでも浸透している宗教である。しかしシユラはユグ教思想を好んでいないのか、肯定の言葉には棘があった。

「そうか。ならば内装や礼拝堂を目にして気付いたやも知れぬが、此処はユグレストの修道女にこわれて建てた孤児院だったのだ」

「請われて、つてことはアンタが？」

「うむ。当時のこの辺りは魔獣被害以外にも早魃や自然災害による孤児が多くてな。村民の反対意見もあるにはあったが、修道女の熱心な説得に皆、次第に折れた。かくいうわしもその一人だった」

エイグンもまた孤児院創立に深く関わった人物なのだろう。焦土を招いた一端である自覚が強いシユラは、たまらず唇を噛む。しかし墓守の背中には、彼女を責めようという気配は無かった。

ただ、遠き日へと馳せる想いと途方もない悲哀があった。

「頑固な奴であったよ。だが孤児らに母と慕われるほど、面倒見が良く優しくかった。孤児らの将来の為にと方々に働きかけ、盛んに文字や計算を教えておった。そんなひたむきさに胸打たれてか、わしも村も、次第に援助を惜しまなくなった。ああ、だからこそ??わしは”信じられなかった”」

「それって、まさかその修道女が火を起こしてしまったの?」

「いや、事件の後の調査で分かったことだが、出火の理由は厨房係の子が不始末をしたからだ。あやつではない」

「じゃあ、どうして」

「逃げたのだ。村まであやつは一人逃げ延びた。燃える孤児院に、孤児らを置いたままのう」

「え」

ひゅつと、シユラの息が止まった。

件の修道女の人物像に暖かみを覚えていた彼女にとって、エイグンの言葉はあまりに信じがたい。しかし揺らがない事実なのである。

「わしは責めた。なぜ子供らを見捨てたと。だが助けられると思えなかった。命が惜しかったと、あやつは泣き叫んだよ。我が身を惜しむ。そののなが悪しきかと言われ

ばそれまでだ。しかし、わしは裏切られたような気がしてならなかった。なによりも愛すべき存在なのだとか幾度と語った孤児らを見捨て、一人逃げたあやつを??わしは、許せなかった。憎いとすら思った。だが、憎しみはさらなる過ちを産むだけであつたと気付くべきであつた」

「過ち?」

「翌日にそこに見える古樹の枝で??あやつは首を吊つたのだ」

「な——」

見捨てたことを深く後悔したのか。

居場所を失くす未来に絶望したのか。

確かな理由など分からない。だが修道女は命を断つてしまった。なにもかもが喪われた事だけが、今も横たわっているのだ。

「わしが殺したようなものだよ」

「??」

「命を奪つた者が死後を看取る役を務める。いかにも歪なことだと思わぬか、騎士よ」

「そうね。でも、それがあんたの選んだ贖罪なんですよ?」

「??ああ」

「死への向き合い方なんて人それぞれよ。誰かにケチつけられるものでもない。そう

じやなきや、墓なんていらんよ」

「??左様か」

断罪を求めているのだろう。だがシユラは拒んだ。

確かに彼の憎しみが、修道女を自死へと追いやったのかもしれない。だが墓守となり、未だ罪滅ぼしに囚われ続ける老人を責める気になどならない。

死への向き合い方はそれぞれの勝手だ。

墓守として十字架を背負うのも。修羅として復讐に身を染めるのも。残された生者の勝手なのだ。

「なあ、騎士よ。歌の上手だったあの修道女は、安らかに天へと昇れたのであろうか?」
「??」

「もしそうなのであれば、わしはお主らに礼を——」

「知らないわよ。そんなの」

だからこそ、エイグンがつぶやく核心をシユラは断ち切る。

「此処に居たのは忌むべき魔獣。この村を襲った悪夢だけだった。修道女なんてあたし達は知らない。だから??」

彼女が見て、対峙して、ヒイロが討ってくれたあの魔獣はこの村の悪夢。それ以外のなにものでもないはずだ。

「あなたが悔い続けた時から??もうその人の魂は、安らかだったんじゃないの」
「??そう、か」

弔いはとうに終わっている。少なくともシユラはそう思った。

それを墓守がどう受け止めたのかは定かではない。彼は哀しく微笑み、立てたばかりの墓標を撫でるだけだった。



「全く。老骨は昔話に熱が入っていかんな。だが、そろそろ霊薬も充分に身体に馴染んだであろうな」

「!」

気持ちに整理をつけたのだろう。

過去から今へと視点を移したエイゲンに、シユラは眠るヒイ口の顔色をうかがう。そして胸をほつと撫で下ろした。

ヒイ口の火傷にはうつつすらと、青き魔素の膜が覆い始めていたのだ。

青は水に属し、水は癒やしの象徴。霊薬の効果が出ている証であった。

「この村を救ってくれた英雄を、いつまでも土の上に寝かせてはコルギの名折れ。村へ

と戻るとしよう。すまぬが、お主も肩を貸してやってはくれぬか。老いぼれ一人にはい
ささか遅し過ぎるのではな

「??ん。その必要はないわ」

「む?」

功労者をこのままにしてはおけない。その意見には賛成だったが、彼女にも意地が
あつた。

言い切つて、シユラはひとりでヒイロを背負う。

長身かつ鍛えられた身体の重さはシユラの倍はあろうが、優れた戦士たるシユラには
問題にすらならない。

「お主?!」

「平気だから。先行つてよ」

「??うむ」

仮に耐えがたい重さであつたとしても、彼女は譲らなかつただらう。カンテラを持ち
先導するエイグンを、ヒイロを背負つた少女が追いかける。

揺らさないよう、ゆっくりと気をつかいながら。

『俺が、悪夢を終わらせてやる!』

背中から伝う鼓動に目を細めながら、ヒイロが切つた啖呵たんかを思い出す。シユラと比べ

れば無名に過ぎない。けれどコルギの村では、ヒイロ・メリファアの名を知らぬ者は居なくなるだろう。

本当に、彼が悪夢を終わらせたのだから。

「なんで逃げなかったのよ、バカ」

今宵の闘いは、それこそヒイロからすれば悪夢のような状況だったはずだ。味方のはずの騎士は魔獣に操られ、更には戦場はいつ身を焼くとも知れない炎に包まれていたのだ。

でも、この馬鹿は決して逃げようとはしなかったらしい。

『——だからこそ、逃げたらダメだろうが』

朧気な記憶のなかで、わずかに思い出せた光景。

自分自身を奮え立たせる為の言葉なのだろうか。脈絡のない独り言。けども鮮烈だった。

不退転の強き意志。今は閉じられた翡翠色の瞳を、思い出すだけで胸の内側に熱が灯る。

「ホント。あんたみたいな馬鹿、はじめてよ」

進むと決めた修羅なる道に、人の光など得られないはずだったのに。

そんなこと知ったことかと、鉄塊てつくれ片手に暗い世界を叩き割った男が現れたのだ。

星もない夜なのに、シユラは目を細めていた。
割れた亀裂から射し込む光を、慈しむように。

「——ヒイロ」

素直になるのがまだ苦手な少女は、明日を迎えれば感謝をちゃんとと言える自信もなかった。

だから梟ふくろうさえ静かなこの夜に、ひっそりと打ち明けることにした。

「助けてくれてありがとう」

あなたが居てくれて良かった、と。

055 舞台裏の神々

木を隠すならば森の中。闇影が溶けるならば、星無き夜はうつつけであった。

「素晴らしい」

木枯らしの音さえ静かな、眠れる森。

焦土と化した孤児院跡地を眺めて、黒尽くめの男は恍惚に酔った声を上げた。

「まだ目覚めたばかりの小火程度で、ここまでの破壊をもたらせるとは。ククク、良いぞ。実に良い。それでこそ配役を仕込んだ甲斐があったというものだ」

男に表情は無かった。片目だけの奇妙な仮面をその顔に被っている為である。しかし痛ましい程の破壊の痕跡を前に、愉悅に身をよじらせる男の歓喜は存分に伝わるだろう。道を外れた者の持つ、おぞましさと共に。

「しかし——少々キャストを遊ばせ過ぎたかな。よもや予定外の羽虫がああも意気揚々と宙を飛ぶとは。存外脚本通りにいかぬものだな??だが、それも一興か」

歓喜の身震いがピタリと止まる。仮面の男が思い浮かべるのは、『魔獣バンシー』を討ったイレギュラーの事である。

本来ならば暴走したシユラの焰に孤児院ごとバンシーは葬られる予定だったが、予定外のキャストに少々過程を乱されたのだ。

しかし結果はさして変わらない。ならば捨て置いても良いだろう。

「いざとなれば薪としてしまえば良い。希望があるからこそ、絶望の焰は凄絶に燃え上がるというものだから」

邪魔になれば消せば良い。あるいは、あのイレギュラーを脚本に組み込むのも一興だろう。シユラが彼に心を許せば許すほど、絶望の炎はより多くを呑むほどに育つのだから。

「そうだろう——私の修羅。全てを灰燼に帰す『黄昏の火』よ」

やがて全て灰の様に做^なうのならば、思う存分過程を楽しもうではないか。

愛憎を。哀楽を。喜びも。潰えぬ怒りも。

「クククツ、アーツハツハツハ!!」

その身を黒き四枚翼のカラスへと変身させて、物語のフィクサーは夜を飛ぶ。いずれ来るべき怒りの日を待ち焦がれながら。

響くは哄笑。全ては意のままに。

だがいずれ、仮面の男は思い知るだろう。

羽虫と嗤った矮小な存在がもたらす影響の大きさを。

嬉々と綴った脚本を燃やさんとする火の産声を。

紛れ込んだイレギュラーは、己にとつての天敵であることを。

この物語の運命は、すでに殺されはじめていることを。



「はあ???」

「おや、どうしましたノルン様。そんな後味が悪そうな顔をして」

「悪そうな、じゃなくて悪いんですよう。結果だけ言えばコルギ村は救えましたけど、なんだか色々とすつきりしません」

「まあ、そういうゲームですし」

「そもそも戦闘面ですよ。結局、魔獣バンシーとはイベント戦で強制敗北でしたし??念のためにと無限湧きの小鬼達を倒した私の努力はなんだったんですか」

「致し方ありません。バンシーの黒魔術『アイネクライネ』は『この世界で』かつて喪

失した大事な女性に誤認させる』という、強力な洗脳効果がありますし。孤児院という場所にバンシーの境遇を考えれば、もはや皮肉なほどにシユラ特効ですよ」

「分かってますよ。沈黙にする『クライモア』の歌と、眠り状態の相手を操れる『マザーグース』の歌? 本当に厄介な魔術ばかりでしたし」

「ただの村人では分かりようがありませんよね。眠った子が自ら廃墟に向かっていたなんて。シユラでさえあんなったのですから」

「それにあの力が暴走した後、燃える廃墟からエイグンさんがシユラさんを運び出してくれなかったら、あのままシユラさんも?」

「ええ。多分、瓦礫の下敷きになってましたね」

「でも。そのせいでエイグンさんがあ?」

「?お亡くなりになってしまいましたね」

「エイグンさん、ただものじゃなさそうだと思つてましたけど、まさか元は村長さんで、ハウチさんが娘さんだったなんて」

「『孤児院の悲劇』ですか」

「?後悔していたんですよね、ずっと。最後の方に廃墟に現れたのは驚きましたけど? エイグンさん、バンシーが燃えながら赤ん坊の骨を撫でてる姿に、例の修道女さんを重ねてたんでしょうか?」

「ええ。でなければ、あのシーンで『すまない』なんて台詞は出てこないでしょう」

「ですよね??? はあ。切ないです。でもなにも、後を追うように息を引き取らなくたって??」

「仕方ありません。ご高齢にも関わらず崩落し始める建物からひと一人救い出したのです。文字通り、死力を尽くしたんですよ」

「??ううう、ハウチさんの慟哭が頭から離れませんか?」

「あのシーンは胸が痛みましたものね??」



「それにしても、あのいかにも黒幕っぽいのですよ!」

「はい。露骨に怪しいやつが出てきましたね。多分原作者も隠す気はなかったんでしよう」

「まあ、色々と気になることばっかり言っていましたけど??それよりもあの仮面男が拾っていたあの鉄パイプのようなものって??もしかしなくても、”序章の港町のボスにシユラさんがトドメを刺した時の——ですよね?」

「はい。そうですね。『凶悪』という名前になっているらしいですが」

「でも、どうしてそれがコルギ村の孤児院に??」

「コルギ村に向かうとき、馬車の中でハウチ村長が説明していましたよね。灰色の戦乙

女の異名を、行商隊の商人から聞いたと

「はい?? えっ、まさか!」

「ええ。その商人が港町事件が終わったあとにこっそり回収してたみたいですよ。直接触ると呪われるいわくつきの商品としてフィジカで販売してたみたいですが、売れなかつたみたいで」

「そりゃあそうですよ、あれだけの事があつたんですし」

「で、ならば聖欧都で売ろうと思つたらしく、行商に参加したんですね」

「行商隊はどうなつたんです?」

「まあ、興味本位でいわくつきの孤児院を訪れた訳ですから。見事に子鬼達のご飯になりましたよ」

「うわあ、それであんなところに?? なんとということでしょう。あの黒幕さんも想定外だったみたいですが、巡り巡つて一番手に渡つてはいけない人の手に渡つたような?? とう、猛烈に嫌な展開が待つてそんな気がします」

「ええ、ノルン様。詳しくは言えませんが、あれも今後の鬱展開に一役買つてる代物ですよ」

「うえええ?? ううう、進める気が滅入ります?? って、あれ。そういえば、ヒイロさんの出番は???」

「おや、なにをおっしゃいます。第一章はまだ終わってなどいませんよ?」

「ええ!?!でももうコルギ村の決着はついたはずじゃ??」

「確かに。ですが??ノルン様はどうやらひとつお忘れの模様ですね」

「な、なにがです?」

「ノルン様も不思議に思っていたじゃありませんか。ハウチ村長はアツシユ・ヴァルキュリアの噂を知っている理由は教えてくれましたが??シユラがそうであることと、彼女が今、騎士団に居ることを”誰に教えてもらったのか”は、話してませんよね?」

「???
あつ」

「さあ、第一章のラストバトルと参りましょう」

056 帰還

「ククク??クッククックツツ?!」

拝啓女神様へ、いかががお過ごしでしょうか。

どうもご機嫌よう、この物語の主人公です。帰りの馬車よりお送りしておりますが、お察しの通り現在俺の機嫌は天元突破しております。

「なによニヤニヤと、気持ち悪いわね」

「ククク、テメエには分かるまい。既に名が売れてたテメエにはなア??」

ニヤけたつていいじゃない。コルギ村の皆にもてはやされたんだもの。

村を悪夢から醒ませてくださりありがとうございました、騎士様。手を取って涙ぐましく言われたんだ。まさにヒーローの本懐だよ。ああ、思い出すだけで頬が吊り上がる。

「これでようやくテメエに追い付き始めた訳だ。今に見てやがれアツシュ・ヴァルキユリア。俺の名声がおマエの異名を追い抜かすのも秒読みだぜ!」

「はいはい???なによ、子供みたいにはしゃいで。ちよつと可愛い所もあるんじゃない」

「あア?なんか言ったか?」

「なんでもないわよ馬鹿」

ちつさい声で呟きながら、ぷいっと馬車窓の外へ視線を逃がすシユラである。

俺が目覚ました後から、ちよつと今までとシユラの様子が違うんだよな。距離が近くなつたとか、やたら俺を視界に収めようとしたりとか。

ひよつとしてあの暴走爆発の負い目を感じているのかと思つたけど、そもそも覚えてないらしいし。ま、覚えてないなら覚えてないでいいか。わざわざ教えて罪悪感を背負わせたくないし。

(となると??嫉妬かな)

ふむ。さてはシユラ、俺の活躍ぶりに嫉妬してると見た。今回の一件で、自分の活躍を奪いかねない俺だ主人公って気付いたか。チラチラと見てくるのがその証拠だ。

火傷が治り切るまで食事やら濡れ布の用意やら世話してくれたのも、俺の力を観察する為だろう。ふふふ、いいね。今の地位に油断しない姿勢、手強いライバルじゃないか。《ま、バンシーに勝てたのもボクのおかげでもあるからね。マスターの名声はつまりボクの功績と言つても過言じゃないわけだよ》

(おやー? 真つ先に逃げ出そうって提案してたのはどこの凶悪ちゃんでしたっけー?)

《あ、ひつどい。ボクはあくまでマスターの身を案じたプラン出しただけなのに》

(はいはい分かつてゐるって。ちゃんと感謝してっから)

《むふん。ならばよろしい》

そして頭に響くこのボクっ娘ボイスですよ。

チラリと右手の薬指を見下ろせば、黒い鉄のリングがはまっている。そうです。これ凶悪さんです。

念話や魔術増幅のみならず、まさか縮む事まで出来るとは恐れ入ったよね。

(てかさ、本当に俺に付いてきて良かったのか?)

《今更なにさ。拾ったんだからちゃんと言責任取って面倒みるのが誠意ってもんじゃないの?》

(捨て猫かよお前さん)

《いいじゃん別に。あんな場所に置いていかれたってしようがないし。それに、どうせならマスターみたいな面白い人間に使われたいしく?》

(まあ凶悪が良いなら良いけど? って、人を愉快なやつみたいに言うなよ)

《いや愉快でしょ。念話の言動と普段の言動の不一致っぷりとかさ?》

(あー?!色々あるんだよこっちにも)

なぜだか凶悪は俺を気に入ってしまい、これからも力を貸してくれる事となったらしい。マスター呼びもいわば協力の証だろう。

はい。どう見ても主人公強化イベントだねこれ。まさかコルギ村を救うことが俺の

パワーアップに繋がるとは。依頼受けてホント良かったよ。そもそも凶悪が『スヴァリン』を増幅してくれなかったら、今頃消し炭だったろうし。

（魔術増幅はありがたいけど、武器として使うのは控えた方がいいよな？）

《へ？なんで？ボクこれでもカツチカチだよ？ミスリル製の武器なんかよりも全然タフだけど》

（や、ほら。孤児院でシユラの剣防いだ時に痛いっつってたじゃんか）

《あー。アレは寝てる時だったからね。起きてる時はボクの力で痛覚シャツトダウン出来るから、別に気にしなくていいよ？》

（マジかよ。なんだこの都合の良い女感は。さては男をダメにするタイプだな）

《乙女心まで気にするなどは言っていないだけど？》

ほんと色々と高性能だな、この喋る鉄パイプさんは。

まあ、惜しい点があるとすれば凶悪のフォルムかな。喋る剣とかならないかにも王道っぽいけど、鉄パイプなんだよなあ。

鈍器片手に戦う騎士って。シナリオのセンスが前衛的過ぎませんかね。

（なんでこんなのがあんな孤児院に放置されてたんだか）

《それは秘密って言ったじゃん。ま、隠すほどのことじゃないけどさ》

（だったら教えてくれてもいいだろ）

《やだねー。黙ってた方が面白そうだし。あとあと、何度も言ったけど??ボクを他の誰かに触らせたなら駄目だからねー?》

(確か迂闊うかつに触ると精神に異常来たすんだっけか?)

《そーそー。並の人間だったら廃人コース待ったなしだよ。別にボクはいいけど、それだとマスターが困るでしょ》

(超困るな??でも、じゃあなんで俺は平気なんだ?)

《知らなーい。マスターの精神構造が呪い以上にぶっ飛んでるとかじゃないの?》

(人を精神異常者みたく言うな。ヒーローだぞこちとら)

《つまり頭悪いつてことだね》

(???そつ)

《自覚あつても否定しようよ??》

どうやら凶悪は所有者を呪う類のやべー武器らしい。

でも何故かその呪いは俺に効かないんだとか。理由は気になるけど、デメリットは帳消しに出来るに越したことはない。

それに、ヒイロが実は聖なるパワーとか加護とか持ってますよーフラグなのかもしれないし。だとしたらますます期待に胸が踊る。やはり主人公といえれば特別な出自だ。

実は大精霊と人間のハーフでした、みたいなパターンと見たぞ俺は。

(ま、なんにせよ??これからよろしくな、凶悪)

《うふふ。精々末永くつるむとしようね、マスター!》

ともあれだ。

このコルギ村での依頼は、結果だけみれば間違はなく騎士ヒイロに追い風だろう。

凶悪、名声など多くの成果を得ての凱旋だ。

胸を張って門を潜ろうじゃないか。

そう思ってた時期が、僕にもありました。

「長旅御苦労?と、言いたいところだがな。ヒイロ・メリファー。エシユラリーゼ・ミルガルズ。正式な騎士身分を得てないにも関わらず、民間からの依頼を受けた貴殿らをごれより拘束する。抵抗は、してくれな」

門を潜った先では、俺たちの帰還を手ぐすね引いて待っていたらしき門番の皆様がずらりと並び。

一歩前に歩み出ている隻眼の男、シドウ教官の号令により??俺達はあつという間に捕縛されてしまったのだ。

そう、俺達はまだ気付いていなかった。

悪夢は終わった。

けれどもまだ、この一件に潜む悪意は終わっていないのだったのだと。

057 ルズレー属かませ犬科

住めば都。そんな言葉がある。

どんな場所だつて慣れれば大したことないって意味だろうけど、俺からすれば大異議ありだ。

懲罰房は流石に、都にはなれません。はい論破。

「??此処にぶち込まれて、もう何時間だ?」

「さあ、覚えてないわ」

「もう陽が暮れてやがる」

「そうね」

「クソツ、腹減ったぜ」

「やめて。考えないようにしてるんだから」

拜啓女神様へ。どうも主人公のヒロウィth隣の牢に居るシユラです。順風満帆かに思えたマイロードですが、このたびめでたく豚箱に打ち込まれました。助けてくれ。

(まさかマジでとつ捕まるとは??)

なんで村一つ救った俺達がこんな目に。嘆きたい気持ちもあるけど、残念ながら心当たりがあった。

ハウチさんの依頼を受けるかってなった時に、シユラが忠告していたことだ。

正規の騎士でない者が、勝手に民間からの依頼を受けることは禁止されており、発覚すれば規則違反として罰を受けるって。

あの時はテンションに任せて「まあ主人公の善行だし大丈夫でしょ」と流しちゃいたけど、駄目でした。石壁と鉄格子に囲まれた一室。小窓から射し込む夕焼けが、まあ目に染みること。

でも隣の牢のシユラを思えば、申し訳なさが凄くて。俺はこの結果には悲しさはあれど後悔は無い。けどシユラは俺が巻き込んでしまったようなもんだし。

正直罵倒の一つでもされるかなと思ってたけど、意外にもシユラは俺に憎まれ口ひとつ叩かなかった。

「??責めねえのかよ」

「着いていくって決めたのはアタシよ。決断しといて責任だけ押し付ける真似、する訳ないでしょうが」

「へっ。格好つけやがって」

「格好つけようとしたあんたが言うな」

くつ。流石は我がライバル。男前じゃないか。

俺としたことが、ちよつとキユンとしちまつたぜ。

《うーん、まさかマスターに付いていった矢先にこれとはねえ》

《??凶悪。お前の呪いってもしかして不運を呼んだりする?》

《ないない。これは普通にマスターの自業自得だと思ふよ?》

(正論つて時に人の心を深くえぐるよね)

身も蓋もない凶悪の一言に、ずんと落ち込む俺だった。

しかし自業自得つてのはいいとして、いつまでこのままなんだろうか。たつぷりと事情聴取、後にこの牢にぶち込んでくれたシドウ教官は「追つて沙汰を伝える」と言つたきり帰つて来ないし。

これからへの不安も含めて、無気力に汚い天井の染みを数えていた、そんな時だった。

入口の重い扉が軋む音が、懲罰房内に響き渡つた。

「ええい、錆臭^{さび}くてならんな。懲罰房とはいえ仮にも騎士と名の付く施設ならば、清掃もきちんとすればいいものを」

ついでに滅茶苦茶鼻持ちならぬ感じの声も響き渡つた。

「しかし下賤な産まれの者には相応しい場所と言えよう。ご機嫌いかがかな、愚かにも規則を乱した平民共よ」

「?？」

「なんだその顔は。我輩は栄光ある貴族にして騎士、パウエル・オードブルである。我が威光をその目にしたならば頭を垂れ、ありがたがるが良い。平民の責務であるぞ?」

「うっわ」

(うわあ)

《うへえ》

俺達の牢の前に来るなりそう宣ったのは、色々とキツイおっさんである。くるんと上を向く金の髭。騎士の甲冑に羽根付き帽子を被るといふ絶望的なファッション。

なにより金髪のカューティクルが凄くて、普通に引いた。ちなみに声出したのはシユラです。

「なんだテメエ。なにしに来やがった」

「口のきき方になっておらぬな、この猿め。先も言ったが我輩はオードブルー一門の貴族にして、ブリュンヒルデに属する騎士である。貴様のようなゴミが口をきける相手ではないのだぞ?」

「本隊の騎士、だと?」

「??フン」

嘘でしょ。こんなんがあの入隊するだけで誉れつていわれる本隊に居んのかよ。貴

族云々はともかく、俺の先輩にあたる人物の登場に少なくない衝撃を受けた。

「だが目的を答えねば話は進まぬも道理。ククク、何をもつて一般の依頼料すら払えないゴミ村の依頼を受けたかは知らぬが、罰は罰である。我輩は貴様らに沙汰を下しに来た」

「?なんだと?」

「喜べ平民共。貴様らの称号はめでたく、剥奪だ。平民は平民らしく、有象無象に身をやつすが良い」

「???剥、奪?」

「???」

称号剥奪。告げられた罰の重みが、ずしりと心にのしかかる。息を呑むシユラの声さえ遠い。

ああマジかよ。あん時はシユラに啖呵切った訳だけど、流石にいざ結果を突きつけられるとシヨックだ。思わず呆然としてしまう。

そんな俺のリアクションがパウエルの嗜虐性に刺さったんだらう。大層満足そうに領きながら、まだ話は終わってないとパウエルは手を叩いた。

「しかしだ。哀れで愚かな貴様らとて、一度の失態で全てを奪われては敵うまい。そこでだ。偉大なる我輩から一つ、取り引きを持ちかけてやろう。条件次第によつては、我

輩の権力で貴様らの称号剥奪をなかつたことにしてやれるぞ？」

「??条件？」

絶たれたかに思えた騎士ヒイロの道筋。

けどもそこに蜘蛛の糸を垂らしたのは、実に醜悪な笑みを浮かべるパウエルであった。

「まずは忠誠の証とし、我輩の靴を舐めよ。そして今後は我らが貴族派の尖兵として下僕となること??それが我輩からの条件であるっ！」

058 貴方が騎士をやめるなら

「そも、この国は始まりからして間違っていたのだ?」

《わー。急にひとり語りはじまったよマスター》

(こういうのが校長になると苦労すんだよな)

《こーちよーって?》

(眠らせ系黒魔術使い)

《はえー》

一方的にろくでもない提案をし、かと思えば返事も待たず急に語り出すパウエル。これには凶悪さえも苦笑いであった。

「五百年前にこのアスガルダムを興した初代皇帝シグムント。しかし彼の騎士王という称号に増長した騎士共め。愚かにも貴族を差し置き権勢を伸ばし、今もこの聖欧国にのさばっておる。これほど許し難き蛮行は無い。貴様らとてそう思うであろう?」

「??その露骨な選民思考。アンタ、貴族は貴族でも『旧貴族』の連中みたいね?」

「旧貴族だア?」

「その蔑称を使うな。我らは旧くなどない。貴族派と呼ばぬか!」

シユラの呼称に食つてかかるパウエル。

よつぽど気に入らないんだろが、そもそも貴族に新と旧つてあんのかよ。そう思わ
ずにはいられない。

「貴族派ねえ。同じ貴族相手にまで敵意を振り撒いてる癖に」

「ふん。貴族としての誇りを忘れ、私財を切り崩してまで騎士共に媚びへつらい家格を
保つ商売鼠など、もはや貴族と呼べはせぬわ」

「どつちでも良いわよ。権力欲しさに騎士に賄賂を贈つて腐敗を加速させるか、性懲り
もなく過去の栄光にすがるかの違いなんて」

「すがっているのではない！『古き良き貴族の栄光を再び』という、我輩らが使命を果た
したいだけである！」

《?!にやるほど。どーやら貴族には二種類居るっぽいね。旧貴族は貴族復権の為のタカ
派つてとこかな?》

（お、おう。そんなとこだな。なかなか理解力が高いじゃんか、凶悪）
《どやあ》

あれ、ひよつとして凶悪さん俺より頭良い?

いや俺だつて理解してない訳じゃない。でも、欧都暮らしの俺はともかく、凶悪は孤
児院で放置されてたわけじゃん。知識の下地が違うのにも関わらず、聞いただけで現貴

族と旧貴族の違いを把握出来るなんて。

まずい。IQ鉄パイプ以下って凄い屈辱的なんですけど。

(あかん。このままで俺の威厳が、主人公としてのプライドが!)

《え。威厳なんて別に最初から?!》

俺は実戦担当とはいえ、これは挽回せねば。

凶悪の辛辣なツッコミもなんのその、ここは一つバシツと決めねば主人公が廃る!

「ハッ、旧貴族の復権なんぞどうでも良い。最初から答えなんて一つだろうが」

「ほう。では??」

「臭い足向けんじゃねえ。誰が舐めるかパエリア野郎が」

「ば、パエ?!?!」

そう。交渉の中身を聞いた時点で答えは決まっていたんだ。

提案を呑むとでも思ったのか、伸ばされた足を払えばパウエルの顔が驚愕に歪む。

「確かに俺は騎士になる為に血の滲むような努力をしてきた。それこそお前らの言う悲

願って奴だ。騎士の称号つてのは決して軽いもんじゃねえよ」

「ぐっ??! だったら何故条件を呑まないのであるか! 惜しむなら、我輩に忠誠を誓うので

ある!」

「まだ分からねえかこの野郎」

ようは貴族つてこういう生き物なんだろう。世の中全部、自分の思った通りに進むつて前提で生きている。主人公の俺でさえ思い通りにいかないことが多いつてのに。

だからその贅沢な“勘違い”を、思いっきり正してやるべきだろう。

「誇り捨ててテメエの下僕になるくらいだったなら、騎士身分なんざ惜しくもなんともねエつて事だよ腐れパエリアが！」（誠に残念ながら貴君の採用は見送らせていただきます）

騎士の称号を求めたのは、ヒーローを志す為の手段だったからに過ぎない。そしてヒーローはこんなところで身分惜しさに忠誠を誓わない。手段の為に目的を捨てるなんて、本末転倒も良いところだ。

「今すぐ失せなクソ野郎。帰つてテメエのケツでも舐めてろ」（ご苦労様でした。お出口は右手になります）

コイツの目論見なんて、最初から叶うはずもなかったのだ。



ああまで言えば、俺が絶対に頷くことはないと察せたんだろう。

覚えるのも面倒な罵詈雑言を吐き捨てた後に、パウエルは懲罰房から出ていった。後悔するなよ、と恨み節を添えて。

「これで良かったの？」

「ああ？ 良いに決まってるんだろ。それこそテメエは良いのか、つい俺が交渉蹴つちまっただが」

「冗談。あんな奴の下僕なんて死んでもゴメンだわ。別に騎士だって惜しくもないし」
「チツ?? 才能あるやつはこれだから」

嵐が去って、考えるべきはやっぱりこれからの事だった。

今までの努力を思えば騎士称剥奪は辛い。魔術修行手伝ってくれたクオリオにも謝らないとだし。

なら今考えるべきは未来についてだ。

「魔術師ヒイロってのは」

「白魔術しか使えないくせになに言ってるのよ」

「なら教官ヒイロは！」

「騎士になれないのに教官になんてなれる訳ないでしょ、馬鹿？」

「ぐぬぬ」

もつともすぎるシユラの否定にがっくりと凹む。

いやまあ自分でも無理だと思ってるけど。魔術師は駄目。教官も論外。じゃあ、もつと自由なのはどうかだろう。

「冒険者ヒイロならどうだよ」

「??:冒険者?」

「おう。なにもこの世界はアスガルダムだけじゃねえだろ。世界各地を周りながら、秘境やらダンジョン巡り。トレジャー探しってのも悪くねえ」

やっぱり主人公といったら冒険だよな。

いっそアスガルダムから飛び出して、この世界を渡り歩くってのも全然楽しそうだし。行く先々で困ってる人を助けて名を売り、いつかヒーローとして認知される。

うん。いいじゃん。俺的には全然有りだぞこれ。

「夢見がちね。脳筋のアンタだけじゃドジ踏んでそこから野垂れ死ぬ未来しか見えないわよ」

「んだとお!?!」

《マスター。ボクもぶつちやけその未来しか見えないね》

(凶悪!?!ここはフォローする所だろ!?!)

《ボクは現実主義者なんで》

あつさりと否定されて、がっくりと凹む。

そんな俺の様子が牢の壁越しにでも想像ついたのか、シユラはくすぐったそうに喉を鳴らして。

「だから、アタシもついていってあげる」

「あア?」

意外な提案をしてくれた。

「何よ、不満? 言っとくけどアタシ、騎士団に入る前は一年くらい旅してたから。あんたよりも全然慣れてるわよ」

「テメエ! 冒険面でも俺より上を行きやがる気か?!」

「残念ね。頭の悪さと目付きの悪さ以外じゃ全部アタシが上よ」

「目付きはテメエのが悪いだろうが!」

「悪くない! アンタのが全っ然悪いわよ!」

「あア!」

どういふ風の吹き回しなのか、シユラが二人旅を提案するとは。

牢の中でさえしようもない言い合いするぐらいなのに。

あれか。ライバル枠だから、主人公不在の危機感でも発動したのか? ううん、わからん。

「ま、ともかく。アンタが世界を巡りたいってんなら、しょうがないから付いてってあげるわ。感謝しなさいよね」

「て、テメエ、勝手について来るってぬかしておいて、感謝までせびりやがって?」「うっさい!」

でも、コイツとの二人旅つてのも案外悪くないんじゃないか。

口喧嘩ばかり起きそうでも、退屈はしなさそうだし。実際頼り甲斐はあるし。ぶっちゃけ凶悪と俺だけってのも不安だし。

なんて風に、心の内でぼんやりと前向きな気持ちになつて来た頃だった。

「――残念ですが、その未来予想図は白紙に戻していただきます」

「!」

突然割つて響いた女の声に、慌ててそちらを向く。

いつの間にか俺達の独房の前に立っていたのは、一人の女性だった。

滅私色のショートヘアに、モノクルから覗く鋭い紫の瞳。

いかにも規則規律に厳しそうな頑固さが姿勢に出ている感じに、俺はふと既視感を覚えた。

(あれ、この人って確か、入団式のときの??)

思い出した。春の入団式に壇上で入団案内してた委員長だ。

確か、リーヴァ団長補佐官筆頭なんて呼ばれてたはず。間違いない。でもなんでこんな所に。至極当然の疑問が浮かぶ。

だがその眼差しは、俺の疑問どころか存在などまるで眼中にないかのように、シユラだけを鋭く見つめていて。

「喜びなさい、エシユラリーゼ・ミルガルズ。貴女は釈放ですよ」
そう、告げた。

059 Round and Round

「どうしてなのよ」

夕陽に焼き焦げた世界で、今にもかき消えそうな囁きがこぼれ落ちていた。

アスガルドムの欧都の街並みは、黄昏になれば一際に美しい。しかし通りを重い足取りで歩くシユラの表情は、失意に沈んでいた。

「アタシだけ釈放って??意味分かんないわよ」

懲罰房に囚われていたはずの彼女が、何故外を歩いているのか。その理由を思い出す度に、シユラの奥歯が悔しさで軋む。

『調査書類によると、此度の依頼はそちらのヒロ・メリファアが受諾したものだと言言がありました。そして貴女は居合わせたただけであり、故に酌量の余地ありと判断し、三日間の謹慎まで減刑されましたよ』

『??:は??:』

リーヴァの告げた内容は、シユラを唾然とさせた。

なんだそれは。共に村に向かっておいて、巻き込まれただけなはずがないのに。当然

シユラはリーヴァに食つてかかったが、冷たいモノクルの乙女はまるで取り合おうともしない。

そして、リーヴァはあまりに無情な問いをヒイロに投げかけた。

『では、確認します。ヒイロ・メリファー??コルギ村のハウチ氏からの依頼を受諾したのは、貴方で間違いないですね?』

『——、???ああ。俺が受けた』

『ヒイロっ!?!』

『了解しました。では、貴方の処分の確定作業がありますので、私はこれにて』

『待つて!待ちなさいよ!?!ふざけるな、こんなのつ、アタシだけが赦されていいはずが??ヒイロオツ!!!』

氣付けば、掌から血が滴っていた。

ふざけるな。あんなヒイロの善性を逆手に言質だけを取るやり方で、どうして自分だけが赦される。アイツだけが罰を受ける。

村を救おうと決めたのは確かにヒイロだ。けども村を本当に悪夢から救つたのもヒイロなのだ。

本当ならば治安維持組織たる騎士団がやらなければやらないことを、彼はやったのだ。軍規違反であるとしても、酌量の余地ならば功績者のヒイロにこそあるはずじゃな

いのか。

そう、去り行くリーヴァに想いのままぶつめた。けれど。

『私はあくまであの御方の命によつて動いたままでです。その勘定に、彼は含まれていません。貴女だけを釈放するだけでも面倒でしたのに、これ以上の面倒はごめんですよ。精々これからは、貴女を推薦し、編入までさせたあの御方に報いるのですね??エシユラリーゼ・ミズガルズ』

「??なにが」

自分だけを救つておいて、勝手に世話を焼いた気になるんじゃない。だつたらどうしてヒイロに全部押し付けるやり方を選んだのだ。

どっちも救えただろうに。自分をヴァルキリー学園に推薦した『あの男』ならば。団長補佐官筆頭に命じる立場たる彼ならば、間違いなく救えたはずなのに。

「ヒイロ??」

悔しかった。何も出来ないでいる自分が。ただ寮に帰る事しか出来ない自分が。肝心な時ばかりに、救いたい人を救えない自分に。腹が立って仕方ない。

「なっ??エシユラリーゼさんか!?!」

「!?!アンタは、ヒイロの??」

そして世界はそんな彼女に優しさを見せることなく。

残酷なまでに突き落とそうとする。

「聞いたぞ！ヒイロと一緒に懲罰房送りになったって！君がついてながらどうしてアイツに無茶させたんだ??！」

「??ごめん」

「えっ。あ、いやその、謝って欲しい訳じゃなくてだね??す、すまない、事情も掴めてないのに責めてしまつて。あれだ、どうせヒイロのバカが勝手に暴走したんだろ？全く、考えるより先に行動するなどあれだけ口酸っぱく言つたのに??！」

滝のように流れ落ちる憎まれ口だった。だがそれはクオリオがヒイロに心を配っていた証だろう。見え隠れする友情が、一層シユラの罪悪感を鋭く刺していた。

「けれど安心したよ。君が此処に居るということは、ヒイロの馬鹿も釈放されたみたいだね」

「っ」

「とはいえあの馬鹿だ。姿が見えないとなると、恐らく懲りずにどこぞで鍛錬しているんだろう。全く、あの修行馬鹿め。使用人達の魔の手から僕を見捨てた分を含めて、たっぷり説教してやるとしよう」

きつとヒイロのことだからと。いつしか当たり前にクオリオの日常に溶け込んだ男に、朗らかな恨み節を囁く優しい表情が、胸に痛かった。

痛くて、シユラには堪えきれなかった。

「??もう、戻って来ないわよ」

「え?」

「ヒイロに降った処分は??騎士称剥奪。だから、あいつはもう戻って来れないわ」

「——は?」

打ち明けた事実には、クオリオはハンマーで頭を打たれたように絶句した。

060 主役達の奔走

「はは、そんな馬鹿な。依頼請負の罰則は重いけど、なにも剥奪なんて。冗談だろ？」

「冗談なんて言えるはずないでしょ??」

足元が不確かでさえあった。

シユラが告げたヒイロへの処分。クオリオにとつても、簡単に受け止められるものではない。

きつとなにかの冗談だ。そうであるはず。そうに違いない。

しかし眼の前で俯くシユラの表情は、種明かしを期待するにはあまりに暗かった。

「本当に??剥奪なのか?いくらなんでも罰則が重過ぎるぞ!な、なにかの間違いじゃないとか??そもそも、ヒイロが剥奪処置を下されたなら、なんでキミだけが此処に??」

「そんなのアタシが知りたいわよ!!アイツだけ主犯に仕立て上げられて、アタシは巻き込まれただけの扱い?だから謹慎程度で済ませる!?!こんな馬鹿げた処置を、団長補佐官筆頭もみすみす受理して??ワケ、分かんないわよッ」

「???」

冗談であつて欲しかった。けれども聞いたこともないシユラの慟哭は、その事実

女が打ちのめされている証だ。

嘘だと思いたい気持ちよりも、聡明な頭脳が導き出す。

ヒイロは騎士団から追放されるという事実を。

ようやく暖かくなつたばかりのジエ^五ミニ^月の風が、異様に肌に冷たかつた。

「ごめん。八つ当たりして悪かつたわ。でも、少し??放つておいて」

「あ??」

クオリオの優秀な頭脳をも埋め尽くす衝撃と困惑。立ち直れない間に、灰色の少女が去っていく。街並みの陰りに吞まれ行く背に伸ばした腕は、宙を掴むだけだった。

「??称号剥奪だつて?」

独り残されたクオリオが呟く。ヒイロに下されたあまりにも重い処分。けれどもそれが返つて、クオリオに多くの疑問をもたらした。

（おかしい??依頼請負で称号剥奪なんて、現地で余程の被害を起こさない限りくだらない罰だぞ。それが即日検討されたつて?しかもそれを補佐官筆頭??あの人”が受理しただつて?）

仮に剥奪処分がくだるほど被害を出したなら、シユラの態度も妙だ。自分への悔いより、理不尽な処遇に困惑しているように映つた。

それに処理がスムーズ過ぎる。罪が重ければ重いほど事実確認と精査は必要なはず。

なのに剥奪処分が即日即決。このスムーズさに、どうにも違和感を抱かずにはいられなかった。

(??確かめなくては)

使命感にも似た想いで、クオリオは騎士団本部ヴァルハラに向けて駆け出した。

(勝手に謝って勝手に筋通して、挙げ句勝手に居なくなるなんて??そんなの、僕は絶対許さないぞっ)

いつかの夜に押し付けられた分厚い本を拾い上げ、強く胸に抱き締めながら。



「最低ね」

寮部屋に帰宅するなり、備え付けのベッドに寝転がったシユラの第一声だった。

懲罰房の硬い床も、不潔な臭いも薄暗さも此処には無い。けれどあそこに居たときよりもずっと最悪の気分だった。

「??恩に報いるだなんて言ってくれるわ。だったらアタシが一番に報いなきやいけないのは、ヒイロじゃない」

恩義がない訳じゃない。でも報いたいと真つ先に想う相手は、仄暗い独房に閉じ込められたままだった。そして彼は騎士じゃなくなる。あれだけ努力していた男が、夢を折らなくてはいけないのだ。

「なのになんでアタシは、なにもできないのよ?!」

その傍らで、自分だけがのうのうと赦される。

シユラにとつて最低で最悪で、残酷な現実だった。けれどもこの不条理を覆す妙案が思いつかない。

修羅には闘う力しかないのだ。あれほど疎^とんだ権力さえ、今は欲しかった。

「?!:アンタだけに辞めさせるもんか」

だから決意だけは固めていた。

騎士職を辞してヒイ口を追いかける。今回の一件で疫病神扱いされるかも知れないが、縊^{すが}つてでも共に行くつもりだ。

騎士となれば魔獣の情報が多く手に入り、討つ機会も増える。復讐の炎を燃やす薪をより多く得られるからこそ、彼女は騎士になったのだ。今更惜しくなどない。

「アンタだけ独りにさせるもんか」

なによりこのまま彼を独りにしたくなかった。

否、本当は独りになりたくないだけなのかも知れない。

入団試験の時に見た、他とは違う焰の意志を。

祈りの家から去り行く時に背に感じた、あの重みを。

このまま遠ざけて終わるのは、嫌だった。

だからヒイロが騎士を辞めるのなら、自分も。

無力感に苛まれながらも揺るがない決意を硬める、そんな折だった。

「シユラ姉、帰って来てる〜?」

「??シヤム?」

返事を待たずして寮部屋の扉を開いたのは、毛先だけが桜色に染まった青髪ミドルヘアの少女であった。

錠前付きの赤いチョーカーを首に巻いており、桜と青が瞳の色が不思議ながらも快活な印象を与えた。

「わはあ!おつかえりー!ひさびさのシユラ姉だ!」

「ちよ、ちよつとシヤム??急に飛びついて来ないでよ」

「ごめんごめん。つい嬉しくなっちゃってさあ」

「ついじゃないわよ全く??」

躊躇ためらいもなく抱き着いてきた少女に、シユラは溜め息をついた。シヤム・ネシャーナ。つつけんどんな態度ばかり取っては距離を置かれる自分に、それでも構わず懐いてきた

シユラのルームメイトである。

元氣の塊ともいえるシヤムを当初は鬱陶しがったシユラだったが、折れたのだろう。『シユラ姉』と呼ばれる頃にはもう、シヤムを厭うことはなくなっていた。

「ねえねえ、ご飯行かない？シユラ姉が居ない間、積もる話もあつてさあ〜」

「??ごめん。ちよつと今は、気分が良くないのよ。少し一人にしてくれない?」

「ええええ??」

シヤムの悲嘆つぷりは罪悪感を大いに刺激したが、それでも今は食事を楽しむ気分にはなれなかった。

青桜の瞳を潤ませ気持ちを訴えるが、シユラの態度は変わらない。澁々納得し密着状態から離れたシヤムだったが、はたと思いついたように懐をまさぐった。

「あ!忘れてた、シユラ姉に渡さなきゃいけないものがあつたんだつた」

「??アタシに?」

「そうそう。寮母さんがシユラに渡して欲しいって頼まれたものらしくて、そこをすかさずウチが任されたのさ!はいこれ!」

「??手紙?」

差し出されたのは、一通の手紙だった。シヤムが大雑把にしまったせい少し皺しわが出て来ている。しかし読めない訳ではないだろう。

不思議に思いつつも、シユラは手紙に目を通す。

「——え」

差出人の名前はない。内容も僅か。

けれども記された内の一文に、シユラの際はピタリと止まった。

『ヒイロ・メリファーを助けたいか？』

061 貴方は私が救うから

《ねえ、マスター》

(なんだよ凶悪)

《いや、ほんとーにあれで良かったの？マスター、騎士じゃなくなっちゃうんでしょ》

(まあ、そうだろうな)

《ボクは納得いかないけどなあ。あの女だけって所が特に》

(なんでだよ。シユラは元々反対してたんだ。一緒に来てくれたのも俺一人じゃ不安だったからだって言ってたし)

《それはさつきも聞いたけど??マスターはなんでアイツだけ、とか思ったりしないの？(しないって。むしろアイツの罪が軽くなっただんならいい事じゃね?)

《??はあ。これだよ。マスターをマスターにしたの、ミスったかなあ》

(ひどい)

拜啓女神様へ。出来立ての相棒が早くも俺を過あやまちにしようとしています。泣きそう。

外はすっかり陽が落ちた夜。シユラだけはせめて、と思つた俺の証言が凶悪は気に入らないらしい。

でもさあ、仕方なくない？ 実際依頼受けたの本当に俺だし。嘘ついてどうすんの。主人公的にも、あそこはああ答えるのがベストだと思うけど。

《はあ。それにしても、いつまでここで放置されるのかなあ。マスター忘れられてない？》

(いやそんな、俺ほど存在感あるやついねーだろ)

《んー。確かに思考と言動のちぐはぐさとか、行動自体は強烈だけど、いまいちこうステータスとか外見がパツとしないよね》

(えっ)

《黙ってるマスターはなんか普通にそこら辺に居そうだもん》

(なっ??なあっ!?)

おいおい。おいおいおい。

なにを仰る凶悪さん。こんな主人公捕まえて。

くそっ、シユラとかクオリオと比べると華がない自覚があるだけに今のは刺さった。だからだろう。凶悪に対しての反論は、思考だけでは収まり切れなかった。

「誰がモブだコラア！俺アヒロになる男だぞ！」

「ずいぶん大きい独り言ね。アンタは最初っからヒロでしょうが」

「!？」

《おっと》

つい叫んだら、まさかの人物からまさかの返事がまさかなとこから返つて来たよ。

振り向いた先の、独房についてる鉄格子付きの窓穴。今の声は間違いなくここから聞こえてきていた。

「シユラ?! テメエ、なんでンな所に居やがる?!?」

「馬鹿、声大きいわよ。静かにしなさいっ」

「お、おう。じゃなくてだな、どうしてそこに居んだよ」

「本部の地理に詳しい知り合いが居たのよ。探すのに少し骨が折れたけど、監視は殆どないみたい。騎士の怠慢に助けられるなんて、皮肉な話ね」

つまりは懲罰房の窓に繋がる外に忍び込んでる訳だけど。クールな癖に結構無茶するよなこいつ。

見つかつたらヤバいののに、どうしてこんなとこまで来たんだか。今は方法よりも、シユラの目的が知りたかつた。

様子を見に来たの。さつきは格好付けたアンタが、今頃後悔してるんじゃないかつて」

「ああ? してる訳ねえだろ。丁度これからの俺様の未来に想いを馳せていたところだ」

「冗談よ。相変わらず無駄に前向きね、アンタは」

（冗談かい。シユラが言うど冗談に聞こえないっての）

《ふん、冗談にしても性格悪いよねこの女》

(??なんか凶悪、シユラに対して当たり強くね?)

《気のせい気のせい》

凶悪の言葉が俺だけに聞こえる仕様で良かった。なんか折り合い悪そうだしこいつら。

でもあれか。様子見にここまで潜り込むってことは、案外俺を心配してたのかもしれないな。シユラも可愛いとこあんじゃん。

「それにアタシに一方的に借りを作って、自己満足に浸られでもしたら腹が立つじゃない」

「ああ?」

「孤児院でアタシを助けて、ここでもアタシに有利な証言して。なによ、もしかしてアタシに惚れてるの?」

「阿呆かよ。仲間だから助けたまでだろうが。変なこと言ってんじゃねえ」

あ、前言撤回。こいつ可愛くない。

やっぱりライバルキャラということか、素直に感謝している訳じゃないらしい。ずいぶん捻くれた言葉に思わず俺もムツとしてしまう。

「知ってるわ。でも??アタシは割と、アンタのこと嫌いじゃないわ」

「????
あ?」

「つて、あれ。いや嫌いじゃないって。俺も別にシユラが嫌いって訳じゃないけど。」

「急にしおらしい声色になったシユラに戸惑ってたら、なにやらヒラヒラとしたものが窓の格子越しに投げ渡される。」

「なんだこれと手に取ってみれば、"リボン"だった。」

「色は黒の布製。あの入団試験の折に拾った、シユラのリボンだった。」

「それ、持ってた」

「このリボンは??あん時のやつか。大事なもんじゃねえのか?」

「大事よ。大切だった人達から貰った形見だから」

「形見、だと??だったら」

「あげる訳じゃない。押し付けてるだけ。ちゃんと後で返して貰うわ。だから、変なこ

とに使ったら殺すわよ」

「使わねえつつてんだろ!」

「ふふっ」

「懐かしいやり取りを思い出したのか、珍しく年相応に弾んだ笑い声だった。」

「でも待てよ。大切だった人達の形見つて。そんな大事なもんをどうして俺に渡すん

だよ。」

「ヒイロ」

「あア？」

「アンタは絶対、私が助けるから」

「シユラ??？」

「だから、そこで待ってなさい」

待て。なんでそんな覚悟決めたような声出してるんだよ。

なにするつもりだお前。そんな問いかけに、シユラは応えない。

「シユラ！」

「???'」

ただ一言の返事の後に、駆け出すような足音が遠ざかっていく。

無理矢理に窓の格子にしがみつき、外を見渡す。けれどももうシユラはどこにも居な

い。黒々とした闇の中に、足跡だけが吸い込まれていく。

(??なにしようってんだよ、シユラ)

べったりとした夜空に浮かぶ月が、少し赤みを帯びていて。

なぜだか、胸騒ぎが止まらなかった。

062 エシユラリーゼ・ミズガルズ

エシユラリーゼ・ミズガルズには、十歳の頃までの記憶が無かった。

気付いた時にはエシユラリーゼという名で呼ばれ、気付いた時にはミズガルズ孤児院に引き取られた孤児だった。

両親については知らない。けれども深く知ろうとしなかった。自分以外の孤児達もまた、親の居ない子供達ばかりだった。

だから孤児院のサテイ院長が、みんなにとつてのママだった。

昔からシユラは腕っ節が強かった。同年代の男の子との力比べでも負けなしだった。だからサテイが孤児院で育てた薬草を、粉末にして袋に詰め、人力車で隣町まで運ぶのは彼女の仕事だった。

女の子がする仕事じゃありませんとサテイに言われても、シユラは譲らなかつた。手先が不器用なシユラはユオと違って料理は出来ないし、ミミみたいな裁縫なんて逆立ちしたって無理だった。

それでも孤児院の運営資金の為に力に成りたい。だから運び仕事はシユラにとつて

うってつけだった。

多分、才能に選ばれていたのだろう。剣を持ってばすぐに感覚を掴み、技を肌馴染ませるのも早い。隣町で開催される腕試し大会では、大人すら敵わないほどにシュラは強かった。

その賞金で食料を買い込み、孤児院の皆に配った時には達成感に浸れたほど。けどもサテイ院長は焦ったように怪我は無いかと心配し、危ないことをしては駄目だと叱られた。

でもきつとその時に、シュラは知ったのだ。大事にされる感覚を。だからシュラにとつても、院長や孤児院の皆は大事だった。

かけがえのないものだったから。

【(G x e e e e)!!】

いつものように運び仕事を終えて帰宅した孤児院で、彼女は地獄を見た。

『エ、シュラ、リーゼ?!』

リボンをくれた裁縫上手のミミの腕が、黒い小鬼の玩具になっていて。

料理が得意なユオの足で、異径の影が鍋をかきまぜて。

いつもつつかかってきたトニの頭が転がって、本が好きなセンリの目玉が、チエル

の髪が、みんなが、みんなが、みんなが。

『サテイ、せんせい??』

『??たす、けて??』

魔獣の腕に腹を貫かれたサテイ院長の伸ばした手が、落ちた。

色が消えてく。光が負ける。眼の前には全てを奪った悪鬼の群れ。

しかしそんな悪鬼達が霞むほどの形相で、シユラは魔獣MAJINの悉くを殺し尽くして。

その日に、一人の修羅が産まれたのだ。

全てを奪った魔獣への復讐の誓いを違えぬよう、彼女はアスガルダムを駆け巡る。

その最中に礼を言われることもあった。感謝の品を尽くされることも。シユラの美貌に恋をした男達からの求愛も。しかし一切の興味を示さず、彼女はひたすらに魔獣を葬る日々を過ごした。

そんな最中に出逢ったのは、一人の騎士だった。

精悍な顔つききの男はシユラに言った。君のやり方では効率が悪い。魔獣を殺すための剣でありたいのなら、相応の身分があつた方が良い、と。

シユラはこう返した。自分に勝つたのなら、その提案を飲むと。

そして——シユラは敗れ、騎士の手配によりヴァルキリー学園に編入される事となつ

たのだった。

シユラは後悔したが、敗北した上に約束を反故にすることはプライドが許さなかった。しかし学園での日々はひたすらに退屈で、同年代らしき騎士候補生たちの温ぬるさが気に障った。

おまけに自らが目指さなくてはならない騎士といえ、私腹を肥やす事に墮落した輩が多く、好感を覚えるような人物は殆ど見当たらない。闘い続ける道を選んだ彼女にとっては、どいつもこいつも甘ったれた奴ばかりだった。

けれどエシユラリーゼは——ヒイロ・メリファーに出逢ったのだ。

出逢い、観察し、彼を知った。

力も技も未熟でありながら、口にするのは大言壮語に憎まれ口。しかし彼は恐ろしいまでに努力家だった。

折れない意志。曲げない意地。飽くなき向上心。どれもこれもが”本物”だった。

周囲に失望する日々ばかり送っていたシユラにとって、ヒイロはある種の救いだ。ヒイロと出遭えたことは、騎士を目指さざるを得ない日々の中での唯一の収穫とさえ思えた。

そしてついには、コルギ村で本当に救われてしまった。

まだ近くで見たい。

遠ざかるのならば追いかけて。

恩にはちゃんと報いたい。

だからエシユラリーゼ・ミズガルズは、なにがなんでもヒイ口を救いたかったのだ。

「???
着いたわね」

カツンと、石床を踏む音が響く。

シユラが辿り着いたのは、ヴァルキリー学園の旧校舎であった。現在は建物の老朽化により使われておらず、闇一面の辺りには人どころか獣すら入り込んで居ないようだった。

「ほら、約束通り来てやったわよ」

しかしシユラは闇の向こうの、居るはずの誰かへと声をかけた。そう、彼女は思い立って此処に来た訳ではない。

『ヒイロ・メリファアを救いたくば、本日の夜半にて旧校舎の踊り場を訪れるがいい。そうすれば、彼を救う術を教えよう』

シヤムから受け取った謎の手紙には、送り主からの時間と場所の指定が記載してあったのだ。故にシユラは迷いなくここを訪れた。ヒイ口を、アイツを救うための術を求め

て。

「——いつの世も、人の優劣は生まれで決まる。そして人の優とは知恵だ。貴き家とくしとに生まれたものとそれ以外とは、頭の出来の優劣こそ顕著に現れる。なあ、お前もそう思わないか?? 薄汚れた庶民め」

「アンタ、は??」

しかし。

シユラの形振り構わぬ必死を、闇より歩む高慢な声色は嘲笑う。あるいはまんまと罠にかかった獲物を、どう料理しようかとてぐすねを引くように。

「のこのこと現れて感謝するよ、エシュラリーゼ。ははは、ちんけな村までの旅路は楽しめたかい?」

闇より歩み出たのは、ずっと以前から潜んでいた悪意。
ルズレー・セネガルが、あらわれた。

063 仕組まれた罨

「ジャガイモ貴族、どうしてアンタがつ！」

「誰がジャガイモだ！しかしどうしてとは愚鈍じゃないか。お前が此処に居る理由を考えれば察しがつかないかい？」

「じゃあ、あの手紙は??」

「ふはは、僕は文才というものにまで恵まれてしまっているらしい。よもや本当に来るとはね。流石は平民、甘い言葉には尻尾を振ってよく集^{たか}る！」

満を持してという心持ちだろう。

現れたルズレーはとても饒舌だった。身振り手振りも大きく、歪んだ高揚感に酔っていた。

「あの村長もそうだ。僕がちよつとお前の事を教えてやれば、必死になって探し回つてさー！」

「アタシが騎士になつてる事を知つたの、ずっと妙だと思つてたけど??アンタが教えたのね」

「そうとも。だがもつと傑作だったのは、本当に依頼を受けてくれたことだよ。あんな

ゴミみたいな村の為にリスクを犯すなんてさ！はははは、実におめでたい馬鹿の集まりだったよ！後はお前達が勝手に請負ったことを報告するだけだった。実に愉快だったさ」

つまるところルズレーの手引きだったのだ。

アツシュ・ヴァルキュリアの噂だけを知っていたハウチがひと目見てシユラをそうだと確信出来た理由も。帰還早々にシドウ教官に捕縛されたのも。

「アタシに負けたのが悔しいなら、アタシだけ狙いなさいよ！ヒイロは関係ないじゃないー！」

「大有りだとも。あのデクめ、僕に散々後ろ足で砂かけやがったんだ。お前含めて身の程を知らしめてやらなくちやな？」

「なにが身の程よ。こんな姑息なやり方でアイツの夢を奪つてまで！」

「??騎士称の剥奪か。ああでも、流石に僕も罰則処分まで調整は出来ないさ。だから頼りになる御人に、少々お力添えを頼んだのさ」

「頼んだ、って??」

「クフフフ。先刻ぶりであるなあ。一日に二度も我輩を拝謁を出来るとは、平民には過ぎた褒美とは思わぬか？」

「！」

類は友を呼ぶのか。つい数時間前に顔を合わせた旧貴族、パウエルまで姿を見せた。「パウエル卿。此度のご助力、心より感謝致します」

「ふふふ、他でもないセネガル家の嫡男に頼まれては否と言えまい。それに、愚か者に相応しき鞭をくれてやるのも、高貴たる者の務め。審問担当官も、我輩の威光をよく理解していたまでのことよ」

「??なにが威光よ。どうせ審問官に金を積んで、無理矢理処罰を捻じ曲げただけでしようが!」

「ヒイロなる者についてはルズレーくんから聞いているのである。貴族を尊ばない低俗な輩などもとより本隊には不要である。ならば我輩が引導を渡してやるまでよ」

「そんなくだらない理由で?!」

シユラの中で轟轟と怒りが燃えた。低俗の塊みたいな男のせい、アイツが窮地に立たされている。全くもって許しがたい。

けれども冷静さは必要だった。今、窮地に立っているのはシユラもまた同じなのだ。

「???、
——そッッ!」

「どわっ!」

激情によつて鋭敏化した感覚は、物影から機を伺っていた小癩こじやくな男を見逃さない。

懐から投げたナイフがすぐ傍の壁に突き刺さつて、シヨーク・シャテイヤはたまらず

声をあげた。

「チツ、このアマ。俺に気付いてやがったな！」

「シヨーク、この役立たずめ。しくじったな」

「す、すいませんルズレー様。あの女、とことん可愛げのない奴でさあ」

いわばこの場がシユラを肅清するための罠。ならばルズレーの取り巻きの姿が見えなければ、警戒するのは当たり前だった

「誘い出した上に闇討ち。とことんまで姑息ね??けど、やられっぱなしは性じゃないのよ。アンタ達を徹底的に叩き潰して、そのパエリアには処分を撤回してもらおうじゃない」

しかしシユラは、この窮地を好機と捉えていた。例え罠であったとしても、自分達の処分を捻じ曲げたパウエルが眼の前に居るのだ。

捻じ曲げたのなら、本来あるべき形に戻すことも出来るはず。

否。させてやる。どんな手を使ってでも。

シユラは尋常ならざる剣気を立ち昇らせながら、ルズレー達に斬りかかった。



(あんな奴らの畏にハマるだなんてね。なにがアツシユ・ヴァルキュリア。ここの所のアタシはてんでダメね。あの馬鹿に笑われちゃうわ)

戦いとは数の差である。

それが三対一となれば差は顕著にあらわれるものだ。

しかしこの夜、この場において、その理屈は身を潜めていた。

(だからこそよ。今度こそアタシがやるの。誰かの為になんて、それこそ性に合わないけど)

「せいッ!!!」

「ぐへえあ!?!」

「ショーク!? お前、あつさりやられるな!」

「アンタもよそ見してんじやないっ!」

「ぶふっ?!?こ、この、僕を足蹴に?!?」

「ならば我輩の魔術で!詠唱破棄——『シルフの戯れ!』」

「又ルいのよキモ髭ひげ!『イフリートひげの爪!』」

「ぬううっ!?!」

鮮やかとさえ言えるだろう。

ショークをガードごと弾き飛ばし、ルズレーを蹴り払い、パウエルの緑魔術には赤魔術で相殺。一つのアクトに隙のない攻勢で、エシユラリーゼは数の不利をもつていない。コルギ村での失態を取り戻そうかの様な、凄まじい大立ち回りであった。

「おのれ。平民風情が小癩なっ！」

「うるさい！存在が癩そのものよアンタは！」

容赦もない。呵責も必要ない。剣気が籠もる理由はあれど、刃が鈍る理由などなかった。

灰色の戦乙女。その異名に恥じない強さに、ルズレー達は焦りを隠せない。

(とはいえ中々、深くまで踏み込み切れてないわね)

数の不利はもはや無いのと同じ。だが決定打にまで至らない。

パウエルの緑の魔術が嫌なタイミングで放たれ、後一步が踏み込めないのだ。高慢極まりない男だが、その技術は腐っても本隊入りを果たした騎士といえた。

(よし。まず、一人を確実に落とす?!)

『我纏う冷厳なる神の楯』——スヴァリン！』

ならばとシユラの決断は早かった。無理をしても数を減らす。リスクを減らす為の白魔術を唱え、防御力を向上させ刀剣を構えた。

「——」

「ひっ」

狙いはお前だ。そう知らしめるシユラの眼に睨まれて、ルズレーの膝がぶるりと震えた。シユラ憎しと謀略を巡らせたとはいえ、凄惨だった敗北の味は、まだ忘れられるほど昔ではないのだ。

一歩後退つたルズレー。その隙を見逃すまいと、シユラが一気呵成に踏み込もうとした瞬間だった。

『燃やせ、燃やせ、赤のはじまり』??イフリートの爪!』

『歌え、歌え、青き水面みなもよ』??ウンディーネの詩!』

「——ッ!」

突如として響き渡つた詠唱。走つた悪寒に従つてシユラは反転し、咄嗟に大きく跳び退いた。

シユラの残影を、焔の爪と青き流水が掻き消していく。

魔術による攻撃。パウエルではない。シヨークでもない。当然だがルズレーでもなかった。

「苦戦してるようですね、オードブル卿。加勢に参りましたよ」

「ほほう、これは美しきレディだ。しかし貴族に剣を振るうとは、よほど教育がなっていないらしいな」

「ムーク卿も物好きですわねえ。あんな品性の欠片もないブスを美しいなど。しかし道理を弁えない平民を躰けるのも貴族の務め。わたくしも手を貸しましょう」

(増援!?!しかも、こんなにな?!?)

最悪だった。

新たに現れた貴族派らしき連中、その数は八人。

覆った戦況を自覚したのはシユラだけではない。

アツシュ・ヴァルキュリアを前に劣勢に追い込まれていた悪党達は、揃いも揃って喜色を浮かべていた。

中でも彼らを手配したであろうパウエルは痛快とばかりに手を叩き、シユラを見下した。

「クフフフ。模擬戦とはいえ、あのシドウめに土をつけた貴様相手に、この我輩が備えぬはずもあるまい。懲罰房にて我輩に刃向かった事がいかに愚かだったか。

思う存分、知らしめてやろうぞ?!?!」

064 月が晒した彼の悪意は

所詮は烏合の衆。何人集まっても誠に強きものには敵わない。

そんな理屈を押し付けるにも限界はある。

「そらそらそらっ！ さつきまでの威勢の良さはどうした！」

「くうっ?!」

歯噛みするしかない。

相手は総勢十一人。パウエルの呼んだ増援は、シユラを致命的に追い詰めていた。

個々の力はどれもシユラには及ばない。しかし数が多過ぎた。

魔術、剣、槍、弓。反撃すら潰すほどの攻撃の物量に、シユラは防戦一方を強いられていた。

「あははは！ 不様なダンスじゃないか、ええ？ 所詮平民、そんなステップじゃ男のエスコートにも応えられないぞ？」

「卑怯者が、アンタはなにもしてない癖につ！」

「これは肅清だ！ 僕はお前という身の程知らずを躡ける為の場を用意した。十全たる功

績を果たしてる！卑怯者呼ばわりはいただけないなあ、じゃじゃ馬め！」

「なにが仕事よ??全部アンタの逆恨みの癖に！」

よつてたかつて数の暴力を押し付けているだけの男が、なにを誇らしげに胸を張るのか。

「よく言ったセネガル卿。そう、貴族とは存在そのものが貴ばれしもの。平民ごときが楯突いて良いはずがない」

「騎士社会などクソ喰らえだ。相応しき者が然るべき地位に君臨するから社会は回る。その理屈をしかと刻みつけてやろう」

しかし彼に。否、彼らに恥と思うことなどない。むしろ正しい行いなのだろう。自分を尊ばない下賤な輩など、彼らにとっては無価値でしかないのだから。

「調子に乗るなアアアアアツツ!!」

「なん——ごほっ!!」

「ネギダツタ卿!?こ、このブス!平民の分際でよくも我ら貴族に?」

「さつきからうっさいのよ厚化粧」

「ぶっぺっ」

だが黙って嫩なぶられるアッシュ・ヴァルキュリアではない。迂闊に近付いていた貴族に劍の柄を叩き込み、更に口喧しい女貴族も蹴りの一撃で黙らせる。受けた侮辱の分、顔

を踏んで置くのも忘れない。

「おのれい、よくも！諸兄、合わせよ！

『戯おもけ、遊べ、バラバラに』

『歌え、歌え、青き水面よ』

『燃やせ、燃やせ、赤のはじまり』

二人を昏倒させられはしたが、生じた隙は大きかった。

シユラの反撃は一瞬の煌めきに過ぎないのだと知らしめるべく、悪辣達は一斉に唱える。

『シルフの遊戯』！』

『ウンディーネの詩』！』

『イフリートの爪』！』

(まずい?!?)

緑の刃。赤の爪。青の奔流。

同時に放たれた三色の魔術は到底受けられるものではない。

即座に飛び退き回避するシユラ。しかし大多数を相手に立ち回り続けた疲労に、動きの冴えは奪われている。

「かはっ」

そして魔術着弾の余波により、シユラの身体は壁に叩きつけられてしまった。



「は、はは、ようやく膝をついたな！」

「クフフ。やはり平民が偉大なる貴族に勝てる道理など無かったということである」

「キツヒヒヒヒ！あのアツシユ・ヴァルキュリアさんが目も当てられねーほどズタボロたあな！そそるじゃねえか、誘ってんのかあ？」

「う、ぐ??」

背中を襲う衝撃が抜けない。

呻きながらも立ち上がれないシユラを見て、ルズレー達は醜い勝鬨が上がる。

度重なる攻撃により衣服が千切れ乱れたシユラの姿に、シヨークは下卑た笑みを浮かべていた。

「ふぎ、けんな??誰があんたらみたいなの相手に??！」

「つくづく可愛げのないアマだぜ。そんなざまになってもまだ抵抗するつもりかよ」

「生憎ね、例えどんなに惨めになっても、アンタらに愛想振り撒くぐらいなら死んだ方がマシよ??！」

「??ケツ。気に入らねえな、テメエもよお！」
「あぐつ」

満身創痍ながらも気丈に振る舞う、シユラの赤き瞳が気に入らなかつた。既視感があつたのだ。どこぞのデクと同じ強き者が放つ光。

シヨークに肩を蹴り抜かれ、呻くシユラ。だがそんな彼女を、もつと暗き感情を宿して見下ろす男が居た。

「愛想ね。ふん、なにを清纯ぶつている。アイツを誑たし込んだ売女ばいたに言えた台詞か！」
「??」

「あいつは愚鈍だが、僕に刃向かえるような男じゃなかつた。古来より男を変えるのは女だ。お前があいつを誑かして、あんな風にしたんだろ？」

「アンタ、なに言つて??」

「——全部お前のせいだと言つてるんだっ！」

突然に弾けたルズレーの様相に、辺りはシンと静まり返つた。

呆氣に取られたのはシユラだけではなく、シヨークも、パウエルも、増援に來た貴族達も、誰もが豹変したルズレーを見た。

だがルズレーは止まることなく、火がついたように更にまくしたてる。

「あいつは従順だつた。常に僕の後ろに居て、僕の言うことならなんでも従う奴だつた。」

それが変わったんだ。急に、前触れもなく！」

「?!なんの、話よ」

「とぼけるな！お前があいつに何かしたんだろう！洗脳のユーズアイテムか？それともその下品な身体で籠絡したか！卑しい身分の分際で、僕の手駒を奪い取りやがって。この魔女め！」

さながら断頭台にて魔女を断罪するかのような糾弾だった。

お前のせいでヒイロは変わった。しかしシユラにはまるで意味が分からない。

シユラが初めてヒイロに会った時から、彼は彼だった。それにあの強固な精神が、自分に関わっただけで大きく変わるとも思えなかった。

「だからお前を痛めつけて、知らしめる。僕に逆らうことの恐ろしさを。裏切ることの間違いを！そうすればアイツだって目を覚ますさ?!」

(なんなのよ、こいつ。さっきから、様子が?!)

シユラからすれば、ルズレーの言葉は全くもって支離滅裂である。自分を痛めつけて、ヒイロが変わるはずなどない。見当違いも甚^{はなは}だしい。

「さあ、あいつを返して貰うぞ?!」

「ふぎ、けんな?!」

本物だった。ルズレーの歪んだ執着も。シユラを屈させればヒイロを取り戻せると

いう盲信も。

しかしシユラとて誓つたのだ。アイツにも、自分にも。

ヒイロ・メリフアーは必ず自分が救つてみせると。だからこそ、こんな所でルズレー相手に敗北する訳にはいかなかったのだ。

「約束、したのよ。アタシが救つてみせるつて。だから、アンタ達なんかに負けてらんないのよ?!」

「ぐおつ、このアマ、まだ動きやがるか?!」

氣力を振り絞り、シヨークを払い除ける。

衝撃で痺れる身体を、それでも無理矢理に立ち上がらせる。

「ふん。この状況で、まだ僕たちに勝てると思つてるのか?」

「??当たり前よ。アンタ達に勝つまでは、終わらない——!」

正面には卑劣な群雄。ここからはもはや足掻きにしかないほどの絶対的な不利。

それでも、劍を構える。心に芯を通す。

いつか見た背中を“なぞる”ように。

シユラは前を向く。臨むべき死地を見定めるように。

しかし。

「??、——え」

死地へと挑まんとするシユラを遮さえぎったのは、”なぞったばかりの背中”だった。

「つたく。どつかで聞いたような啖たんか呵か切りやがって。いつからそんなに熱くなりやがったよ、冷血女」

そう、忘れることなかれ。

「よう下衆共。こんな寂れた場所ですいぶんと盛り上がってるじゃねえか」

暗い世界にこそ、まばゆく光が射し込むように。

「な、なんで??」

「て、テメエは??!」

「ば、馬鹿な。なぜ貴様が此処に??!」

救うべく者の危機にこそ。

英雄の詩は響き渡るのだ。

「ああ? 何故だと?」

「ハツ?? ンなもん決まってるだろ、パエリア野郎が!」

英雄に憧れる、今はまだ唯の一匹の雄。
されどその佇まいは、既に威風纏いし赤き勇壮。

「——この俺が、ヒイロだからだ」

ヒイロ・メリファー 見参。

065 君思フ声

「ヒイロ??ど、どうしてアンタが此処に??」

「ハッ。そりや俺の台詞だろうがよ。勝手に覚悟完了して飛び出して、やっと駆け付けた頃にはンなザマと来てやがる。随分とらしくねえなア、シユラさんよお?」

「う?」

正直な話、心底ホツとした。

だってこの状況、どう見たって間一髪だ。色んな意味で。けどこれもまた主人公補正つてやつだろう。

なんせ主人公つてのは大概、間が良い生き物だからな。

ま、今回ばかりは補正の恩恵だけじゃないけどさ。

「選手交代だ。ちつと休んでろ」

「ま、待ちなさいよ。いくらアンタでも一人じゃ??」

「問題ねえよ」

平気だとアピールすべく、トントンと凶悪で肩を叩く。

その際、シユラのやられっぷりに脳内でなにやら言及してるけど、一旦無視する。だって、目の前の悪党達をいつまでも放置する訳にもいかないだろうし。

「答えよ。何故、懲罰房に居るはずの貴様がここに居るのであるか」

「ああ？ンなもん出して貰ったからに決まってるんだろ？」

「なんだと!?!誰がそんなことを?!」

ま、驚きはごもつともだよ。そもそも俺だって、あのまま大人しく沙汰を待つつもりだったし。

だから俺の処分が必要以上重くされてるんだ、って言われた時には驚いたよ。ほんとよくもやってくれたな。パエリア野郎め。

「ハハツ、ひとりでノコノコと来やがって。だから間抜けってんだよつ、テメエは!」
狼狽えるパウエルに気を取られていたからか、気付いた時には眼の前にビリビモスの鱗粉が舞っていた。

シヨークか。いつの間に。とことん姑息な奴だなこいつは。

「詠唱破棄——『シルフの戯れ』」

かつて苦しめられるきつかけとなった鱗粉を前に、不思議と身構えることもなかった。

油断じゃない。信頼してたからだ。そんな期待に答えるように金色の雨を阻んだの

は、俺より後方から飛来した風の刃だった。

「なっ??この風、どっから!」

「油断大敵、ね。そっくりそのまま君に贈ろう」

「て、テメエは??いつぞやの、ヒヨロガリ眼鏡!」

「品性の欠片もないネーミングだな。けど、それでいい。生憎、君みたいな輩には名すら呼ばれたくないんでね」

そう、俺はひとりで現れた訳じゃない。

頼りになる友人を引き連れて、此処に来ていたのだ。

「おうクオリオ、遅えぞ」

「君が速すぎるんだ。なんだそのデタラメなスピードは??それに迂闊過ぎるぞ。わざわざ敵中突つ込む奴があるか!」

「そのおかげでギリギリ間に合ったんだろ。ガミガミ言うんじゃねえよ、小姑か」

「くっ??一度、道に迷いかけた癖に。この方向音痴め」

けどやっぱリクオリオは辛辣だった。懲罰房で散々説教した癖にまだ言い足りてないっぽい。

でも俺が懲罰房が出られたのは、紛れもなくクオリオのおかげだった。

「お、おのれえ??だが一体どうやって。見たところ貴様も所詮は騎士候補生であろう。」

その小僧を釈放する権限などありはしないはずである！」

「ああ、当然僕にそんな権限はない。だからこそ然るべき人を説得して、然るべき人にも力を借りたのさ。例えば僕の姉??リーヴァ・ベイティガンとかにね」

「は?!?!」

ああ、そりゃ開いた口も塞がらないよな。

あのキツそうなモノクル美女が、まさかのクオリオのお姉さんだったとは。クオリオが、リーヴァさんと『もう一人』を懲罰房に連れて来た時はビビったもんだ。

どうにも一連の話を聞いたクオリオが不審に思つて、リーヴァさんに直談判に行つたらしい。そしてクオリオの説得に折れたリーヴァさんが、今回の処断を決めた審問官に問いただし、あっさり白状したと。

おかげで俺は晴れて無罪?!という訳にはならなかつたけど、騎士号剥奪は免れた訳だ。いやあ、持つべきものは頭の良い友達つて奴だよ。

「そして僕はヒイロほど無鉄砲で無計画じゃない。然るべき手は打たせてもらったよ、騎士オードブル」

「ど、どういう意味であるか??」

「——まったく。己を磨くことに時間を割かず、いつも悪事ばかりに知恵を回す。

そしていざ悪事を為す時は、決まってこの場所を選びたがる。訓練生時代からの癖も変

わらんな、パウエルよ」

「ひっ?! シ、シ、シ、シドウだとおお!?」

クオリオの打った手とは、あまりに強力な援軍要請だ。

リーヴァさんと同様に事態の再確認をするべく、クオリオが懲罰房に連れて来た人物。それはあのシドウ教官だった。

「ヒイロ・メリファー。クオリオ・ベイティガン。本来ならばこの場を収めるのにお前たちの手を借りる訳にはいかぬのだが、事情が変わった。ある程度、任せて良いだろうか？」

「了解です、教官殿」

「そのパエリアはテメエにくれてやる。煮るなり焼くなり好きにしな」

「ま、ままま待てシドウ!! は、話せば分かるのである!」

「問答無用だ。ベイティガン団長補佐官殿より貴様には捕縛の命が降りた。生憎だが、我が国の民を護るべく戦った若人を捕えた時よりも、今の私は遥かに士気が高い。覚悟せよ、この痴れ者がツツ!!」

「ひいひいひいっ?!?!」

あの並外れた慌てよう、パウエルにとつちや教官は天敵なんだろう。詳しくは聞けなかつたけど、どうやらシドウ教官はパウエルと関わりがあるらしい。

というのも、そもそもシユラが旧校舎に居る、と予測出来たのはシドウ教官のおかげだった。

実はあの格子越しの密会、シドウ教官は気付いていたんだとか。その上で見逃してくれたみたいだけど、シユラが旧校舎方面に駆けていくのを見て不審に思ったらしい。

で、今回の経緯とパウエルの勧誘の話を説明した際に、シドウ教官が言ったのだ。シユラに危機が迫っているかもしれないと。

(今回ばかりは周りに助けられっぱなしだったなあ、俺)

《今回は？今回も、間違いでしょ？あの村でのボクの助力はノーカンってこと？わあ、所有した途端にそれってマスターったら冷たいんだあ！》

(あー、はいはい。毎度毎度助けられっぱなしですよ、ええ。ってことで、今回も頼むぜ凶悪)

《んふ。しよーがないなあ》

そこでこの凶悪さんですよ。すかさず自己主張する辺り、もしかしたら俺と凶悪って似たもの同士かも知れないな。

ま、人の縁つてのは持ちっ持たれつだ。助け合い精神でいこうじゃない。

とはいえ持たれっぱなしじゃ格好つかないから。

主人公として。ヒーローとして。

かつてのヒイロ・メリファーとしても、やるべきことをやらなくては。なあ、ルズレー。お前もそう思うだろう？

「おう、久しぶりじゃねえか、ルズレー坊ちゃん」

「ヒイロ?!」

しばらく見ない内にとんでもない目付きをするようになった因縁に、告げる。「こつから先は、俺が相手になってやるよ」

お前の悪巧みは、俺が終わらせてやると。

066 今はいつかの誰かとして

「どうしてなんだ」

自覚はあった。今のこの状況を招いたのは、巡り巡って俺のせいでもあるって。

「どうしてお前が、そっち側に立っているんだよ」

「あア？」

「背いて、楯突いて、刃向かって。違うだろ。そうじゃなかったはずだろ。お前はいつでも僕の後ろにいて、僕に黙って従う。それがお前だった！それが正しい在り方なんだよ！間違っているんだ、今のお前は！」

拒んで、遠ざけて、溝が出来て。

そのまま放置してたツケだ。ヒーロの今までを精算しなかった、俺の自業自得でもあるんだろう。

「言いたいことはそんだけか？」

「！」

「甘ったれんなよ。テメエのやってる間違いには目エ曇らせたまんまで、なにを正しさを説いてやがる」

「間違いなものか！ そうだ、お前をおかしくしたのはその魔女だろ？ だから僕は正す為に行動したまでだ！ 曇ってなんかいない！」

「馬鹿野郎が。俺がテメエと決別したのは、テメエのやり方を認められなくなったからだ。シユラが原因な訳ねえだろ」

「ぼ、僕のせいだって言うのか！」

「つつ——テメエと俺のせいだつつつてんだ！」

だから、お前のせいだって言われても否定は出来ない。
でも。だからこそ今のお前を許してやれるかよ。

「だから、ここでケリをつけてやる。どうしようもねえろくでなしだった、俺の今までになアー！」

「ふ?! ふぎけるなああああ!!!」

絶叫と共に切りかかってきたルズレーを、真正面から凶悪で受け止める。感情を剥き出しにした、見たこともない形相だった。

だが、そんなものにビビってなんかいられるか。

「ふぎけてんのは、テメエの方だ馬鹿やろオオオオオ!!!」

ああ、それにさ。俺だつて頭に来てんだよ。

今までそんな機会もなかった。だからほんとに知らなかったよ。

ポロポロになったシユラの姿を見て、はじめて知ったんだ。

”仲間”が痛めつけられると、こんなにも腹が立つんだつて。



(じよ、冗談じゃねえぞ！ヒイロはともかく、あのクソやべえ教官が敵に回ってるつての
かよ！)

シヨークは焦っていた。

旗色の悪さから息を潜めていた彼は、シドウの恐ろしさをまざまざと見せつけられて
いた。

「この無礼者！貴様という男はどうして我らを目の敵にするのであるか！」

「汚職、贈賄、恐喝、不正。貴様らが為す事のいずれもが裁かれるべき事ばかりだからだ」

「お、おのれ。な、ならばいつそ貴様も我ら貴族派に加えようではないか！どうだ、貴様

ほどの武人ならば相応の褒美を約束するぞ!？」

「断!!」だっ

「ひいひいひい!?!」

シユラが倒した二人と、シヨークとルズレーとパウエルを除いた六人は、混乱の最中に彼よつて一気に叩かれていたのだ。

試験の時とは明らかに違う気迫。まさに剣鬼。パウエルが降されるのも時間の問題だろう。

(無理だ。あの貴族とじゃモノが違う。このままじゃ全員とつ捕まんのがオチだ)

ならば取るべき選択肢は一つだった。

このままルズレーと共倒れなどあり得ない。早々に見切りをつけた小悪党は、息を潜めたまま出口へと忍び足で向かう。

「逃げるつもりかい?」

「!?!」

しかし、暗き思考を見通すからこそ明晰なのだ。

撤退を企てたシヨークの前に立ち塞がったのは、クオリオであった。

「て、テメエ??!いつの間にな!」

「ヒイロほどじゃないけど、僕も僕で、君とルズレーには借りがあるんでね」

「く、クソツ!昔の恨みを引きずりやがって、女々しい奴が!」

「??性格が悪い自覚はあるさ。だからこそ、同じような腐った奴には嫌悪感が湧いて仕方ないね」

眼鏡の奥で尖るのは、かつてヒイロに向けたような憎悪ではなかった。心の底からの軽蔑だった。

「このヒヨロガリ眼鏡が。大体テメエは、なんでアイツの味方をしてやがる!」

「ん?」

「テメエをからかったのはアイツも同じだろうが!」

「??ああ、そうだね」

シヨークの指摘に、クオリオは同意する。

確かに自分は当初、ヒイロを強く拒絶した。踏み入ってくるなど厚い壁を立てていた。

「でもヒイロは謝ったんだよ。地に額まで擦ってさ。挙げ句、僕の無理難題の為に泥だらけになって。恨むには女々しいくらい昔の話なのに。そこまでしたんだ、あの馬鹿は」

けれどあの馬鹿野郎はこっちの心境などお構いなしで、壁をぶち破ったのだ。

「だけどもあ、僕みたいな偏屈家には、あれくらいの馬鹿の方が居心地が良いんだ。ひよっとしたら、友達って呼んでも良いのかも知れない」

多分??許す、許さないじゃない。

観念したのだ。こういう馬鹿にはなに言たつて無駄だろうから。わだかま 蟠る気持ちに見切りをつけて、自分も馬鹿になることにして。

それからの日々が、楽しくて仕方なかったから。

「なあ、シヨーク・シャテイヤ」

だから、クオリオは思う。

もう少しこの日々を続けたい。それでも暗雲が覆うならば、緑の魔術師らしく吹き晴らしてみせよう。

「僕が??友達 の味方をして、いったい何が悪いんだ!」

緑閃光が、流星の如く夜を駆けた。



「なんでだっ!」

軌道は幼く、受け止めずとも避けられるような直線だった。

「どうしてこうなる?!」

けれど受け止めた剣戟は、重心だけでなく、心ごとぶつかるような厚みがあった。

「なんで勝てない!なんで逆らう!なんで裏切る!どうしてお前は、僕と戦ってるんだ

よー!」

喚き散らして、ルズレーはひたすらに剣を振る。

錯乱してる訳じゃない。本心なんだ。全部剥き出しなんだ。

まるで思い通りにいかない事に泣き叫ぶ子供だった。

ヒイロ・メリフアーとルズレー・セネガル。

俺の知らない物語が確かにあったことの証明のように、ルズレーは訴える。

俺が奪ってしまった未来を、むぎむぎと突き付けている。

でもな。

なんでだなんて、こっちの台詞だよ。

どうしてって、俺が言いたいよ。

おまえ、ちゃんと強いじゃんか。素質あるじゃんか。

しっかり鍛えて磨けば、立派な騎士にだってなれるかも知れないのに。

どうして、あんなやり方しか選ばなかったんだ。

「変わったからだ」

「嘘だ。変わるもんか。そんな簡単に！」

「簡単じゃねえよ。だが出来ねえことでもないだろ」

「で、出来るはずないだろ、今更^{??!}」

「ハッ。変わった奴が目の前に居んだろうが！やる前から否定してんじゃねえ！」

「??うるさい！うるさいうるさいうるさいっ!!」

俺だつて苦勞した。村や学園だつて白い目で見られたし、今も騎士寮じゃ俺の事を毛嫌う奴だつて居る。どの面下げて騎士になったつて言う人だつて居た。

でも、少しづつ俺を認めてくれてる人達だつて居るんだ。気軽に挨拶を交わせる仲になれた奴だつて。

なにも、俺だから出来た事じゃないはずだ。

「お前が僕を、否定するなああ!!!」

だから。

「テメエだつて変われんだ。それを分かれよ、ダチ公」

「か、は——」

今は、熱海懂でも、騎士ヒイロとしてでもなくて。

ヒイロ・メリファーとして、ルズレーに拳を叩き込む。

呻きながらも俺の肩へともたれたお前に、囁く。

「一足先を走ってやる。付いて来てエなら、好きにしな」
変わろうとするのに、遅いなんてことはないはずだつて。

「ヒイ、ロ??!僕は???!、——」

意識を闇に落とす間際、何を言いかけたのかは分からないけれどもあの歪んだ形相は、今は穏やかに眠りについて。

そんなルズレーの顔を、淡い月の光が照らしていた。

067 手には鉄塊、この背に光

聖歐都から見れば小さく些細な、けれど俺個人からすれば大きな動乱にも一応の決着はついた。

ルズレーを倒したあの後のこと。

シドウ教官が寄越した隊員達によつて、貴族派とルズレー達は拘置所へと連行された。大多数で一人に対して暴行を働いたんだ、決して軽い罪じゃない。

特にあのパエリア野郎は改竄教唆に贈賄とかの罪で、相応の罰が降る可能性が高いらしい。少なくとも騎士称剥奪は確定だつてさ。それと、ルズレーとシヨークも相当な処分を受けると思う。ルズレーがああいう行動を取つたのは俺が原因だし、正直複雑な気持ちだつた。

(ま、俺の罰もまるつきり免除つて訳にはいかないんですけどね???)

《そりゃあ依頼受けたのは事実だからね。一週間の謹慎と反省文十枚だつて?》

(ああ。謹慎はいい。けど反省文はきつつい。俺、マジで文章書いたりすんの苦手なんだよ。あああ、国内逆立ち十周とかのがよっぽどマシだつた???)

《マスター??バランス感覚おかしいよ、色んな意味で》

清さとはつまり公平さともいえる。

清職者という異名持ちのシドウ教官は、俺の罰を見逃してくれるほど甘くなかった。まあ、騎士称剥奪よかだいたいぶマシにはなったけど。

ともあれ、解決は解決だ。

終わってみれば思うところも省みるべき事も色々あつたけど、少しばかり肩の荷が降りたつてもんだ。

えっちらおっちら寮への道を帰りつつ、ホツと胸を撫で下ろす。

そんな俺に、弱った声が真後ろから囁かれた。

「??笑えばいいでしょ」

「あア?」

声の主はシユラである。はい、そうです。俺は現在シユラをおんぶして歩いていてます。

というのも、シユラはどうやら鬨いの際に足の骨にヒビが入っていたらしく、治療魔術を施しはしたものの痛みが残っているんだとか。

疲弊もあつてフラフラ歩くシユラを見てられず、俺が無理矢理背負つたという訳である。

「何を笑うってんだ？」

「言わせる気？この破廉恥はれんち」

「あア!?なんでそうなんだコラア！」

「うっさい。近いんだから怒鳴らないでよ」

「??お、おう」

帳の下りた夜の道。背負う男と背負われる女。それ以外には誰もいない。クオリオも医務室までは一緒だったんだけど、やることがあると言って姿を消した。なんかニヤニヤしてたけど。

(??うーむ)

《さつきからマスター、色々考え事してるっぼいけどさ。ひよつとしてえ、ムラムラしてたりするう?》

(え?怪我人相手に欲情する訳ないだろ。そんなのヒーローの風上にも置けないし)

《??えー、つまんなーい。枯れ過ぎだよマスター》

(知らんがな)

なんで凶悪が不満そうなんだよ。

いや、確かに背中越しに伝わる感触とか太腿の感触とかやべえよ?でも怪我してるし、そもそもシユラはライバル枠だし。

「笑わないの?」

「だから、なにをだ」

なんて風に脳内漫才していると、しおらしいシユラの声がまた降ってくる。そこにいつもの気の強さはほとんど見当たらない。

今のシユラは、まるですぐにも消え入りそうな小火だった。

「??だ、だつて。アンタを助けるつて言つて、ひとりで突つ走つて、勝手にピンチになつて。しかも肝心のアンタはクオリオにとつくに助けられてて」

「??ああ?」

「それで、めでたくこうしてアンタのお荷物よ。最後の最後までなにも出来ないで。みつともなくて泣けてくるわ」

「??テメエ」

「だから、いつそ笑つてよ」

言い切つて、耳元で喉鈴が転がる。かすれたような自虐の笑みだった。

なにも出来なかつた。それが悔しくて虚しくて、堪えてしまつているんだろう。背の重みがシユラの気持ちに引きづられて増した気さえする。

《あらら、面倒くさい女だねえ。いつそ放り捨てて罵つちやえば?この役立たずめ、つてさ》

(はいはいお黙り凶悪ちゃん。良い子はもう寝る時間帯だぞ)

《ちよつ、子供扱いはんたーい!》

(じゃ、大人なレディは静かにしてような。空気読もうか空気を)

《むー。なんか、マスターに言われるのは納得いかない》

(ひどい)

そりゃ俺だって空気読むの下手だよ。

上手い言葉を探せるだけの、幅のある人生を送れて来た自信はない。でも俺の為に必死に頑張ってくれた奴に、なにもしてやれずに終わるのは嫌だった。

主人公以前に。ヒーロー以前に。

熱海憧としても。

「面倒くせえ奴だな」

「??」

「俺は結果主義じゃねえ。至るまでの過程にもこだわってる。あん時の医務室でもそう言っただろうが。忘れたか?」

「??覚えてる、けど」

だから、気持ちだけは伝える。

上手い言葉を見つけれずとも。

伝えようとする言葉が捻れても。

一字一句に込めた熱だけは届いてほしい。

せつかく、こんなにも近くに居るんだから。

「ハッ。」だつたら、俺がテメエを笑う訳ねえだろ」

「??」

「んな事すら分からねえなら、馬鹿はテメエもだ。ばーか」

「??あつそ」

変な激励もあつたもんだと我ながら思う。

でも言いたいことは言つたし、これ以上言う事もない。

だからこの話はここでおしまいだ。返事も待たずに、俺は再び歩き出す。

「??じゃあ、あたしもアンタと同じでいいわよ」

響いたのか。伝わったのか。

人の気持ちに疎とい俺には分からない。

けれど、振り向いてまで確かめる気にはならなかった。

「ねえ。さつきから歩くの早いわ」

「あア?」

「揺れるから。痛みに響くの」

「??仕方ねえな」

注文に答えるように緩めた歩速。

それに少しだけ微笑んだシユラの声は、さつきよりも明るい。

「??うん。じゃあ、このままゆつくり。ね?」

「??ケツ、偉そうに」

首元から胸元へと回されたシユラの腕。

支えを欲しがるように俺のシャツを掴む手の爪が、月光に触られて白く輝く。

「ヒイロ」

「んだよ」

「なんでもない」

「??そうかよ」

眠りについた夜の片隅で。

返したばかりの黒リボンが、視界の隅でひらりひらりと揺れていた。

068 その物語の主人公は

『俺の最期??少しは主人公っぽかったですかね?』

『——はい。確かに。貴方は紛れもなく主人公でしたよ』



「あううう??」

「おや、どうなさいましたノルン様。せつかく第一章をクリアしたのですから、もう少し喜ばれては?」

「喜べる訳ないですよーだってだって、ルズレーさんたち普通に強いじゃないですかあ!」

「ああ。それはまあ、一応第一章のボスですし。原作プレイ済の方々の中でも、彼らには

苦勞したという感想も多いみたいですよ?」

「苦勞しましたよほんと? ショークさんは常にユーズアイテムでバッドステータス振り撒くし、ルズレーさんも普通にステータス高いし。そして例のヒロさんはひたすらに白魔術でバフするからダメージは与えにくいしこっちは痛いしで、十回もゲームオーバーになりましたよ! あれだけ厄介なのにどこがモブキャラなんですかどこが!」

「モブが難敵というのもRPGのお約束ですよ」

「そうかもしれないけどお? あれだけ強いなら、普通に騎士になった方がいいじゃないですかあ?」

「悪役とはそういうものです。現にルズレーは小物臭は凄いのに、なかなかえげつない企てを図りましたし」

「そうですね? まさかハウチさんにシユラさんのことを教えたのが、彼だったなんて。しかもシユラさんがすぐ釈放されるからって知った途端、あの子を?」

「シユラのルームメイト、シヤム・ネシヤーナですね。手紙を使っておびき寄せて、シヨークで麻痺らせヒロが拘束する。とんでもなく鮮やかな手際でしたね。悪い意味ですが」

「あのまま人質に取られていたらなんて思うと、ゾツとします。あの謎の声さんがシヤムちゃんを助けてくれなかったら、どうなっていたことか」

「ええ。まあ、謎というか、シャムの双子の妹ですけども。リヤムが魔術でシャムを救出してなければ?? R指定待ったなしの胸糞展開でしたでしょうね」

「??はあ。シユラさんを罠にはめた理由も、負けたことへの逆恨みですしヒイロさん側を応援したい気持ちがありましたけど、正直勝った時はちよつとスツとしちやいました」

「そんなものでしょう。まあともかく、これにて無事第一章クリアです。おめでとうございます、ノルン様」

「ありがとうございます??でもここからヒイロさんの出番はなしかあ」

「ええ、そうですね。ヒイロとしての出番はないですね」

「うん?なにか含んだ言い方しますね」

「ふふふ。この先のストーリーを進めれば、いずれ分かることですよ」

「な、なんですかその暗黒微笑は??うう、嫌な予感しかしません」

「それはもう、ノルン様の気分がずーんと沈んでいくのが楽しみで楽しみで??」



「??と、おや?」

「どうしましたか、副官」

「お喜びくださいノルン様。たった今、現地向かわれてるヴェルザンデイ様からの報

「告書が届きましたよ」

「え、ほんとですか!」

「ええ。待ち遠しかったですね。しかしノルン様のミスであの世界へと羽ばたいたので、恐らく相当な苦勞をなさっているのでしょうか?」

「う、う、やめてくださいよう??ほんつとおおおに反省してるんですからあ??」

「ふふふ。ではまずは私が中身を拝見致しましょう。あまりに酷い内容だと、ノルン様が卒倒しかねませんからね」

「ニヤニヤしながら言わないでくださいよお??」

「ふふふふふ、では失敬して??」

??、??、??

?????????
 、、
 ???ふむ、??、
 、、
 ??????????
 、、
 はあっ?!」

「わっ、どうしたんですか副官。急に叫んだりして」

「どうしたもなにもノルン様!と、とんでもない事になってますよ!ほ、本当にどういふことですか?」

あの『ユミリオンの悪夢』が、クオリオが、完全に親友ポジション!?
凶悪を拾って、そのまま武器として使ってるう!?

し、しかもなんでパウエル・オードブルが投獄されてるのですかああ!?! わ、訳がわかりません。何なんですこれ一体?!?!

「あおう。凶悪、つてのは分かりますけど、クオリオ?とパエリア?というのは誰なんです?!?!」

「へ?あ、ああ、そういえば彼らの登場は原作じゃ第二章からでしたね??そ、その、第二章にてシユラは小隊に編成されることとなるんですけど、クオリオというのは同じ隊員の少年で、パエリアじゃなくパウエルは、その小隊の『隊長』になるキャラクターだったんです」

「はえええ、そうなんですか?!」

「ですがクオリオはともかく、パウエルが投獄されると??だ、誰が隊長に?一応原作に沿った流れではありますが??このままではこの先の展開も、色々と壊れてしまうよ
うな?!」

「うーん、違う意味で大変なことになっちゃってますねえ。あはは」

「笑い事ですか?!というか、これは流石におかしいですよノルン様!」

「え。おかしいって、なにがです?」

「この影響力ですよ！あの熱海憧というのは、ただの人間ですよね?!イレギュラーとはいえ、いくらなんでもただの人間が確立された世界にここまでの影響力を持つなんて??明らかにおかしいですよ!」

「??え?ただの人間???そんな訳ないじゃないですか」

「へ?」

「もう、副官もうっかりさんですね。そもそも近年になつて異世界に転ずるタイプの世界が数多く生まれたから、おいそれと転移や転生はしたら駄目ーつて、大神様に命じられてるじゃないですか。だから例え私のミスで死なせたとしても、普通の人間を勝手に転生させることは大神様が許してはくれませんよ」

「??え、あ。そうでした。え、待つてください。ということは、彼はなんらかの特別な存在である?」

「ええ、まあ。あれだけ綺麗な糸ですからね。私も彼が主人公だつてことは分かつていたのですが、どういう物語の主人公かは知らなかつたので。彼を送つたあとに、ヴェルちゃんからこれを教えて貰つたんですけど」

「これ、つて??『漫画』ですか?それをヴェルザンデイ様が?」

「ええ。どうやら、ヴェルちゃんが元々愛読してたものなんですけど、私も読ませてもら

いました！今ではすっかり熱海憧さんのファンです！」

「熱海 憧殿の??って事は、もしや彼は??!」

「はい、その通りです！」

「たった一人の少女を救う為、自ら闇の道へと身を堕としながらも巨大な悪虐財閥に立ち向かったとある青年。

容赦なき暴力と裏社会の恐怖と対峙していく中で、ふとしたきっかけにたが籠が外れ、そのまま己の正しさの為に悪さえ為す道を突き進んだ者。

多くを奪い、多くを壊し、多くを潰し、多くを殺した悪の華。

歪みきった正義、貫き通すエゴイズム。

ですが、そのあまりにブレない華道を突き進み続ける痛快さが人気を博した、ある人気青年誌にて完結を迎えた『ダークヒーロー』の物語！

そう、熱海 憧さんとは！

【新宿摩天楼のロキ】という漫画の！

れつきとした『主人公』だったんです!!」



「???」

「ふふん、言葉もないようですね、副官。いつも驚かされたり、凹まされたりばかりの私じゃないんですよ?」

「あ、いえ。驚いたのは確かです。自分としたことが、結構な把握漏れをしていたのだなど。反省しております」

「え?は、はい」

「ですがノルン様??それってつまり、主人公級の存在をうっかり死なせてしまった訳ですよね?」

「??」

「割とうっかりじゃ済まないレベルの失態じゃないですか??本当に、もつとしっかりしないと駄目ですよ」

「??」

「??????」

うわああああああああん!!!
おっしやるとおりですううう!!!

わたしはほんつとーに駄女神ですううううう!!
生きててすいませんでしたあああああ!!びえええええん!!!」

第三章 完

Ex. 000 或る英雄の光について

その男は特別ではなかった。

現代にありふれた内の一人だった。

就職活動に失敗し、フリーターの身で細々とバイトをしつつ、気付けば三十代を超えた。

家族との連絡は絶えて久しい。アプリの最新トーク履歴はずっと昔の通知のまま。休日に行うことと言えば、好きだった特撮ヒーローのビデオを見るか、ネットの海に沈んで行くか。

いつか俺だって。

そんな言葉で慰めて、どれほど時間が経ったのか。ちよつとした趣味の共有を面と向かわず出来た時の、ささやかな喜びを生き甲斐だって言い訳して、ずるずると穏やかに詰んでしまった人生”。

冷めた弁当を温めるレンジの隅に残った汚れ。

きつとそんな色の目をして生きていた。

『か、かっけー!』

だから、憎たらしかった。

シヨツピングモールの屋上のバイト。

仮面のヒーローに扮して風船を配る時給920円の稼ぎ。

怠惰な日々を引き伸ばす、それだけの意味も意義もない仕事姿に、爛々と目を輝かせた少年が。

風船を渡した後にも、かっけーかっけーと喚きながらついてくる子供が。

憎い。妬ましい。鬱陶しい。眩しい。

『うるさいんだよつ、どっか行けよ!』

スカツとした。くしゃつと泣き顔に崩れた子供を見て。一目散に逃げてく後ろ姿に、ざまあみろと思った。

でもその瞬間は見られていたらしい。

着替える間もなく年下のバイトリダーに胸倉を掴まれて、そのまま会場裏の従業員室に連れ込まれて。

ボロクソに言われた。

あんな子供相手に、あんたはクズだ、つて。

そんなこと自分が一番分かった。

だから——目の前に広がる光景が天罰なんだとしたら、いくらなんでもやり過ぎだつて思つた。

焼け焦げた匂い。いつから回つたかも分からない火の手。降りたシャッター。喧騒。悲鳴。煙。

パニツクに陥つて、一周回つて落ち着いた。

ああ死ぬじゃん。息苦しくて、ビニール製の覆面仮面の下半分を千切つた。大した延命にもならないのに。

それに、命を引き延ばす意味なんてなかっただろう。

クソみたいな人生だったし、こつから先もどうせそうだろうし。

肺につまる息苦しさに、もういいかつて諦観が混ざつて巢食つて飲み込もうかつて瞬間に。

『う??:う、う??:』

その男は不運にも、見つけてしまった。

その男は幸運にも、聞いてしまった。

煤と火傷だらけの子供の姿を。呻き声を。

『たす、け??る??か、ら??』

救いを??望まず”。

『おれが、みんな、を??たすけ、る??から??』

地に這いつくばいながら、自分が”救い”になろうとする姿を、見て。
気付けば、身体が動いていた。

『————仮面ヒーロー、参上ツツ!!!』

『え?』

『やあ少年。私が来たからもう安心だ!』

これはありふれた名もなき^モひと^ブりが、ヒーローとなった^{ゼロ}零の物語。

◆ E x . 0 0 0 或る英雄の光について ◆

馬鹿な事をしてゐる自覚はあつた。

助かる保障もない。熱は徐々に思考と体力を奪つていく。

でも、何故だか力が湧いていた。

引つ越しのバイトではすぐに折れた気持ちも足も、ちつとも折れることはなく。

朦朧としていく意識の中で。

小さな右手が縋る、本当は頼りないはずの自分の肩。

小さな左手が握る、あれだけ酷くあしらつたにも関わらず掴み続けてくれていた風船。

背中から伝う、少年の心臓の鼓動。

命の音。まだ生きてゐる音。

諦めないという気持ちばかりが、湧いてきた。

この子を絶対に助けてみせると、本能が誓う。

だからフラフラと炎の中を歩きながらも、彼は仮面を被り続けられた。

『けほっ、かめっ、んっ、ヒーロー、大丈夫???』

『もちろん、だとも。仮面、ヒーローは、”無敵”だからね』

笑顔が気持ち悪いと言われて、接客業をクビになつたこともある。

目があつただけで一回り下の女の子に舌打ちされたこともある。

でも背負った小さな温もりは、自分の下手くそな笑顔にさえ、安心したように目を細めてくれている。

『そつかあ。凄いなあ』

『凄い、か??』

『うん。おれなんかより、よっぽど凄いよ』

『??そんなことはないさ。きみが、私を立ち上がらせてくれたんだ』

『??え?』

今こうしていられるのは、この背にある希望のおかげだった。

何者でもない自分を奮い立たせてくれたのは、他でもない少年の勇気があったからだ。

ろくでもない人生。ただ死んでないだけだった人生。

それを覚えてくれたのは、こんな小さな光だった。

『さあ、ついたぞ』

満身創痍ながらも辿り着いた非常階段への入口。

背中の少年をゆつくりと地に下ろしながら、力を振り絞って扉をあける。

バラリ、と顔のすぐそばを石ころが落ちてきた。

限界が近いことがわかった。

自分も、奇跡のような時間も、この建物も、天井も。

けども仮面を被ったのなら、最後まで被り通す。

何者でもなかった男の最後の意地は固かった。

『さあ、行きたまえ、少年。私は、もう??いや。』

私には、まだ、救わねばならない人達が居る』

『う、ん??わかつ、た??』

扉の向こうへと、少年が行く。

小さな背中だ。自分よりもずっと小さな。

けども心に火をくれた、優しく強い意志を持つ幼子。

思い出す。その無垢さに嫉妬した理由を。

多分あの時は、もう取り戻せない煌めいていた自分の時間を、見せつけられていた気がしたのだ。

がしたのだ。

でも、今は違う。

最後に、男は確かに取り戻せたのだ。

この目に映る光が、その証だった。

『ああ、そうそう。ひとつだけ、伝えるべきことがあった』

『!?なに? 仮面ヒーロー』

『少年。

私を????、

——いや。

俺なんかを、ヒーローにしてくれて、ありがとうな』

名も知らぬ小さなヒーローへ。

名も残らぬヒーローからの、感謝の言葉。

それだけ伝えると、男は扉を勢いよく閉めた。

閉めて、背を預けて、ずるずると座り込む。

見上げたのは、今にも崩れそうな天井の亀裂。

けどもそこに浮かんでいたのは、背から下ろす際に少年が手離してしまった、風船が

一つ。

(??ああ、なんだよ)

懐旧。嫉妬。憧憬。奇跡。

光。光。

さいごの、ひかり。

(??悪くないもんだな)

拜啓。この空の向こうの神様へ。

願わくばどうか、この背にあつた小さな光が。
曇くもることなく、育ちますように。

???)、

———)

そして名もなき英雄は。

満足したように目を閉じて。

奇跡のように保ち続けた風船は。

崩落と共に、散っていった。

こうして、少年——『熱海 憧』は、家族で訪れたショッピングモールにて発生した火災事件の中、生還した。

だが、生還者の中に、彼の両親の名はなかった。
けれどその胸には、あまりに強い憧憬が残った。

幼き彼が、目にした背中。

名もなき英雄の詩である。

【Ex. Episode—000.】 Fin.

長女ウルズの人物紹介VOL. 3

ご機嫌よう皆様。長女のウルズです。

え？待ってた？ええ。どうも、ありがとうございます。

へ？相変わらず美人?????ど、どうも。

えふんえふん！そ、それでは気を取り直して、紹介に参りますね。



【No. 1】

ヒイロ・メリファー／あたま熱海 しやう憧

・魔術について

クオリオとの修行の成果により、白魔術の補助系三種を習得した模様。さらに凶悪という強力な相棒により、こと近接戦闘においてはかなりの強さを保てるようになりました。

・【摩天楼のロキ】について。

彼は元々、現代日本の青年誌にて連載された【摩天楼のロキ】の主人公でありました。

暴漢に襲われた少女を救うことで、後に巨大財閥を倒壊させるダークヒーローの物語は始まる?? 予定でした。なぜ始まらなかったのかは?? ええ、みなさんご存知のとおりです。

摩天楼のロキの愛読家であるヴェルザンデイいわく、この摩天楼版の彼は、ヒイロとしての彼と大きく異なる人物らしいです。

ただ、その片鱗はあつたそうですよ。例えば、シヨークとの闘いの際に隠し集めた『ビリビモスの鱗粉』を使つて、反撃しようとした時とか。私も本来の彼について気になりますので、また詳しく聞いてみましょうかね。

【No. 2】

エシユラリーゼ・ミズガルズ

・過去について。

どうやら十歳までの記憶がないそうです。

ですが、ミズガルズ孤児院という場所に引き取られ、院長であるサテイ先生と沢山の孤児達と共に生活していたのだとか。その後、孤児院は魔獣達に襲撃され壊滅。唯一生き残つたシユラは、魔獣に対する復讐を誓いました。

彼女の魔獣に対する異様な復讐心は、この過去が原因のようですね。

その後、各地を転々としながら魔獣の討伐を繰り返していた模様。いつしかアツシユ・ヴァルキリアとよばれる程に強くなつた彼女はとある人物と出会い、決闘の末に敗北。そして彼女はアスガルドに訪れ、その人物の手引きにより『ヴァルキリー学園』へと編入することとなりました。

・現在について

魔獣についての憎しみや復讐心は決してなくなつてはいません。しかし、若くして修羅の道へと進んだ彼女にとって、ヒイロという自分の世界を大きく塗り替える存在に出逢つたのは衝撃だつたのでしょうか。

今の彼女にとって、ヒイロは非常に大きな存在となつているようです。

・ウルズからの一言

はい、遂にデレましたね。ですがまだまだ確固とした気持ちとは言い難い模様。この気持ちかしっかりと形になって、自分の中にあるのだと自覚するのはいつになるでしょうか。

【No. 3】

クオリオ・ベイティガン

・姉について

騎士団長補佐官筆頭という非常に高い地位にいる姉を持つていらつしやるようですね。名前はリーヴァ。シユラと対峙した際には辛辣の一言に尽きましたが、クオリオの説得には耳を傾けたようです。

・交友関係

面倒見はいいながらも少し捻くれがちな性格な為か、友達らしい友達は居なかつた模様。しかしヒロの為に姉のリーヴァとシドウ教官を説得したその熱意から、心に熱いものを持つている男の子なんです。

だからこそ、原作での末路を想うと切ないのですが。

【No. 4】

ルズレー・セネガル

・セネガル家について

貴族であることは明言されていましたが、セネガル家はどうかやらオードブル家と同じ旧貴族と呼ばれる類みたいですね。

騎士との癒着によって権益と富を肥やしている現貴族とも違う派閥であり、旧貴族は高圧的で高慢な人が多いらしいです。ルズレーのあの他者を見下す姿勢も、その典型といえるのでしょうか。

・ヒイロについて

ヒイロに対しては手駒、下僕などあんまりな扱いですが、額面通りに捉えるには彼への執着は強いですね。もしかしたら、ヒイロ・メリファーという存在はルズレーにとつての特別なものかもしれません。

【No. 5】

凶悪

ヒイロがコルギ村の孤児院にて拾った鉄パイプです。

少女の人格を持ち、触れた者の脳内を介して交信する能力を持っております。性格は時折、容赦のない合理性や他者を馬鹿にする言動などが見られますが、自分からヒイロに所有をもちかけたりと、不思議な面の多い存在です。

・性能について

彼女はただの鉄パイプではなく、所有者の魔術をブーストさせる特異能力をもっております。また洗脳状態とはいえシユラの剣撃を受けられる耐久性もあり、更には指輪ほどに縮むことも出来るようですね。

しかし彼女を所有することは精神に強力な負荷がかかり、直接触れているだけで精神が狂ってしまうのだとか。

ええ。なんでヒイロは平気なんですかね。私にも分かりません。

・原作のその後

原作においては、シユラが力を暴走させ、半壊させた孤児院に取り残されたままでした。そこを仮面の男が現れ、回収。その後、数々の悲劇を引き起こしたそうです。仮面の男にとつても凶悪を回収出来たのは想定外だったらしく、鬱シナリオらしい主人公不遇のイベントと言えたでしょう。

・正体について

『灼炎のシユラ』の序章、港町フィジカにてシユラが討伐した魔獣。その魔獣に止めを刺した際に使用した鉄塊が、この鉄パイプだったそうです。

いえ、違いますね。もっと正確に言うならば??

”彼女は、シユラに討たれたはずの魔獣なのです”。

[No. 6]

パウエル・オードブル

あのヒイロですら気持ち悪いと断言するほどずれた美的センスを持つ、旧貴族の一人。また、ブリュンヒルデ本隊に属する騎士でもあります。その実力は確かであるらし

く、彼の使う緑魔術はシユラを苦しめました。

・本来の立ち位置

原作においてはこの先のストーリーにて、シユラと関わりのある立場だったのですが?? 幸か不幸か、彼は今回の一件により重大な処罰を負うことになりました。果たしてパエリア?? 失礼、パウエルの再登場はあるのでしょうか。



さて、今回は多くの追記事項と紹介をさせていただきました。

登場人物も増え、各キャラクターの情報も徐々に公開されてきましたね。次章もまた新しいキャラクターは増えていくでしょうし、今後ともよろしくお願い致します。

それでは、次章の解説コーナーにてお会いしましょう。

??え? ヴアル? どうしたんです急に?? ってこれは「摩天楼のロキ」の一卷?

ああ、布教活動ですか。熱心ですね。

ええ、いいですよ。一足先に楽しむとしましょうか。
彼の本来の、旅路の果てを。

次女ヴェルザンディの省略あらすじVOL. 3

やほやほー、ヴェルちゃんだよー

運命の三女神の次女ヴェルザンディーちゃんだよー

えへへー、今回はヒイロくん大活躍だったねえー

ヴェルちゃんもファンとして鼻高々だよー

??え? ヒイロのファンなのかってー?

それはねー?? 『どっちものファン』、だよー!



・その1

選抜試験を全部勝って、無事めでたく本隊入りが決定したヒイロくん。妹のサラちゃんから祝われつつ、たまたま一緒にお茶してたシユラちゃんと、依頼受領を断られてるコルギ村のハウチさんを目撃してたよー。お金がないから助けてあげないなんてひどいよねー。

・その2

機嫌を悪くしたっぽいシユラちゃんを追いかけて、ヒイロくんはあるお店に行ったんだよー。え？見覚えのある店員さん？

んふふーなんのことだかわからないよー。んふふふー。

で、その後にはハウチさんに声をかけられて、ヒイロくんたちはコルギ村に起きてる異変を解決することになったんだよー。ヒイロくんかっこいいー！

・その3

コルギ村にやって来たヒイロくん達は、早速調査を開始したんだよー。そして共同墓地の近くの森が怪しいってことで、墓地に向かったんだよねー。そこで墓守エイグンさんに出逢ったんだよー。

エイグンさんは森の奥には孤児院があつて、そこには立ち入っちゃ駄目だよーって忠告するんだー。でもそのタイミングで森から魔獣達が現れたんだよー。バトル開始いいだねー！

・その4

ヒイロくん初の魔獣戦だったけど、すごく楽勝だったんだよー。でも当然かなー。魔獣の中でも相当弱い相手だったみたいだしー。

けどそこで歌が聞こえた途端、魔獣たちが逃げてったんだー。そしてシユラちゃんが

追いかけてつて、ヒイロくんも仕方なく追いかけてつたのー。

・その5

シユラちゃんの白魔術、感知を使つて魔獣達の魔素を追いかけたおかげで、二人は孤児院にたどり着けたんだよー。そして孤児院にはボスっぽい歌う魔獣バンシーちゃんと戦うことになつちやつたんだー。でもでもバンシーちゃんはとつても厄介な黒魔術を使うから大苦戦。おまけにシユラちゃんが洗脳されちやつたんだー。

ヒイロくん大ピンチだよー。

・その6

でもでもー、なんとそこでヒイロくんは凶悪ちゃんと運命的な出逢いをしたんだー。凶悪ちゃんっていうのは、見た目はただの黒い鉄パイプなんだけど、魔術を増幅するすつごい能力を持つてたんだー。その代償はあるはずなんだけど、ヒイロくんはへつちやらだつたみたい。ヒイロくんすごいなー。

そして凶悪ちゃんの協力もあつて、バンシーちゃんを倒したヒイロくん。けどその光景がシユラちゃんのトラウマに触れちやつて、シユラの中の未知の力が暴走して、孤児院は全壊しちやつたんだー。

・その7

バンシーを倒せたヒイロくんだったけど、シユラちゃんの力の暴走によつて全身に大

火傷を負っちゃったんだー。でもそこに現れたエイグンさんが、マードックさんって人から貰った霊薬を使ってくれたおかげで、ヒロくんは大丈夫だったみたいだよー。

うーん、マードックさん凄いいねー。前にヒロくんに聖獣冠目録をくれたのもマードックさんだったし、なにものなんだろうねー。

そして、ヒロくんが寝ちゃってる間にエイグンさんから孤児院の秘密を聞いたシユラちゃん。悲しい過去があつたんだよー。でも今回の一件で、エイグンさんも少しは前に進めるといいよー。

シユラちゃんの気持ちみたいだねー。

・その8

コルギ村を救ったヒロくんは、わーいって喜びながらアスガルダムに帰ったんだよー。でも、騎士団の許可なく依頼を受けることはご法度で、ヒロくんたちは懲罰房に入れられちゃったんだー。

しかも急に現れたパウエルくんいわく、騎士の身分も没収されちゃうんだって。

こんなのひどいよー、かわいそーだよー??

・その9

パウエルくんからの交渉も絶対にNO!!しちゃったヒロくん。でもその後をやっ

て来たリーヴァちゃんに、シユラちゃんだけが釈放されちゃった。良かったよー。でもシユラちゃんも納得出来ないみたいで、そんなタイミングでクオリオくと再会。シユラちゃんから事情を聞いたクオリオくんも大シヨクだったみたいだよー。クオリオくん、ヒイロくんのことを大事に思ってくれてたんだねー。

だからシユラちゃんが行っちゃった後に、クオリオくんは騎士本部のヴァルハラに向かったんだー。シユラちゃんはシユラちゃん、ルームメイトのシャム・ネシャーナちゃんから不思議な手紙を受け取ったんだー。なんと！そこにはヒイロくんを助けたいかーと書かれてたんだよー！

・その10

いまだとらわれのヒイロくん。そこに格子付きの窓越しにシユラちゃんと再会だよー。ここでシユラちゃん、さらっとデレてたねー。んふふー、ヴェルちゃんは見逃さないよー。

でもいざ待ち合わせの場所についたシユラちゃんの前に現れたのは、ルズレーくんにシヨークくん、パウエルくんだったんだよー。手紙も罨だったんだー。

ハウチちゃんにシユラちゃんのことを教えたのも、ヒイロくんが依頼を受けた張本人だつて証言したのも、ヒイロくん達から騎士の身分を没収しようとしたのも、パウエルくんにも協力を頼んだルズレーくんだったみたい。ルズレーくんったらひどいよー。

鬼だよー悪魔だよー。

・その11

そのままルズレーくんたちと闘うことになったシユラちゃんだったけど、さすがだねー。シユラちゃん勝てそうだったよー。

でもでもパウエルくんが呼んだ貴族派のみんなが加わって、シユラちゃん大ピンチだよー??

けど。そうはさせないから、ヒイロくんなんだよねー!

シユラちゃんのピンチにヒイロくん参上!なんだよー!かっこいいー!

ヒイロくんが解放されたのはクオリオくんがお姉さんのリーヴァちゃんを説得したおかげなんだよー。クオリオくんさすがだよー!それにヒイロくんでも全然勝てなかったシドウくんも加勢してくれたんだー!むねあつだよー!

これもぜんぶ、ヒイロくんが起こしてきた出来事がみんなの心に響いていたってことの証だねー。良かったねーヒイロくん。

・その12

結局、ルズレーくんたちはヒイロくんたちに勝てなくて、みんな捕まっちゃったよー。パウエルくんはしようがないけど、ルズレーくんはすこし可哀想だったかもー。

ルズレーくんのしたことは悪いことなただけど、ヒイロくんのためでもあったみたいだよー。いつか仲良くなれたらいいねー。

最後のヒイロくと、シユラちゃんみたいにさー。



はいはい、今回はここまでなんだよー。

今回のポイントヒイロくんだけじゃなく、みんながんばったところかなー。

んんー？「摩天楼のロキ」って面白いのってー？ちよー面白いよー！でも今のヒイロくんをやってる憧くんとは全然違う憧くんだから、みんなが知ったらびびっくりするんじゃないかなー。

え？具体的にどう違うのってー？

うーん、そうだなー。強いて言うならー??

『過程』を大事にするのが、今のヒイロくんかな憧くんてー。

『結果』を大事にするのが、本来成るはずだった憧くんかなー。そんなとこー！

んんー？憧くんとお話できるなら、ノルン様のミスについては説明しないのかーって？んんー、するつもりはないかなー。だってー、勘違いしたままの方がきつとおもしろ??上

手くいきそうだしー？

それに教えたところで憧くんの今後の行動が変わる、なんてことはないだろうしー。
憧くんは憧くんだもんねー。あはははー！

それじゃあみんな、最後まで聞いてくれてありがとうだよー。

また会おうねー、ばいばーい！

三女スクルドの専門用語解説VOL. 3

わっはっはっはー！喜べみなものー！

余の時間であるぞー！余に会いたかったかー？うむ、そうかそうかわっははははー！

あれから結構経ったのだ、当然献上の品も用意しておろうな!?

うむ。うむ。うむ??うむ!!

まこと大儀であるぞ皆の衆！これらは解説コーナーが終わり次第、ばっちりと食していくのでな！まずは余の話をじっくり聞いていくが良いぞ！



【アツシユ・ヴァルキュリア】

灰色の戦乙女とも読むぞ！

魔獣に復讐を誓ったシユラが各地で魔獣討伐を繰り返し、ついた異名がこれであるぞ。その勇名はシユラの見たと騎士団への不信感もあいまって、なかなか轟いてい

るようだの。ま、可愛さにおいては余の方が上だがな！

【バッドステータス】
『状態異常』

読んで字の如く、身体の不調を指した総称であるな。

どれも厄介であり、種類も沢山あるぞ。予防や対策はしっかりとせねばな！

『麻痺』

・ 身体を麻痺させる状態異常だな。立つのもしんどいくらいに麻痺するから、特に前衛が患うと大ピンチになるぞ。要注意だ！

『沈黙』

・ 魔術が使用出来なくなる状態異常だぞ。麻痺は前衛殺したが、沈黙は後衛の魔術師が気を付けねばならんやーつだな。これも要注意だ！

『頭痛』

・ 激しい頭痛により動きを鈍化し、攻撃する意志そのものを無くす状態異常であるな。ヒイロみたいに精神が肉体を凌駕しがちなやつ以外にはとても厄介だ。当然要注意！

『風邪』

・ 極端に咳き込むから魔術も紡げぬし、全ステータスが少し低下するおまけ付きの状態異常だぞー。余はかかったことないが、やはり人肌恋しくなったりするのかな??う

む。要注意だ。

『洗脳』

・文字通り精神を操られてしまう状態異常である。状態異常の中でも特に厄介だと、余も思うぞ。ま、人の大半は余の可愛さの前では即刻洗脳状態に陥るがな！無論、要注意！もうぜーんぶ要注意だ！

【黒の魔術】

魔獣が扱う魔術のことをこう呼ぶのだ。黒魔術の危険なところは対策が大変なところだな。なんせ魔獣の黒魔術は魔獣の種類によってそれぞれ違うし、魔獣の種類もめちやくちや多い。なかにはバンシーのように初見殺しめいた黒魔術を使うやつも居るから、魔獣への知識は必須といえるの。

【魔獣バンシー】

コルギ村の孤児院にてヒイロが斃した魔獣である。

単体でのステータスは貧弱なだけでも、黒の魔術をたくさん持っておりどれも厄介な状態異常を引き起こす魔獣なのだぞ！

歌う魔獣とも言われており、こやつは黒魔術は歌を引き金に異常が起こる。歌を聞か

なければ状態異常にはかからぬのだが、知らなければバンシーの独壇場だ。やはり対策って大事なの！

まず、相手を沈黙状態にする『クライモア』

次に眠り状態の相手を操れる『マザーグース』

そして最後に「この世界でかつて喪失した、大事な女性に誤認させる」という『アイネクライネ』。

うーむ、どれもこれも厄介過ぎる??余は思う。こいつを考えたやつはぜったい性格悪い、と！

【貴族派】

蔑称は旧貴族ともいう。だが貴族派連中に旧貴族と呼ぶとめっちゃ怒るから、無意味な挑発をしたくなくば気をつけるようにの！

アスガルドムは騎士社会と呼ばれておるほどに騎士の権威が強い。十二座と呼ばれる十二人でアスガルドムの政治を担う委員会があるのだが、建国当初は騎士が九人、貴族が三人ほどに偏ったバランスであった。これにより貴族は騎士に対して強く出られず、騎士社会という構造が出来たのだな。

しかし貴族も黙って従う訳もなく、既得権威を独占し搾取する事に優れていた貴族側

が、「騎士」を英雄像としサガやエツダの普及を広め、騎士達に名誉欲と権益という鼻薬を嗅がせることを始めた。つまり、騎士に対して「おぬしも悪よのう??」と言われる「越後屋」役になった訳だの!

これにより優遇される貴族も増え、徐々に騎士社会は蝕まれていった。現在は十二座の議員比も騎士が七人、貴族が五人となっておることから、貴族達の努力っぷりがうかがえるの。感心はせぬがな!

そして、こういう現行貴族達のことを「商売鼠」と揶揄し、騎士も今貴族も平民も憎んでおる貴族連中が『旧貴族』という訳なのだ。スローガンは「古き良き貴族の栄光を再び」であるな。

パウ??パエリア?とかいうやつも旧貴族だし、ルズレーもまた旧貴族だ。旧貴族というのは現貴族以上に他を見下しがちで高慢かつ高圧的なのも特徴といえるかの。

しかし他と非協力的な分、権益を維持するのが難しく、あまり資産も持つておらぬのだとか。

大層なお題目を掲げてはいるが、やることなすことが卑しいことばかりなので何ともいえん連中だの。

◆◆【魔術コーナー】◆◆

うむ！ここでは作中に登場した魔術の呪文や媒体、効果を含めて紹介していくぞ！
 みなもここでしつかりと魔術を覚え、習得に励むのだ！

・赤の魔術

【ルミナスの額】

「灯せ、灯せ、燭台に——『ルミナスの額』」

発光する丸い火を現出させる魔術だの。発光性を持ち、使用者の意思によって強弱を増す。

触媒は『灯す土台』で、用意しておくことで発光性が増すぞ！灯す土台とは蠟燭やカンテラ、何かを包む形の両手でもおっけーだ！

作中ではシュラがルズレーとシドウに使っておったの。蠟燭を投げてピカツとやるやつだ。

【イフリートの爪】

「燃やせ、燃やせ、赤のはじまり——『イフリートの爪』」

燃える五本の爪を現出させ、相手を焼く+切り裂くを行う赤の下級魔術だの。膨大性

を持ち、緑魔術の風を通すと膨張し、火炎の大きさと威力が増したりもする。

触媒は『火種』で、用意しておくのと攻撃効果が増大するぞ。火種とは蠟燭の火、カンテラの火、燃える松明など燃えてるやつならば大体良しだの。故に赤の魔術師は、触媒に便利な口ウソクを携帯しておることが多いぞ！

・青

【ワインディーネの詩】

『歌え、歌え、青き水面よ——ワインディーネの詩』

一定量の水流を自由自在に放てる下級の青魔術だの。攻撃性は低いが応用性は高く、ただ放つのみならず、コップを水で満たす、相手の口を鼻と覆う、食器を洗うなどにも使える。便利！

触媒は『綺麗な水』であり、魔法瓶の水、水筒の中身を用意すると、より精密な操作が可能になるぞ。

・緑

【シルフの遊戯】

『戯おどけ、遊べ、バラバラに——シルフの遊戯』

周囲の風を掻き集めて、真空波として放つ緑の下級魔術であるな。刃の形状は基本、何もしなければ三日月の刃だが、意識すれば剣状にも槍状にも球状にも出来るほどの応用性があるぞ。

触媒は『切った羽根』であり、羽根を振りまけば精度と威力が増大する。羽根は虫の羽、蝙蝠の羽根、羽根ペンなんかでもオツケーだぞ。

・白

【アースメギン】

『我が腕に赤き力の帯を——【アースメギン】』

白の補助魔術の一つだの。使用者の腕に赤いタトウを現出させて、腕力を著しく増大させる効果を持つ。見た目は厳ついがとっても便利な魔術であるぞ！

【ヘルスコル】

『我が脚に空渡る銀の術を——【ヘルスコル】』

これも白の補助魔術の一つであり、使用者の靴の踵の部分から翼のような銀色の風が発生し、俊敏性を上昇させる魔術だな！

毎朝の出勤に遅刻しがちな者ならば特に覚えておきたいものだの！え？そうでもな

い??!? そっか。うん。すまぬ。

「スヴァリン」

『我纏まとう冷厳なる神の楯——「スヴァリン」』

白の補助魔術にして、使用者の身体を魔素でアーマー状に包み込み、防御力を向上させる魔術であるぞ！上二つもそうだが、やはり近接ファイターは白魔術でバフをして闘うのが基本だな。そういう意味では魔術の才能がないヒイロにとって、ありがたーい属性と言えようぞ！



うむ！大体紹介し終わったな！今回も長尺で余はとっても疲れたぞ！

さあやることやった後はお楽しみの時間じゃ！みななもの、菓子を持てい！余と一緒にくるめく甘味の園へと旅立とうぞ！

??あ、ウルズ姉！ウルズ姉も良かったらお菓子食べるか？たつくさん貰ったとこで??え？太るから食べない？うぬぬ、残念じゃ。お菓子などいくら食べたところで太るもんでもないのの??!? って、ぴいっ!? な、な、ウルズ姉なにをそんな般若の如し面構えをし

て、あ、待つて、怖い怖い怖い！言い過ぎた、余が悪かったから??

——
によわあああああああああああ!!!

副官の『灼炎のシユラ』原作解説 VOL. 1

どうも皆様、運命の女神ノルン様がしもべ、副官でございます。こうして挨拶をさせていただくのも初めてですね、ご機嫌よう。

ヒイロ介入により現行ルートと原作との乖離が徐々に大きくなって参りましたので、こちらでは原作のルート解説と、乖離点を紹介させていただきたいと思えます。

本来ならばノルン様にこのコーナーを担当していただきたいのですが、憧殿の影響力により『灼炎のシユラ』の世界の運命が大きく揺らいでしまつて。

その分の後始末として色々と雑務をこなさねばならないみたいで、今頃ひいひい言いながらお仕事をなさっているかと??

まあ、自業自得。身から出た錆というやつですがね。

という訳で、わたくし副官の拙い解説ですが、どうぞ聞いていただくにませ。それでは、よしなに。



『灼炎のシユラー灰、左様倣—』

【序章】

まずは卒業間近に控えたシユラが、学園にて周りとの温度差を感じている日々からスタート。騎士の腐敗やアスガルドについての情報などを拾い、チュートリアルで同じ生徒との模擬戦があつたりと、プレイヤーは徐々に世界観を把握していきます。

その最中で幾人の教官からシユラは「アツシユ・ヴァルキュリア」という異名で呼ばれており、彼女の特別な存在感が示されますね。

そして卒業と共に回想がはじまり、話は一年前の港町へ。

シユラがアツシユ・ヴァルキュリアと呼ばれ始めたきっかけでもある事件にまつわるストーリーが展開されます。

港町フィジカに不穏な噂話あり。なんでも海に漁に出た漁師たちがこぞつて行方不明になり、更には真夜中に行方不明になっていた漁師達が家族の元を訪れるとか。しかしその漁師達は誰が見ても分かるほどの亡者であつたのです。

噂話を聞きつけ、港町フィジカを訪れていたシユラ。フィジカの代表はシユラがアツシユ・ヴァルキュリアであることを知り、彼女にこの事件の解決を依頼しました。シユラも魔獣を狩れるならと応じ、調査がはじまります。

そこで一人の少女と出逢います。名をアメラ。彼女は金髪の愛らしい顔立ちであり、赤い宝石のロザリオを身に付けた少女でした。

彼女は港町のある小さな穴ぐらにて、行方不明になった漁師達を見かけたと言います。そこでシユラはアメラと一緒に穴ぐらへと訪れますが、なにもありません。するとけたたましい音が鳴り響き、落石によって穴ぐらの出口が塞がれてしまいました。

落石を引き起こしたのは亡者と化した漁師達であり、亡者を操っていたのは??アメラでした。

「お間抜けさんだねー！こーんなかわいい女の子相手じゃ、アツシユなんたらさんだつてついつい油断しちゃうんだから怖いよねえ？気をつけなよ？綺麗な花には棘があるもんだし、無害な相手は??実は凶悪な魔獣だったりするかも知れないんだから。あはははは！」

「でも君みたいなのが来るようになってしまったのはボクとしても困るから??いつそ、無くしちやおうか。この町をさあ！」

閉じ込められたシユラを前に哄笑を響かせながら、アメラは立ち去ります。アメラは亡者たちを操り、フィジカを滅ぼそうとしました。

悲鳴と驚嘆に覆われる港町。しかしアメラ率いる亡者の前には、力づくで落石を排し、脱出したシユラが立ち塞がります。

シユラはその異名に恥じぬ活躍を見せて、亡者達を一蹴。最終的にはアメラを港町の船上にて一騎打ちに持ち込み、彼女を斬り伏せます。

倒れたアメラ。背を向けるシユラ。しかしアメラは倒れたふりをしていました。少女とは思えない力で船の鉄製の手すり（鉄パイプ）を引きちぎり、シユラに襲いかかります。ですが??

「アンタ相手に二度も油断しないわよ」

奇襲に備えていたシユラはルミナスの額でもってアメラの目をくらし、アメラの手から鉄塊（鉄パイプ）を奪い、ロザリオごとアメラの胸に突き刺しました。

「なん、で??」

「そのロザリオがアンタの正体でしょ、ヴァンパイア。人を亡者化して操るだけじゃなく、血を利用して亡者に乗り移る魔獣。アンタの噂を聞いたのはずっと前だけど、思い出せて良かったわ」

「く、そお?」

こうして魔獣ヴァンパイアは討たれ、フィジカに平穏が訪れました。しかしヴァンパイアを貫いた鉄パイプは、いつのまにかどこぞへと消えてしまったとか。

ともあれ、長い回想を経て、時間軸は現在へ。

学園を卒業し、入隊試験に挑むシユラ。そこでなにやら芋くさい貴族ルズレーにナン

パされませんが、一蹴。順調にヘイトを稼ぎつつ試験開始。彼女はシドウ教官を名指しし、見事勝利を収め、エインヘル騎士団の騎士候補訓練生となりました。

ここで、序章は完結となります。

【第一章】

シユラの騎士候補訓練生としての日々がはじまります。やはりシユラはずば抜けて成績がよく、周囲に一目を置かれておりました。また、シヤム・ネシャーナという少女が同じ寮部屋のルームメイトとなり、彼女になぜかなつかれてしまったシユラ。色々と質問責めをしたり仲良くなりたいたいとアピールするシヤムに辟易としますが、シユラも徐々に態度が軟化。やがて諦めたように抵抗しなくなりました。

しかし戦闘時におけるシユラの剣呑さに、彼女のもっと強くならなくては、という意志を察したのか、シヤムも訓練の際には寮の時のような気安さで接することはありませんでした。

やがて選抜試験が訪れ、シユラの対戦相手が発表されました。第一次、第二次をなんなく突破し迎えた第三次の対戦相手は、訓練生時にも度々絡んできたルズレー。今までの鬱憤を晴らすかのように徹底的にルズレーをのしたシユラですが、それがルズレーの

妄執に火をつけてしまいました。

その後、コルギ村の事件についてはほぼ同じですね。

しかし孤児院での鬩いの際、シユラは魔獣バンシーに洗脳されてしまいます。ですが洗脳されながらもトラウマが刺激され、抵抗するシユラの意志が赤の魔術を使わせ、孤児院に火がつけます。燃え盛る孤児院という光景により、深くトラウマを刺激されたシユラの内なる力が暴発し、バンシーは斃れました。そしてシユラもまた意識を無くしてしまうのですが、倒壊する孤児院から彼女を救ったのはエイグンでした。

エイグンはこの際に負った火傷により死亡。孤児院が焼ける匂いと光景を目にした村人達によりシユラは救助されましたが、後に孤児院にまつわる後ろ暗い歴史がハウチさんから語られました。

コルギ村の事件を解決は出来たものの、後味の悪い気持ちをひきずりながらシユラはアスガルダムへと帰還することとなります。

また孤児院跡にて黒幕らしき仮面の男が登場し、意味深なことを喋ったあとに彼はある鉄パイプを拾い上げます。それはシユラがかつてヴァンパイアを斃した際に口ザリ才を貰ったものと、全く同じものでした。この出逢いが、後にさらなる悲劇を引き起こしてしまうのです。

さて、アスガルダムに帰還したシユラ。しかし彼女はすぐさまに懲罰房に投獄されました。この時、本隊入りを控えていた騎士候補生たちの間にある噂が蔓延します。

それは、シユラが騎士称を剥奪されるかもしれない、という噂です。これにシヨックを受けたのがシャムでした。そんな彼女の元に、ある手紙が届きます。シユラを救いたくば、旧校舎に来いという内容でした。これに光明を見出したシャムは旧校舎に向かいますが、待ち受けていたヒイロとシヨークの魔の手によりシャムは麻痺の状態異常にかげられ、拘束されてしまいます。

一方、シユラは騎士称剥奪という処分に遇されることはなく、寮にて三日間の謹慎が言い渡されました。エイグンの一件で沈んだ気分のままに寮に戻るシユラは、シャムのテールブルにて手紙を発見します。そしてすぐさま旧校舎に向かいました。

向かった先では拘束されたばかりのシャムを人質にとったルズレー達が、シユラを待ち受けていました。ルズレー達はシャムを危険な目に合わせたくなければ、自分たちの言いなりになれと命じます。シユラは激情に駆られますが、人質を無視は出来ませんでした。

しかしそんな時、人質にとられていたはずのシャムがこつ然と姿を消し、シャムとよく似た声が響き渡ります。

「姉さんはもう大丈夫です！今のうちに応援を呼んでくれますので、エシユラリーゼさん

！後を頼みます！」

その言葉を聞き、シユラは剣を手にルズレー達に襲いかかり、一章のラスボス戦がスタートします。

無事、勝利を収めたシユラ。全身傷だらけになり失神したルズレーたちは、謎の声か呼んだらしき応援であるシドウ教官達に引き渡されました。

こうして、第一章は完結。物語は第二章へと続きます。



いかがでしたでしょうか。こうして見るとヒイロが通った道筋は原作と差異がないように思えますが、中身はかなり違っていると思います。

特に大きな乖離点をあげるとするなら。

- ・クオリオと友情を築き、リヤムという少女に好感を覚えられている。
- ・エイグンの生存によりコルギ村から英雄視
- ・パウエルが既に登場し、退場。
- ・凶悪が黒幕ではなくヒイロの手に渡っている

・シュラにとってかけがえのない存在が生まれた。

こんなところでしょうか。

原作の今後を知る私としては、このあとの展開が色々とかけ離れたことになりそうなのは目に見えていましてね??いやほんと、クオリオとかどうなるんですかこれ。

気になって仕方ないですが、ひとまずは現地に向かっているヴェルザンデイ様より今後の報告を待つとしましょう。

例の「摩天楼のロキ」でも読みながら、ね。

それでは皆様、また次章にてお会いしましょう。

はい、さようなら。

069 新章のはじまりくラブコメを添えてく

青空に雲が伸びていく。

本日も健やかな晴天なりな空の下、俺はご機嫌に踵を鳴らして大通りを歩いていた。
(フツ、見ろよ凶悪。すれ違うやつ、みんな俺の事を見てる感じ。さては騎士装備の俺から溢れ出るオーラにみんな惹かれてると見たぞ！)

そう、今日の俺は一味違う。遂に本隊入りってことで、ブリュンヒルデ隊の装備ve r ヒイロなのである。青を基調とした騎士装備のなんとかつこいいいことか。

主人公たる俺がそんな格好してれば、そら注目されて当然って訳よ。

《は？どこが？傍からみてる分には、騎士から鎧奪ったチンピラにしか見えないけど？
マスターったら、冗談はもうちよつと笑えるようにしてよねえ》

(本日も朝からさらつと辛辣ですねえ凶悪ちゃん)

しかしこの鉄パイプさん(指輪モード)からの即否定ですよ。ちよいと酷すぎない？
親愛なるマイシスター・サラだつてかつこいいつて褒めてくれたのに。み、身内**鼻**肩
じゃねーから。主人公の妹、嘘つかない。

あのルズレー事件で俺も結構がんばったんだし、ちよつとは認めてくれてもいいじゃない。

なんて風に、段々と慣れ始めてきた脳内トークに花を咲かすことしばらく。気付けば到着していた騎士団本部ヴァルハラの入りにて。

「遅いわよ」

「遅いぞ」

見慣れた二人が、待ってたぞとばかりに声をかけてきた。

「おう、悪イな??って待てや。待ち合わせなんざした覚えはねえぞコラ」

「アタシもした覚えなんてないわよ」

「僕もない。だが、色々と杜撰で粗暴な君のことだからね。おまけに方向音痴だし、ひよつとしたら本部までの道のりを迷いかねないと思つてね」

「そういうこと。同期がそんなだとアタシも恥ずかしい??つまり、見張つてやるつもりだったつてだけよ」

「普段、俺をどういう風に見てるかよく分かつたぜクソが」

出会い頭にずいぶんな挨拶だった。仮にもピンチを協力して脱した仲なのにこの扱いですよ。いくら俺だつて流石に今更本部まで迷つたりしないっての。

ともあれ、合流出来たなら丁度良い。本日から本隊入りの三人、肩を並べて本部へと

向かうとしよう。

「そういえばヒイロ。君もあの一件の後、麓の村まで帰省したんだっけ？なかなか騒がれたんじゃないか？」

「フツ、まあな。村の連中、俺を英雄だのなんだのとガキみてえに持て囃しやがって。クカカカツ」

ヘルメルに帰省した時のことは、もう思い出すだけでニヤけてしまう。サラの手紙でヒイロが見直されてるって聞いてたけど、ヘルメルに戻った途端に黄色い声援を向けられたのは驚いた。

いやああアレは最高でしたね。村の英雄だ、誇りだ、って具合に騒がれてさ。

村の皆からの憧憬や羨望の眼差しが、気持ち良くなって仕方なかったです。うへへ。

「ねえ。ヒイロ」

「あア？」

「確かアンタには妹が居るのよね？サラって名前の。今は村に一人で暮らしてるんですよ。ちゃんと気にしてあげてるの？」

「ハッ。あいつはこの俺の妹だけ。手の掛からねえしつかりしたヤツなんだよ。心配なんざいらねえ」

「??あつそ。ま、精々大事にしなさいよ」

少し予想外なシユラの気遣いに、内心で面食らつてしまう。なんだかシユラの表情もちよつとアンニュイな感じだし。

あれか、ライバル枠から見れば俺なんてまだまだ危なっかしい奴に見えるつて事なのかね。

「むしろアイツのが俺のことを気にし過ぎてつて話だ。やれ飯はちゃんと食つてるかだの、早く恋人作つて見せに來いだの」

「??、??へー。可哀想にね。どうせその杞憂はしばらく晴れやしないだろうし」

「ああ? テメエ、そりやどういう意味だコラ」

「ふふん。アンタみたいな悪人相にときめく奴なんていないつて事よ」

「ハツ、墓穴掘りやがったなクソアマが! それならテメエだつてろくに男が寄り付かねえだろうが、野良犬みてえな目付きしやがつてよオ!」

「んなつ?? 誰が野良犬よ誰が! 言つとくけど、無名のチンピラなアンタよりはずつとずつとモテてるわよ!」

「ああ! テメエ、二つ名持ちだからつて調子に乗りやがつて!」

「?? 頼むからもう少し周りの目を気にしないか、君たち」

クオオリオの溜め息も指摘もごもつともだが、ここで退いては男が廢る。

言われつぱなしは性に合わない。ここはいつぞやみたく、ライバルに向けて大胆不敵

に宣戦布告してやろうじゃないか。

「ケツ、いつまでも無名呼ばわりしやがって。言つとくが、俺をそう呼べんのも今のうちだけだぜ?」

「——へえ。面白いじゃない。コルギ村の時みたいに、有言実行してくれるっていうの?」

「つたりめえだ。見てやがれよ、アツシユ・ヴァルキュリア」

そうさ。

無名なんて今のうちだけだ。

見てろよシユラ。俺の宿敵、アツシユ・ヴァルキュリア。

お前のその勇名だって、俺はいつか必ず超えてやるのさ。

「今にお前は??俺のもんになんだからよ」(今に有名人の座は、俺のものにしてみせるんだからな!)

フツ、決まった。

?????????
あれ?
なんか今、すつごい食い違い発生してなかった?

「?、——ひえん!」

あ、シユラがいつぞやみたく鳴いた。懐かしいな。

いや違うそうじゃないだろ冷静に懐かしんでる場合か。

(おいしいいい! フィルターおいしい!!)

《マスターって馬鹿なの?》

(今言われたって反論出来ないけどちっげえから!! かんっぜんに言葉の綾だから!)

《えええ?》

いや何故だよ。

なんでこのタイミングで致命的なニュアンスずれが発生してんの?! もはやただの

告白になっちゃってたんですけど!?

おかしいだろ! 内角高めにフォーク玉投げたと思ったら何故か直球ど真ん中に

なっちゃったんですけど!?

「バツ?? なつ、ななな、なに言ってるのよあんた! ほんとなに言ってるの?」
 「あア?」

「あア? じゃないわよバツカじゃないの?! なんでこのタイミングでそんな?? というか
 どういう意味で言ってるの?! ハアッ!? わ、わわ、訳分かんないんですけど!! 意味分
 かんない! 死ぬ! 馬鹿! 変態!」

「???」

見ろよシユラの顔、真つ赤じゃん。めつちやうろたえてんじゃん。いやシユラの反応
 は当然だよ。急に俺のもの宣言されたら誰だってそうなるわ。

でも運が良かったな。美少女とはいえ気の強いライバル粹。下手すれば剣の錆びに
 されてたところだよこれ。

「ヒイロ」

「んだよ」

「君は周りの目と?? 乙女心とやらも気にした方が良いと思うよ」
 「?? うるせえ、畜生」

ただ、心底呆れたようなクオリオの忠告には、強く出れない。

乙女心か。乙女心ねえ。秋の空とも言うけれど、季節はそろそろ夏の入り口が見える
 頃だ。

コバルトブルーの上空。

道のように広がる入道雲が、なにかの始まりを予感させていた。

「ヒイロの馬鹿！ばかつ、ばか！ばーか！」

「??」(??)

あと、意外なことが一点発覚した。

シユラの罵声つて、意外とボキヤブラリーが少ない。

え？クソどうでもいいって？

??ひえん。

070 夏の入口。春との再会

初っ端から珍道中をかました俺ではあったけど、今日が半人前から一人前としてのスタートなのに変わりは無い。

栄えあるブリュンヒルデ本隊の一員として、こっから更なる躍進を遂げる。薔薇色未
来に夢を馳せてる内に、団長も団長補佐筆頭も登場しなかった開会式は終わった。

それでもつてここからが本題。なんでもブリュンヒルデ本隊なんて呼ばれているが、
本隊全体が一個として動く訳ではないんだとか。

隊長一人、他隊員の四、五名での一個小隊のチームで動くのが基本らしい。となれば
気になるのはこれから先、戦友となる同期についてなんだけど、うん。

「まさかアンタ達と一緒にの隊とはね」

「ああ？そりゃこっちの台詞だつての」

「うーん。なんとなくこうなるんじゃないか、つて予感がしてた僕が居るよ」

各小隊に与えられた待機室で顔を合わせたのは、今朝と代わり映えのしない面子であ
りましたとさ。

「予感？なにか根拠でもあるの？」

「根拠ってほどでもないよ。ただ、小隊はいわばチーム。チームに大事なものはバランスだろ、エシユラリーゼさん」

「この際シユラでいいわよ、クオリオ。にしてもバランスね??ま、確かにヒイロは典型的な脳筋前衛だし、そうなればアタシやクオリオが目付け役に選ばれたって不思議じゃないわね」

「誰が脳筋だコラ。テメエだって暴走しがちだろうが」

「ぐっ??」

「??うん、まあ、多分僕は後衛兼、ヒイロとエシユ??もとい、シユラの分のフォロー役としても組み込まれたって所かな」

「フォローだア?そんな細腕で俺を抑えられるとでも思ってたやがるか、クオリオくんよオ??」

「そういうとこだって言うてるんだ馬鹿ヒイロ」

好き勝手言うてるクオリオだけど、言い分は分からんでもない。手綱握りはともかく、俺はインファイター、シユラは魔術も使うけど役割は前、中衛だろうし。クオリオはがつつり後衛だ。

こうして分けてみれば、綺麗にバランスが取れてるといえるだろう。

「だが小隊つつうのは四、五人の隊員が居るもんじゃねーのか？ 数が足んねえだろ」

「確かにそうね。隊長サマもまだ来てないみたいだけど？？あのパエリアみたいに変な奴だったら、いつそ叩つ斬つてやろうかしら」

「恐いこと言わないでくれよ」

「冗談よ」

「冗談に聞こえないから恐いんじゃないか」

「——然り。だがここは、やれるものならやってみせよ、と言つておくとしようか」

「！！！！」

雑談にまさかな答えを挟んできたのは、まさかな人だった。

ガラガラと戸を開けて入つて来る、これまた俺達に縁のある眼帯の男。ついこの間お世話になったばかりの、シドウ教官その人である。

「し、シドウ教官?! 教導官の貴方が何故ここに?」

「ベイティガンか。なに、因果なものだな。かつて私を教導職へと追いやったオードブルの不正を暴いた功績で、また本隊の騎士と返り咲く事となったのだよ」

「本隊つて。じゃあ、アンタが??」

「然りだ、ミズガルズ。私が貴様らの隊長という事となる」

「ハッ、マジかよ」

「マジだとも。ヒイロ・メリフアーよ」

しかもシドウ教官が俺達の隊長かよ。マジか。まあパエリアとかより全然マジだし、頼り甲斐ある人なのは間違いなかった。

でもここだけの話、一回コテンパンにされたから少し苦手意識あるんだよな。

「では、僕たちとシドウ教官とで一個小隊ということですか？」

「教官ではない。隊長である。そして質問への回答だが、隊員は貴様らだけにあらず。今より紹介するでしょう——入れ」

「はいっ！」「は、はい」

シドウ教官、もとい隊長に促されて入って来たのは、ひと目で双子と分かるほどに似ている姉妹だった。

「えーっとお??はじめましてだねい、野郎共！ウチはシャム・ネーシヤナ！天下無敵のシャムちゃんだよ！以後よろしくう！」

「ね、姉さん声大きい??えっと、リヤム・ネーシヤナです。よろしくお願いします」

もう夏の入り口に差し掛かったのに。

過ぎたばかりの春の桜が、ふわりと舞った気がした。

071 レギンレイヴ小隊、結成！

「えーつとお、まずははじめましてだねい野郎共！ウチはシヤム・ネーシャナ！天下無敵のシヤムちゃんだよ！以後よろしくう！」

「ね、姉さん声大きい??えっと、リヤム・ネーシャナです。よろしくお願いします」

片方は空を思わせる蒼いミドルヘアで、片方は春を思わせる桜色の三つ編みツインテール。両方とも互いの髪色が混ざったような瞳の色で、両方とも背がちっこい。でもほんの少しだけ高く見える蒼い方は、聞いての通り活発らしい。なんせ自称天下無敵と来ているぐらいだ。

「わっほーい！シユラ姉だ！シユラ姉も一緒の隊だー！」

「わっ、ちよっ、シヤム!?!」

そこでどうやら活発なのは言動だけじゃないらしい。

気付けば目を輝かせて飛びついてた。シユラに。というか、シユラの胸に。

ほう。やるな。そら天下無敵だわ。

「えへへへへへーああ、このポリウム。ふわふわ感。満足感。やっぱりシユラ姉だあー！」

「ちよ、ちよつとやめ、あつ??って、どういふ確認の仕方よ!」

(??な、なんとという冒流的な??なるほどこれが噂のうらやまけしからんってやつかなるほどなるほど)

《チツ??チツ??チツ、チツ、チイツ!》

(凶悪さんや。リズミカルに舌打ちすんのやめて。怖い)

《あア?!》

(それ俺の口癖だから??取らないで。怖い)

いやしようがないって。あれはもう浪漫じゃん。ロマンシングな性^{さが}だし。だから凶悪さん精神汚染みたいなのやめてさつきから頭痛がやべーってば。

「うん。知り合い、では収まらない仲みたいだね」

「あ、ああ。シヤムは寮のルームメイトなのよ」

「ルームメイトだなんて水臭いなあ、シユラ姉。ウチとシユラ姉はいわば師弟関係だからね!」

「師弟だア?」

「そのとーり!ウチはシユラ姉に惚れ込んだのさ!強いし美人だし!かつこいいし!寝言かわいし!」

「だからアタシは弟子なんて??ていうか最後の余計よ剣の錆にするわよ!」

「ご覧の通り、照れ屋なところもいいよね！」

「シヤムう?!」

へー。つまり俺と同期だったって事か。言われてみれば確かに見かけたかも知れん。でもあの頃の俺はクオリオとひたすら魔術訓練してたし、うる覚えなのも仕方ないかも。

にしても、凄いい懐きようだな。シユラもまんざらじゃなさそうだし、良いコンビじゃん。てつきりコミュ症かと心配してただけに、なんだか後方師匠面めた安堵を覚える俺である。

が、そんな折に、くいつと服の袖を引かれた。

なんだと視線を移せば、桜色カラーの妹さんが俺を見上げていた。

「?!あの、こんにちは」

おお、これはご丁寧にどうも。けどあれ、なんだろう。

この子のこの猫耳ミリタリージャケット、どつかで見た覚えが?!あつ。

「あア?!?!、——！テメエは確か?!あん時の無傷少女じゃねえか」

「ん。ふふ。はい。無傷です。お久しぶりですね、無敵お兄さん」

最近色々ありすぎて一瞬記憶飛んでたけど、聖冠獣目録探しの時にお世話になった無傷ちゃんじゃん。

まさかこんな所で再会するとは。結局名前も聞きそびれてただけに、嬉しい再会じゃないか。

「ん? ヒイロ、知り合いだったのか?」

「おう。つうかテメエとも無縁って訳じゃねえぜ。あの本探す時に世話焼かれたヤツの話、しただろ。アレがコイツだ」

「?? ああ、確かマードック氏とやらを紹介したっていう娘か。なるほど。なら僕も世話になつたようなものだね。ありがとう、リヤムさん」

「あ、いえ。私は大したことでしてません。えっと、ヒイロさんががんばったからだと思いません」

「?? チツ。ガキが謙遜しやがって」

「おや。まさか照れているのか、ヒイロ? 君の人相で照れられたって気味が悪いだけだよ、ぷつくくく」

「あア?! 照れてなんかいいねえわクソが!」

「?? よく分からないけど、アンタとその子じや絵面的に危険過ぎるでしょ。よく通報されなかったわね」

「ぐつ、このアマが?? テメエはそつちの姉と乳繰りあつてやがれや!」

「してないわよ馬鹿っ!」

わーわー！ぎやーぎやー！

恩赦や謙遜、売り言葉に買い言葉。

戦場の銃声みたく飛び交い過ぎて、追いかけるにも目が回りそうな騒ぎようだった。

「——総員、静粛につ！」

「——！——」

けれどもシドウ隊長の一喝は、さながらロケットランチャーの着弾音である。冷水をぶちまけられたように、気が付けば全員が背を伸ばし、整列していた。

「うむ。積もる話もあるうが、順序を間違えるな。まだ貴様らに全てを言い伝えた訳ではない。話は最後まで聞くように??よいな？」

『ハッ！』

このおつかなさだよ。有無を言わさない隻眼の迫力。

でもこの人が隊長ならっていう感じも凄い。多少の苦手意識も拭えそうな信頼感は、俺も憧れを抱かざるを得なかった。

「よろしい。では先にも言ったが、私が隊長を務めるシドウだ。そして??『リヤム・ネー

シヤナ』

「は、はこ」

『『シヤム・ネーシヤナ』』

「はいさーいー!」

「『クオリオ・ベイティガン』」

「はい」

「『エシユラリーゼ・ミズガルズ』」

「ええ」

「『ヒロ・メリファー』」

「おうー!」

同時に込み上げる奇妙な高揚感。

てんやわんやだったスタートから、遂にもぎ取った精鋭の位置。階段のひとつを踏み締めた感覚に、俺は無意識に頬を吊り上げていた。

「本日よりブリュンヒルデ本隊所属として任命された、以上の隊長一名、隊員五名。これより我らは一個の小隊として、アスガルダムの平穩の為に任務に励む。また、小隊にはそれぞれに名称がつけられるのが決まりだ。」

我らがこれより名乗る小隊名は「レギンレイヴ」。

各員??!しかもこの名を胸に刻むように」

レギンレイヴ。

それが俺達の始まりを冠する、隊の名だった。

072 古来より武官と文官は衝突しがち

『神々の残された者』か」

「ああ？なんだよそりゃ??」

「レギンレイヴ。僕らの隊の名称元になった故ふるきワルキューレの名の意味さ」

「ほう。だったら良いじゃねえか。余りものには福があるって事だ。俺たちはツイてるってことだ」

「??はあ。馬鹿か君は。いや馬鹿だったね君は??」

「うるせえインテリ特化野郎」

俺達の小隊名が発表されたあの後のこと。

今日は実質顔合わせだけだったらしく、無駄のない隊長によつてすぐに解散が告げられた。少し拍子抜けだったけど、案外積もる話もあるだろうからつて気を遣つてくれたのかもしれない。

で、お言葉に甘えた俺達は現在、改めての自己紹介も兼ねて欧都でランチと洒落込んでましたとき。

「じーっ」

けど穴あく勢いで見つめられればさ、飯の味も入って来ないよね。

「おい猫娘。オレになんか言いたいことでもあんのか？」

「んー??ん? いや、これがシユラ姉の言つてたヒイロかあつて思つて」

「あア?」

「いつつも無茶してるたんさいぼーなお馬鹿さんつて聞いてたもんだからねー。あとすんごい悪人面つて。あはは、ほんとだー!」

「テメエこらシユラ表出ろやア!」

「なによ、事実じゃない」

「事実をなんでもかんでも言つちまったら戦争だろうがア!」

おのれシユラめ。事実だったら俺の活躍ぶりとか褒めるべき所とか伝えんかい。

しかしシヤムは人懐っこいタイプだな。距離感を気にしないというか。典型的な元氣娘つて感じがする。

一方で妹のリヤムは大人しめな性格らしい。井をかつ込むシヤムの隣で静かにちまちま食べる様子を見れば、似ているのが見た目だけなんだと分かる。

というか、シヤムはともかくリヤムつて全然騎士っぽくないよな。どつちかというと、図書館の司書とか似合いそうだし。

「少し気になっていたんだが、リヤムも訓練生だったのかい? 姉の方はともかく、君を訓

練の時に見た覚えがないんだけど」

「あ、それは当然です。私は元々訓練生とかじゃなくて、ラーズグリーズの候補生として下働きしてまして」

「へえ。ラーズグリーズっていうと、魔獣や魔術の研究を主にしている部隊だったな。下働きってことは、資料整理とかかな？」

「ええと、そんなところです。本当たったらそのままラーズグリーズに所属する予定だったんですけど??なぜかシャム姉さんと一緒に本隊に配属されて」

「ああ?どうせなら姉妹一緒にしちまおうって魂胆か?」

「そ、そうとは限りませんけど??あはは」

「??ふむ。別部署から本隊に属するケースはない訳じゃないが、よそで遊ばせられないほど優秀な場合がほとんどだ。ということは、君も相当優秀って事らしい」

「へあ。そ、そんなことないです。たまたまです、たまたま??」

マジかよりヤムさん。はじめましての時といい天然っぽい印象が強いのに、実は秘めたる力を持っていたりするんのかよ。

ついリヤムをまじまじ見つめれば、気恥ずかしそうに猫耳フードを深く被ってるこの娘が。人は見かけによらないもんだな。

「むむむつ。さてはクオッチ、うちのリヤムに興味有りって感じかな?感じだな!」

「んなつ。ち、違う。ただ僕は気になったことを聞いたままだが」

「でも駄目！リヤムをあげるには、眼鏡くんはひよろひよろしてて頼りないから！」

「ひよ、ひよろひよろ??」

「ね、姉さん??」

「容赦ねえな。さては姉貴分に似たか」

「そこでこつち見んな。シヤムは元々あんな感じよ」

「これも姉心つてやつなんだろうか。恋愛ものでありがちなおせっかいムーブに、ついシユラを見た。睨み返されたけど。」

「まあシヤムの気持ちも分からんでもない。かくいう俺もサラを頼りない男にはやれん。少なくとも俺に勝てるくらいじゃなきや駄目だな。」

「でもこのままクオリオがナメられてる感じもいかんともしがたいし??うん。ここはひとつ、俺もおせっかいムーブかますか。」

「フツ、クオリオを見た目だけと考えるようじゃまだまだだな」

「ほほーん。と言いますと?」

「シユラがテメエの師匠なら、俺の師匠はコイツだつてことだ」

「!」

「えー。このガリガリの眼鏡が?うつそだあ!」

試すような目線で見上げるシヤム。

ふふん、疑ってるな？だが舐めるなよ。クオリオはほんと凄いやツなんだからな。

「テメエはまだクオリオを知らねえ。いいか、こいつは頭が俄然切れる。かくいう俺もシユラも、つい最近コイツの知恵に助けられたばっかだなア」

「なぬっ!?!シユラ姉、それほんと!?!」

「?!事実よ、悔しいけどね」

渋い顔をしながらも肯定するシユラをみて、あんぐりと口を開けるシヤム。良いリアクシヨンするなあ。だがしかーし、主人公のフォローがこの程度と思つて貰っちゃ困るね。

「それだけじゃねえ。体力は無えが魔術師としての腕もピカイチだ。魔素の量も同期ン中なら最上位つてとこだらうよ」

「う、うぬぬぬっ?!」

「この俺ほどじゃねえが、こいつも秘めたる才能は留まることを知らねえ。ひよつとすりゃあ将来、騎士団長すら小さく見えるほどの大物になったつて不思議じゃねエかもなア!クカカカツツ!」

「え、おいヒイロ、ちよつと盛りすぎだぞおい!」

俺のフォローがあまりに手厚かったからか、クオリオが泡を食ったように止めてく

る。

馬鹿野郎、こういうのは盛ってなんぼだぞ。言うだけタダだし。って訳で、最後にトドメのフオローを叩き込む!

「そして——なによりイ! テメエもルームメイトなら受けた事あんだろ、あの訓練時のペーパーテストオ!」

「うぐつ、あれかあ??」

「クククツ、その顔を見るに散々だったみたいだな。俺もだ。だがこのクオリオ・ベイティガンはなア! 訓練生中で唯一! 満点を叩き出してんだよオ!」

「なあつ!?! すすす、すつごおおい!!!」

「クカカカカ! どうだ、凄いだろ。満点だぞ満点! テメエにや逆立ちしたつて無理な芸当だろオが、あア!」

「ぐぬぬぬ??く、悔しいつ!」

ふふふ、参つたら。俺の二十一点では足元にも及ばない満点だ。ぐうの音の出ないほどに悔しがるシャムの前に、俺の脳内で決着のゴングが高らかに鳴り響いていた。

「なあ。なんで僕が一番恥ずかしい想いしてるんだらうな」

「さあ? 頭が良いからじゃない? アイツらが馬鹿過ぎるだけかもだけど」

「??どつと疲れた気分だよ」

「ちよつと喜んでる癖に」

「う、うるさいな。いいだろ別に」

なんだかざわざわ言ってるけど、さしずめ俺の弁舌に感銘を受けていると見た。まあともかく、シヤムもこれに懲りて、クオリオへの印象を良くしてくれるはずだ。

なんて風に、思ってた時期が??俺にもありました。

「み、認めぬし??認めないしー!男も女も度胸、大事なのはパワーだよ!こーんなヒョロつちい眼鏡より、天下無敵のシヤムちゃんの方が凄いもん!」

「む??生憎、僕自身も君みたいな視野狭窄のちんちくりんに負ける気はしないけどね?」

「ちんちくりん!?ウチはまだ成長過程なだけだあー!クオつちみたいなのなんて、魔術使われる前にピヤツと近寄ってキュツとして終わりだし!」

「むざむざと近づける訳ないだろう。ヒイロを笑っていたが君の方がよっぽど単細胞じゃないか!」

「なんだとおおおー!」

あ、あれ。なんでいがみ合ってるの。火花散ってるの。

俺の渾身のフォローは一体??

「ねえ、ヒイロ」

「??なんだ」

「なにごとくも程々にしとく方が、いいこともあるみたいね」

「??おう。肝に銘じとく」

「ね、姉さん、テーブルに足乗せるなんてはしたないからっ。クオリオさんも落ち着いて??!」

平和って、儂いもんですね。

メンチ切り合う二人をオロオロしながら仲裁するリヤムを見て、俺はひとつ悟ったのだった。

073 シヤム・ネシャーナの実力

なんだか想定外過ぎる意地の張り合いが起こった、明くる日の昼下がりに。

俺達はシドウ隊長引率の元、欧都付近の石橋に訪れていた。本隊所属のメインは魔獣討伐。つまりは俺達レギンレイヴの『初任務』という訳である。

「??橋、見事なまでに壊れてやがんな」

「一週間前の大雨で氾濫したらしい。欧都付近だけあつて使用頻度も多いから、早急な工事を手配しなければならぬって話だけど??」

「ゴロゴロと。虫みたいに湧く連中ね」

皮肉さを帯びたシユラの言葉通り、橋の周りは魔獣で溢れていた。

大体三十四匹くらいか。魚みたいな奴からコルギ村で見た小さい人型、更には狼っぽい奴まで。レパートリーも豊かなこった。

「ゴブリンにサハギン、オークにウルフつてどこ? うーん、全然大物居ないじゃん! せっかくクオつちにウチの実力見せつけてやろーつてのに!」

「姉さん、油断しちやだめだよ?」

「フン。精々足を掬われないようにするといひさ」

《んふふ、バチバチだねー。こういうギクシヤクもよきよきい》
(歪んでんなあ、凶悪さんや)

本日も人の脳内で絶好調な凶悪さんだったが、いうほど深刻な溝って感じじゃないよな。意地の張り合いみたいなものだし。

「此度、私は手を出さぬ。お主らだけで事を為してみよ」

「ほおう。まずはお手並み拝見って訳か？」

「フ。試金石にしては物足りぬ、といったところか。しかし隊とは一丸、連携が命となる。互いがどういう力を持ち、どう足並みを揃えるべきかを把握せぬままに荒波に出せるほど、貴様らはぬるま湯離れが出来ているかな？」

「??言うねエ。クク、上等だ」

連携云々に関しては納得。けども建前の奥には「この程度の任務、軽くこなせないなら期待外れ」という挑発があった。

良いね。良い塩梅で気合を入れてくれるもんだ。

「——レギンレイヴ、始めんぞー！」

「ああ」

「ん」

「はいっ」

「あいさー!」

試される状況こそ燃えるってもんだ。

気炎を吐いて武器を取り、俺達は初任務を達成すべく魔獣の群れへと躍り出たのだつた。

(よっしやああ!! しれつと仕切つて副隊長っぽいポジションいただきい!)

《うっわ汚い。流石マスター、きたない》

凶悪さんや。

言つたもん勝ちつて、素敵な言葉だと思わんかね。



開戦の狼煙的発言をし、さりげなくリーダーシップを發揮してるように見える俺の主人公的頭脳ブレイが炸裂した。かに思えた。

しかし実際に開戦の狼煙を上げたのは、驚くべき俊足でもつて一番槍をぶんどつた猫娘であつた。

「にやつはアアアアアツツ!!!」

【g o b u ! ? !】

猫めいた叫び声をあげ、スカイブルーカラーの少女が魔獣の群れを蹴散らしていく。蹴散らす、つてのは比喻じゃない。文字通り吹っ飛んでいた。

「さあさあ寄つてらっしゃい見えてらっしゃい！これぞ天下無敵のシヤムちゃんのお、超絶。パウワーアタックだああい！」

さながら古代中華の武將の如き名乗りは、可憐な少女があげるにはあまりにもギャップがある。でも名乗り以上にギャップを感じさせるのは、シヤムの右手に握られた武器だろう。

それは大人ひとり分はありそうなほどに大きい鉄球が付いた、鉄棍だった。

並の人間じゃ持ち上げることも叶わない鉄の塊を、あろうことかシヤムは片手でぶん回しているのだ。

「??あの鉄球を振り回すたア、どんな馬鹿力してんだよ」

「??非常識だ。振り回すつて、片手で?どういう腕力をしているんだ。滅茶苦茶だ。詐欺にでもあつた気分だ」

「あれで常人以上に速く動けるんだからね。面食らう気持ちは分かるわよ。アタシも最初見たときは目を疑つたわ」

「にゃーっはっはっは!!」

冗談みたいな光景だが、魔獣からすりや冗談じゃ済まない。ブンブンと襲い来る暴力の塊は受け止めることすら許さず、魔獣達は次々に黒い煙と化していた。

魔獣達もまともに戦える相手じゃないと判断したんだろう。一匹一匹ではなく、一斉に黒い影達はシヤムへと飛びかかった。

「一斉攻撃？ ふふん、甘いね？ 甘いよ！ 飛んで火に入る夏のなんとら！ 喰らえっ？ 『ハリケーンストーム』!!」

しかしシヤムは待つてましたとばかりに瞳を輝かせ、鉄球を持ったまま身体を駒のように高速回転させる。軸は身体、遠心するのは鉄の大玉。

瞬く間に文字通り暴力の嵐となったシヤムへと、飛び掛かった夏のなんとら達がどうなるのか。もう、言うまでもなかった。

「というかね。というかね！」

（おおおお!? なんてロマン技だ?? かつけー!）

《うわあ、ダツサイ》

（えっ）

《え?》

えっ。かつこよくない? ハリケーンでストームだよ?

技名叫んで大技繰り出すとか浪漫じゃん。何いってんだコイツ、みたいな反応はよし
てくれよ凶悪さん。

「ふ、ふふふ、どうだあ、この大技?! 見たかあ、クオッチー! これがウチの実力だよ?! うえっ
ぶ」

「?! 僕はいつからサハギンタイプの魔獣になったんだい?」

「?? 目、回したのね。だからあんまりその技使うなって言ったのに」

思わぬ方向性の違いを感じている間に、シャムは思わぬ方向を指差し、ドヤっていた。
お目々をグルグルと回しながら。

お、おう。なんだこの、凄いんだか凄くないんだか微妙なパワー系少女は。あれか。
これがいわゆる脳筋か。

【G i e e e !!】

【w o l — f f f !!】

【g o b u u u !!】

「うう、フラフラすりゆう?」

「っ、まずいぞ。あいつ、囲まれてるじゃないか!」

「はあ。もう、世話が焼けるんだから」

しかも急にピンチに陥ってるし。

なんとというか、ポテンシャルは高いけど、その分、自分のポテンシャルに振り回されがちな奴なんだろう。頭を抱えるシユラを見れば、良くも悪くもシヤムがどういう娘なのかは伝わった。

とはいえ呆れてる場合じゃない。酔って顔を青くしてるシヤムの為に、俺達も急ぎ助けに向かおうとしたんだが。

それより早く、詠うようなソプラノが響いた。

『はやく、はやく、お帰りなさい』

ソプラノは背後から。

振り返れば、いつの間にか白いシルクのエプロンをかけたリヤムが、竹箒で地に陣を描きつつ呪文を唱えていた。

『貴方の家に。私の胸に』——『シルキーの献身』

「??:およ?」

その詠唱が完成した途端、シヤムの身体が一瞬ピタツと止まったと思えば。

次の瞬間。

「のわあああああ!!!」

見えない手に引つ張られるように、シヤムは宙を飛んでいた。しかもギューンって擬音が出そうなくらいに高速で。

「ぶべっ!？」

そして最前線から最後方へ。リヤムが竹箒で描いた魔法陣へと、シヤムはぼてつと落とされた。

「あたたたた。あ、ウチ助かった? 助かった! ありがとうーリヤム!」

「もう?? あんまり無茶しちや駄目だよ、姉さん」

「めんごめんご!」

(今のって?? リヤムの魔術か?)

《へえ。》黄色の中級魔術だね。あれで姉ちゃんを引き寄せたんだ。やるじゃん妹ちゃん!》

リヤムが唱えた『シルキーの献身』。

凶悪の注釈を交えれば、あの竹箒で描いた陣が触媒つてことなんだろう。

そうか、リヤムは黄色の魔術師なのか。そもそもってあの咄嗟の判断力。姉は姉で目を見張るほどの前衛能力持ちと来てる。

ふーん。ほーん。なるほど。

(?? やつべえ)

拜啓、女神様へ。どうもお久しぶりです主人公です。

新たな味方が有能過ぎて、俺の出る幕が無くなるピンチかもしれません。

・

ど
う
し
よ
!
ど
う
し
よ
?

074 リヤム・ネシャーナの実力

「姉さん。怪我が無くて良かった。でも無茶はほどほどにね」

「うーん、おつかしいなあ。あそこでバチツと決めるはずだったのになあ」

「??なるほど。リヤムの方は黄色魔術の使い手か。触媒の陣を描くスピードも早いし、やはり彼女は優秀な魔術師みたいだね」

「出番取られそうに焦ってんじやねえだろうな、クオリオ？」

「まさか。君の方こそシヤムにお株を奪われたんじゃないかい？」

「言ってやがれよ」（なぜバレたし）

《バレてないバレてない》

軽口叩いたらクオリオに核心つかれてドキツとした。

けど大丈夫こんくらいじゃ俺の存在感は消えないからセーフ。

とはいえこのまま観戦に徹する訳にもいかん。色んな意味で。

つー訳でこっからだよこっから。

「ハッ、使えンなら文句ねえ。オラ猫姉妹、魔獣共を蹴散らすぞ！援護しやがれ！」

「は、はいー！」

「あいあい??ってなんで仕切ってんだよー!」

「俺がヒイロだからだ!」

「なにをー!」

ネシャーナ姉妹の活躍に負けてられるか。

とはいえ仲間の活躍に立場危うくなつて立ち止まるなど、ヒーローの風上における。
い。

自分の価値は己の背中で示すべく、凶悪を担いで最前線へと突っ込む俺であった。



「だらアア!!」

【g o b u u u !!】

新規キャラの登場に危機感を覚える俺だったけど、武術の冴えはすこぶる良かった。

これもクオオリオとの鍛錬の賜物つてやつか。地味な特訓の成果を実感する瞬間は、
やっぱり気持ちが良いもんだ。魔獣の断末魔響いてるけど。

「ほうほうほう。思ったよりやるじゃんヒイロン!」

「あア? ヒイロンだア?」

「いい呼び名つしよ？ウチのことはシャムちーとかでいいよん？ヒロロン！」
 「ケツ。お断りだ、猫娘」

俺の猛進っぷりに感心したんだろう。鉄球をぶん回しながら、シャムがにこやかに笑いかけて来た。

仲良くはしたいけどヒロロンはなー。ヒロインみたいでちよつと。

【g e e e e i i i i i !!!】

「！」

戦闘中に考え事はご法度だ。それ見たことかとばかりに、忍び寄っていた魚人の魔獣サハギンが銚子手に襲ってくる。

『芽吹け、芽吹け、遙かへ伸びろ』——『ノームの鼻』

【g i ! ?】

だがその銚子は俺に届く前に、足元の大地から槍見たく隆起した縦長石に持ち手ごと穿たれていた。

「こいつは??リヤムの黄色魔術か」

「す、すみませんヒロロンさん！咄嗟に唱えちゃって??巻き込んだりしてないですか？」

「ああ？見ての通り無傷だ」

「そ、そですか。良かったです」

予想違わず、黄色の下級魔術で俺を助けたのはリヤムだった。

しかし巻き込んだかも、と思つてペコペコと頭を下げる辺り、もしかしてこういう集団戦は経験がないかも知れない。

『叩け、叩け、雷鼓の芯。咲けや咲けよや、緑の雷花』——『ハオカーの招雷』！

「あア??ツ、どわアア!!」

【W o l f f ! ? !】

遠慮しがちなリヤムについて思いを馳せていれば、どこからか響いたフィンガースナップと共に、緑色の稲妻が落ちた。俺ではなく、狼の魔獣に。

無論、自然に起きたものじゃない。空は快晴。つまり今の晴天の霹靂も魔術によるものだって事になる。

そして緑色といえ、犯人は言うまでもなかった。

「そう憂うことはないよ。アイツは馬鹿みたいに頑丈な奴だから、巻き添えくらつても平気さ」

「い、いやいや、さすがにそれは??」

「テメエ、クオリオ！声ぐらいかけやがれ！」

「闘いの最中によそ見をする君が悪い」

よそ見は確かにそうだけだよ。リヤムが思い切りよく戦えるようになって気遣いだろ

うけど、それなら俺にも優しくせんかい。

さらつと新魔術お披露目してからに。くそう。

「むう、緑の中級魔術。クオっちもなかなかやるじゃん?」

「ハッ。口だけ達者じゃ俺の師匠は務まらねえよ」

「なにをー!言つとくけど、ウチらの本当の実力はもつと凄いんだから!」

「??んだと?」

で、また予想外のところに火がついてるし。

「リヤムー!アレやろうよ、アレ!」

「え!で、でも姉さん。みんなが?」

「いーからいーから!」

なんだ。いかにもとっておきをやりませよつて風采だけど。

姉の要求に渋るリヤムだったけど、諦めたような溜め息を挟むと、意を決したようにサハギン達が群れる川の側へと歩み寄る。

『凍れ、凍れ、白銀に。ゆるれり凍れ、刹那に留まれ』

「なっ!?!その呪文は?!」

(??、??え?)

《???

へえ》

触媒なのだろう。詠唱すると同時に取り出した青い色紙に、リヤムがそつと口付ける。

あれがどういう魔術なのかは知らない。リヤムの詠唱が紡ぎ終わった時、何が起こるのかも俺には分からない。

けれど多分、俺とクオリオの驚嘆は同じだった。

何故なら、リヤムが掻き集めている魔素の色が??【黄】ではなく【青】だったからだ。

「行くよ、姉さん——『ウエンデイゴの囁き』」

そして、リヤムが青色紙を川に浸すと??触れた端から瞬く間に、川の水面の一部が凍り付き。

「任せーい!!とりやああああ!!」

妹が作り出した刹那の氷獄へと、姉は大きく跳躍しながら。

「アイシクル、ブレエエエイクウウ!!」

足が凍って身動きの取れない魔獣達へと、文字通りの鉄槌を下したのだった。

075 魔法のランプと精霊モクモン

「まずは満足、といったところか」

結論だけ言えば、レギンレイヴの初任務は圧倒的勝利でもって達成出来た。

「しかし、やはり連携面はまだまだであるな。特にメリファーとミズガルズ。ミズガルズは後方のカバー意識が足りておらず、メリファーは縦横無尽に動き過ぎだ。カバーする意識がなければ後方が伏兵に襲われた際に対処が遅れ、矢鱈に動けば後衛に攻撃魔術を躊躇らわせる要因となる。注意せよ」

新顔のネシャーナ姉妹の活躍も大きかったし、負けじと俺やクオリオも張り切ってる内に、気付けば魔獣は掃討し終わっていたぐらいだ。

「良いな。メリファー。ミズガルズ」

「チツ??あいよ」

「???」

けれど今回の任務で一番スコアを叩き出したのは、俺達でも姉妹でもない。鬼神の如き勢いで魔獣達を葬り続けていた、アツシュ・ヴァルキュリアだった。

「では本日はこれにて解散とする。各々、英気を養うように」

『ハッ!』



「うんうん、やつぱりシユラ姉はすごいなあ。ウチもリヤムと頑張ったんだけど、シユラ姉には全然敵わないや」

「??経験の差もあるわよ。アンタがそこを補えれば、全然なんて事はないと思うけど」
「そーかなあー」

現地集合、現地解散。無駄のない敏腕上司感溢れる隊長様の指示で、現在帰路についてる俺達である。

ドンパチやった後には思えない美少女師弟の背を追いながら、俺は少し考え込んでいた。

「リヤム。少しいいかい?」

「は、はい。なんでしよう」

「さっきのことだけど。君が黄色のみならず、青の魔術を使っていたのはどういうことだろう。四原色の適正属性は、一人につき一色までのはずなんだけど」

「う」

どうやら俺の考え事はクオリオと同じだったみたいだ。

そう、四原色は一人一色までが基本。いかに優秀な魔術師であっても、特異な才能でもない限り他属性に手を出すことは出来ないらしい。

俺もそう教わってたから、流石にひっかかっていた。

「う。そ、そうです。おかしい、ですよね？」

「おかしい、とまでは言わないけどもだね??」

「でも、私にも分からないです。最初から二色使えましたし、どっちかに偏ってるって事もなくて」

「??」

やっぱ適正属性が二色あるって事で間違いないのか。

アンブロシアの林檎齧ったら断面どうなんだろう。黄色と青だから緑色？それとも別々なのかねえ。

なんて悠長な思考も、疑いの眼差しを向けるクオリオを見て引っ込んだ。科学者氣質ってやつだろうか。こいつは疑問があれば、すぐに知りたい調べたいってなりがちだ。

そんな視線に晒されてか、リヤムがフードを深く被る。クオリオに悪気はないんだろうけど、少し良くないな。

「おいおい嫉妬してんのかア、クオリオくんよ」

「なっ。どうしてそうなるんだよ。普通に気になったから聞いているだけで?」

「ンならその目は止めとけ。ガキが恐がってんぞ」

「??あつ。す、すまない、つい!」

「あ、いえ、慣れてますから」

すんなり謝る辺り、無意識の癖だったらしい。けど、慣れてるか。やっぱり特異な才能ってやつは、周りから変な目で見られるもんなのかね。

才能からつきしな俺からすれば羨ましいけど、人それぞれか。

ならばここはいつちよ、重くなつた空気を払拭するという主人公の才能を發揮してみようか!

「だが驚いたぜ。まさか川を凍らせるなんざな。ちんまい癖にテメエもやるじゃねえか」

「ふあ!あ、あくまで一部ですし川だから青の魔素が豊富でだからあのその」

(うーん。なにもそこまで謙遜しなくていいのにな)

《謙遜ってより、そんな風にワシワシ撫でてるからだよね?》

(??あ。これひよつとしてセクハラ案件か?!)

《マスターったら幼気な少女たぶらかしてー、悪いんだあー》

いやいや、悪いってさあ。凶悪も感じるよ、この途端に和らいだ空気感を。仲間同士のギクシヤクもフオー出来てこそ主人公。これぞ俺の才能よ。

ほらクオリオ、お前も俺に感謝の一言くらい??あれ。

なんかクオリオに白い目向けられてんだけど。ついでに振り返ったシユラにまで。げ、解せぬ。でもなんかいたたまれないし、ここは話の流れを変えよう。

「そういうテメエ、あのエプロンと箒はどうしたよ」

「えっ?」

「ああ、『シルキーの献身』の触媒か。そういえばいつのまにか着替えたみたいだけど?? エプロンはともかく、箒はどこにしまったんだ?」

「う、それは、そのう??」

（え。なにこの反応。もしかして地雷だった?!）

《わー。マスター泣かせたー。やーい極悪チンピラー!!》

（泣かせてないから!すこーし涙目になっただけだから!）

でもなんでだ。リヤムはどうしてこんなにお口お口してんだろう。聞いちゃまずい事だったとは思えないんだけど。

つい首を傾げてみると、リヤムは考え込むように黙った。その穏やかじゃない様子に、俺達も押し黙るしかない。

《わあ》

「なにつつ?!」

ええ。なにこの、なに。

紫色の煙が喋ったし。

しかもこの煙、なんか手足つぽいのあるんだけど。

細く黒い棒が腕で、黒棒の先にある白い丸が掌みたいな。それが四つ、手足つぽく生えてるし。なんだこれ。

その内ひとつがフリフリと揺れてる。あ、やつぱ手だよこれ。挨拶してるよこれ。なんだこれ。

「ええと、紹介しますね。わたしの友達の??モクモンです」

☒モクモック!☒

ペコツと頭を下げるリヤムに倣^{なら}って、片手をピシツとやる紫のモクモク。

俺は、思った。

ファンタジーってすげえ。

076 白き凶悪

☒モクモツ！☒

「も、モクモ??」

とりあえず挨拶は基本。身に染みた礼儀が反射的に片手を挙げさせる。けど頭はパニクっていた。

モクモンって。煙じゃん。魔法のランプって魔神が出てくるのがお決まりじゃないの。煙なんですが。

「モクモン、箒を出して」

☒モクー！☒

「！」

困惑する俺をよそに、リヤムにお願いされたモクモンがランプの蓋に手を突っ込む。そしてポンツと軽快に音を立てて、掴み取ったのは、あの時の竹箒だった。

「ランプから取り出しやがった??」

「あ、はい。このランプはモクモンの住処なんですけど、中が広いらしくて。色んなものを仕舞っておけるから便利なんです」

「た、確かに、魔術の種類同様、触媒も多岐に渡る。いちいち持ち歩くのも不便なのは分かるけど?」

白エプロンもそつから収納したって事か。つまり俺の当初の疑問も晴れた訳である。でもそれ以上の摩訶不思議が出てくるんですがそれは。

「ひよつとして、このモクモンというのは『白魔獣』なのか?」

「??はい、そうです」

「ああ? 『白魔獣』だ?」

「??うん。まさかと思うが、知らないなんてことは??」

「そのまさかに決まってるんだろ」

「???胸を張れることじゃないよ、ヒイロ」

知ってるのか、クオリオ。といたいの知ってて当然みたいな反応は辛い。でもしようがないだろ、ここんと俺の知識は魔術やバッドステータス理解に割かれてたんだから。

俺の脳内メモリ容量の低さを舐めるなよ。

うん。やっぱ辛い。自分の馬鹿さが一層辛い。

「——ねえ」

「ああ???」

けど。

肩越しに囁かれたシユラの低い呟きが、自虐してる場合じゃないと肌を粟立たせた。

「しゅ、シユラ姉??？」

「魔獣じゃない、ソイツ。なんで魔獣が此処に居るのよ」

「おいシユラ待て、待ちやがれ！」

「??ヒイロ。そこ、どいてよ」

「なら剣の柄から手エ離せ。どくならそれからだ」

「ちよ、ちよつと待てシユラ！ヒイロも！急にどうしたんだっ！」

「え、あ、あの、シユラさん??？」

☒モ、モクモク???

まずい。そう思って咄嗟にシユラの前に立ち塞がれば、案の定だった。シユラの紅い瞳が、憎々しげにモクモンへと向けられている。魔獣を睨み付ける時と、同じように。

モクモンも姉妹も、クオリオも突然のシユラの行動に戸惑っていた。けどそれも仕方ない。多分シユラが魔獣を憎んでるって事を知ってるのは、この中じゃ俺しかいないだ。

「落ち着きやがれ」

「アタシは落ち着いてるわ」

「ならどうするつもりだった」

「??決まつてるじゃない。魔獣なら、斬るだけよ」

「ソイツは白魔獣ってんだろ？良く分かんねえが、テメエの憎む魔獣とは違うんじゃないのか」

「??ッ！」

白魔獣どころか、そもそも俺は魔獣ってものが一体なんなのかも良く分かってない。精々ヒトを襲う、人類の天敵って事くらいだ。

けどリヤムに庇われて震えてるモクモンってのが、いわゆる俺が戦ってきた魔獣とは同じには見えない。クオリオだって警戒もしてなかったし、なにかを害する存在じゃないんだらう。

「——ッ。関係ないわよそんなの！魔獣は魔獣、白も黒も無ければ、つける気もないっ！魔獣って名前の灰色なら、討たなきゃいけないのよっ、アタシは！」

「テメエ??」

「そうじゃなきや、アタシは??だから、どいてよおっ！」

しかしシユラは違った。

もはや悲鳴に近い絶叫をあげながら、悲壮感に顔を崩して、剣を振る。

軌道は腕にめがけて。がむしやらながら、そこに殺意もなければ普段の冴えもない。

ただの威嚇に過ぎない事は、俺にでも察せた。

「??チイツ、凶悪ツ!!!」

《んふ。はい、モードオフと》

だからこそ黙って斬られちやいけない。確実にアイツの疵きずになっちまう。

呼び掛けた名に応えて指輪から鉄パイプへと姿を変えた凶悪で、俺はシユラの剣を受
け止めた。

でも、それが失敗だったと知るには、俺はあまりに無知だった。

「———アンタ、いまの。その、武器。まさかっ」

「っ。やっぱりか」

「??あア?これがどうかしたのかよ」

シユラの動きは止まった。

けれどその紅い目は、俺の手の凶悪を前に、グワンと揺れて。

まるで手痛い裏切りを貰ったかの様なシユラの反応に、クオリオの息を飲む台詞さえ
妙に遠く思えて。

「??なんでよ。なんでアンタまで??」

『白魔獣』を持つてるのよ??ッ!!」

「????は?」
「????は?」
「????は?」

《——んふ。んふふつ。あはははっ！

あーあ、バレちゃったねー??マ・ス・タ・ア!!》

シユラの言葉に真っ白になった俺の思考を、凶悪の愉しげな声が埋め尽くした。

077 魔獣と加欠、白と黒

「そう、か。さっきの鬨いぶりからして感じ取れてはいたけど、シユラは魔獣を強く憎んでいたんだね」

「??あア」

歯痒い思いつてのはまさにこのことか。

あの後、シユラは去ってしまった。制止する声にも耳を貸さずに。けどその目には憎しみも拒絶も浮かんじやいなかった。

あいつの去り際。まるで突き放されたかの様な怯えた横顔が、目に焼き付いて離れない。

「その、ごめんなさい。私が余計なことをしなければ」

☒モクウ??☒

「なんでテメエらが謝んだよ。聞いたのは俺だろ」

責任を感じてるのか、しよぼくれる一人と一煙。当然リヤム達に責任なんて無い。シユラを心配して追いかけていったシャムにも。

「けど迂闊だったな。黒魔術について教える時に、確認しておくべきだった。白魔獣と

いう存在は非常に希少とはいえ充分認知されているし、知っているものだと決めつけていた。僕としたことが?？」

「テメエのミスじゃねえ。どこかしらから湧いて来る天敵、程度にしか思ってた俺のミスだ」

結局は、俺のやらかしなんだよなあ。

単純に白魔獣って存在を知らなかったのもそうだし、凶悪についても主人公強化イベントの恩恵って所で思考を止めてたのが良くない。でも、まさかなあ。

(まさか凶悪が白魔獣ってやつとはなあ??)

《いやーびっくりだよねー》

(他人事みたいに言うなよ。なんで教えてくれなかったし)

《えー。だって、ミステリアスさは良い女の子の秘訣でしょ?》

(こんにやろうめ??)

なーにが良い女の子の秘訣か。鉄パイプの癖に。

こいつめ、絶対確信犯で黙ってたろ。

「??ん。それなら、改めて教えておくべきかな。白魔獣と、魔獣の生誕の仕組みについて
も」

「!」

シユラは放っておけない。しかしなにも分かってない俺が、今のまま言葉を交わしたって響きはしないだろう。

まずは知ることが先だ。そういう意味でも、クオリオの申し出は非常にありがたかった。

「大多数の認知上では、白魔獣とは人間に害意を持たない”魔獣”と定義されてる」
「害意？」

「ああ。例としてあげるなら、かつてこの国の初代皇帝を導いたと云われてる、四枚羽根鴉の『ギムニフ』。国旗のモチーフにもなつてように、人に利益を齎す魔獣??」

「それが『白魔獣』だったのか」

魔獣にも色んな種族が居るのは知つてたけど、そもそも大元の分類が二つあったとは。今は指輪モードの凶悪をじいっと見つめる。

(??利益ねえ)

《んー? なにかな、その疑つてる感じい。ボクはちゃんどマスターに協力してるよねえ?》

(でもお前さん、害意チラチラ見切れてんじやん?)

《あは。そりゃあ、ただ人のお役に立ちますうなんてボクの柄じゃない》

と、いつもの凶悪節である。こいつには助けられているけども、なにかと悪い方へと

唆^そそうとするし。本当に白魔獣なのかさえ疑わしいもんだ。

「そして、白魔獣は特殊能力を持つている事が多い。例えばリヤムのモクモンならば魔法のランプへの収納。君のその鉄塊はさしずめ、魔術の増幅といった所じゃないか？」

「?!良く分かったな」

「誰が君の魔術を指南してると思っている。いつぞやにシユラを追って旧校舎に向かう時。ヘルス^{俊敏性強化}コルを行使した君の速度は、明らかに普段の君では出し得ないものだったからな」

「ハッ。あん時から見抜いてやがったか」

うへえ。まさかクオリオにバレていたとは。いやよく考えれば当たり前か。俺の白魔術は、凶悪のおかげで滅茶苦茶効果上がってんだもんな。バレない方がおかしい。

てことは、クオリオは気付いた上で静観してたつて事だろう。ひよつとしたら話してくれるの待ちだったのかも知れない。

少し咎めるような眼鏡越しの瞳が、俺の罪悪感をグサグサと刺していた。

「さて。ここ^{ここ}まで一般的な白魔獣の定義を説明した訳だけど?!正直、”この定義は疑うべき”だと僕は思う」

「ああ?どういいうことだそりゃ」

「言葉の通りさ。何故なら過去に、白魔獣と見なされていたものが人に害を為したケ-

スもいくつか報告されているんだ」

「マジかよ」

「はい、本当ですよ。私の居たラーズグリーズの部隊も、そういった白魔獣を確保し、害を発生させないように封印して保管したりしてますし」

「うん。だから僕は、”害する時も、利する時もある存在”という認識が正しいと思う。人類の味方などと安易に捉えるのは危険だ」

「??なるほどな」

《あつ、なにさ！すんごく納得した風に！》

(だってしつくりきたんだもの。便利だけど厄介でもある感じがまさにじゃん)

《むー。違うとは言わないけど、面倒くさいヤツみたいって言われてる気がして嫌！》

あんだだけ俺の脳内で食わせ者ムーブしといて、よく言うよ全く。でもクオリオの忠告は、凶悪の所持者である身としては腑に落ちるものだった。

強い力を行使するには、相応の代償が必要、みたいな感じだし。

「以上を踏まえた上で、魔獣の生誕について君に説明する訳だけど??どうしたものかな」
「あア?んだよ、奥歯に衣着せた言い方しやがって。らしくねえ」

「普段はデリカシーないみたいに言うな!??」
「ったく。先に言っておくぞ。今から君に話すのは、近年になって持ち上がった、ある仮説に過ぎない。僕は支持しているけど、あく

まで仮説だということを念頭に置いていてくれ」

「お、おう」

よつぽどとんでもない内容なのか、念を押すクオリオの迫力に頷かざるを得ない。というかりやムまでこつそりコクコク頷いてるし。

教鞭振るうモードのクオリオは、少し雰囲気変わるよなあ。

「君は魔獣が死ぬ際に、身体が”黒い煙”と化す事に気付いているかい？」

「??そーいやそーうだな。あんま気にした事なかったが」

「実は、あれこそが魔獣が発生する元凶なんじゃないかって言われてるんだ。現にあの煙には「加欠かげ」という呼称がついているからね」

「カゲ、ねエ??」

魔獣を倒した時に出る黒い煙。あれに名前までついてたのか。

にしても加欠かげと来たか。どうも穏やかじゃない響きだな、程度に感じた俺だったが。「では、この加欠の正体とは何なのか。魔獣を構成する魔素。魔獣の断末魔。神に裁かれた証。討つたものへの呪い。」

様々な説が存在するけれど、僕が支持する仮説では??こう云われている」
その感触は正しく。

けれども想像以上に不穏だった。

「加欠とは魔獣の生まれる源であり。
加欠とは即ち——”未練”だ」

078 在りし日の影、成れの果て

「未練、だど??」

「ああ」

重々しく告げられた内容に、体温が下がる自覚があった。

「未練とは、ようは意志を持つ生き物ならば持ち得て自然な感情だ。当然色んな種類がある。その中でも憎悪、怨讐、憤懣ふんまん、犯意。強く激しい未練が黒き加欠を。心残りや寂寞、憂鬱や憂慮みたいな比較的穏やかな未練が、白き加欠となると言われているんだ」

「黒き加欠と白き加欠、ですか」

「加欠は魔獣が生まれる基つつたよな。そりやあつまり??」

「ああ。魔獣とは、加欠が生物や物質に宿ることによって産まれる生命体、というのが僕の支持する仮説の結論だ。そういう意味じゃ、魔獣とは人や生物が残した未練の、成れの果てなのかもしれない」

魔獣。人類の天敵。今までそうとしか知らなかったモノの正体が未練。仮説だとクオリオはいうけれど、俺の中でしっくりと来るものがあった。

なぜなら、あの歌う魔獣が思い浮かんだからだ。

あいつがどうして子供を狙ったのか、幼子の骸骨を撫でていたのか。結局分からず終いだっただけ、あれこそが基となった未練なのかもしれない。

(未練??か。凶悪にも、そういうのがあるってことだよな)

《んー、さあどうでしょう。ボクはただボクのやりたいことやってるだけだし、未練だのなんだのは分かんないや。だから安っぽい同情とか止めてよね?》

(そんなんじゃない。ただ??)

《ただ?》

(“似たようなもんって思ってた。俺も、お前も”)

《??ふーん。よくわかんないけど、マスターみたいなお馬鹿さんと一緒くたはちよつとねー》

(??ひどい)

《当然の主張です》

同情とかじゃない。けど共感があった。

俺が死んだのは女神様のミスだった訳だけど、もしそうじゃなかったら。俺はきつと強い未練を抱いていただろう。

その成れの果てが、白なのか黒なのか。

(俺だったら??)

ふと見上げる青い空。

少ないながらも浮かぶ雲に、薄暗いものが混ざっていた。

「——あの、ヒロロさん」

けど、そんな俺の袖を引いたのはリヤムだった。

白い肌に映える桜色の前髪が、緩い風に吹かれて揺れる。

「シユラさんのところに行つてあげてください」

「俺が、か」

「はい。ヒロロさんじゃなきや駄目だと思えます」

「テメエのツレに因縁つけられたつてのに、あいつに氣遣うのか?」

「ほんとは、ちよつと恐かったです。でも、シユラさん??怒っていたというより、傷付いてたような気がして。ですから、その??ヒロロさんが行つてあげた方がいいんじゃないかな」

恐る恐ると。でも意志はしっかりと瞳に染めて。

あんな風にシユラに詰められても気を配る辺り、見下ろすほどの背の少女は、俺が思う以上に大人だつてことなんだろう。

それに、俺が行かなきやいけないつても分かる。

去り際のアイツの表情。ああさせてしまったのが誰なのか、分からないほど馬鹿じゃ

ないさ。

「そうかよ。まア、テメエに言われるまでもねえさ」

「??はいっ。シユラさんは今、欧都の西外れの高台に居るそうですから」

「あア?なんでテメエがシユラの場所を」

「あ??か、勘です!わたし、すんごく勘がいいんです!はい!」

「お、おう」

「??ふむ。こういうところは姉譲りなのかな」

「へ?」

☒モク、モク☒

一見繊細そうに見えて、すごく強引な力業で誤魔化そうとする辺り姉妹だよな。クオリオも同意らしい。モクモンに至ってはうんうんって頷いてるし。

けどまあ、細かいことはいいか。

手間が省けたんなら何より。今はそれでいい。

馬鹿な俺はいつだって、他のことに気を割く余裕なんてないから。ただ今は、アイツの顔を思い浮かべて。

「跳ねっ返りの尻、叩いてくる。ザクツと斬られたら笑ってくれや」

「大丈夫ですつ。ヒイロさんは無敵ですから!」

「葉なら用意しといてやるさ。すごく染みるタイプのね」

「おうクオリオは後で覚えてやがれな」

少しずれた激励を受けたことだし、行くとしようか。

へそ曲げちまった、俺のライバルの所にさ。



欧都アスガルダムの外れの高台は、平地に比べて風が強い。

渴いた風が髪に度々絡むが、シユラはなされるがまだつた。

どうしてかそんな気力が湧かず、抜け殻のように高台の椅子に座って、街並みを見下

ろし続けていた。

「?!」

シユラにとって、欧都は好きな場所ではなかった。むしろ嫌いな場所と言えたのかも

知れない。

ある男に敗北したことを皮切りに始まった騎士を目指す日々。

けれど日が沈み、また昇るたびに騎士というものに失望を覚えてばかりだった。それ

でも此処に残り続けたのは、彼女の小さなプライドが自棄を起こしていたからかもしれない。

「??」

けれどもここ最近で変化があった。褪せて見えた灰色の街並みに、鮮やかさを感じていた。

朝の月の綺麗さに気づけるくらいにくたびれた余裕が、いつの間にかシユラにはあったのだ。立ち止まる事を赦されない人生だったはずなのに。

有害な優しさが、修羅なる少女の世界を気付いた時には染めていて。

「??なんでこんなに、辛いのよ」

だから、あんな思いさえ初めてだった。

ヒイロの手に握られたものがなんであるかを理解した途端に、形容しきれない感情が湧き上がって。

気付いた時には逃げ出していた。

耳を塞ぐように。目を閉じるように。

心配してくれているシャムの手すら、強く払った。

ついてくるなど手酷く拒絶し、置いていった。

今は誰にも会いたくなかった。この身を苛む感情に、火がついてしまうのが何よりも

恐かったから。

「?!あの指輪。きつと、あの教会で拾ったのよね」

思い出すのは、彼に救われたあの村での出来事。満身創痍となったヒイ口の指に収まっていた、見覚えのない指輪。恐らくあの指輪が白魔獣であり、今やヒイ口の矛となつているのだとしたら。

あの力があつたからこそ、バンシーとの闘いを切り抜けられたのだとしたら。

「魔獣は、魔獣。それでいい。いいはずなのに??」

シユラにとって魔獣は魔獣。仇は仇だ。人に利するならば白なんて判定を、彼女は持ち合わせていない。

だからこそ自分を救つたのもまた、白魔獣の力であることに嫌悪感を覚えてもいた。けれどそれ以上に思うのだ。

アタシを救つたのは、アイツであつてほしい。

背負つてくれたのも。導いてくれるのも。アタシの世界を変えてくれたのも。

アイツが良い。アイツじゃなきゃ、イヤ。

でも拒んだ。だから拒んだ。逃げて、逃げて。

今は独りで、居たくもないのに此処に居る。

辛かった。あんな風に拒絶して、この先をどうしていいかも分からない。また塞ぎ込

んだ世界に戻らなきや駄目なのかと思うと、肌が寒くて心が泣く。

エシユラリーゼ・ミズガルズ。

光を知った今だからこそ、背負うべき修羅の定めに怯えていた。膝を抱えて顔を埋める子供のように、シユラは閉じ籠もるしかなかった。

けれど。

「ハッ、黄昏れるにはまだ陽が昇ったまんまだろうがよ」

「??え」

有害な優しさは、閉じた世界であろうとも。

隙間を見つけて滑り込み、臆病者を齧るのだ。

「よう。探したぜ」

079 死が二人を別つまで

降ってきた声に、シユラは振り向く事はしなかった。

風に好き放題乱された髪を手で抑えながら、少しでも背を縮こめる。そこに彼女の美貌に基づいた色つぼさはなく、叱られる事を怖がる子供のような無垢さがあった。

「なんで来たのよ。今、アンタの顔なんて見たくないの」

「知るか。なんで俺がテメエのわがままなんぞ聞いてやらなきゃならねえんだ」

「こういう時くらい放っておいてよ」

「二度言つてやる。テメエのわがままなんぞ知るか」

どこまでも勝手なヤツだ。

目を合わせようとしてもしない女に、了解さえ得ないで隣にのしつと座る。走つて来たのだろう。少しでも香る汗の匂いに、シユラはキュッと片膝を抱えた。

「魔獣が憎いか」

「っ。そう見える?」

「そうにしか見えねえな」

「だったらアンタの目は正常よ。そうね、憎いなんてもんじやないわ。アタシは滅ぼしたいのよ。魔獣と名の付くものは全て」

「全て、か」

「ええ」

クツションを挟まない本題の切り出し方は、本音しか許されない。だからシユラも臆さずに切り出せた。

魔獣は全て滅ぼしたい。黒も白もなく、全部。彼の指に収まった、彼の力でさえ。

重々しい誓い。けど音にすれば軽かった。軽はずみに過ぎた。

シユラは、気づかれないように後悔をする。

今の本音は敵対の意思とも取られかねない。

大きな亀裂が生まれるかもしれない。

自分だけの灰色の世界の足音が聞こえて、たまらずに片膝を強く抱き締めた。

「魔獣つてのは、人間の未練が元になってるんだろ？」

「?!」

「知りはしなかったが、心当たりはあったってところか。まあ、俺もさつきクオリオに教えて貰った仮説だがな」

魔獣は、ヒトの未練から生まれる。

多くの魔獣を葬ってきたシユラとて知らなかった話。けども考えなかった訳ではなかった。

魔獣狩りとして生きていた頃、大量発生する地にはなにかと災害や紛争の痕跡があった。多くの人の死に、呼応するように奴らはやって来ている。

そんな魔獣の在り方に嫌悪感を覚えつつも、引つ掛かつてはいたのだ。

「っ。だからなんだっていうのよ。魔獣を討つことは、人を討つことと変わらないって言いたいわけ?!」

「馬鹿言えよ。魔獣殺しは人殺しなんて理屈は、テメエ自身の考え方次第だろうが。俺に糾弾するつもりもねえし、資格もねえよ」

「だったら、なにが言いたいのよ!」

復讐をやめろと諭す訳でもない。

魔獣は人の想念が元だから殺すなど、安易な正義感を振りかざす訳でもない。

ヒイ口の意図が分からなくて、シユラは顔をあげた。

泣き出しそうな幼子の様な目で、はじめて隣を見つめた。

するとヒイ口の薄い翡翠色の瞳が、優しくスツと細くなり。

「俺が死んだら、並外れた未練が残る」

「??え」

静かに告げた。

己が通りかねない末路を。

「俺は夢を掴み取ると誓った。この国一番の騎士になると。俺自身に。テメエにも言つたな。そんな俺が道半ばで折れるような事があつたなら、まず間違ひなく魔獣になるだろうよ」

「??それは」

「しかもだ。並じゃねえ。なんせ俺が基だ。それこそ世界がプチツと滅びかねねーほどに、やべえ魔獣になんのは決定事項だろうよ」

もし仮に未練の大ききで、魔獣の強さが決まるなら。

きっとヒイロは未曾有の怪物となるだろう。

彼の想念をシユラは知っている。見ている。感じている。浴びている。

「だから。いいか、アツシユ・ヴァルキュリア。

——その時は、テメエが俺を斬れ」

だからこそ、彼の言う末路は想像に難くなくて。

「そんなかわり、テメエの人生を他の小物なんぞに捧げるような生き方すんな。あの煙も、この凶悪も、俺に比べりゃ目くじら立てるまでもねえだろ」

「????」

「テメエは俺だけ見てりや良いんだよ」
もしそうなら。

唯我独尊たる怪物相手じゃ生半可ではいられない。

きつと他の一切に気を取られていては、敵かなわないのだ。

託された介錯の役目は、ヒイロだけを見なくては叶さなわないのだ。

シユラにとってはあまりに残酷で、優しい——凶悪に過ぎる、白い脅迫。
けれど。

「???、
——は」

正義などよりも、よほど身勝手な押し付けに。

シユラは疲れたように口角を上げた。

「馬鹿、じゃないの」

ああ。そうだった。

忘れてはいない。でも改めて突き付けられた。

こいつはこういうやつなんだって。

「アンタを斬れって。なにそれ。死んだ後までアタシに面倒見させる気？　ほんつと、

最低。馬鹿」

「うるせえ。死んだ後までってなんだ。テメエにんな世話かけた覚えはねえぞ」

「かけてるわよ。ぐちゃぐちゃよ。アタシの人生、また狂ってきてんのよ??アンタのせいだ」

「ああ?」

かつて閉じ籠もった修羅なる世界を、知ったことかと壊すのがヒロ・メリファーという男だった。

こういう風に。自分だけの理屈を押し通して、自分の命を差し出して、納得しろと言ってくる。

「簡単に復讐を捨てられる訳ないじゃない」

「捨てるなんざ言ってるねえ。俺だけ見てろって言ってるんだ」

「アンタは魔獣じゃなくて人間でしょう」

「今は、っただけだ。未来は分からねえだろ」

「??どうなるかも分からない未来の為に、今の憎しみ全部注ぎってどうの?」

「おうよ。そうでもしなきゃ、魔獣と化した俺様には勝てねえぜ?それとも逃げるか、

アツシュ・ヴァルキュリア!」

「???はあ。ほんつと意味分からない。滅茶苦茶よ。アンタはもう、いつだって、荒唐無稽

で自分勝手で?」

憎しみを簡単に捨てられるはずもない。

捨てろとも、彼は言っていない。

ただ自分を見ていろと、無理矢理な結論だけに押し込もうとする。

「???もう、分かったから。アンタだけ、見てればいいんでしょ?」

あまりに強引で、あまりに身勝手に。

一方的で、損にしかならない誓いを求める理不尽な男。

でも、本音を言うならば。

それを望んでいた自分が居た。

奥にまで届くくらいの彼の言葉を、卑しくも期待していたのかも知れない。

だから。

シユラはヒイロの提案を、断らなかつた。

「——誓うわ」

見上げながら、少女は告げる。

大切な人達を譲つた空。

昇る黒煙はそこになく、ただ澄み渡るのは群青ばかり。

「アンタが堕ちたら、アタシが斬る。」

でもね、ヒイロ。もしそうなつたら??一生怨むから」

捧げたのは、いつかの誓いと似て非なるもの。

いずれ、死が二人を別つまで。

けれど、どうか果たされないでと。

無垢に願う灰色が、儂げに微笑んだ。



「うーん、内容は全然聞こえないけど、成功したっぽいね。まさかあのシユラ姉を励ませるなんて??やるじゃんヒロシ！」

「ば、馬鹿。あまり大きな声を出すなよ、聞こえたらどうするっ」

「聞こえたら?うーん、多分三枚に下ろされるんじゃないかな?シユラ姉、怒るとちよー怖いし」

「姉さん、ニコニコしながら言うことじゃないと思う??」

「全くだ」

「ん。ともかく!これでレギンレイヴ即解散ってならなくて済んだね!めでたしめでたしっ」

「気楽だな。僕はこれから気苦労しそうでならないよ」

「つさけないなあクオッチは。だから眼鏡なんだよ」

「眼鏡関係ないだろ！」

「えー？関係ない？いや関係ある！」

「断言するなっ！君という奴は??いいだろう、演習場に来い。いい加減その減らず口を黙らせてやる！」

「ほほーん、ヒョロ眼鏡くんがウチを相手によく言った！ぼこぼこのシヤムシヤムにしてやんよ！」

「ちよ、ちよつと、どうしてこつちで喧嘩してるんですか??つて、ああ??行っちゃった??はあ」

「でも、そつか??ヒイロさんはやつぱり、誰かの為に頑張れるひとなんですな」

「??もつと、お話とか、してみたいなあ??」

080 リヤム、強引に迫られる

前途多難っぽい感じだったけど、とりあえずシユラの説得には成功したと言っても良かった。

あの後、若干複雑そうながらもリヤムに詫びてたし。リヤムもシヤムもなんらかの事情があるんだと察して、シユラの謝罪を受け入れてたし。

うん、正直納得してくれるかは賭けだったけど、流星は主人公の説得だ。言葉に押し切れるだけのパワーがある。万事解決万々歳ってね。

それからレギンレイヴで何度か任務をこなしたけど、禍根も残ってないみたいだし。連携の粗さは度々シドウ隊長に指摘されてるけども。

「295??296?!」

そんな忙しい日々の中で、ようやくと貰えた休暇が今日である。

騎士職も労働。お役目仕事。ようは人間だ、休みがなくつちや務まらない。

趣味に没頭するなり外に出るなり遊ぶなり、気分転換は大事だろう。

「300?!」

つまりこうして寮近くの空き地に寝転がってる俺もまた、休日を満喫している訳であ

る。

うーん、やはり筋トレは良いね。いつもの量を更に増やして内容もよりハードに、メニューをこなせた充実感は素晴らしいものがある。

(休日の筋トレ、充実するぜい??)

《ボク、これっぽっちも共感出来ないや。休日もなにもいつもと変わらないじゃん》

(分かってないなあ凶悪さんや。いつもは普通の腕立て伏せ二百。今日は回数三百に、プラスチック腕立て伏せて内容もバージョンアップしててだな)

《あーはいはい。マスターの脳味噌が筋肉つてのはよく分かったつてば》

やはり鉄パイプには伝わらないのか。いつもの自分を越えたつて実感が、筋肉の躍動から得られる気持ち良さ。いいもんなんだけどな。

なんて風にくつたりと疲労感を味わっていれば、フツと顔に影が差した。

「あ、これお水です」

「おう悪イな」

「いえ」

そうそう。トレーニング後に冷たい水でぐいっとやるのも乙なのよ??? って。なにしろつと最初から居ました、みたいな顔して混ざってんのリヤム。

「ンア?なんでテメエが?」

「その、がんばってるなあと思ひまして。タオルもどうぞです。寮の管理人さんからお借りしたのですが」

「ほう。気が利く??いや待て。そうじゃねえ。どうして此処に居る」

仮にも男性騎士寮の庭なんですけど。まさかあれか、実は恋人が居るので会いに来ました的なやつか。休日なんでこれからデートを、的なやつか!

「この間クオリオさんから借りた本を、返そうと思ひまして。不在だったんですけど。そこで頑張ってるヒロさんをみかけて、つい。ご迷惑だったでしょうか?」

「んなことで迷惑がる訳ねえだろ」

違つた。普通に知り合いに用だつた。クオリオは本買ひに出掛けてるし、たまたま行き違つたついでに、見かけた俺に差し入れをくれたと。

おいめつちやええ子やんけ。天使か。

「つうか、姉の方はいないのな。双子つつつても、流星にいつも一緒つて訳じゃあねえか」

「あ、はい。姉さんならシユラさんと一緒に服と小物を買ひに行つてますよ。なんでも中央通りに素敵なお店が開いたらしくて」

「服ねえ。テメエも一緒に行きや良かったろうに」

「うーん。私、あまり服とかに興味がなくなつて。可愛いものだど値段もかかりますし、そ

れに私みたいなのが着たってあんまり??ですし」

「あ? ヒヨロいはヒヨロいが、見てくれ良いだろテメエ。何いってんだ」

「ふあ。え、あ、どうも??」

心のままに褒めたただけで、照れたようにフードを被つてもじもじ、とは。うーん、やっぱり前から思つてたことだけど、どうもリヤムは自己評価が低いよな。

魔術も二色使えるし、見た目だつて愛らしい容姿してんのに。単純に褒められ慣れてないつてより、謙遜の度合いが強いというか。

(つくづく、姉とは正反対だよなあ)

《あつちはむしろマスターのがそっくりだよね。お馬鹿だし、勢い任せだし、お馬鹿だし》

(二回言うな二回)

凶悪は辛辣だけど、言つてゐることはもつともだ。

本能で生きてゐるようなシャムと比べれば、リヤムは自己主張を殆どしてないし。別に悪いつて訳じゃないけど、こういうタイプは割とストレスを溜め込みがちだと思う。

リヤムにはクオオリオと和解する為協力して貰つたし??ここはやつぱり俺がひと肌脱ぐべきだな、うん。

「そーいえば、テメエにやデカイ借りがあつたよなあ?」

「え？か、借り、ですか？」

「忘れたとは言わせねえぜ。俺にマードックの爺を紹介しただろうが。あれがなきや俺は星冠獣目録を手に来れなかつた。つまり、俺はテメエに恩があるって訳だ」

「そ、そんな??私に別に大したことなんて」

「したつつつてんだろうが！俺がそう言つてんだよ、あア!？」

「ふあ!?!そそ、そですね、しました！ヒイロさんに借りお作りしましたー!」

「おう、そうだろうそうだろう」(うむ、素直でよろしい)

《マスター、普通に脅迫だよこれ》

いいのいいの。こういう謙遜な子は強引に行かないと駄目だから。

まずは無理矢理にでも自己主張させていくのが大事なのよ。主人公に間違いはない。

「そこでだ。テメエ、なんか俺に命令しろや」

「め、命令って言われても??」

「あんだろ。パン買って来いとか鉄パイプ磨けとか肩を揉めとか」

「しよ、しよんなこと急に言われてもおお??」

「あんだろ!」

「ぴゃい!」

《あ、マスター。ボクもちやんと高級研磨剤で磨いてね。めいれい》

(どうせまた磨く時に変な声出してからかうつもりだろうが。その手には乗らんぞ)
 《喘いだつていいじゃない。きもちいいんだもの》

(黙らっしゃい)

しれつと主張の激しい凶悪の注文をスルーしつつ、ガツと肩をつかめばリヤムは観念したように頷いた。なんかお目々ぐるぐるしてたけど、やり過ぎくらいが丁度良いよな、多分。

「あうあうあう???じゃ、じゃあ、お願い良いですか?」

「おう、来いや」

そして、満を持して絞り出されたリヤムのお願いは。

「???」
 「一緒にお買い物、どうですか?」

全然普通の内容で、ちよつと拍子抜けした俺だった。

081 リヤム、少し相談する

人の趣味とはいわば人それぞれである。

クオリオは読書で、俺は鍛錬。シユラは分からないけど、シヤムは食べ歩きなんだとか。そして今、欧都南区の市場通りにて俺の隣を歩くリヤムの趣味は「料理」らしい。

「あ。この根菜、良いですね。美味そうです」

「見ただけで分かるのか？」

「はい。ここ、根つこが長くて多いじゃないですか。たくさん大地の栄養吸ってる証なんですよ」

「ほう。詳しいな。さては食材選びの達人か temeエ」

「そ、そんな大袈裟な?」

麻籠あさかごを二の腕に引つ提げて食品を眺めながら、少し照れくさそうにはにかむリヤムだった。

うーん、健気で物静かな美少女の趣味が料理。これまたなんともベタな。良いけどね、嫌いじゃないし、むしろ好き。

「つつつても寮で飯は出んだろ。毎度自炊してんのか？」

「毎度つて訳でもないんですよ。忙しい時とかは寮食で済ませることもありますが、その、姉さんつて好き嫌いが多くて」

「偏食家のアホの為に作つてやってんのか。ハッ、面倒見が良くて健気なヤツだ」

「ふあ。あ、ありがとうございます」

「シヤムが偏食家だったとは。うん、全然違和感ねーや。なんか苦味のある野菜とか超苦手そうだし。」

「そんな姉の為にご飯作つてあげるとか、つくづくええ子やないかい。」

「ヒイロさんは、こういう場所にはあまり来られないんです?」

「飯は基本、寮で出されたもんばかりだしな。機会もねえし、そもそも俺みてえなのが食材片手に喰うなつてみる。周りドン引きじゃねえか?」

「え。別にそんな事?」

「あんだろ。我ながら武器屋で剣だの槍だの物色する方がよっぽどらしいと思うぜ?」
「??ええと」

「ククク、目エ泳がせやがつて。素直なヤツだ」

「実際、さつきからちよくちよく周りの視線が痛いし。」

「パツと見て、大柄で人相悪い男と気の弱そうな美少女つて組み合わせだし。いわゆる美女と野獣みたく映るんだろうか。」

おのれいモブ共め。こちとら主人公ぞ。まあ俺が逆の立場だったら、通報の二文字が過ぎつちやうけどな!

「まア武器屋つっても俺には自前があるし、わざわざ行く必要はねえがな」

「あ?きよーあく、でしたっけ。ヒイロさんの白魔獣」

「おう。こいつがまたとんでもねエ厄介な性質たちでな。隙あらば頭ン中で喚きやがる。俺じゃなきや持て余す代物だっつーのによ」

「あはは。た、大変みたいですね」

《えっ、なにこの感じ。手の掛かる子供みたいなさあ。ものすつごくボク不満》

(実際手がかかるじゃん。口の悪さ的な意味で)

《なにさ!むつかつくう!マスターにだけは言われたくないし!》

よっぽど不服なのか、ビシビシと頭痛を送ってくる凶悪さんである。まあ頼りにはしてるけど、時々悪ガキムーブしたがるのも事実だし。というか俺にだけは言われたくないってなによ。

「??ヒイロさんは、白魔獣が恐くないんですか?」

「ハツ、ちつと変わり種なくらいの魔獣なんぞにビビるかよ」

「変わり種ですか。実際、恐がってる人もすごく多いんですよ?」

「あア?一般じゃ、白魔獣は人間に利するヤツの事を言うんだろ?ンな恐れるべきもん

でもねえだろ」

「はい、そういう認識になってます。けど、白魔獣だつて魔獣なんだから排除しなきゃ駄目って言う人も多くって」

「そういえばリヤムが居たラーズグリーズじゃ、騎士団に鎮圧、保護された白魔獣の管理もしてるって話だったっけ。」

「だとしたらその活動に異議を唱える声があつたつて不思議じゃない。魔獣は人類の天敵だ。被害にあつた遺族達からすりゃ、あの時のシユラみたく許し難いつて思うのも自然だろう。」

「もしかしたらモクモンランプの所有者であるリヤムも、咎められた経験があるのかもしれない。」

「声が多けりゃ正義って訳でもねえだろ」

「え?」

「そいつらの主張が正しいかどうかより、テメエ自身がどう思うかだろ。あの煙が大事なら、テメエは胸張つてりゃ良い。そんだけの話だ」

「ヒイロさん?!!」

「俺だつて今更凶悪を手放したりするつもりなんて無いし。例え、シユラやクオリオに請われたとしてもだ。」

ちよつかい出される事は多いけど、愛着だつて湧いてる。きつとリヤムもそうなんだろう。目を細めて微笑むリヤムは、どこか安堵したように息を吐いていた。

「まア、捻り出した頼み事が『買ひ物の付き添い』な辺り、テメエにはまだ難しいだろうがな。ククク」

「??そ、そんなことないです。私にだつて出来ます」

話の流れを変える意味合いでも、ここは本来の目的へと軌道修正するべきだろう。

そう、そもそもこの買ひ物だつて引つ込み思案の荒療治の産物だ。しかしやはりリヤムの謙虚さは筋金入りなので、まだまだもう一押し二押しは欲しい所である。

「言うじゃねえか。ならサーブスだ。もう一個ぐらい頼み事する権利をくれてやろう」

「ふあ。も、もうひとつですか?」

「おう。さあバツチ来いや。吐いた唾は飲めねえぞ?」

「う、うう?」

困つたように眉を下げるリヤムだったが、ここで手を緩めては本懐は遂げられない。

周りの視線がちよつと強くなる中で、ようやくと願ひ事を決めたのか、どこか迫真めいた勢いで顔を上げたリヤムだったが。

「じゃ、じゃあ?」

「おう」

「わ??」

「わ?」

「わ、わ??わたしが作ったご飯、食べてください。毒見ですっ!」

「???(?)」

「???(?)」

「あー」

「うん」

「俺は思った」

「あの姉にこの子の爪垢煎じて飲ませるより、姉の爪垢を妹に飲ませる方が良いかもしれん、と」

082 リヤム、少し大胆になる

「どどどどどうしようつい誘っちゃったけどよく考えたら姉さん以外にお料理振る舞ったことないよどうしよやっちゃったよたすけてモクモン」

☒モクモ。モクツモク。モツモツクー??☒

「深呼吸?う、うん。まずは落ち着かないとね。うん。ひ、ひ、ふー??ねえモクモン、これなんか違う感じがするけど」

☒モクツ!?☒

(こっちの世界にもラマーズ法あんのかい)

《らまあず?》

(あ、凶悪は流石に知らないか。悪い)

《??マスターに知識で負けただど?し、死にたい??》

雨雲の気配もないのんびりしたお昼時。にも関わらず、あつちもこっちもてんやわんやであった。何故だよ。

どうもご機嫌よう主人公です。なんでもしたげるセカンドチャンスを与えたら、何故かりヤムの部屋に呼ばれ、料理を振る舞われる事になり申した。

いや逆だろ。なんで俺がされる側なの。

「おい、大丈夫か」

「おかまいなくっ！ど、どうぞ（こ）ゆっくり！」

「お、おう」

全然大丈夫そうじゃないんだけど。とはいえ余計パニックになられても困るし、とりあえず椅子に座りながらも静観する事にした。

かくいう俺も多少緊張してたし。なんせ女の子の家に招かれるなんて初体験だ。見渡してみる寮部屋の中は、小物やらカーペットやらテーブル掛けやら、些細な部分まで異性を感じさせる柔らかい雰囲気だった。

「と、とりあえず一品目??よ、よし、せっかくだし得意の魚料理で??ああつ、魚屋さんにさばいて貰うの忘れてたあ！」

☒モクモ、モク！☒

「うう、言わないで。ちよつと緊張してたの。こ、こうなったら私がさばいてみるしか??」

☒モクッ?!モ、モクッ☒

「だ、大丈夫、多分。やり方は覚えてるし??せっかくなんだから、いいところ見せないとだし??」

☒モクー??☒

あのー。これリヤムさんテンパってませんかね。

調理台の前でワタワタしてるんですが。ごゆっくりと言われたけど、ここは様子見た方が良いかも知れん。

「い、いきますつ」

☒モククツ☒

意を決したように包丁片手に、まな板の魚に挑まんとする少女。けど魚をさばいたことないせいとか、手がプルプルと緊張で震えてる。うん、これ覗いて正解だったわ。

「待ちな」

「うひゃい!?え、あの、ヒイロさん?」

「挑戦心は買ってやるが、その手つきじゃ怪我すんのがオチだ。大人しく諦めろ」

「う。で、ですけど、うっかり買っちゃったのは私ですし??お魚屋さんに持っていくまで待つて貰うのも申し訳なくって」

どうにも引つ込みがつかなくなったらしい。別に待つくらい良いんだけど、それから申し訳ないと感じる辺り、肝が小さいというか優し過ぎるといふか。

けどリヤムは運が良い。

「ククク。生憎待つ必要なんざねえのさ」

「え？それって、どういう？？」あつ」

小さな手から包丁を譲り受け、まな板の魚をジツと見下ろす。

異世界だけあつて見たことない種類だけど、そんなに変わらないっぽいな。イケる。

「俺がやる」

つてわけで、ここは俺の数少ない特技を一つ披露するとうましようか。



思えばかなり久しぶりだった。

台所に立つのも、包丁を握るのも。世界すら違うのに、遠い昔に嗅いだ畳の匂いが蘇る。

「聞くが。コイツでなに作るつもりなんだ？」

「え、えつと。ソテーにしようかと」

「ン。なら三枚におろせば良いんだな」

「は、はい」

ザツと聞いた感じ、捌き方も使う部位も現世の魚とほとんど変わりないらしい。頭を落として鱗を剥いで、臓器を取って、と。何年ぶりってくらいだけど、案外こういう技

術は錆びつかないもんだな。

「す、すごくお上手ですね。ひよつとしてヒロさんも普段お料理するんです?」
 「しねえよ。だがまあ、ガキン頃に引き取られた家が港町でな。手伝いで良く????つと悪い。今のはナシだ」

「へ?ええつと??」

「つまりだ。俺アさばくのは得意だが、味付けやら加熱具合やはからつきしだ。そつちには期待出来ねえから、テメエに任すぞ」

「ふあ!はい!ま、任せてください」

危ない危ない。ついポロツと『前世』についての話をするところだった。なんとか誤魔化せて良かった。

今ここに居るのは麓の村ヘルメル出身のヒロ・メリファーであつて、熱海憧じやない。あの火災で両親を亡くした俺が、祖父母に引き取られたつて話、する訳にもいかなしいしな。

《マスターつてさ》

(ん?)

《前から思つてたけど不思議だよね。いや不自然つて言うべきかな?ヒーローだとか良く分からない言葉知つてるし。結構隠し事してない?》

「?? あー。まあ、そこはほら、秘密が多いのは良い男の証ってやつで」

《うわ、前にそれで誤魔化したボクへの当てつけ? 性格わるうい》

(人聞き悪つ。しょうがないだろ、俺にだって色々あんの)

《むー》

不服そうに唸る凶悪だけでも、ほんとに色々あるからさあ。

現状を一から説明するとなると流石に長くなるし。あるヒーローに火災事故から助けられて、家族で唯一生き残つて。そこからじいちゃん家に引き取られて??と、軽くなぞるだけでも山積みだ。

そもそも女神様のミスで一回死んでんだよね、とか言ったらどんな反応するんだろ。

「??」

「おい。なに人の手をジツと見てやがんだ」

「ふあ。あ、ええと、私と比べて大きいなあと思ひまして。気が散りましたよね、すいません」

ちよつとした懐旧に浸つていれば、なにやらリヤムが包丁を握る俺の手を凝視していた。大きいなあつて、そりゃ俺とリヤムみたいな小柄な女の子とじゃあなあ。

「俺がデケえつてより、テメエが小さいんだろ。倍ぐらいは差があんぞ?」

「さ、流石にそこまでちつちやくないですよ」

「ククク、どうだかなあ」

「測ってみればわかることですつ。ほらー!」

言い方が良くなかったのか、珍しくムキになったリヤムがピトツと俺の手の上に掌を重ねる。仮にも包丁握ってるんだから気を付けて欲しいんだけど。

こういうところは、案外リヤムも見た目相応なんだよなあ。

「???あー。確かに倍は言い過ぎたかもな」

「???そ、そそ、そうですね」

「おん?なに急に黙り込んでやがる」

「ふあ!おかまいなくう!」

「お、おう」

いや構うわ。急に真っ赤になられたら、何かあったのかと思うじゃん。でもこれはアレだな、自分でも子供っぽいこととしてしまったっていう意味での赤面だろうな。

(思春期つてやつだねえ)

《合ってるけど間違ってるよ、お馬鹿マスター》

(えっ?)

なんでそこで溜め息をつかれるのか。

どういう意味だつて聞こうにも、これみよがしに《色々あるんだよ》と意趣返しされ

る俺であつた。

・

083 リヤム、まだ春半ば

「??美味かったぜ。やるじゃねえか。テメエの姉貴がちと羨ましいぐらいだ」

「え。あ??ふふ。はいっ、おそまつさまでした」

振る舞われた料理は、やるなんてもんじゃなかった。

マジで美味かった。腹に入ればなんでもつてくらい雑食な俺だけど、これを毎日食べられる奴は幸せだろう。

シヤムの普段が人生楽しそう感出てるのも納得である。

「なんとというか、少し不思議です」

「あん?なにがだ」

「その、姉さん以外にご飯を食べてもらうことなんて無かったから。ホツとしたとか??美味しいって言われると、こんなに嬉しいものなんですな」

ふにやつとはにかんで、リヤムは胸を撫で下ろす。

嬉しい、か。確かに俺も、捌いた刺し身をじいちゃんばあちゃんに褒められた時はかなり嬉しかったっけ。

先立ったばあちゃんを追いかけるようにじいちゃんが肺癌を患った時、もう一度食べ

たいと言われたとも言われた。結局、食べられるほどに快復してくれる事はなかったけれど。

懐かしい記憶だ。まさか違う空の下で、こうして思い出せる機会に恵まれるとは。人生って分らないもんだな。

「テメエほどの器量なら、招いたって誰も嫌な顔しねえだろ」

「え。あ、ありがとうございます。でも私、やっぱり姉さんみたいに人付き合いも上手く出来なくって??」

「ああ? あいつ、人付き合い上手いのか? 常ににやーにやーうるせえし振り回しやがるしで、下手に見えるがな」

「あはは?? でも、姉さんが居るだけで明るい気持ちになれますし、意外と細かい気配りとかも出来て。私より全然、姉さんは凄いです」

儂く微笑みながら、リヤムはグラスを小指の爪先でひっかいた。それこそ不思議だよな。リヤムみたいな見た目も性格も良い子なんて、普通に友達沢山居そうなものなのに。

どちらかといえば、リヤム自身が周りから一步距離を置いてる感じがする。踏み込めない性格っていうなら、それまでなのかも知れないけど。

(うーん。ちよつと気まずい)

《話題選び失敗しちゃったねえ、マスター?》

(うぐ。くそう、こういう時のトークスキルは流石に自信ない?)

気まずい沈黙が降りる。

しかし、ここで黙っているのは主人公の名折れである。美味しいご飯出して貰った手前、なんとか良い感じに話題を変えねば。

とはいえぶつちやけ軽快なトーク術なんて会得してない俺からすれば、辿り着く会話カードはやっぱり種類が少なくて。

「ン、ンンツ。あー畜生。飯が美味すぎた。あんな美味いもんだして貰っちゃったら、こっちは引つ込みがつかねえぞ。おいリヤム、どうしてくれんだ」

「へ?え、あの、ご、ごめん、なさい?」

「バカ、そこでテメエが謝って??いや待て。おうそうだ。美味過ぎたのが悪い。お陰で俺も黙って引き下がれなくなった。つまり分かるな?分かるだろうなアおい」

「え?え??分か、る?ええと、ごめんなさい。なんのことだか?」

「なんのことかだ?決まってるだろ。」

ラスト願事チャンスだ!」

俺が選んだのは、三度目の正直チャレンジだった。

「ふあ。ま、またですか!」

「なんだこら嫌だつてのか、あアン!？」

「い、いやじゃあ、ないですけど?？」

《Oh??これは酷いゴリ押し??》

(しよ、しようがないだろなんも思い付かなかったんだからっ)

我ながらとことんパワープレイしてると思うよ。

けど買ひ物の付き添いとご馳走されただけじゃ、あの時の御礼が出来たとも思えんし。ランプの魔神のお願いストックも三度までつて事で、仏さんだつて見逃してくれるだろう。

「ようし。ラストこそ叶え甲斐のあるやつ頼むぜ。遠慮はなしだ。テメエの欲望をさらけ出しちまえ」

「よ、欲望??欲望??うううん」

リヤムみたいなタイプには難しい要求かもしれないが、こつちももう引つ込みが付かない。

それこそランプの魔神みたく腕組み仁王立ちしながら、待つこと一分間。頬をふんわりと桜色に染めながら、リヤムが上目遣いに俺を見上げた。

「欲望、とはちよつと違うんですけど」

「なんだ。言ってみろ」

「その、たまにお姉ちゃんみたいになりたいなあつて思うんです」

「??姉みてえに、だと?」

「は、はい。駄目でしようか」

「??お、男に二言はねえ。ちと待つてろ」

シヤムみたいになりたい。それがリヤムの願ひとは。

しかし、シヤムみたいにと来たかあ。見た目的な意味じゃないだろうし、うーん。

《これはなかなか難問が来ちやつたねえ。さあさあ、応えなきや男が廢るよー》

(あ、煽るなつて。任せろ、すぐに俺が名案を??閃いた!)

いや待つてそうか。「シヤムみたいに」じゃない。

リヤムが行つたのは「お姉ちゃんみたい」になりたい、だ。

よくよく思い出せばリヤムはちよくちよく子供扱いを嫌がつてた節がある。逆にい

えばお姉さん扱いがされた事がないのだ。

答えは見えた。ならば後は突き進むのみ。

「ククク、なるほどな。つまり姉みてえに年上ぶりてえつて訳だな?」

「へ?」

「楽勝だ。楽勝すぎんぜ。良いだろう。だつたらテメエには特別に、俺を『ヒイロくん』と呼ぶ権利をくれてやろう」

「??ふあ!」

「さん付けすつから年下の枠に収まんだ。もつと生意気に行け。なんだつたら呼び捨てでも良いぜ」

「え、ええええ、そ、それは、ちよつと??」

ふ。やつぱり遠慮するよな。しかしここは譲れん。

「呼んでみろ」

「でででも」

「呼ぶだけだ」

「でですけど」

「呼べ」

「ふあ。はいいい」

やつと聞き出せたりヤムの願いつぽい願いだ。

男に二言は無いと言つたし、なにがなんでも押し通す。

若干涙目になりつつも俺の頑固さを悟つたのか、黙り込み、モジモジとしつつ、口を開いては閉じて。

「??ヒイロ、くん」

桜の花弁のような唇が、一度キュツと結ばれたあとに??満を持して花開いた。

「おう。やりや出来るじゃねえか」

「あ?????」
「ア?なに黙り込んでんだよ」

「なんか、背徳感みたいなのが、すごくて、ふあい」

「?????」
え。背徳感つてなに。

まるで熱に浮かされたみたいに身悶えてるし。一体リヤムはどうしちまつたんだよ。けど分かる。多分これ、俺またミスったパターンだ。

だってもう今頭痛がすごいし。凶悪さんからの叱咤的な意味で。

《マスター》

(はい)

《年下の女の子をいかがわしくさせるのが、マスターのツボなの?》

(いやいやとんでもござらん。拙者はただ真剣にリヤムの願いを叶えたまでで)

《真面目に》

(はい。ごめんなさいでした)

なお、凶悪さんから散々な言われようをされた後。

ようやく我に帰ったリヤムさんはどうやらこの呼び方がまんざらでもなかったらしく、以降リヤムからは「ヒイロくん」呼びが固定された。

またその際に、シユラにとんでもなく冷めた目で見られた事を、ここに追記しておく。うん。ほんとどうしてこうなった。



しかしその晩のこと。

とうにヒイロが去り、シユラと買い物を楽しんだシャムがぐうすかと寝台にて寝息を立てている最中。

一人テーブルに向かい合い、一通の手紙をしたため終わった春の少女は、椅子に背を預けて呟いた。

「願いざいごと、かあ?」

脳裏に浮かべるのは、口振りだけが粗暴な男のこと。

強引で無茶苦茶で無軌道で、けれど自分の為になにかをしようと思死になつてくれたヒイロ・メリファー。

無愛想かと思えば端々に不思議な愛嬌があつて、そこに気付くたびに心が絡め取られる感じがして。

その方向性は空回りが多かったものの、彼の思い遣りはリヤムにしつかりと届いていた。

「もしもあの時?? 本当のことが言えたなら」

自分なんかの為に、こんなにも頑張つてくれる人。

背が高くて手の大きな、淡い香りのする異性。

だからこそ、つい思つてしまう。

「たすけて、つて。言つてたら。ヒイロくんは??」

もしもあの大きくて暖かい掌に。

自分のこの手を伸ばしたら。

躊躇ためちうことなくあの人は。

掴み取つてくれるのだろうか。

「?? ううん。そんなの、駄目だよね」

想いはまだ、思うだけ。

ぼんやり灯るランプの小火に翳し、溶かした蠟印で手紙に封蠟したリヤムは、儂く微笑む。

小さな指先がなぞった封蠟には、リヤムが元々に籍を置いていたラーズグリーズの紋章が描かれていた。



まだ道半ば、春半ば。

半ばで半端な腕は、まだ救いを求めて伸ばしきれない。けれど少しずつ、彼女の心に変化は訪れていた。

季節が変わるように。変わらぬものなどないように。

『灼炎のシユラ』においては『シャム・ネシャーナ』と殺し合いの末に、相討ちとなつた少女の未来も、今。

背高い赤毛の存在により、変わろうとし始めていた。

084 護衛任務

「劇団の護衛任務？」

「然りだ」

しかと頷いたシドウ隊長から新任務を告げられたのは、討伐任務を終えたばかりの事だった。

「アスガルダムより南西に五十里ほど降った所に、ジオーサという名の小さな町がある。此処に現在巡業中のある劇団が訪れ、魔獣被害の慰撫も兼ねた劇が開催されることとなったのだ」

「つまり、その劇団からの要請ということですか？」

「その通りだ、ベイティガンよ」

「たいちよう！ そのある劇団ってのはー？」

「劇団ワグナーだ」

「ワグナー！ マジで？ マジで！ すごいすごい、そんなところの護衛任されるなんて?? うちらも相当な注目株ってことだねっ」

「あまり凶に乗り過ぎるなよ、シヤム・ネシャーナ」

「わかってるって、えへへへへ」

ほほう、劇団ワグナーねえ。シヤムの反応を見るにかなりの有名所らしいな。

結成からまだ半月も経っていないレギンレイヴ小隊。けども積み重ねてきた依頼達成の数から、新進気鋭のチームと評判になっていた。

そこで遂に、VIP相手の任務にまで就けるほどになったと。くーっ、いいねいいね、この認められた感じ。やっぱり主人公街道はこうでないかと。

「護衛任務??正直、アタシの性には合わないけど」

「といつても討伐以外はろくな任務がなかったんだ。たまにはこういう騎士らしい職務と良いと、僕は思うけどね」

「そんなこと言つてえ、ほんとはワグナーの女優さんとかとお近づきになりたいとか思ってるんじゃないの? やらしいんだあクオッチ」

「なっ、勝手に人を色魔扱いするなっ。生憎だが、僕は演劇に興味などないっ」

「ああ?だがテメエ、こないだ休日に劇場に誘ってきたじゃねえか。チケットが余ったとかなんとかで」

「ばっ! ヒイロツ、余計なことをっ」

「おやおやおんやあ? ムツツリクオッチは、ドーも興味しんつしんみたいですねえ」

「ね、姉さん。クオリオさんだつて男の子なんだし、むしろ健全な証だよ?」

「ぐ、く、く、く、うぐうっ?!」

「しれつとトドメ入れたわね」

「見事に刺しやがったな。やるじゃねえか、リヤム」

「ふあ?」

なんかクオリオの尊厳がガリガリと削られてるっぽいけど、それは一旦置いて。護衛任務か。護る者ってイメージの強い騎士にはもってこいな任務だけど、正直シユラと同意見でもある。ただ討伐するのは訳が違うだろうし。

(けど騎士らしいイベントだよな。やつぱり王道展開は護衛対象が実は訳ありなやんごとなき身分で、そこからアヴァンチュールのな仲に発展とか??)

《やんごとなき身分ってなにさ》

(そりやお姫様とかよ)

《アスガルダムの現国王は男だしまだ若いから、王女なんて居ませんけどー?》

(やめろ夢を壊すなあ! 鬼、悪魔、凶悪!)

《あはははは!》

妄想ぐらいいいじゃん。現実突きつけるとか、さてはヒーローの変身シーンに攻撃すりゃ良いのとか言っちゃやう系だな。本当に凶悪な奴め。

リアリスト鉄パイプへの憤然に、つい黙り込んでしまったからだろうが。そつと俺の

二の腕に触れながら、リヤムが諭すように語りかけてきた。

「大丈夫ですよ」

「あア？」

「ヒイロくんなら、護衛任務だっていつもみたいになさえますから。自信もつてください
い」

「フン、なに勘違いしてんだ。俺にかかりやどんな任務だろうが楽勝に決まってる」
「はい、そうですよねっ」

自信満々な返答がお気に召したのか、リヤムはふにやつとはにかんだ。

「どこことなく大人びて見える微笑み。これもこないだの荒療治によるヒイロくん呼び
効果なのかもしれないな。」

「ヒイロくん、ね」

「あア？なんか言いたげだなテムエ」

「べつに。特に。なんにも」

「??そうかよ」

「けど何故かこうやってシユラに睨まれることが増えたんだよなあ。なまじとんでも
ない美少女である分、迫力も凄いから勘弁して欲しいのに。」

「ただちよつと、練習したくなっただけ」

「なんの練習だ」

「アంతを斬る練習」

「おい全然なんにもねえことねえじゃねえか！」

「うるさい馬鹿、変態、女の敵」

「後半二つ関係ねえだろ！」

「一番あるわよ馬鹿ヒイロ！」

絶対練習って感じじゃなかったじゃん！

しかも女の敵って。割と紳士的な方だと思えますけど!?

くそう、これもヒイロフィルタ―による毒舌の影響なのか。いや俺が気付いてないだけで乙女的にナシな事しちゃったのか。

分からね。しかし言われればなしは癪だからと、反撃すべく口を開きかけたけども。

「——総員、正座アアア!!」

俺の反撃の狼煙は、隻眼隊長による一喝によって掻き消された。

その後、若気の至りというのものもあるが、隊長の話は最後まで聞くようにと至極まっとうなお叱りを、延々と受ける俺達だった。

なお長時間の正座により脚が痺れて立てないリヤムを背負ったら、また機嫌の悪いシユラに睨まれる羽目になったことを、ここに記す。

•

085 薄い月夜のボーイズトーク

雲が濃くて、だから月が薄くなる夜。護衛任務について告げられた昼間の喧騒が、遠く思えるくらい静かなひとときに。

ぼんやりとした溜め息が、騎士寮の一室にて響き渡った。

「はあ?! またか」

憂鬱な表情を隠そうともしないのはクオリオである。

軽く頭を抱えている彼の片手には、一通の手紙があった。

その手紙こそが憂鬱の原因なのだろう。やけに高級感のあるソレを、クオリオは今にも机上のカンテラへと投じてしまいそうなのであった。

「おい」

「む」

ついには本当にカンテラの方へと手が伸びていたクオリオを止めたのは、ぶつきらばうなルームメイトだった。

「これ見よがしになに溜め息ついてやがる。また納得出来ねえ論文でも見つけやがった

か?」

「そんなんじゃないさ。いや、実は家から見合いの催促が来ててね」

「見合いだと?」

「ああ。毎度毎度、どこかしらの令嬢のプロフィールを送ってきては目星をつけろとつこくてね。そんなものに時間を割くなら、まだ微妙な論文でも眺めていた方がマシだっていうのに」

いかにも悩ましげだっただけに、拍子抜けしたのはヒロである。

「遡れば訓練生時代。更に本隊所属となり新たに用意された騎士寮でさえ同室となつたクオリオから、こんな色気のある話題が持ち込まれた試しは無い。」

だからだろう。ヒロの仏頂面には、呆れよりも驚きの方が色濃く浮かんでいた。

「色恋に悩めるなんざ、平和な証だろうがよ」

「れっきとした政略だよ。色恋でもなんでもないだろ。というかむしろ君こそ色恋に悩むべきだと僕は思うけどね」

「喧嘩売ってんのか。そういう相手も居ねえのに、どうやって悩めつつうんだ。テメエのおこぼれに預かってかア?」

「??勘弁してくれ。僕はまだ斬られたくはない。命が惜しいよ」

「?」

そこで心当たりがないとばかりに首を傾げるヒイロに、クオリオは別の意味で頭を抱えたくなる。

「テメエ、あの猫姉妹共とは仲睦まじくやってんだろ？ シヤムとは顔を合わせりや言い合っているし、リヤムには本まで貸してやがるしよ。俺にや絶対貸そうとしねえ癖に」

「仲睦まじく、つて。君にしては含んだ言い方をするじゃないか。というかね、シヤムはともかくリヤムはむしろ?」

「ああ?むしろ、なんだよ」

「??なんでもない。変に指摘したせいで巻き込まれるのは御免だ」

「??」

本の貸し借り云々で仲睦まじいなら、ヒイロくん呼びされてるお前はどのようなんだよ。馬鹿なのか。いつそほんとに一回斬られてしまえ、と。

胃の辺りを抑えながらクオリオは割と本気でそう思った。

「あと、君に本を貸さないのはどうせ粗雑に扱われるからだよ」

「あ? そいつは、星獣冠目録の件でか」

「違う。今更あの一件を持ち出すほどに僕は女々しくくない。ただ常日頃の君を見ていればね、うっかりページを破ったり折り目を作ったり、表紙を傷付けたらそれさうという

か」

「ひでえ言われようだなオイ」

さながら野生動物か幼児のような扱ひである。

流石に言われっぱなしではいられないのか、すかさずヒイロは反撃を試みた。

「つうか、テメエだって大概粗雑だろうがよ。特に身だしなみ。毎度靴下は左右で色が違えし」

「う」

「その黄色いローブも、ところどころほつれてやがるしよ」

「ぐ」

「指摘してやらなきや寝癖だって放つたらかし。日頃の坊ちゃんぶりが見て取れんぜ」

「ぼ、坊っちゃん呼びはやめろ！ 君にそう呼ばれると鳥肌が立つ」

「うるせえよ。テメエはあれだ、すっかり者に見えてだらしねえからタチが悪い」

「どういう暴論だ！ 普通にだらしなさそうでだらしない君にだけは言われたくないな！」

水掛け論のような酷い口論だった。しかしこれは別段、初めてという訳では無い。彼らのそれなりの付き合ひの長さが、時たま妙な意地の張り合ひを産んでいた。

これまたそれなりに付き合ひが長いエシユラなりーゼさんがこの場に居れば、どっち

も大概だと吐き捨てるであろう。

無論、彼女自身も割と大概なのは棚上げにして。

「口が減らない奴め。せつかく君の知リたがっていた事を教えてやろうと思つたのに」
「あア?もつたいぶつた言い方しやがって。どうせ大したことじゃねえつてオチだろ」

男同士のしようもない小競り合ひである。これまでの勝敗の累計さえ不確かなほどだ。

けれども今宵、軍配が上がつたのはクオリオの方であつた。

「へえ。君にとって、ルズレーとシヨークのその後については、大したことじゃないのか?」

「んなつ?!」

「少しばかり家の者に頼つて、調べて貰つてたんだよ。なんだかんだで気にしてるみただつたからね」

「??」

あの一件以降ヒイロは直接口にごそしていないが、ルズレー達を気にかけているのは明らかだつた。

そこでクオリオは密かに実家の使用人を頼り、彼らの顛末を探っていたのだ。

「知りたいんだろ?」

「??おう。教えてくれ」

「ふふん。仕方のないやつだな」

いかにも「してやったり」な態度だが、傍から見ればただの友達想いの良い奴でしかない。

そこに気付かずヒイロの殊勝な態度に溜飲を下げる辺り、やはりクオリオも大概なのであった。

「まずはシヨークだが、剥奪処分になった以上はルズレーとの縁も切れたようだね。今はアスガルダムの南地区辺りで日銭稼ぎをしてるらしい」

「シヨークの奴が、か。手癖の悪さ活かして、盗みでもやってんじやねえだろうな」

「さてね。でも今のところ、騎士団の世話になるような真似はしてないみたいだ。心を入れ替えて真面目に、って性格でもないだろうけど」

「??まあ、しぶとくやってんならソレで良い」

「お優しいことで」

「チツ、そういうんじやねえよ」

まずはシヨークの顛末を聞いて、ヒイロは腰掛ける椅子をギイツと軋きませていた。クオリオからすれば嫌悪感しか湧かない小悪党だが、彼からすれば違うのだろう。

ぼんやりと思慮ふしに耽る横顔に、クオリオは深く踏み込むことはしなかった。

「ん。それで、ルズレーの方だけど??今はまだ、セネガル家の領地で謹慎中だつてさ」
「あいつも、剥奪食らつたんだよな」

「ああ。また上役に金でも積んで処分を免れてるかと思つたけど、どうやら違つたみたいだ。家が家だけにあまり情報も探れなくてね、屋敷の中で休養してることくらいかな」

「???」
「???」

あまり進展のない報告ではあつたが、それでもヒイロは嘯み締めるように呟いた。彼からすれば、ルズレーがまた悪どい手段で保身に走ろうとしないだけ吉報だったかも知れない。

しつとりと目を閉じる横顔は常日頃のヒイロらしくなく、あまり落ち着かない。

「??、——ああ、そうそう。一つ言い忘れていた」

だからだろうか。

クオリオはどこか観念したように、暖めておいた最後の札を早々と切つたのだった。

「ルズレーについてだけど、実はこの前??ラステルから少し気になる話を聞いたんだ」

「ら、ラステル?」

「??僕らがまだ訓練生の頃、寮のまとめ役をしてた彼だよ。君が本片手に泥だらけに

なった夜にだって、思い切り世話を焼かせただろうに」

「??、??、??? ああ、あの口うるせえ真面目クンか。で、そいつがどうしたってんだ」

「??ハア、まあいい。で、そのラステルが、ルズレーが寮から引き払う時にたまたま出くわしたみたいだね。その際に問い詰められたらしい」

「あん??? 問い詰められたって、なにをだよ」

「ああ、それがね??」

「——ヒイロ。君が毎日やっていた、”鍛錬の内容”だつてさ」

086 カンテラの中の小さな朝

一息入れようか。そう告げるやすぐに席を外したからだろう。

ルズレーの話を聞き終えて、ヒイロが何を思ったのかをクオリオが戻った時の横顔は、部屋か

けどもコーヒを注いだマグカップ二つを手にクオリオが戻った時の横顔は、部屋から出る際のものとは変わらない神妙なもので。

湯気立つカップを顔に押し当てて勢いで差し出して、そこでようやくヒイロは普段の仏頂面へと返ってきたのだった。

「もうそろそろ寝るつてのにコーヒーかよ」

「文句を言うなら飲まなくていい」

「飲まねえとは言つてねえ」

ついでに、普段の減らず口ぶりもセットで。

「??つか、うめえなこれ」

「僕が淹れたんだ、当然だろう」

「あ？嘘言えよ。食堂の誰かに頼んだんじゃねえのか」

「この時間に残ってる訳ないだろう。そんなに意外か」

「そうでもねえ、似合ってるよ。ほっといたら豆の種類の蘊蓄とか延々喋ってやがりそうだし」

「どういいう言い草だ」

あんまりな言い草だが、否定出来ないのも事実である。

並外れた探求心と知識欲。ついには喋りたがりまで芽生えてしまっている自覚が、クオリオにはあつただけに。

ごくりと飲んだ一口に、余計な苦味まで合わさった気分だった。

「それなりに、褒められたこともあるんだぞ」

「へえ。誰に？」

「??父上に。騎士学園に入る前は、僕の朝の仕事だったからな」

「??ふーん。甲斐甲斐しいな、坊っちゃん」

「????」

黙り込むクオリオに、ヒイロは小首を傾げた。

坊っちゃん呼びを咎めもしないし、誇らしげでもない。

黒い水面に視線を落とし、コップを静かに撫でるだけ。

横顔は、月を見て鳴く犬のようだった。

「ゴホン。そういえば??いや、違うな。せつかくの機会だし、聞いておきたいことがある

「ただけど」

「あア?なんだよ」

「シユラのことだよ。君、なんて言って彼女を説得したんだ? 普通の魔獣に対しては相変わらずだけど、白魔獣?リヤムのモクモンとかには、少し態度が軟らかくなってるみたいだし」

「??」

「もちろん、無理に聞くつもりはない。ちよつとした興味本位だし」

なにかを誤魔化すような勢いだったが、気になっていたのは事実だった。

あの一件にはクオオリオも相当肝を冷やしたのだ。ともすれば早くも小隊瓦解の危機だったほどののに、あれ以降シユラは変わって来ている。

明らかに目の前の男が丸く収めてみせたという事だろう。

安易に踏み入るべきではないとしても、やはり興味はあった。

しかし。

「??ん。別に良いんじゃないやねえか? 大したこと言った訳じゃねえし」

「そうなのか?」

「おう。まあ、ちよいと『俺をぶった斬っていいぞ』つつただけだ」

「????????
は?」

好奇心は猫をも殺すというが。

この時ばかりは、クオリオの思考もさっくり殺られたのだった。



「——いやいやいやいや!! どういう説得の仕方だ。いや、本当に。キミは馬鹿か。いや馬鹿だけど。つくづくもうほんとバカだ」

「そこまで言うかテメエ」

「言うよ！むしろ全く言い足りないくらいだ！」

全貌を聞き終えて、クオリオはつくづく目の前の男が理解の及ばない存在であることを噛み締めた。

「だってもう脅迫みたいなものじゃないか。君がとんでもない魔獣になりそうだって点に、無駄に説得力があるところとか質が悪いし。もっと別の言い方があつただろうに。よくシユラも納得したもんだ」

「く、言いたい放題言いやがって。だったらテメエならどう言ってたってんだ、あア?!」
「??? そうだな。視点を換えさせてみるとか?」

「視点だと?」

「僕らは騎士なんだから、より多くを護る為の『術』を保持することもまた、魔獣にとつての脅威と考えられるだろう?」

「??あ?ど、どういう意味だ」

「つまりだ。リヤムのモクモンも君の凶悪も、白魔獣ではあるけれど魔獣を倒す為の立派な術だ。魔獣への復讐が目的なら??騎士が保持する白魔獣を見過ごす方が、より効率的に魔獣の数を減らす事に繋がるんじゃないか?」

「??、??おう。確かに」

「それこそ、ヒイロがとてつもない魔獣になるリスクを減らす事にも絡められるし、我ながら悪くない説得だと思っただけだね」

「ぐ、く、く??」

完膚なきまでの正論を前に、ヒイロはぐぬぬと押し黙る。

本来ならばすかさず言い返しているところだが、実際シユラにも滅茶苦茶だの支離滅裂だのと言われてただけに、言い返せないのだろう。

そんなルームメイトの様子を、我が身を振り返らせる良い機会だと思いつつ、零れそうな溜め息をコーヒーで流し込むクオリオだった。

（『憎しみ全て注がなければ、魔獣と化した自分には勝てやしない』か???はあ。情けない。僕も大概毒されてるよ）

しかしクオリオはクオリオで、我が身を振り返らなくてはならない。

常軌を逸したヒイロの説得。けれどもふと思ってしまうのだ。

自分がもし、魔獣への憎しみを募らせる過去があったとして。

シユラと同じように衝突し、ヒイロにそう言われてしまったら。

(?!滅茶苦茶でもコイツなりの理屈なんだ。馬鹿げていても真剣なんだ。だからこそ逃げ道も作らせてくれない。本当に、つくづくたちが悪い)

きつと、彼女と似たような結論に落ち着いてしまう自分が、呆気なく簡単に想像でき
てしまつて。

なのにどうにも嫌な気分にならない事こそが、ヒイロに毒されてる何よりの証だつ
た。

(シユラ。きつと君も、そう思ってしまったんだろうね)

同情するよ——と。

そう同じ穴のムジナは苦く笑つて、天井を仰いだのだった。

087 詩われし新たな光

梅雨の残り香も幽かな、レオの月の第一週。

ちぎれて流れる風景に重なる馬蹄と車輪の音。溪谷沿いの空気は湿気が多くけどもベタつかない。陽射しが強いからだろう。

洗濯物を干すのに躊躇わない程度の爽やかな気温が、騎士任務の道中って事を忘れさせるくらいには風情があつた。

「うー??あー??」

なお、今のはちよつとした現実逃避である。

至近距離から呻き声が聞こえれば、風情もへつたくれもありやしなかつた。

「シユラ姉、だいじよぶー?」

「だい、じよぶ、ない。ぐるぐるして、きつい」

「やれやれ、まさかシユラが馬車が苦手だったとは。意外な弱点があつたものだね」

「クオリオさん、苦しんでるんですから物珍しがる言い方は駄目ですよ。少し待ってくださいねシユラさん。今、酔いにも効くユモギクサの薬瓶を??モクモンっ」

☒モクモツ!☒

ルズレーにあんだけ人は変われるって訴えた俺ですが、そう簡単にはいかないらしい。

青い顔のままグデーつと俺の肩にもたれかかるシユラを見れば、その世知辛さはひとしおでしたよ、ええ。

☒モククツ☒

「もくくつて??あー??落ち、ぶれたもんね。白魔獣に、施しを、受けるなんてね?!”

「気取ってる場合か。さつさと飲めや。あと、いつまでもたれかかってやがる」

「だって。まつすぐだと、響くしがくがく揺れるし。これなら、マシなの。だから。文句はなしよ。斬るわよ?!”

「へバリ顔で脅すんじゃないねえ」

背筋を伸ばすと揺れが辛いのか、もう動くのさえ億劫なのか。シユラが離れる気は無いらしい。こちとらいつリバースされるか、ってハラハラして仕方ねえってのに。

でもなんだかんだ、モクモンから薬瓶を受け取るくらいには、シユラの心境も変化が訪れてるらしい。

リヤムもほつと胸を撫で下ろしてるし、良い傾向ってやつかな。

「道中も任務の一環だというのに、毎度毎度、なんと賑やかしいことか。貴様らの姦しさで、此方の手綱捌きまで狂いかねんぞ」

「わ。もしかしてたいちよーも馬車酔いだったり?」

「単なる皮肉だ、シヤム・ネシャーナ」

一方で少しは落ち着けとばかりに溜め息を落とすのは、馬車の手綱を握るシドウ隊長だった。曲者揃いな面子が集まつてる小隊だからか、こんな風に小言を零す姿も板についてるものである。

まあシヤムのみならず、かくいう俺も時たま羽目を外しちやうし、隊長を悩ませる原因だつて自覚はありますけどね。へへへ。

「ジオーサの町まで、もう間もなくである。今のうちに各々、心構えを改めておけ。かよ
うな呑気さでいられるのも、恐らく今のうちだろうからな」

「へ? どういうこと?」

「貴様らはまだ、騎士という身分がどういう捉え方をされているのか。その現実を、まだ知らぬということだ」

「捉え方、ですか?」

「うむ。リヤム・ネシャーナよ。”騎士たること、即ち何よりも誉れ也^{ほまなり}”。浮かれがち
な成り立ての騎士ほど、そのような理想めいた自覚を持ち続けるものだ。だが現実は当然、誰もがそう仰ぎ見てくれるものではない。欧都より遠くに離れれば離れるほど、貴様らとて嫌でも実感するだろう」

騒ぎ立てる俺達に浮き足立ったものを感じたのか、ピシヤリとシドウ隊長が手綱をしならせる。単なる脅し文句じゃなく、どうにもならない憂いを乗せたような釘刺しだった。

「遠けりや遠いほどか。つてンなら、ジオーサの町じゃあ俺達は?！」

「うむ。まして此度我らを招いた相手はジオーサではなく劇団であるし、遠方ならば騎士に対する反感を持つものも多いだろう。手厳しい対応をされることも、考慮しておくのだな」

「??フン」

心なしか右肩に重みが増す。

以前から誰彼問わず匂わされてきた、騎士の腐敗と信頼感の喪失。そんな不穏な実感が、今回の護衛任務でいよいよのしかかって来るのかも知れないな??なんて。

そう思ってた時期が俺にもありました。

「いやはや、これはこれは。遠路はるばる、よくぞ我がジオーサの街までお越しく下さいました、レギンレイヴ小隊の皆様方!!」

えー。はい。まさかのめっちゃ歓迎ムードなんですけど。

町長さんっぽい御方が腰を折りつつ、揉み手に笑顔がキラツキラなんですけど。

「申し遅れました、私はこのジオーサの町長、ハボックでございます。ワグナーの団長殿から、此度の護衛要請をお聞きしましてな。我々は皆様を歓迎致しますぞ」

「う、うむ?!ハボック殿の懐深き対応、感謝致す」

「いえいえそんなそんな。アスガルダム国民として当然であります。わっはっは!」

お構いなしに両手を握り、ブンブンと振る。

聞いてた話と百八十度違うやん。ドーいうことなの。

そう言いたげに隊員一同でシドウ隊長を見るけども、当のシドウ隊長も予想外だったらしい。握手をしつつも、その鉄面皮を驚きに崩していた。

というかね、町長さんの笑顔が凄い。もうニパーツて感じで。彼の指にはまるでつかいダイヤモンドの指輪にも勝る輝きっぷりだ。ぶ厚い顔立ちも相まって、圧すら感じるべつたりとした笑みだった。

(うーん。まさかここまで歓迎ムードとは。この俺の目を持ってしても見抜けなんだ)《マスターって割と節穴じゃん。てか、隊長さんが単に大袈裟に言っただけじゃないの?調子に乗りやすいマスター達にビシツというためにさあ》

(まあ、それはあるかも。でも、シドウ隊長も相当困惑してるっぽいんだよなあ)

別に悪い事じゃないんだけど、ある意味肩透かし感は否めない。というか、ぶっちゃ

「俺でも不思議に思うくらいだった。」

俺とシユラがコルギ村を訪れた時、かなり切羽詰まった事情があったのに騎士に対する不信感やら失望は見て取れたのだ。

「さてさて、ところでどこで??ふむふむ。灰色髪乙女に、十字前髪の赤き青年。どうやらこちらのお二方で間違いないようですね」

「??! あア?」

「つ??! なにか?」

けれど、この疑問は直ぐさま解消されることとなる。

不意に俺とシユラにぐいつと顔を近付けては、うんうんと頷くハボック町長の言葉によつて。

「このハボック、是非とも、是非ともつ、お会いしたかったですよ!! コルギ村を襲った悪夢を見事打ち払ったという、若き英雄騎士のお二人??!

エシユラリーゼ・ミズガルズ殿と。

ヒイロ・メリファー殿とねえ!!!」

ほう。英雄騎士とな。

えっ、俺のこと？

マジで？

えー。

拝啓、女神様へ。

ついに、俺の努力が報われる瞬間が来たかも知れません。
泣きそう。

088 ワーグナー劇団

「ククク??クッククク??」

上色一面を覆うどんより雲もなんのその。

ジョーサの街並みをらんらんと歩む今の俺は、ご覧の通りに有頂天だった。

(遂に??遂に俺にも武勇伝がつっ!)

先頭を行くハボック町長から。あるいは行き交う町の人々から、今もバシバシ向けられる尊敬の眼差し。

英雄騎士と持ち上げられている現状。

これに全くの心当たりが無いほど、俺は鈍感じゃあない。

(「コルギ村を救った」英雄騎士か??ハウチさんめ。嬉しいこと言ってくれるねえ)

どうにもハウチさんやコルギ村の人達が、村に寄った行商人や吟遊詩人に俺達の活躍を喧伝してくれてるらしい。

現代と違って娯楽の少ないこの世界じゃ、誰かの武勇伝も立派な娯楽になるんだとか。

いわく、善良なる騎士。貧しき民の味方。産まれたての赫き英雄。悪夢を終わらせる者などなど。

シユラがぼそつと『盛りすぎでしょ』と零すくらいに讃えられつぷりだ。そら有頂天にもなりますよ。

「いやはや、それほどの御仁にこうして我が町を案内出来るとは光栄ですなあ。新進気鋭とはいえ、その活躍には私共も是非ともあやかりたいと思ひましてねえ！」

「フン、いくらあやかろうが減りやしないんだ、好きだけあやかりやがれ」

「おほ、度量の深いお言葉。流星は音に聞こえし英雄！わははははは！」

「クハハハハ！」

「??ハア。調子に乗り過ぎだろう」

「あはは。そこがヒイロくんの良いところですよ」

「あのバカを無理にフォローしなくたって良いわよ」

「むむー、ヒイロンめ。既に活躍してたとは小癩なり！」

ふふふ僻む^{ひが}な僻むな。確かにすんごいベタ褒めだけでも、俺が頑張ったのは事実だし。称賛なんていくら受けたって良いんだから。

「??ハボツク殿。町の案内はありがたいのだが、そろそろ我らの依頼主と面通しを願いたい」

「おお。これは失敬、つい熱が入りましてな。このまま審問会の面々にも是非お会いして欲しかったのですが、遠くより越していただいた騎士様にわがままを言う訳にはいきません。すまいません。」

「??審問会?」

「このハボックを始めとした七人ばかりの、ちよつとした議会の様なものでしてな。当然本国の『十二座』とは比べるのもおこがましい程度のものですが」

隊長の追求にそうへりくだるハボックさん。

審問会かあ。なんか仰々しい響きだけでも。

けど『十二座』ってアスガルダムの国政を決める議会の事だろ。そのしよぼいバージョンってことだから、町内会みたいなもんかね。

そう思えば印象も和らいだもんだけど、シドウ隊長は隻眼をスツと細めるだけだった。

「おつと、または無駄話を。ではではこちらへ。劇団の皆様ならば今も広場にて作業中のはずですぞ」

「??広場で作業を?」

「ええ、ええ、そうですとも! 慰安業務ということで、劇団の皆様には我らの希望を汲んでいただき、此度披露していただく『演目』??そして!!」

我が町の広場を『劇場』に仕立てていただいたのですな!!」



「おおおー!!」

「はわあ、凄いですね」

「まあ、なかなかやるわね」

「大層なものだな」

「す、素晴らしい。さすがは劇団ワグナー??」

案内のもと辿り着いた先で、俺達は揃って圧倒された。

ここまで見てきたジオーサの小さな町並み。ささやかな往来。だから広場といつても見合つた想像は出来ていたんだけども。

「こいつは、とんでもねえな」

《はえー、真つ黒なオニオンみたい》

広場にデンと構えられた、全体が黒布で覆われた建築物を見れば、ヒイロフィルター

とて貫通もするわ。クオリオなんてもう素晴らしいを連呼してるし。

「驚きますでしょう? こちらがワーグナー劇団の方々がご用意してくださった、組み立て式の劇場なのですよ!」

劇場。これが。まるでサーカスのテントみたいだ。

しかも組み立て式って。なにそれ。実際に組み立てる瞬間、くっそ見たかったんですけど。

「それではそれでは、いざ中へと参りましょうか。フッフ、ご安心を。羊頭狗肉なんて事は決してありませんぞ!」

《なんで町長さんが自慢げなんだか》

(そーゆーこと言うんじゃありません)

さも自分のことのように誇らしげな町長さんの満面のダイヤモンドスマイルには、俺も凶悪と同じ感想を抱いた。とはいえはしやぎたくなる気持ちも分らないでもない。

なんて詮無きことを考えつつも、俺達はハボツクさんが導くカーテンドレープの入口を潜った。

「?!すげえ」

率直な賞賛が落ちるほど、劇場の内部も立派だった。

天井に吊るされた光源と、複数人がずらっと座れる長椅子の列。そして正面には奥行

きの広い舞台が立ち、木材や金具を肩にした作業員達が忙しく歩き回っている。まさにTHE・劇場。組み立てのレベルじゃない。

ハボツクさんの言う通り、羊の頭はちゃんと中身まで羊だつてことだろう。「ようやく来たか」

そんな風に俺達が劇場の出来に感心してた時だった。

奥の方からカタツと靴音響かせて、やたらと存在感のある三人組が現れて。

「ほう。ふむふむ、ふんふん」

(えっ、なに急に)

先頭の長身瘦躯の男がピタツと立ち止まるや、前触れもなく長い黒髪をバリボリと掻きながら、何故だか俺の顔をジイイイツと覗きこみ??告げた。

「よし。」

よし。

おい、悪人顔のお前。

一役くれてやる。私の舞台上上がるがいい」

・ ??????????
フ
ア
ツ
!?!?

089 ヒイロ・テクニカル・ノックアウト

さながら通り魔にあつたような衝撃だった。

「は??」

急に現れて急に舞台上がれとか。口ぶりからしてこの人、劇団長だよな。え。つまり。俺に劇に参加しろってこと?

いやいや。ちよ、ちよつと突然過ぎて頭ん中真つ白だわ。

「へえ。まさかいきなり劇団長に目をつけられるとは、ラッキーなボーイが居たもんだな。へい、我らがドルド劇団長。一体彼のどこに惹かれたんだい」

「決まつてるだろう。顔だ」

「??ハハ、劇団長はいつだつてそうだ。言葉手短に要求をおっしゃる。俺達キャストはいつだつて振り回されるんだから困つたもんだ。なあローズ。キミもそう思わないか?」

「??珍しく貴方と同意見ね、マーカス。劇団長の思いつきにも困つたものだわ」

衝撃のあまり動けない俺達の代わりに前へと出たのは、三人組の残り二人だった。

胸元をはだけさせたピンクのシャツが妙に似合ってる金髪イケメンと、ラメ入りのドレスが艶っぽい紅い長髪の女性。

それこそ腕組んでレッドカーペットを歩いてそうな美男美女に顔を出されて、ざわついたのはクオリオだった。

「ま、ま、ま、マールカス・ミリオとローズ・カーマイン??ほ、本物だあ」

「なに興奮してんだクオリオ」

「興奮するに決まってるだろう！ワーグナー劇団の二枚看板だぞ！設立当初から看板として活躍し、貴公子プリンセスの通り名で愛される名俳優『マールカス』！さらに去年の春から入団したにも関わらず、高い演技力と美貌でもってあつという間にマールカスに並んだ銀幕の女王『ローズ』だぞ!!そりゃ興奮するとも、しなくてどうする!!」

「お、おう」

どうしよう。いつものクオッチじゃない。

舞い上がり過ぎてバグってますやん。ファン丸出しじゃないか。見ろよ。お前の勢いに小隊のみんなも、二枚看板さんも若干引いてるぞ。

思わぬ熱狂ぶりに空気が塗り替わって、クオリオもようやく気付いたんだろう。慌てて咳払いしてそっぽを向くけど、もう手遅れ。

シャムのニヤニヤした視線に、クオリオは心底居心地悪そうに背中を丸めていた。

「熱狂的なボーイのおかげで自己紹介の手間が省けたな。よろしく、ナイトの諸君。俺のことはプリンスでもマーカスでも、好きに呼んでくれ。出来れば愛を込めて」

「ローズよ。生憎だけれど、どうでもいい連中からの愛なんていらぬから、お仕事に励んでくれれば結構」

「おいおい冷たいな。せつかく噂の英雄騎士殿らも呼んで貰ったつてのに」

「英雄騎士、ね??」

ハボック町長もそうだったけど、俺達がコルギ村の困難を解決したつて事は劇団の人達も知ってるのか。

いや、ひよつとしたら劇団側が町長に教えたのかもしれない。そもそも護衛を依頼したのも劇団らしいし。

それにしても、マーカスと比べてローズの態度は冷たかった。お世辞にも友好的とは言えない。

その証に俺を値踏みするように凝視しては、不機嫌そうに鼻を鳴らす始末だった。

「アッシュ・ヴァルキュリアの方は噂通り、箔に劣らない存在感に美貌。けれど貴方のほうは想像以下。まるで騎士らしさが無いじゃない。そこいらのゴロツキつて風情だけど」

「ああ? なんだテメエ。喧嘩売つてんのかこら」

「まさか。争いって同じ程度の間でしか起こらないものよ？ 身の程は弁えるもの
わ」

「こ、このアマア?!」

《わお。女優さんってば言うねえ。バチバチだー》

えー。なに。なんなのこの女。

こんなにも喧嘩腰なの、シユラカルズレーくらいだぞ。

さてはあれか、俺が劇団長に指名されたのが気に入らないって感じか。うん。ぶつちやけ気持ちは分かんなくてもない。

けど言われっぱなしで済ませるほど、俺は我慢強くなかった。

「ハッ。さっきの話聞いてなかったのかよ。俺はテメェんとこの劇団長にご指名貰った男だ。だつてのに随分と好き勝手言えたもんだなオイ」

そう。俺はいわばこの劇団のトップからちよつとしたスカウトを受けた立場だ。つまり俺の第一印象を批判するって事は、トップの眼を疑うってことと同義。

ぐふふ、どうよ。これにはぐうの音も出まい。

我ながら完璧な反論を言えたもんだとほくそ笑む俺だった——が、しかし。

「ご指名ねえ?! 舞い上がっちゃって。貴方、勘違いしてるわ」

「ああ? 勘違いだど?」

返って来たのは、超絶ヘビーなカウンターだった。

「ええ。だって劇団長がやらせようとしているのって? 『悪徳貴族の取り巻き役』だも

㊦

「えっ」

(えっ)

《ぶはっ》

えっ。なんですと。悪徳貴族の、取り巻き?」

おう。おう。あの僕、一応この物語の主人公なはずですけど。

「悪徳貴族の、取り巻き?」

「あー。そうだけボーイ。キャストはいるんだが、ガタイは良くてもいまいち優男な風貌でな、劇団長はそこが不満だったらしくてな。そこでボーイの?」

「顔だ」

「??まあ、そういう意味でお眼鏡に叶ったって訳さ」

「なん、だと??ち、ちなみに台詞量は?」

「三行よ」

「は?」

「ぶふっ」

「ぐ、ぷふゆいつ」

《ぷひひつ、三行！ たった三行って！ うあははははっ!!》

(わ、笑うなアアア!!!)

おい。いやおい。三行ってなんだよ。もはやモブと変わらないじゃん。

あのー！ 主人公つすよね自分！

そこは主役に大抜擢とかであれよ！ 何にビビッと来たってんだよ劇団長さんは！ 嘘だと言つてよルズレー！

ちくしょう。なにが腹立つってこつそりツボつてるシユラとシヤムが腹立つ。クオリオもニヤニヤすんなつ。オロオロしながら俺を氣遣うリヤムの爪垢飲ませたるか！

「ぐ、ぐぬぬ、ぐぬぬぬう?!」

「あら、とつても良い顔ね。本当は素人を舞台上上げるのなんて反対だったけれど、そのやられ役っぷりはお見事。劇団長の推薦、私も賛成しちやおうかしら」

「てつ、テメエエエエ?? ツツ」

《うひゃあ、緩めないねえ。この女優さんとは仲良く出来そう。あはは》

ここぞとばかりに叩き込むローズの、なんと憎らしいことか。

まさに悪女然とした笑みは皮肉なほどに美しく、名前に恥じない薔薇の棘っぷり。ツンツンってレベルじゃねえ。

「あ、生憎だが、俺は騎士として此処に来てんだ??せ、せつかくの申し出だが、お断りさせてもらうぜ」

「あらそう、残念」

「ぐっ、このアマア」

ちつとも残念そうでもないくせつ。

くそう、いかん。このままじゃ負ける。

けど折れるな俺。ここで言い返せねば俺が廃る。大丈夫俺は主人公いけるいける!

そう意気込みながら、俺は圧倒的劣勢を覆すべくビシツとローズを指差して、挽回の宣誓を叩き込んだ。

「——良く聞きやがれ性悪女ア!

俺はヒイロ、ヒイロ・メリファー! やがてテメエなんぞ目じやねえくらいの高みに至るべき男だ! だから端役なんぞこっちからお断りよオ!

いいかつ!俺様になにかを演じて欲しいなら、主人公役くらい持つて来やがれえ!

言つてやった。ビシツと。

言つてやったつもりなんですよ。

けど、悪女はまるで気圧された様子もなく。

むしろ咲き誇る薔薇のように、にっこりと微笑んで。

「それ、言うなら劇団長にじゃないかしら？」
「??? おっしやる通りだちくしょうがアア!!!」

返しのマジレスパンチに、負け犬の咆哮が虚しく響き渡るのだった。

090 想い出は遠くの日々

とある有名なスポーツ大学のヘッドコーチの名言がある。

『例えどんなに優れた選手であっても、敗けたことがない者など居ない。

だがその中でも一流の選手は、自分のそれまでの努力に報いようと、すみやかに立ち上がろうと努める。

並の選手は、立ち上がるのが少しばかり遅い。

けれど敗者とは。いつまでもフィールドに横たわったままなのだ』

そう、つまりこの名言を今の俺に当てはめるならば。

いかにあの性悪女優の言葉に打ちのめされようとも。

屈辱に塗れようとも。

最終的に立ち直れば、それすなわち。

俺の勝ちなのである。

「改めてお前らに言っておく。

俺はヒイロだ。アスガルダムの騎士、ヒイロ・メリフアード」

「は、はい」

「うんうん」

「確かに俺は華のねえ悪人面かも知れねえ。華々しい芸能の世界と比べれば、見向きもされねえ石つころなのかも知れねえ。

だが——この俺の胸に灯る火は！熱く燃えたぎる志はッ！

どんな夜闇でさえ花開く、気高いもんだと誇つて言えらア！」

「ひ、ヒイロくん。その意気です！」

「いいよーヒイロン！しまつていこー！」

「おう、そうとも。俺は偉い。そんなでもつてあの性悪に言われっぱなしで終わる男じゃねえー！テメエらもそう思うだろ猫姉妹！」

「は、はい！思いますっ！」

「ようし高まつて来た！いいぞテメエら！もつとだ！もつと褒めろ！」

「えっ。は、はい！え、えと??ヒイロくんは凄い！」

「ヒイロンはすごーい！」

「まだまだア！」

「ひ、ヒイロくんはかっこいい！」



「さて、総員傾注。これより今回の護衛任務にあたっての情報整理と行動を提示する。各々、聞き逃しのないように」

さて、ところ代わり俺達は劇場から広場へ。

俺の劇的な復活を見計らってか、シドウ隊長は普段の厳粛な雰囲気を発しながら、直立する隊員達を見渡した。

「まず初めに、此度の護衛任務が要人警護ではなく、町全体の警備となることは貴様らにも理解出来よう。依頼自体は劇団からの申請だが、別段彼らが何かしらの脅威にさらされている訳でもない。想定される敵性は専ら、もっぱら外から来る魔獣や盗賊団であろう。差し当たって、我らがすべき業務は??ベイティガン、述べてみよ」

「??基本は町内の警邏。町の出入口の警備でしょうか。ハボック町長の話では、この町は北と南に小さな門があり、それ以外は外壁で塞がれているようですし」

「うむ。加えて周辺の警邏も必要だな。神出鬼没の魔獣が町へと近付くのを、未然に防ぐことも肝要である。門の警備に関してはジオーサ側にも門番役があるので多少は任せても良いだろうが」

「へえ。任せつきりって訳じゃないのね」

「首都から離れた地にある町村は、自警の意識が高いものだから」

「じゃあ、門番は町の方々にお任せするってことですか？」

「全てではないがな。ある程度は我らも門番を務める事になるだろう」

「うへえ。ウチ、じーつとしてるの苦手だなあ」

「??」

ぶつちやけ俺も苦手だ、とは言わない。シドウ隊長に睨まれたくないし。けど思ったより護衛任務の要点は分かりやすいな。ようは主に町の中と外をパトロールするのがメインって事だろう。

「ともかくだ。ドルド劇団長からうかがった話によれば、公演日は明後日の午後からとなる。各隊員、くれぐれもぬかりのないように」

「うーん。門番に警邏かあ。なーんか地味だなあ。これなら普段の討伐任務のが刺激的だしー」

「ね、姉さん」

うん。シヤム。ぶつちやけ俺もそれは思った。でも言わない。

だつてほら、シドウ隊長の隻眼がそれはもう恐いくらいに吊り上がってるし。

「ふむ、刺激か。ではシヤム・ネシャーナよ。貴様は主に私と任務にあたって貰うとしよ

うか。任務中に少しでも気がゆるんだら??お望みの刺激をくれてやるとしよう」
「ふにやつ!」

あーあ、言わんこつちやない。

隊長からの無情な宣告に、がっくりと膝をつくシヤム。可哀想だし、後で俺とリヤムで「シヤムを励まし隊」でも結成してやるか。

(演劇か。どんな演目やるんだろうな)

ちらつと視線を逸らせば、そこには黒い幕で覆われた劇場のテントがある。

あの中では本番に向けての余念を無くすため、リハーサルが行われているのだろう。

(あの人も、張り切ってるのかね)

思い浮かぶのはやっぱり女優のローズだ。

ずいぶんキツイ言われ方をしたもんだけど、あれも第一線で活躍する役者としてのプライドが許さなかったのかも知れない。そう思えば、言い負かされた悔しさも薄れていく気がした。

「確かに護衛任務とは、討伐任務に比べいささか受動的ではあろう。だが任務である以上、決して気を抜いて良いものではない。各員、それを肝に命じよ。特に??ヒイロ」

「あ?俺か?」

「貴様に決まっております。良いか。再びドルド劇団長から勧誘されようとも、その時は。

分かつているな?」

「??フン、言われるまでもねえよ。ちゃんと断る。これで良いんだろ」
「うむ。ならばよし」

釘を刺してつもりなんだろう。じつとりと睨めつける隊長の視線は、口ぶりとは裏腹にちつとも緩められる気配がない。

けど、これはシドウ隊長の懸念は取り越し苦労つてやつだ。

また劇団長が俺を誘ったとしても——いや。

「??」最初つから」そんなつもり、無かつたしなあ)

《ふーん。それつて最初からあの劇団長の誘い断るつもりだつたつてこと? 意外だねえ》

(まあな。でもそんなに意外か?)

《そりやあね。マスターつていえば馬鹿がつくほどの目立ちたがりだし。あ、それとも男の子の強がりつてやつー?》

(??いんや。割と本心で平気だけど)

目立ちたがりつてのは今更否定出来ないけど。

嘘偽りない本心だつた。

ローズが言うような負け惜しみでもない。

むしろ、そっちの方がまだ良かったのかもしれない。

(凶悪??言っとくけどさ。)

自分以外の誰かを演じるって、そんな簡単なことじゃないんだよ)

《??え?》

『はい、誕生日プレゼント。』

ははは、びつくりしたかい。ほおら、開けてごらん。

どうだい?欲しかったゲームだろう?

おばあちゃん、ちゃんんと覚えていたんだから。

ねえ、それで合ってるだろう?

合ってるよねえ。

「—ちゃん?」

カタンツ、と。

古びたシーリングライトの紐糸を引っ張るように。

目の奥の神経を、さびついた思い出が刻んでいる。

じわりと膿んだ様な理由^{痛み}が、まだ俺の中で燻っている証だった。

091 審問会

警邏、警備、門番。

交代時間、メンバー、巡回ルート、エトセトラ。

ジョーサ周辺の地図を広げながら、隊長がそれらを俺達に説明し終えた頃にはもう空には夕暮れが忍び寄って来た。

そんなもって茜色のついでとばかりに俺達へと忍び寄って来たのは、相変わらずのダイヤモンドスマイルをちらつかせるハボック町長だ。彼はいかにも申し訳なさそうな顔で、シドウ隊長にある要望を囁いてきた。

いわく。騎士団の方々を審問会の皆に是非とも紹介したいとのことで。

いざ護衛任務開始という出鼻をくじかれたからか、若干渋い顔をしつつも、やっぱり無下には出来ないんだろう。

到着直後の焼き直しの如く、意気揚々と先導する町長の後ろをついていく俺達なのだ。



「おお、お待ちしておりましたよ」

「活躍はかねがね。よくぞお越しいただきました」

「御足労、感謝」

「ひひひ、ワガママ言つてすまないね」

審問会の集会所を訪れるなり俺達を出迎えたのは、四人の初老の方々だった。

みんなハボック町長と同じぐらいの年代か。言葉尻こそ個性が出るが、さながら選挙演説のワンシーン見たく俺達に握手を求める彼ら。揃って圧みのある満面の笑みを浮かべている辺りも、町長さんと共通してる。

けれどももつとも目を惹く彼らの共通点といえば??それぞれが身につけている装飾品のいずれにも、大粒のダイヤがあるとところだろう。

(うつわ。イヤリングにネックレスに、バンクル、ブローチ??全部ダイヤじゃん。ダイヤ尽くしじゃん。なんだこれ)

何カラットがどうかまでは知らなくとも、小さめのドングリくらいの大きさともなりゃ、相当な高額だって事くらい俺にも分かる。ひよつとして町内会ってより、資産家達の集いのニューアンスだったりするのか。

「うにゃあ！あつちもこつちもすつごいダイヤだ！キラキラだあ！すんごいねこれ、お金持ち集団？」

「ね、姉さん。そんなにはしゃがないで??でも本当に凄いですね。ダイヤの装飾品が審問会に入会する条件とかなんでしようか？」

「む、ははは。いやなにいやなに、決してそういうわけではありませんぞ、騎士のお嬢さん。これは単なる嗜みの延長のようなもので」

「左様、左様」

「ひひひ。強制つて訳じゃあないさ」

「まあ、あくまで自主的なもの」

「そういう意味では、私共の結束の証ともいえるかな」

　　結束と言うだけあって、審問会委員の息はびったりらしい。

　　ご老人ならぬ五老人のダイヤモンドスマイルには、俺達をたじろがせる妙な圧があった。

「改めてではありますが、ご挨拶を。我らはジオーサの審問会。噂に聞いた御二人を含んだレギンレイヴ小隊の皆様とは、是非ともお会いしたかったのですよ」

「然り、然り」

「??大した歓迎ぶりね」

「わはは。それはもう。なにせ先月に魔獣の脅威に恐々としたばかり。そこに新たなる英雄騎士の到来ともれば、私共としては心強きことこの上ない」

「貴方がたほどの騎士様が警護してるといえば、魔獣のごとき??いやさ、あの【舐めずる影】とて恐れをなして一目散に逃げ出すでしょうな!」

「左様、左様」

「ひひひ、裸足で回れ右さね」

「——【舐めずる影】だと?」

舐めずる影って。

なにそのじつとりとした不穏な響き。

「たいちよー知ってんの?」

「うむ。近年、巷を騒がせ続けている有名な辻斬りだ。騎士団のブラックリストに入っている賞金首でもある」

「つ、辻斬りですか?」

「名前は僕も聞いたことがある。あまり詳しくは知らないけど、相当に腕が立つ輩らしい」

(賞金首か??ロマンだなあ??)

《えー、浪漫って。むしろ騎士とかと対極じゃない?》

(いやいや、ハードボイルド系な作品だと結構定番じゃん。襲い来る賞金稼ぎ達を、ちぎっては投げちぎっては投げ、みたいな)

《はあ。まーたマスターの悪い病気が》

凶悪には呆れられてるけど、実際硬派な物語じや王道なんだよな。悪の政府だかに反発するレジスタンスものとか、ダークヒーロー系の創作物じやあ、主人公が賞金首つて設定も珍しくないし。

そういうのもかつこいいよな。俺の好む王道じやあないけども。

〔舐めずる影〕か??通り名はちよつとアレだけど、会つてみたいな)

なんて風に、ああだこうだと胸を熱くさせていれば??ふと、シドウ隊長がある一点をじいつと見据えていた。

「ところで一つ、不躑^{ぶしつけ}ながらも尋ねてよろしいか?」

「ええ、ええ。なんなりと」

「ふむ。あの奥の部屋は一体なんなのだろうか? やたらと施錠がされているが」

なんだろうと隊長の促す方を向いてみれば、不躑だつて前置きをしつつも尋ねた理由がひと目でわかった。

目線の先には、一枚の扉。ただし、その扉には複数の錠前やらかんぬきでガツチガチに固められていた。

「??ああ。あちらの部屋は『保管室』ですよ」

「保管室?」

「ええ、ええ。ジオーサの町内政策に使われた予算帳簿や町民の戸籍情報などなど、貴重なものも保管している??ただそれだけの部屋ですぞ」

「ほう。防犯意識が高いようだなによりだ」

「少しばかり過剰な心配に映るやもしれませぬが、しかしこの町の長としてはこれくらいの意識は、ええ、はい」

（防犯意識ってレベルかこれ??もう金庫室って感じだけど）

いや、戸籍情報とかも充分大事っちゃ大事だけどさ。

あれ絶対開けるの面倒臭いっしょ。白魔術の『施錠』を使っても、ちよつと手間取りそうだし。

試しに住民情報見せて、とか言ってみようかな。いややっぱ止めとこう。審問会の人達の笑顔の圧がヤバイことになりそうだし。

（顔に似合わず心配症なんだなあ、ハボックさん）

《心配症ねえ??ボクはちよつと怪しいと思うけどなー?》

（怪しいってなんだよ）

《えー。だってさあ、あんなにまでガツチガチにするなんて、よっぽど見られたくない秘

密でもあるんだって思わない?》

(そりや帳簿とか戸籍情報とかはあんまり見せるもんでもないし)

《いやいやそんなじゃなくって??あつ。じゃあさじゃあさつ、今度こつそり入つてみる? マスターの白魔術が珍しく活躍するかもよ?》

(珍しくは余計だつての。てかそんなことしたら俺が小隊にとつ捕まるじゃん)

《なんだよもー。バレなきやセーフでしょー!》

(バレたら一貫の終わりでしょーよ!)

よっぽど悪いことしたいんだろう。

脳内で子供見たくやいのやいのと騒ぎ立てる凶悪から、逃れるように俺は視線を逸らした。

(??見られたくない秘密、ねえ)

窓の外、夜の帳がそろそろ降りてくる。

もしかしたら、近い日に雨でも来そうな空模様。

宝石の煌めきでも隠れてしまいそうなくらい、どつぷりとした暗雲が。

茜に染まる空色を、じわじわと呑み込んでいた。

092 Ivy And Irony

明くる日も、昨日を引きずったような雲空だった。

重い空模様物が物足りないんだらうか。低く飛ぶ鳥が鳴き声もあげずに、ジオーサの通りを練り歩く俺とシユラとを追い越した。

歩き回って、かれこれ一時間近く。とはいえ別に観光してるとかじゃない。

単に、午前の町内警邏を割り振られたのが俺達っただけである。

「テメエとサシで歩き回るのも懐かしい感じがすんぜ」

「??そういえばそうね。懐かしむほど前でもないけど」

「コルギ村ん時以来か。ククク。あん時は俺もまだ無名だったが、今やテメエの独擅場とはいかねえぜ」

「そればかりねアンタは」

「当然だ。テメエにも散々啖呵売ってきた訳だしな。有言実行の証ってやつだ」

「ふん。昨日はあんな女に言い負かされた癖に」

「ぐっ。あれは??アレだ、華を持たせてやっただけだ！負かされちやいねえ！」

「はいはい」

振り返りの感動を、さらっと手折るシユラは本日も手厳しい。

なんだよなんだよ、実際コルギ村に来た当初と比べりや大躍進じゃないか。そりや前から有名人なシユラはもう慣れたもんかも shouldn't けどさあ、ちよつとくらい褒めてくれてもバチは当たらないと思うんですけど。

「じゃあ英雄騎士さんに聞いてあげるけど。アンタは気付いてる? この町の違和感に」

恨みがましく視線を向ければ、返ってきたのは試すような問い掛けだった。

「違和感だア?」

「そうよ。散々歩き回った訳だけど、この町には普通ならあるべきものが無かったわ。それこそコルギ村にだってあったものが」

「??」

珍しく含みを持たせるシユラの言葉に、足を止めて考えてみる。

コルギ村にあって、ジオーサの町にないものねえ。逆ならパツと思いつくんだけど。例えば審問会の存在とか。あの嚴重過ぎる保管室とか。

でもそれなら散々歩き回って、なんて言わないよな。多分シユラの言う違和感つてのは、警邏中に気付けたことなんだろうけど。

「??孤兒院か?」

「違うわよ。珍しくもないけど、あるべきものでもないでしょ」

唯一思いつけた「孤児院」も即座に切り捨てられちや、大人しく白旗を上げるしかなかった。

「――墓地よ」

「!」

言われて、ハツとする。

そういえば確かに警邏中、コルギ村にあったような共同墓地を見かけてない。

この世界じゃ現代と違つて遺体は土葬がメインだ。追悼する文化だつてちゃんとする。じゃなきやエイグンさんみたいな墓守つて役割はそもそも存在しないだろう。

墓地のない町、ジオーサ。

違和感とシユラが告げた理由も分からなくもない。コルギ村と比べりや何倍も広く、住民戸籍だつてばつちり取つてるような町に墓地がないつてのは??俺でさえ、おかしいと思つたけど。

「おお、こちらに居られましたか」

「!?ハボック、町長」

間の良いことに現れたこの町の顔役によつて、この疑問は解消されたのだった。

「いやはやいやはや、ご苦労さまにございます。ええ、ええ、実は御二人に我が町ジオーサの『葬送の儀』の手伝いをお頼みしたいのですが??
これより少々、お時間よろしいですか?」



耳みみに劈つんくざぎざ鳴りは、一雨の音じやなかつた。

町外れにある溪谷の滝が、ざあざあと崖下の川へと落ちていく。今にも一雨降りそうな雲空は、まだ泣いていない。

でも涙は落ちていた。

「ああ、ミモネ?」

喪服をまとった男の手から、一握りの灰が撒かれた。

小さな骨壺から広すぎる世界へと。風に乗って、宙に溶ける。

もう見えなくなった白い名残を、それでも男は追いかけるように見つめていた。

「ミモネ・ランシー。どうか、どうか、安らかに。鎮まりたまえ。眠りたまえ。どうか。貴方を看取ったこの町を想い、空を満たす一粒でありますように」

追悼の言葉と共に、ハボック町長が胸に手を当てる。

常に笑顔を絶やさない顔が、この時ばかりは密やかだった。

ざあざあと滝音が鳴り響く。一粒であるようにと願われた妻を見送った夫は、静かに涙を流していた。

(?!葬送の儀、か)

遺骨を遺灰に摺り、こうして滝へと撒く。

滝が伝う河から、やがて母なる海へ。与えられた命を源へと返す弔いの儀式。

これがハボック町長の何代も前から続いているジオーサの風習であり、町に墓地が無かった理由だった。

「町長、ありがとうございます。これで妻の無念も少しは安らぐと思います」

「なんのなんの。これも長たる務め、礼など不要ですぞ」

「騎士様方も。道中を御守りいただき、ありがとうございます」

「?!おう。だが、礼は町に帰ってからのしな。行きと同様、何事もなくとは限らねえんだからな」

「はは。仰る通りですね」

力のない笑みだった。

今回劇団が慰撫に訪れるきっかけとなった魔獣災害。彼はその被害者の内の一人であり、奥さんを亡くしてしまったのだ。

追悼は終わっても、すぐに立ち直れやしない。

この人の目は、まだ在りし日の影をぼんやりと追っているのだと。

俺には分かった。見慣れていたから。

「ねえ」

だから、余計に。

「魔獣が、憎い？」

シユラがどうしていきなりそんなことを聞いたのか、俺には分からなかった。

「憎いに決まっているでしょう」

「??」

「いつだってあいつらは奪っていく。奪うだけ奪って、なにも生まない。ただの破壊者

だあんな奴らは一匹残らず討たれてしまえばいい。心の底からそう思います」

「???」

愚問だといわんばかりに、男は真つ直ぐにシユラを睨んだ。

詰まることなく溢れる怨嗟。まだ遺灰を掴んだあとの残る掌が、堅く握りしめられて

いる。

「ですが、私達は弱い。力がない。だからこそ、騎士様には期待しております。貴方達の

正義の剣が、憎き魔獣共を根絶やしにしてくださいと、信じておりますとも！」
憎き魔獣を討ち滅ぼす、正義の剣。

彼にとって。いや、大半の力無き人たちにとって、騎士とはそういうものなんだろう。

「???」
「(??)シユラ?」

けれどシユラは何も答えず。

まだ遺灰で白んだ男の手を、じっと見つめるだけだった。

以前の彼女なら同調したっておかしくないのに。まるで自分でさえ、どうしてこんなことを聞いたのか分かっていないかのように、紅い瞳を揺らしているだけだった。

「さて、さて。風が冷たくなって参りました。戻ると致しましょうか。騎士様、帰り道もお頼みしますぞ！」

「あア」

「??」

陽はまだ落ちるにも早いけど、水辺の風は身をすくませるだけの寒さがある。気を取り直そうと手を鳴らした町長の提案は、断る理由もなかった。色んな意味で。

ざくり。ブーツの底が砂利を嘔む音が近いほど、滝のざざ鳴りが遠退く。ことあるごとくに嘔み付く隣の少女騎士も、口を開こうとしない。

だから、余計に。居心地の悪ささえ感じるほどに静かで。

『『魔女』の下僕たる魔獣共は??正義の業火に焼かれるべきなんだ』

(??魔女?)

ざざ鳴りの隙間にするりと届いた、最後尾を歩く男の眩きを。

気になりはしても、聞き返すことは出来なかつた。



葬送の儀を終えた俺達は、ジオーサにすぐさまとんぼ返り。

となれば、また町内の警邏へと戻るはずだったのだが。

『少しひとりにして。追いかけて来たら斬るから』

町に着くなりそう告げて、シユラは返事も待たずに去って行ってしまった。どこに行つたのかも分からない。呼び止めることも出来なかつたし。

だからこうして俺はひとり、トボトボと警邏の続きをしている訳である。

(交代の時間はまだだし、どうすっかな)

「いまいち身が入らない。いっそ南方で門番してるネシャーナ姉妹の顔でも見て来ようか。今頃ジツとしてるのが嫌だーって駄々こねられて、リヤムが困ってるかも知れない。それならシヤムとチェンジして、リヤムと一緒にのんびりつてのもいいかもな」と。

隊長に聞かれれば洗い顔されそうなプランを、前向きに検討してるときだった。

「——あさん——必ず——」

街並みの中、不思議なことにぼかりと空いた土地の前。

俯きながらもなにやら呟いていた、見覚えのありすぎる紅髪を見つけてしまった。

「げっ、テメエは?！」

「つい、声が出てしまった。」

「!? つ。あ、貴方。今の、聞いてたの?」

「ああ??いや、別になにも聞こえちゃいねえが」

「あつちは気付いてなかったんだろう。」

「なにか聞かれちゃまずいことでも口走ってたんだらうか。正直に答えてるのに、ローズは疑わしげに俺を睨み付けたままである。」

「んだよ、誰かの陰口でも叩いてやがったのか?」

「??残念ながら、私は物怖じはしないの。文句や不満があるなら面と向かって叩きつけてるわ」

「チツ。ああそうだな。テメエはそういう奴だよ」

「あら、昨日の今日で私を理解した顔をするのはやめてくださる？ 身の毛がよだつただけれど」

「その昨日で散々思い知らせてくれたのはテメエの方だろうか！」

「なんのにかしらね」

「この性悪女?!」

ぐぬぬ、こいつめ。一を言えば十で返して来やがって。しかもなんか愉しそうだし。俺からすりや、魔獣よりよっぽど天敵かもしれない。

なんて風に、どうもローズに対する苦手意識が拭い切れない俺だったんだけども。

「???、
???、
——でも、そうね。」

互いを知らないままに罵り合うのも、流石に健康に悪いわ。

そこで、少し提案があるのだけど」

「??あ?提案だと」

「ええ」

そんな俺をさらに困らせるような提案が。
ルージユの引かれた唇から、紡がれた。
寒気がするほど、妖艶な笑みと共に。

「このあと、食事でもどうしから？
——貴方と私。ふたりつきりで」

093 紅いルージュは嘘の色

拝啓、女神様へ。ご無沙汰してます主人公です。

わたくしめは現在劇団が借りてる宿屋の一室にて、有名劇団の有名女優さんとディナータイム中です。

いやどうしてこうなった。

「前に興業で北の方に行っただけだけど、その時にファンからいただいたチーズがとても美味しくて。赤ワインにとても合うわ」

「おうすげえな」

「変わり者の団長でも、ワインの趣味は良いのよ。切りハムがあれば尚良かったけど、ここじゃ贅沢は言えないわね」

「ほうすげえな」

「??ひよつとして緊張してる?」

「は?んな訳ねえだろすげえなリラックスしてるわおうこら」

「ふうん」

嘘です結構緊張してます。

《ぷぷぷ。マスターったらガツチガチじゃん。普段は馬鹿みたいに朴念仁の癖にさあ》

(ううううるせえやい！)

だつてしょうがないじゃん！俺らしくもないアダルトなシチュエーションなんだから！

テーブルに薔薇をいけた花瓶にワインとチーズつて、なにこれ貴族か。すげえなbroにもなるわ。

異性に部屋に招かれて食事つて状況はリヤムともあつたけどさあ。雰囲気が段違いとか。

(ほんとどうしてこうなった?)

いやね？ 最初はさ、俺だつて断ろうとしたのよ。こんなバレたらまーた隊長の雷が落ちるし、昨日の気まずさもまだ残ってるし。

そしたら「女がこんなにも誘ってるのに袖にするなんて、やつぱり大した男じゃないのね」つて挑発して来てさ。気付いたらワンフロアに二人きりですよ。ええ。自業自得。それな。

「それじゃあ、良い夜にしましょう」

「お、おう」

「乾杯」

かくして、乾杯をうたうグラスの音を皮切りに、いけ好かない女優との晚餐が始まったのだった。



「そんで俺が『——悪いな魔獣。テメエの歌もこれで終いだ』ってな風にバチイツと決めて決着したわけ。どうよこの活躍っぷり。ちよつとは見直す気になつたんじゃないか？ んー？」

「まあ、それなら英雄騎士と言われるだけの立ち回りとも思うけど。貴方の話に脚色が無ければ」

「全部ホントだつての！ んぁーもう、どいつもこいつもさあ、たまには素直に褒めてくれてたつていいだろ！ クオリオもシユラも隊長もさあ！」

「知らないわよ。というか、仲間の愚痴をベラベラと喋るのは騎士としてどうなのかしら？」

「そつちだつて『マーカスからちよいちよい口説かれるのがうざい』とか『劇団長の無茶ぶりが理解出来ない』とか散々愚痴つてたじゃん！」

「私は良いの。性悪女だもの?」

「うぬー!ふんぬー!」

うっぜー。

ここで意趣返し気味に開き直るとか超うぜー。

あとさつきから凶悪が脳内でゲラゲラ笑ってんのもうざい。頭ん中ぐわんぐわんするから止めて欲しいのに。

「胸を張りたいなら、はしたない飲み方はよしたらどうかしら。さつきから口調も崩れっぱなしよ?」

「あー?良いの良いの、こっちが本来の俺だから! あの喧嘩腰じゃ色々誤解も産むし、言いたいことも言えない時だってあるし。うん」

「??本音を隠す仮面は必要だもの。貴方の場合は乖離が凄いけれど、見かけによらず繊細なのね」

おいおい、なんだよ急に優しいじゃん。

見かけによらず、って余計な一言なかつたらうっかり惚れてたぜ。

にしてもワインうめえ。チーズもうまうま。

「そーいや聞きそびれてたけど、ローズはなんの役やんの?」

「ん。もしかして今回の劇のことかしら? それなら【裏切りの魔女】という演目の『ユ

リン役』だけど」

「??裏切りの魔女? なんだそれ」

「知らない? アスガルダムを建国したシグムンドに、初代皇帝四大精霊を支配して反乱を起こした【魔女ユリン】が討たれた話。子供でも知ってる昔話エッダなだけど」

「んー、聞いた事はあるかもだけど、あんま覚えてねーや。うちのクオリオならパツと分かるんだろうけど」

「ああ、あの眼鏡の。詳しそうだったものね」

「そうそう。にしても、慰撫目的の劇なのにずいぶん趣味の悪そうな演目だなそれ」
「??そうね。私もそう思うわ。心から」

確か演目を指定したのってジオーサ側なんだっけか。

どうせなら、もっと胸が熱くなる騎士物語とかにすれば良いのに。俺が知らないだけで、かなり盛り上がる話なんだろうか。

でも演じるローズ本人も同感らしいし。

うーん、よく分からんね。

「でも貴方からすれば、痛快なんじゃない?」

「は?なにが?」

「だって、私のこと嫌いでしょう? 良かったわね。演目のクライマックスには私、稀代

の魔女として火炙りにされちゃうわ」

「おいネタバレかよ。そういうとこだぞ性悪女！」

「結構よ。だから魔女なのよ、私」

「ふふん、異議あり！ 性悪だからって魔女が似合うとは限らんでしょ。そもそも魔女って性格悪くなけりや務まらないもんでもないし。どっちかっつと浪漫だね。むしろ会つてみたいぐらいだぜ、俺」

「会つてみたいって??変わってるのね、貴方」

「え、そうか？」

「だって。魔女なんて普通、憎まれてしかるべき立ち位置じゃない。物語じやいつも悪事を働いて、大衆を惑わして、そして裁きの炎にやかれておしまい。そういうものですよ。それを、騎士の貴方が会つてみたいだなんてね」

「でも、それって物語の上での話だろ？」

「え？」

「今も実在すんのかわからないけどさ、話してみれば楽しいかも知れないし。仲良くなつたら魔術を教えて貰つたりとか。悪事だつて理由もなくしてるとは限らんでしょ。魔女だからって、憎まれて当然つてのは違うんじゃないか？」

「??、——」

むしろ勇者系の物語じゃヒロイン役なんてザラだし。

主人公と一緒に修行して強化フラグにもなるし。性悪なタイプもいるだろうけど、だからってローズが適役って感じはしないなあ。そう、ローズはどっちかっていうと??

「あー、つまりまとめると??ローズみたいな性悪なら、魔女よりも悪役貴族の令嬢とかのが似合ってる!そういうこと!」

「??」

うん。我ながらドンピシャだわ。高笑いも似合いそうだし。

「??魔女より、悪役貴族の令嬢ね??ふ、ふふ。あははは! だったら、私の取り巻き役は

貴方かしら?」

「なんでそうなんだよ! 俺は騎士だってば!」

「あら。町の警邏をせずに、こうしてお酒を飲んでるのにとんだ悪徳騎士だこと」

「誘ったのはそっちだろ」

「貴方は嫌いな女に振り回されるぐらいが丁度良いわ」

「こ、こいつ??」

そういうところだつての。

つか別に嫌いとはまでは言っていないし。苦手なだけで。

「でも」

「なんだよ」

「??私は貴方みたいな人。意外と好きよ」

「??へ?」

好きよ、て。えつ。な、な、なにこいつ急にどうした。

嫌いじゃない、とかじゃなくて好きで。なにその切ない感じの流し目は。

冗談だろ。冗談だよな?

お、落ち着け。性悪女のことだ、どうせからかわれてるだけに違いはない。

「???
???だからこそ??どうして今更、としか思えないわ」

「?」

しかもなにかボソボソと呟いてるし。

軽くパニック状態だったのに加えて、本当に囁くくらいの声量だったから内容までは

いまいち聴き取れなかった。

だから思わず、じいつと顔を覗きこんでみれば。

ローズは弾かれたように席を立つ。

「——新しいボトルを空けるって言ったのよ。とっておきのやつを、ね。喜びなさ

い、早々味わえやしない逸品だから」

「逸品!? まじかよ良いのか?」

「ええ。少し待ってて」

こ、このタイミングで追加のボトル。しかも隠し棚っぽい所から、逸品らしいワインまで取り出して。

わざわざ新しいグラスまで用意して、注いでくれてるし。

え、まじで冗談じゃないパターンか？

夜はむしろこれからよ的な合図だったりする？

ど、どど、どうする俺。どうすんのかな。

ワインの黒ずんだ紅色がトクトクと流れ落ちると共に、俺の心拍数まで上がってってるし。

「さあ、どうぞ」

「お、おとお、おっすー！」

気付けば、酒の力でも誤魔化しきれない緊張の極地に追いやられたからだろうか。

上擦った声のままにグラスへと伸ばした手は、震えて。

「あつ」

「!」

《ぎみやあああああああ!!!》

横たわったグラスから、まるで血みどろみたく広がる赤が。

綺麗なテーブルを。俺の右手を。リング状の凶悪ごと。

びったびたに濡らしてしまっていた。

(やらかしたあああ!!)

《によわあああなにこれえええー!!!》

やばいやばいやばい。やらかした。マジでやらかした。

さつきまでのほろ酔い気分が嘘みたいに醒めていく。

凶悪の爆音絶叫が脳裏で反響してる中。予想だにしない大ボカのあまり、完全に俺の時は止まっていた。

「――」

辛うじて出来たのは、茫然としてるローズの様子をうかがうことくらいで。

そこからはまるでスローモーションの絵のように。

きつく結ばれたルージユの引かれた唇が、一瞬歪んで。

はあ。と吐き出した溜め息と共に、ギロリと睨み付けられた。

「帰って」

「ああ?か、帰れ、って」

「それなりに楽しい一時だったけれど、貴方が台無しにしたのよ。悪いと思うなら、これ

以上顔を見せないで」

「い、いや待ちやがれよ。詫びる。すまなかった。だが、せめて掃除くらいはだな??」
「結構よ」

当然だがお怒りな様子のローズは、もはや取り付く島もなく。

「残念だけど、こぼれたワインはボトルに戻らないの」

せめてもの片付けすら許されず、俺はローズの部屋から叩き出されたのであった。



なんて具合にさ。

人生でもトップ5に入るくらいのやらかしをした後だから、そりやもう最悪の気分の

帰り道だった。

いっそ滝壺にでも飛び込んで、身体ごと締めりの無い頭を醒ましたかつたくらいだ。けれど。

僅かに残った酒精を醒ましたのは。

《あああもう最悪。まだボクの中で残ってる感じがするし、めちやくちや気持ち悪いし。ああでも、マスターも命拾いしたね》

(命拾いってなんだよ。こっちは粗相かまして最悪の気分だつてのに??)

《ん?粗相? あれって”わざと”だった訳じゃないの? てっきりマスターが危険を察知したのかと思つてたけど》

(危険???)

なあ凶悪。さつきからおまえ、なにいつてんだ?)

《えー?だからさあ??あの、新しい方のワイン》

・ 「??????」
「は？」
《飲んでたら多分、
マスター死んでたよ？》

094 Raise A Curtains

ワーグナー劇団の公演日は、雨が降っていた。

さめざめと梅雨を歌う雨空を見上げる者は少ない。この日を待ち焦がれていたのだらう。興奮に頬を染め、町人はみな我先にと真つ黒いテント劇場へと潜っていく。

観客達の背の群れを見送っていたヒイロの頬に、冷たい一滴が落ちた。

「力^{りき}み過ぎておるな、メリフアーよ」

「！」

肩に手を置かれた訳でもないのに、スツと背筋が伸びる。

普段にはない緊張のあらわれか。それとも訓練生時代から今に至るまで、厳しく目を付けられてるシドウへの条件反射か。

どちらでもありそうだと、ヒイロは静かに苦笑した。

「いささか肩の力を抜け。まだ幕が上がった訳ではないのだ」

「へっ、らしくねえな。気を抜くな油断するな、が口癖の隊長にそう言われるとは。雨の代わりに槍でも降らす気かよ」

「雷なら落としてやれるが? 『昨日の件』??よくよく聞けば、貴様は警邏を途中放棄していたみたいだしな」

「げっ、藪蛇かよ。つか、それを言うならシユラもだろうが」

「??告げ口してる気? でも残念、アタシは一応町中には居たからね。叱られ役はアンタひとりよ」

「馬鹿者。私が見つけた際には物憂げで心此処にあらずといった有り様だったろうに。あれでは警邏をしているとは言わん。ミスガルズも同罪だ」

「ぐっ」

なんとも幼稚な喧嘩両成敗である。

裁定役のシドウも、まだまだ未熟と隻眼を呆れたように伏せていた。

しかし遠慮のない間柄でのやり取りのおかげか。不良然とした部下の、肩の力は抜けたらしい。ヒイ口の強張っていた顔付きも、いつもの調子を取り戻しはじめていた。

「隊長」

「時間か」

「はい。劇団側も審問会も、僕らを待っているようです」

「??『対象』に動きは?」

「いえ。まだそれらしい行動は見られません」

「そうか。ではベイティガンよ、ネシャーナ姉妹に引き続き会場での待機を指示せよ。我らもすぐに向かう」

「了解です」

雨露に紛れ現れたクオリオが、シドウと言葉を交わす。

端的な受け答えを済ます彼の表情に公演への喜色はない。あれだけ劇団に対する情熱を、隠しきれなかったのにも関わらず。

しかしこの場に居る小隊員にも、一足先に会場内で警備をしているリヤムとシヤムにも、この違和感を今更指摘する者は居ない。

クオリオはそつとヒイ口を振り向くと、一度だけ小さく頷いて、そのまま会場へと取って返した。

「では、我らも行くのでしょうか」

「おう」

「ええ」

雨がこぶりに降っている。

さめざめと梅雨を歌う空を見上げる者は少ない。

「??」

しかし歩み出すシドウとシユラの、その後ろ。

ヒイロは、立ち止まって暗い雨雲を見上げている。

雨足が強くなる気がする。根拠もない動物的な勘に、彼の鼻がひくりとうずいた。



さながら舞踏会のホールの様に、劇場テントの中は明るかった。小雨に打たれて濡れた騎士鎧をタオルケットで拭き取り、身嗜みを整えるシドウ達。

滞在三日目ともなれば、ジオーサの町人は彼らの姿を見慣れたのだろう。劇場内のあちらこちらで「騎士の方々だ」と喜色の滲んだ声が響いていた。

「おお、これはこれは隊長殿に英雄騎士のお二人！ お待ちしておりましたぞー！」

「ひひひ、雨の中ご苦労だったねえ。仕事熱心なことだよ」

「感心、感心」

「審問会の方々か。お氣遣い、感謝する」

現れた騎士達に労りの声をかけたのは、審問会の五老人達だった。やはり彼らもまた今日の公演を心待ちにしていたのだろうか。各々の笑顔にはいつも以上の独特な迫力があり、ダイヤモンドの装飾も心なしか輝きを増している。

「いやはや、いやはや。今日という日はまさに、このジオーサの歴史に太々と刻まれる一日でありましょうな」

「然り、然り」

「ハボツクめ、年甲斐もなくはしやぎおる。しかし儂もまた気持ちは同じよ」

「全くだ。幕が上がるその時を、今か今かと待ち焦がれてしまう」

「ひひひ。まるで子供さね。だが、開幕の前にちよつとした『お楽しみがある』つて小耳に挟んだんだけどねえ??」

「——おっと。流石、マドモアゼルは耳が早いようだ」

「あら、残念。サプライズは失敗みたいね、マークス」

「??おお!これはこれは!劇団の二枚看板が揃い踏みとは!」

咲きははじめた話の華にそつと踏み入つたのは、マークスとローズであった。

劇団ワグナーの誇る二枚看板。その片割れたる美男の手には複数のワイングラス。挑発的なドレスを纏う美女の豊かな胸元には、一本のワインボトルが抱えられていた。

貴公子然とした風貌のマークスは、淀みない手付きで各々にワイングラスを手渡していく。

「マークス殿。これは?」

「さつきマドモアゼルが言っていた『お楽しみ』さ。うちの劇団長はワインには目がなく

てね。こういった巡業の時には、開演前に観客達にワインを振る舞うのが通例なのさ」
見渡せば、他の劇団員たちがワインを振る舞っているのだろう。既にあちらこちらで喜びの音が踊っていた。

「いやはや、いやはや。なんとも素晴らしき催しでありますな」

「でしよう？ さあさ、審問会の皆様方。グラスを傾けてくださる？ 至上の酒精を注がせていただきませすわ」

「おお、麗しのローズ殿手ずからとは。誠に粋な計らいであるな、わはは！」

噓せ返るような色気を纏うローズが、グラスにワインを注いでいく。そこにヒイロたちとはじめて顔を合わせた際の、棘立った言動は影も形もない。彼女にとつても、慰撫相手のお偉方は特別なゲストということか。

態度の違いに若干不服そうにしながらも、ヒイロは不満を口にすることはなかった。

「では、次は騎士団の皆様にも?？」

「いや、結構」

「?え?」

続けざまにシドウ達のグラスにもワインを注ごうとするローズ。だがシドウは空いている方の手でローズを制し、それどころかマーカスにグラスを突き返していた。

「おいおい、つれないな。ひよつとして、ナイトの諸君はワインは苦手だったかい?」

「いや、たまの休日にはよく嗜むが」

「ヘイ、だったら?」

「しかし、現在は護衛任務真つ只中。大変勿体無い話だが、貴殿らのもてなしに甘んじる訳にはいかぬのだ」

彼ら流の持て成しを袖にされては、少し具合が悪いのだろう。少しぐらい良いだろうとマークスは諭すが、シドウは取り合わなかった。

清職者のレッテルは伊達ではない。シドウからすれば任務中の飲酒など言語道断である。つい昨夜には、その禁を破った不良男ヒイロに拳骨を食らわせたばかりなのだ。

厳格なシドウは口説けない。肩をすくめるマークスを見て、ローズは嘆息混じりにヒイロへと流し目を送った。

「せっかく貴方に、名誉挽回の機会をあげようと思っただけれど。残念だったわね?」

「ハッ、お優しいじゃねえか。だが機会は与えられるより、掴み取る方が性しよに合っただよ」

「?ローズ。名誉挽回ってのは?」

「あら。マークス・ミリオ。男と女の秘め事に割って入ろうとしないでくださる?」

「秘め事と来たか。妬けるねえ。なら俺は麗しい女性騎士に慰めてもらおうとしようかな?」

「二枚看板が一枚看板になる覚悟があるなら、慰めてあげてもいいけど?」

「???」
「はは、は。まだ現役で居たいからね。遠慮しておくとしよう」

さしもの貴公子といえど、アツシユ・ヴァルクリアは口説けないらしい。劍の様な目付きで睨まれば、彼とて青い顔して後ずさるのが関の山であった。

「いいわ。なら誇り高き騎士の皆様には??別の形で持て成しをさせていただくのでしょうか。勿論、私達の本分でね?」

「ローズ、そいつは名案だな。ナイトの諸君も、今日の舞台は観ていつてくれるんだろう? マーカス・ミリオの晴れ舞台、見逃したとあっちゃ一生もんの悔いになるぜ?」

「??ふむ。本来ならば、劇場外にも隊員を配置する予定ではあつたが。それも言われれば、仕方あるまい」

「そこなくっちゃな」

飲酒はご法度だが、劇を観ながらの警備までを咎めるつもりはないらしい。本来ならば依頼者側が護衛騎士に気の緩むような提案をするものではないが、型破りな貴公子からすれば、晴れ姿を見逃される方が嫌なのだろう。

期待に沿った返事を得て気を良くしたマーカスは、朗らかな笑みを浮かべてローズと共に去っていった。



そして遂に。

幕が上がった。

「親愛なるジオーサの皆様。お待たせ致しました」

「これより始まるは、偉大なる我らがアスガルダムの騎士王が刻んだ、表舞台での最後の
叙事詩」

「シグムンド・サーガの最終章」

「【裏切りの魔女】——はじまり、はじまり」

復讐劇の、幕が上がった。

.

095 目蓋の裏の血濡れた惨劇

歩む道が変わったのが、いつだったのか。それは後世となった今でも判らない。

五百年。遠き星霜が降り積もる間に間に、深く埋もれてしまったのだろうか。

掘り起こすにはあまりにも遠く、深く、奥の奥。

今や真実は砂の海。

けれど歴史は指し示す。

交わっていたはずの互いの道は、歪み、捻れて、そして。

別れた。対峙した。

栄光と罪科に。

玉座と反逆に。

『何故なのだ』

人歴1500年。

長きに渡る闘争に終止符を打った稀代の英雄王シグムント。

剣を掲げ王道を歩む王の傍らには、四枚羽根の黒鴉と、英雄騎士の四人が在った。

賢知授けし鴉、ギムニフ。

翠嵐の狩人。

黄銅の闘士。

水藍の流浪。

紅焰の乙女。

『何故なのだ、ユリン！ 答えろ！』

だが、紅焰の騎士は。

もつとも古くから王道を支え続けた乙女は。

統治後のアスガルダムに侵攻した。

四大精霊を狂わせ、引き連れ。

我らが王に矛を向けた。

『あの【黄昏】を、迎えさせないためよ』

紅焰の乙女は、裏切りの魔女へと堕ちたのだ。



「【黄昏】
???」

クオリオは誅^{いぶか}しんだ。

シグムンド叙事詩における最大の謎の一つ、ユリンの裏切り。王と共に多多くの戦場を駆けたと云われる側近が、何故裏切ったのか。今もなお考古学研究者の学者達が熱き議論を交わしている題材である。

裏切りの代償だろうか。彼女についての文献は少ない。出身地も不明。シグムンドに付き添った理由も、時期も不明。

彼女自身についても、精霊と交信出来るほど心清らかな乙女と歌う詩人も居れば、計算高い傾国の毒婦だと毛嫌うものも居る。

人物評でさえこれほどに解釈が違うのだ。故に、ユリンの裏切った理由における仮説もまた、数多く存在する。

だが特に演劇におけるユリンは、大半が悪しき魔女として演じられるのが常だった。それも当然だ。彼女は歴史最大の反逆者。肯定的に描けば現皇帝政権ガールランドに睨まれかねない

しかし。

(黄昏を迎えさせない為とは一体^{????})

劇中の台詞を反芻しつつ、もう一度首を傾げる。

恐らくはドルド劇団長による『新訳』なのだろう。

黄昏。つまりは落日。ひよつとしたらアスガルドの落日を迎えさせない為、という比喩なのか。だがそれでは行動が伴わない。魔法の行いそのものが、落日へと押し込む反逆紛争だというのに。

(黄昏、たそがれ。まさか??ユミリオン神話の【神^ラ々の黄^ナ昏^ロ】か? いや。いやいや。だとしたらそれこそユリンへの解釈が謎めいて??うーん、ううん)

劇場の壁に背を預けながら、探求者クオリオは思考の海へどっぷりと沈んでいく。

だが悲しいかな。幾ら頭脳を巡らせようと、これだといえる仮説はついで浮かばず。時間が止まってくれる訳ではない。

取り残された賢者を置いて、演劇は進む。

物語の辿り着く先はクライマックス。

魔女ユリンはシグムンドに敗れ、囚われの魔法は舞台の上にて火炙りの刑に処される。

裁きの時が、迫っていた。



断罪こそが、大衆が望む愚者の末路である。

罪には罰を。悪には報いを。敵には死を。

因果応報ここにあり。それこそがシグムンド・サーガの最終章。魔女ユリンの最期である。

だから、これはその再現なのだ。

ユリンは舞台装置に磔にされ、国民観客達の元、シグムンドマールカス自らに火を焚べられる。

五百年前の末路。

「燃やせ」

観客の誰かが呟いた。耳を澄まさなければ聞こえないぐらいの、小火のような囁きだった。

「そうだ、燃やせ」

「燃やせ！燃やせ！」

「断罪を！」

「魔女に罰を！」

けれど小火に留まらず。囁きは伝搬し、うねりをあげて熱狂へと変貌していく。観客達が口々に叫ぶ。

死を。罰を。報いを、と。

血走った目を？いて。

口泡を飛ばして。

拳を突き出して。

ジョーサの町人たちは狂ったように、叫んでいて。

(?!へい。なんだってんだこりや)

劇団員達は驚愕した。

それも当然だろう。これほどまでに異常なシユプレヒコールを浴びたことなど彼らには無い。レギンレイヴ小隊の者達ですら狼狽している、観客達の豹変ぶり。動揺するなという方が無理な話だ。

それでも動揺を表情に出さなかったマーカス・ミリオは、流石劇団の看板を背負っている男だと賞賛すべきである。

だが。

「そう。物語はこうして終わるの。」

裏切りの魔女はシグムンドに裁かれて。

アスガルダムは永き安寧を得る」

動揺なんて欠片も見せず。

ただ凍り付いた目で見下ろす魔女ローズが居た。

「正義によつて、悪は討たれて??」

これでおしまい。めでたしめでたし、だなんてね」

”脚本に記されない台詞”を、魔女が歌う。

歌劇のように艶やかに。

死刑宣告のように冷酷に。

「あはは、馬鹿みたい。真実なんて誰も知らないのに。

誰かが作った都合の良い悪名に。

石を投じる罪の、なんて軽いこと」

ローズ・カーマインは知っていた。

町を牛耳る老人達が、隠し続けている罪を。

知らず踊らされ続ける、町人たちのかつての罪を。

「お前達こそ??裁かれるべき、化け物でしょうに」

そうして魔女は告げた。
そんなに化けの皮を剥がされたくないのなら、いつそ、
相応しい姿にしてあげると。

「廻れ。『神の毒』」

唱えたのは呪詛。

鳴り響いたのは、隠し持っていた銀色のベル。

茶番はここまで。ここからは。

紅き魔女の、復讐劇である。



「ひっ」

熱狂の始まりが小火だったように。

魔女の招いた地獄の始まりも、小さな悲鳴からだった。

「な、なんだよこれ。俺の腕がっ、腕があっ」

ボトリと落ちた。身体が欠けた。

まるで腐った木のように、足元に腕が落ちたのだ。

理解が出来ない。意味が分からない。

どう考えたってこんなおかしい。

なあ。おい。俺の腕、拾ってくれよ。

急に襲いかかってきた混乱に晒されながら、男は隣の席の妻を頼ろうとしたのだが。

「ヒツ?!ま、魔獣?! なんて!?! いやっ、嫌、イヤアアアアツツ!!!」

妻から返って来たのは悲鳴だった。

こちらを見るなり、魔獣だと叫ぶ顔は恐怖にひたすら歪んでいて。

魔獣?! 劇場に魔獣が出たのか?!

そう、言葉にしようとしたはずなのに。

「まじゅb p m ; j m w y u u , g j z e g a — a , a , e ? , a h , ; ; ; ; ,」

人の物とは思えない声が、果たしてどこから発せられているのか。

それを自覚するよりも早く、身体は崩れ落ち。

男は、一匹の魔獣と化していた。

地獄のはじまりは、一人の異変から。

先程の熱狂をなぞるように異変は、伝搬していく。

「あ、あ、あたしの身体が?!

いやっ、いや、I y a a w d b m d a a a y

一人から二人へ。 !?!?!?!?

「な、なんだよこれ!

一体なにが起こった e e w j p g z m g d g y m g

二人から四人へ。 !?!?!?!?

「や、やめろ、魔獣め!来るなああ!!!

「助けて!誰か助け——」

「ま、魔女の呪いだ??俺達は、呪われたんだ!」

「いやあああああああ!!!」

悲鳴が飛び交う。鮮血が舞う。

魔獣の爪に肉を引き裂かれ、骸はやがて異形の怪物と化し。
ガラスが割れる音。

何かが砕ける音。

肉を食う音。

辺り一面、阿鼻叫喚に横たわる。

「あ、は」

割れたランプから、火の手が伝った。

敷かれた絨毯を、焰の竜が食い破った。

地獄の業火が、罪人たちに裁きを下した。

「駄目よ。助かりなんてしない。逃げ場なんて最初からないの。
罪には罰を、なんでしょう？　そう信じて狂った貴方達が、どうして今更、逃れられ
るなんて思えるの？」

舞台の上。狂宴の渦中。

絶望を調べに魔女が歌う。

「嗚呼——正義面の貴方達へ。

正しく狂い尽くした皆様へ。

これはいつかの、魔女の娘からのお願いです」

歌劇のように艶やかに。

死刑宣告のように冷酷に。

復讐の魔女に、想うべき死などありはしない。

だからこそ『神の毒』^{ワイン}を振る舞ったのだ。

「絶望の紅焔にのたうち回って。

どうか、どうか。おくとばかりあそばせ」

私欲が為に生贄を求め、悲劇を起こした審問会の老人達も。

あの日、ただの女でしかない母を魔女と裁いた町の人々も。

”到着初日からローズに色目を使い、もてなしのワインも独占したあの下品な騎士隊

それは、紅き魔女の復讐劇。

「ハイ。ヘイツ、ローズ！ いきなりアドリブかましといて、なにをブーツと突っ立っているんだよ！」

本来、辿るべきだった物語の道筋。

「どう、して??？」

しかし——忘れることなかれ。

紛れ込んだ異世界の怪物によって。

この物語はすでに、殺されはじめているのだと。

「どうして、なにも起きないの??？」

復讐のはじまりを告げる鐘は鳴った。

神の毒も、騎士団員以外は飲み干した。

けれども殺された脚本は息を吹き返すことはなく。

地獄の釜蓋は開かない。

復讐劇は、始まらない。